THE KAIZO

改造

二月號

1924

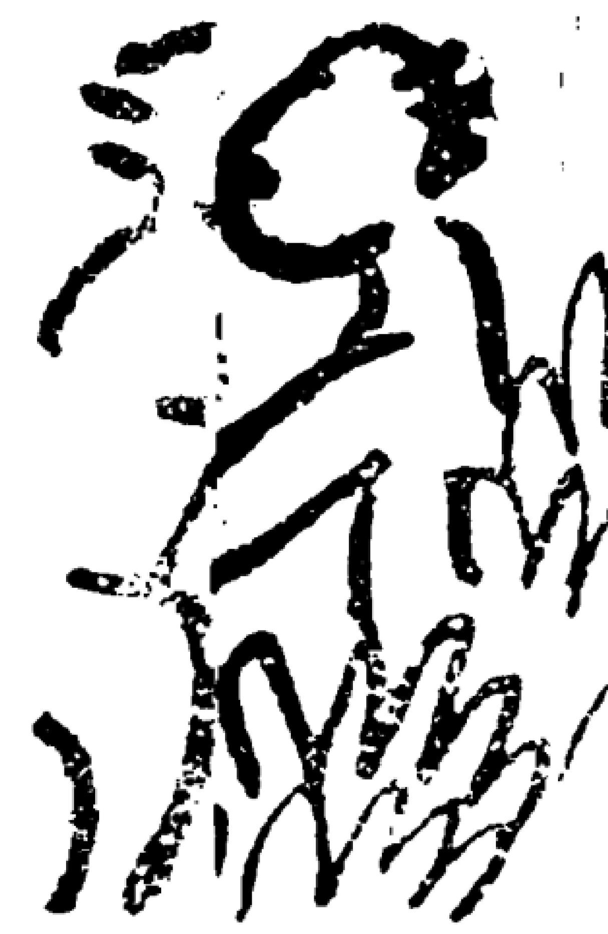

朝こ食後の常用に
クラブ煉歯磨
CLUB
クラブ煉歯磨
歯を強く
美しくし
心身を
爽快にす
御家庭用にクラブ粉歯磨
御旅行用にクラブ煉歯磨
御含嗽用にクラブ水歯磨



色が良い
質が良い
ペン先がサビない
ON INK
プラトン
SATIONERY DEPT
優良第一の
プラトン
インキ
萬年筆用——事務室用
學生用——スタンプ用



改造 二月號 目次



イバニエスと彼の作品……千葉龜雄

回顧四十年……馬場孤蝶

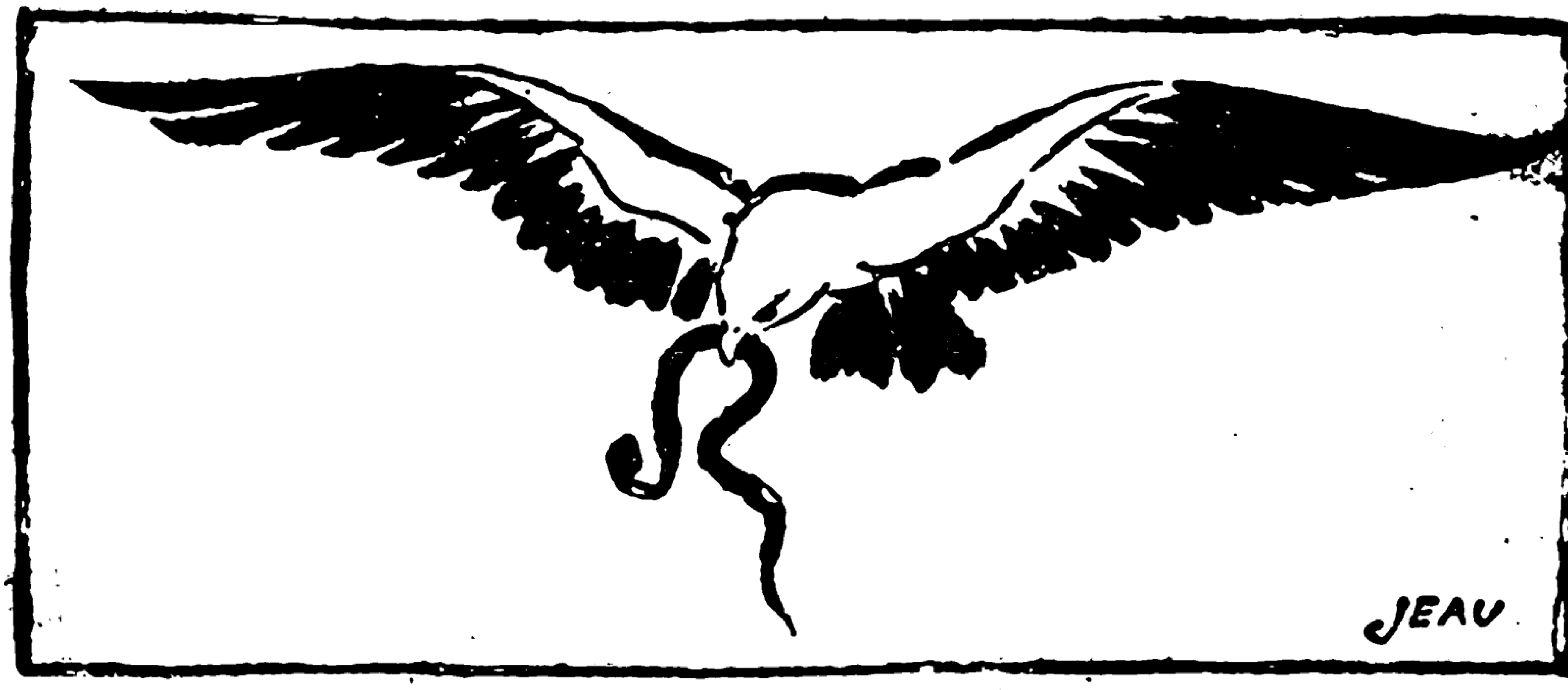
厨川白村著

苦悶の象徴

二月十日出來

定價壹圓五十錢
送料十五錢

改造社



（二　月　號）

無原則の國民生活の行きづまり

日本民族特有の、及びかれの社會に特有のおの〳〵の問題は、暫現的のも、恆存的のも、無原則に、すなはちかれの原則意識の缺乏にそれの原因を見いだす。

かれの政治生活の不安が近時いよ〳〵顯著だといふ。しかし、その不安の原因と實體とは、いまさらならぬむかし、限りもない遠いむかしから要するに根を據り、葉を茂らしてゐた。お層深及び外發上の生活內の安と不安と、榮と辱と、利と害と、幸と不幸とに喜悲し、笑泣する以外の內包をも、外延をも曾つて持たなかつたわれらは、一度もそれを意識しえずに醉生夢死し、夢死醉生し來たつたのだ。

元、准元老、樞府、貴院乃至藩族、いはゆる官僚、また政閥、たとへばこれらに多少または全部的不存在理由があるとせよ。その原因の原因はどこにあるか。ついにひるがへつてわれら日本民族なり、その國民なり、社會民なりの原則意識の薄絕と斷絕にのみそれは見つかるでないか。いま時の日本に、第一黨の代表者も、第二黨のそれも、第三黨のそれを夢みつつあつたとかいふ一と頃の和製ルーズエルトなにがしも、揃ひも揃つて爵などいふ反政治的具足を大事さうに身に着けてゐることが、それをすら從うのむかしに脫ぎ棄てず、すはだかの一社會的生產主義者としての政治家になり、他のかたちの公人になり轉生し、新生し、いな眞生しえずにいまだに晏如として太洋のただの表面の、ただの限られる一小區域の細瀾纖波を擧げたり、抑へたりすることに浮き身をやつしてゐられることが、かれら自身の公人脈のあがつてゐる一證であると同時に、日本民族の社會の地上全社會に於ける生　脈もけはしいげかりにほそくなつてゐることを有力に證據立てる一材料だ。

眞の社會的生產主義が、すなはち眞の社會價主義が、またそれの根柢實在としての眞の人物本位主義、人格價に對する私的及び公的主義が、わが社會民の現在の生活を、それら心狀と、事情すなはち制度、慣習との全側面から、包擊し、顚覆し、摧碎する必要が、われらにとつて、いまや、曠古の程度に於いて成熟し且つ緊張した。日本民族よ、深く思へ、そして、猛然として天を地へ、地を天へかならず置きなほす決意を現いに行證し來たれ。いはゆる天とは反社會價主義、反人格價主義、消費主義の人と制度と慣習と常識と學說だ。いはゆる地とは社會價主義、人格價主義、生產主義のそれらだ。

わが民族の現代者よ、われらは深徹を缺く、それゆゑに遠達しない。われらは原則意識のそとに生く、それゆゑに現象界を支配しない。國民生活の最近發は、脚下寸前にまで押し寄せてゐる。われらは根源を喝破しなくてはならん。

個人倫理問題の再新

（同時に、本誌一九二三年三月號掲載、再新の問題及び方法に關する論文の續篇として）

エドムンド、フッサール

一、倫理生活の前形式としての自己規定の生活形式

論題に就ての序説

人間――個々人及び社會化されたる人間――の再新は總ての倫理學の最高問題である。倫理生活の本質は、意識的に再新の觀念下に立ち、この觀念から自意的に指導され形成された生活である。純正倫理學は純粹（先驗的）普遍性に於けるかゝる生活の本質と可能的形式との科學である。そこで、經驗的人間的倫理學は、純正倫理學の規範を經驗的事象

と適應せしめむとするものである。それは、與へられたる關係（個人的、歴史的、國民的その他の）の下に於て、現世的人間の指導者たらむとするものである。併し、我々は倫理學の名の下に、實踐的に「善なる」「理性的」なる人間の行動を、隣人愛の觀念に從つて、彼の同胞に對する關係に於て規定する單純なる道德學のことを考へてはならない。道德哲學は倫理學の全然非獨立的な一部分にすぎない、何故なれば、倫理學は、理性的主體の全行爲生活に關する科學として、必然的に、この全生活を統一的に規定する理性の觀點の下に理解されねばならないものだからである。そしてこの觀點の下に規定されるものとして、我々の考察し得る可能的行動の特別なる領域は、何であるか――例へばそれが、思惟する認識として表示された行動であらうとも――そこに、また倫理學の研究問題が構成される。それ故に、理性てふ題目をまた、全然普遍的に劃義されねばならないので、倫理學と實踐理性の科學とは、當然、同價値の概念たるに至るものである。

更らに、倫理學は、單なる個人倫理學ではなく、また等しく社會倫理學である。併し、「同胞」即ち單一社會内に於ける他の成員に對する個々人の實踐的行動は、個人倫理學の研究に屬するといふ一事を以て、こゝに社會倫理學の概念が成立つて居るものではない。そこには、また必然的に、社會としての社會、特に、我々が「人類」――一國民、または數多の國民を包括する一總體人類――と名くるかの一般社會の倫理が存する。例へば「ヨーロッパの」、若しくば「西洋の」人類といふがごとき場合は、これに屬するものである。

一人類の擴がりは、一文化の單位を限度とする。從つて、それは、何れにしても、多數の國民的特殊文化を包容し得る一つの獨自的を完結された一般文化の單位以上に及ぶものではない。

社會は所謂多頭的ではあるが、併し結合された一個の人格的主體である。それの個々人は、人と人とを精神的に結び

付ける多形的の「社會的動作」（自他關係の動作、即ち命令、合意、愛情的動作等）によりて、機能的に相互に織り成されたそれの「肢體」である。時として、一つの社會は、多頭的に、併しより深き意味に於ては「無頭的」に、即ちそれが一つの意思主體の單位にまで集中されて、一個の單獨主體に類する行動を爲したことなしに作用するものである。社會はまたこのより高き生活形式を取つて、一つの「より高級な人格」となると共に、かゝるものとして社會的仕事を實行し得る。そしてその仕事は、各個人的仕事の單純なる共同形成ではなくて、それの意欲によりて實現された社會その者としての眞の意味に於ける人格的仕事なのである。これによりて、一つの社會の、一つの全人類の行爲——生活——假令それが、歴史的實在に於ては成立つて居なかつたものであるとしても——もまた、實踐理性の單一的形態、即ち一つの「倫理的」生活のそれを取ることが出來る。そしてそれは倫理的個人生活の實際的比論に於て理解されたものである，それ故に、これと同樣に、自分自づからを、實踐理性の意味に於ける純正の人間に、從つて、彼の文化を、「純正に人間的」なる一つの文化に形成することが、即ち固有の意思から産み出された所謂「再新」の生活であるだらう。一つの人類は「大量人」として、實際考察され得るし、また考察されなければならないと同時に、社會倫理的には、出來るだけ自己決定的のものとして、從つてまた倫理的に決定されるを要するものとして實際考へられ得るし、また考へられねばならない。併し、この思想は、それの原理的可能性に於て證明され、力強く明認されねばならない。そして、それに包藏されたる本質的可能性と規範的必然との研究を經て、實際に決定的なものとならねばならない——固より、それは、社會としての社會に對して、從つて、彼等が社會意思の保持者であり、運用者である限りに於ては、社會の成員に對してゞあるのは云ふまでもない。

以上の所論は、今後發表される一般的諸檢討の終局目的を——社會倫理的根本問題としての再新——その基調に於て

特質附けるものである。

併し個人倫理的再新に對する社會倫理的再新の本質關係を闡明するためには、先づこの個人倫理の根本問題を豫先的に取扱ふ必要がある。本論は即ちその問題のために献げられたものである。嘗て本誌に於て發表された私の論文「再新の問題及び方法」の說明に準じて、我々の方法は「先驗的」方法、即ち「本質研究」のそれであらねばならぬ。その詳細なる特質に就ては拙論「本質研究の方法」(引續き本誌に於て發表さるべき)を參照されたい。

A、人格的にして自由なる本質としての人間

我々の狙ひ處が特別のものであることからして、我々は、人間一般の一定の本質的特性に、我々の眼光を向けなければならないものであらう。そこで、この觀念の範圍内に於て、我々は倫理人の觀念に於て完成される人間の存在形式及び生活形式に就て、一定の文化的殊別化の先驗的構成を試みようとするものである。これ等の殊別化に於て、自己再新の、即ち、それの本質的動機構成に於て見出さるべき新人への自己形成の特有なる本質形式が、明らかにされるのであらう。

我々は、人間の本質に屬する自己意識の能力を出發點とする。しかも、謂ふところの自己意識の能力とは、人格的内省へのそして、反省的に、彼れ自からと彼れの生活とを基本とする態度を取ること、即ち自己認識、自己評價、及び實踐的自己決定(自己意欲自己形成)の人格的行動にまでの、個人的内省に基く能力の充實せる意味に於てゞある。自己評價に於て、人間は彼れ自づからを、善、不善として、有價値、無價値として判斷する。この場合、彼れは、彼れの行動、彼れの動機、彼れの手段及び目的を評價する事に於て、結局、彼れの究竟目的にまで遡するものである。そして、彼れ

は單に現實的なだけではなく、更らにまた可能的な彼れの行動を、動機を、目的を、彼れの實踐的可能の全範圍を概觀しながら評價する。最後に、彼れはまた、彼れの固有の實踐的「性格」及びそれの特別なる性格的特性、即ちそれ等が、彼れの可能的實踐の方法と方向とを決定するかぎりに於て、あらゆる種類の稟性、能力、習性をと評價する。しかのみならず、それ等が、本原的、精神的習慣として、凡ての活動に先在して居るものであるか、或は動作の練習若しくば訓練によつて、自づから發育したものであるかは、敢て問ふところではない。

我々は、尙ほ、特別に人格的なる行動の特性を注意せねばならぬ。人間はまた、受働的不自由の姿に於て、彼れの衝動（偏向、情緒）の趣くがまゝに委されてあることの代りに、そして最も廣い意味に於て、情緒的に動かされることの代りに、寧ろ、彼れ自身から、彼れの自我中樞から、自由活動的の姿に於て「行爲し」、眞に「人格的なる」、若しくば「自由なる」活動に於て經驗し（例へば、省察しながら）、思惟し、評價し、そして經驗された環境に働きを及ぼすべき本質的性質を持つて居るものである。これを言ひ換へれば、彼れは、彼れの受働的作爲（意識的に爲されたる）とその作爲を受働的に動機附ける條件（偏向意見）の働きとを「阻止し」、それを問題視して、適當なる商量をなすと共に、事物の現狀とその現狀に於て一般に實現され得べき可能性と、それの相對的價値との究竟的認識に基きて、初めて意思決定を爲すべき能力を有つて居る。かゝる決定に於てのみ、主體は、充實せる意味に於て、意思の主體なのである。彼れは最早「無意思に」情性の（「偏向」の）奴隸となるものではなく、彼れ自からに「自由」に、その決定をなすものである。そして、その實現が、かゝる意味に於て一つの自意的のものであるならば、彼れは「行爲する」主體、即ち彼れの所爲の人格的實行者なのである。人間は、彼れの自由なる行爲に關してもまた、從つて、より高き段階に於て、この自由を支配をせしめることが出來る。彼れは、新たに（從つてこれ等の自由なる態度をも）制抑し、新たに、批判し、商量し

そして決定することが出來る。彼れは、既に爲されたる決意を、意思の肯定に於て承認し、若しくば、意思の否定に於て抛棄することが出來る。また人間は、彼れに取つて、彼のその後の生活に於て、引き續き自然的に行はれつゝある行爲意思を、事後的に、意思批判に服せしめ、その意思の持續的効力を確認し、若しくば、その意思に、この實際的効力を、意思の否定とに於て否認することが出來る。この場合、彼れは、結局、意思主體としての彼れ自づからを、正當に若しくば不當に意思し、行爲する主體として、評價することになるのである。

批判的商量は特殊的のものであると共に、また普遍的のものであり得る。蓋し、人間は、或特殊の觀念、思惟、評價及び執意を行ふものではなく、かゝる總ての行爲を、また「一般に」の形式に於て、即ち「特別的」若しくば「一般的」普遍性のそれに於て、人間が實行し得るといふことは、人間の本質に屬するからである。「單純なる動物」は、例へば、一定の狀況の下には、常に同樣に行動するかも知れないが、併し、彼れは、普遍性の形式に於ける意思を有つて居るものではない。人間が次ぎの言葉に於て表明する意味は、動物には通用しないのである——「私は一般に、そして、私がかくのごとき狀況にある場合には、常にかくのごとく行動せむと欲する、何故なれば、かくのごとき財は、一般に私には價値あるものであるから」。

固より、こゝで論じて居るのは、人間と動物との經驗的特性に就てゞはなく、本質的差別に就て、先驗的に可能的なる生活形式と能力との、即ち先驗的に可能なる「人間」と「動物」との差別に就てゞあるのは、言ふまでもない。

更らに、人間生活の本質に屬するものは、それが、絕へず努力の形式に於て反映されることである。そして、この場合、人間の生活は、結局、常に積極的努力の形式を取るもの、從つて積極的價値の獲得を目的とするものである。それ故に、凡ての消極的努力、即ち無價値なるもの卻の則努力(Wegstreben)は(例へば、官能的苦痛)、積極的價値にまで

の一つの遷り行きにすぎない。阻却努力の弛緩を作ふ苦痛狀態は――「最後の一滴に至るまで」（價値を味ひ盡すことによりて、享樂努力）の最後の弛緩を呈したる場合に於ける無味狀態と等しく――直ちに、積極的に價値あるものを以つて、そこに生じた空虚を充す目的を有する新たな積極的努力を動機づけるものである。

絕へず新たに動機づけられた積極的努力は、交互的に、滿足に、失望に、苦痛なるもの若しくば間接に無價値なるもの（例へば、普遍的價値水準を高めるところの求めらるゝ新らたなる價値の喪失、「倦怠」）の强迫に逢着するものである。そうすると、更らに、新なる現實の實際的に可能なる價値が現はれて、現在尙ほ妥當しつゝある價値と鬪ふ。そして、努力する者のために、未必的にそれの價値を喪失せしめる。何故なれば、それは自から、より有價値のものとして、實際的優越を要求するものだからである。略言すれば、主體は、後に生ずべき價値の喪失、價値の減損、價値の空虚、幻滅の失望に對して保障されたる、そして彼れの價値内容を向上せしむべき一つの「價値充實の」生活、即ち常住的な、確實な全體的滿足を與へ得るがような一つの生活のための鬪ひに於て生活するのである。そして、このより高き階段、自由なる自發性の階段に於ては、かのより低き階段に於けるがように、主體は、互に鬪爭する動機の單純に受働的なる一群集ではない。彼れは彼れの生活を概觀する。そして、自由なる主體として、彼れは、意識的に、且つ樣々の可能なる形式に於て、彼れの生活を、一つの滿足なる生活、一つの「幸福なる」生活にまで形成せむと努力するのである。

彼れの隨時的情性の働きから免れて、自由なる商量に移り行く根本動機は、否定及び疑問の不安なる體驗である。從つて、それは、判斷、價値及び實踐上の「意見」の、そして、場合によりてはまた、既に自由に爲されたる商量及び決斷の――これ等とて等しく疑問視されると共に、新しき批判の前に立たされ得るものであるかぎり――現實的にか、若しくば、切迫せる崩壞の體驗である。他方に於て、諦觀、即ち考へられたるものの直接自得の意識（實行的行爲にあり

ては、目的價値そのもの〻獲得の意識）としての「明證」乃至「洞見」は、單純なる豫想とは相容れない。それは證驗的規範の特に評價され、力求されたる一つの淵源となるものである。判斷、評價及び實踐上に於て彼れの取るべき隨時の態度に關して、個人的生活に、聰明の形式、またはこれに適合するものとして、「正當性」若しくば「合理性」の形式を與へむとする一つの努力としての理性努力の特質は、實にかくのごとくにして理解されるのである。相關的に言ひ現せば、それは、それ〴〵關係方面に於て「眞なる」ものを——眞の存在、眞の判斷內容、眞の若しくば「純正の」價値及び財——洞見的に自得せしむとする努力である。そして、單なる意見の正當不正當は、總て、この「眞なるもの」に準據して、測定さるべきものなのである。併し、これを彼れ自らに洞見し得て、これによりて彼れ自らを動機づけしむることは、また等しく人間の本質的可能性に屬する。そして、實踐的に彼れ自らを改造することの可能性に關してもまた同樣なのである。

B、特別に人間的なる生活形式と自己規定の倫理的形式

最後に認識されたるこの自由なる自己形式の可能性に基礎を有する先驗的に差別されたる、そして特別に人間的なる生活形式は、若しくば人格的なる人間定型は、倫理人の最高なる價値形式に我々を導入し、且つこれに於てそれの最高位に達する。人間は、假令それの確實と明晰との程度に於て、甚だしき差異を存するにもせよ、兎も角、彼れの全生活を單一的に概觀し、且つ現實性と可能性とに從つて、それを一般的に評價し得るものである。彼れは、これに從つて、一つの普遍的生活目的を定立し得る。そして、その結果、彼れは、無限の將來に展開する彼れの全生活を、彼れ獨自の自由なる意思に發祥する一つの規範要求に服せしめることが出來る。かくのごとき意思は、事實上汎決定的の一つの動

機として働くことになるので、勢ひ、人格的生活に、一つの全く新たなる種類の形式を與へる。固よりこれは、徹底的に自我の中樞を捉へたものであり、そして同時に、中心的自己拘束の習慣的形態を、これに與へたものであることを、前提とするのは言ふまでもない。生活の限界なき無限の上に意識的に擴充されたるかくのごとき一つの規定は、例へば、或る者が、官能的自己保存とこれに役立つ財とに、一般的の、規則正しき注意を獻げようとし、そしてこれに應ずる生業の一つを選定する場合に、見出される。しかのみならず、彼れは、彼れが家庭の傳統によりて、この職業に沒入するものであるか、或ひは、その經濟財に、他の凡ての財の豫先條件を認めるものであるか、或ひはまた、それにあらゆる優先的價値を與へるものであるかの理由からのみ、これを爲し得るものである。

この概括的記述に於ては、生活形式の一つの普遍的類定型が書かるゝに止まつて、そこには尚ほ樣々の特別なる定型を存し得るのは、言ふまでもない。これ等の定型中で、我々が擧示せんとする一つの著しき定型は、一つの人格的價値判定が、全人格生活のある自己規定に取りて、決定的となるかような特別なる態樣によりて區別されたものである。彼れの將來の可能なる生活の概觀と價値とに於て、或る者は、彼れが何時にても行爲の目的として選び得べき一定種類の價値が、彼に取つては、それの繼續的實現なくしては、到底滿足を見出し得なかつたかような無條件欲求の對象たる性質を有つものであることを、確認し得るであらう。(この意味に於て、或る者に取つては、權勢の財が、他の者に取つては、聲望、隣人愛等のそれか、絕對的に最優越のものと看做され得るのである)。それによりて、彼は、出來得るかぎりかゝる價値の實現のために、彼れ及び彼れの將來の生活を獻げ盡すことに向つて、決心する。併し、それは、彼れが、偶然なる事情の下に、この價値を斷念し、そして、この事情の下には、これよりも寧ろ他の財を選ぶべきであると認めることに於て、それを犧牲にすることを妨げるものではない。この場合、それは、それ自體に於てより高き財──それ

に對して、彼れの財は、彼れ自身が見るやうに、一般に低位にあるがごときかゝる財に關するものであることも、また屢あり得るのである。例へば權勢崇拜者の場合に於ける隣人愛の財の如きが即ちそれであらう。しかのみならず、それ等の價値は、常に彼れの實踐的範圍に存し得るのであるから、彼れは、これ等の價値のためにもまた、彼れの生活を獻げ得るであらう。併し、彼れは、例へば、權勢若しくは金錢の崇拜者として、それ等の價値を獲得するために、さしたる「負擔」を感ぜない場合に、たゞ隨時にそれ等の價値を選擇するにすぎない。それ故に、彼れ自身の眼には、相對的に劣等なるそれ等の財が、彼れに取つては、最も勝れて選ばるべきものだとの常住的確信の下に、彼れが生活して居るものであるかぎり、客觀的により高き評價は、必ずしも實際的選擇となることを必要としない。蓋し、この場合、それ等の價値は、彼れが無條件拋棄を欲せないものであるし、また拋棄するを得ないものなのである。そして、彼れがそれを爲し得ないのは、彼れが無條件にそれ等の財を欲して居るものだからである。

この場合第一に我々を興味づけるものは、彼れの欲求の絕對性に發祥するものであつて、評價されたる目的に無條件に獻身する一つの志向が、一つの生活規定の原理になるといふ一般的事實である。この獻身は、設例に於けるがやうに次ぎに述べる盲目的溺愛のそれに等しき、一つの全然非合理なものであることを必要としない。

我々の普遍性の下に屬する他の一つの場合は、一つの充實せるより高き意味に於ける一職業生活に對する決定の場合である。我々はそれを一類の價値に關聯したものとして考へる。その一類の價値とは それが、當事者に取つて、絕對的なると共にまた「純粹なる」愛に於て、愛好されて居るものであるがために、それの獲得が、彼れに純粹なる滿足を與ふべきものと謂ふのである。そして、彼れは自からそれを明識して居るのである。この場合、それは、初めから、純正なそしてそれの純正さに於て認識されたる價値、しかのみならず、絕對的に選ばれたる唯一の價値帶の價値に關係するもの

である。この價値帶の尊崇、それに屬する價値の實現に對する獻身的生活は、關係主體が、一つの人格的愛に於て、專らこの價値帶に——例へば、科學または美術のそれに、若しくは純正なる社會價値のそれに——沒入して居ることに於て成立つのである。私は色々の價値を完全に尊重することは出來ても、併し、わたしの價値として、在るがまゝの私がそれと不離の關係にあるがやうなかゝる價値として、人格の最內中樞から——「心魂を傾けて」——それ等凡てを愛し得るものではないといふ點に於て、正しく一つの本質的區別が見出される。かやうにして、美術は、純正なる美術家に取つて、科學は、純正なる科學者（「哲學者」）に取つて、「職業」なのである。彼れが「呼ばれてある」と自から意識する天地は、精神的行爲と仕事との領域である。それ故に、彼れにありては、かくのごとき財の創造のみか「最新の」そして「最純の」滿足に達する、そして彼れに「幸福」の意識を與へるものは、その創造のあらゆる完全なる成功なのである。我々は、これを以て一般的自己規定の二三の形式を知り得たのであるが、しかし、それは一つの可能なる批判の前に——就中、隨時それを肯定したる者の側からも——立たされ得るものであることは明らかである。これ等の形式は、一部は有價値のものとして、一部は無價値のものとして、また相對的に、より高價値の若くはより低價値のものとして、認識さるべきものである。

二、純正なる人間性の個人的生活形式

倫理人の生活形式は、他の諸形式、例へば前節に於て標記されたる職業生活の生活形式のごときに對して、相對的に最高價値のものであるだけではなく、また唯一の絕對有價値の形式である。積極的に評價される凡ての生活形式は、倫理人の段階に達した人間に取つては、それが倫理的生活形式に整序され、且つそれに於て、單に一つの新形式を獲得す

るだけではなく、更らにまた、それの眞に正しき規範と限界とを獲得することによりてのみ、有價値に止まり得る。それ故に、純正なる美術家は單にそれだけでは、尙ほ最高の意味に於て、純正なる人ではない。併し、純正なる人は純正なる美術家たり得る、そして、倫理的自己規定が、これを彼れから要求する場合にのみ、それであり得るのである。

かくのごとき指定は、本質的必然性として、明確に認識されねばならない。我々は、先づ、可能的人間生活の一つの(先驗的)本質的形成としての倫理的生活形式を、發生的に、即ち、本質的理由からして、その生活形式に導き行く動機構成の過程から發展せんと試みるであらう。

A、絕對的一般的自己規定としての再新の由來。

——理性、幸福、滿足、倫理的良心。——

先づ我々は次ぎのことを考察しよう。上來、我々がそれを記述したがような一般的自己規定に基く生活形式は、正しく、全體生活を包含するものではあるが、しかし、それは、それ等の形式が各個行爲を決定的に規定するがような、從つて、規定を確立する普遍的意思にその根原を有する一つの規範的形態が、各個行爲を與へられることとなきような態樣に於てではない。それ故に、一つの生活的職業を決定する決意は、單に職業的活動をのみ規定せむとするものである。從つて、これ等の活動のみが、その決意から、被當爲的の(sollt)、そして出來るだけ善く遂行される行爲の形態を取るのである。更らに、凡てのかくの如き生活形式は、正しく、動力的素朴の狀態から人間が脫却する過程に基くものである。即ち、隨時に意識されたる環境の影響に基く情緖の、自我が全然素朴的に盲從することに於て、生活は最早遂行されるものではない。自我は、單に本源的若しくは修得的衝動、慣行的情癖、その他これに類するものに從つてのみ

生活するものではなく、寧ろ、上述するがように（第一節A）、自我は、彼れ自づからと彼れの作爲とに基きて、反省的に方向づけられるものである。かくて、それは、自づから決定し、自づから選擇する自我となり、そして、職業的生活に於けるがように、彼れの全體生活を、一つの反省的普遍的意思に服從せしめる自我となるのである。併し、一般に、かような一つの自由なる意思は、更らに或る素朴性に於て働くものである。そこには、究竟目的にまで徹底せむとする目的批判の習慣的志向が欠けて居る。而るに、この志向は、單に目的の實現可能性や手段の合目的性や、方法の有効性やに關するばかりではなく、更らにまた、それの價値觀的妥當性や、それの有價値なる純眞性に關するものなのである。かくのごとき批判は、單に實質的誤算だけではなく、また價値的誤算の失望に對しても、豫じめ行爲を保障するものであると共の、目的達成の歡びに常住不壞の力を與へ、續生する價値喪失——それの實質的、價値觀的信憑の拋棄に因りて——に對してそれを擁護するものである。そして、こゝに謂ふところのかくのごとき價値喪失は、次ぎの痛ましき認識に於て發生するのである——即ち、達成されたる「善」は、一つの誤想善にすぎなかつた、それ故に、このために獻げられた仕事は、無用の仕事であつた、それの歡びは、無意味な歡び、從つて、今後、從來の生活の幸福量に、最早加算するを許されない性質のものであつたといふ認識に於て。

かくのごとき痛ましき價値喪失と失望とから生ずる動機形成は、既に前に舉示したがように、かかる批判の必要、從つて、特別なる眞理努力、即ち明哲なる基礎附けによりて、證明に、「確定的」正認に達せむとする努力を生ぜしむるところのそれである。かくのごとき一つの努力は、先づ、個々の場合若しくば場合の類別に於てのみ發現し、そして働き得るものである。併し、この場合、そこには、一つの完全なる生活一般——、即ち凡ての彼れの活動に於て、それが充分に正認されると共に一つの純粹不壞の滿足を與ふべき一つの生活としての完全なる生活への一つの一般的努力を招

來する一つの動機形成の本質的可能性が成立つのである。

この點に就ては、更らに詳細なる說明を必要とする。人間が彼れの全生活を（彼れに取つては對象的に確認されたる單一體としての、）何時にても概觀し得るといふことは、人間の特別的性質である。上記推論の結果として、自己の可能なる行爲の無限態と、そしてこれと一體の關係に於て、環境的生成の無限態とを、それに包含された實際的可能性に關して、自由に適量する可能性もまた、この特質に屬するのである。これに依りて個人的發達の經過に於て（それの程度の高きに從つて、益々著しく、）單に實際的考案、計畫、實行的活動の多樣と錯綜とが增大するだけではなく、人間の內的不安固、即ち凡ての價値喪失の批判と拋棄とに對して保障された純正不壞の財を、滿足を求めむがための惱ましき焦慮も、また著しく增大する。

この場合、人間の情調と實踐とを絕へず困難ならしめるものとして、特に指摘するを要するものには、可能なる理性的實踐の本質に基く實踐的價値相互間の機能的依存關係と、吸收の法則に於て表現される實踐的價値消滅の適切たる普遍的本質形式とである。そして、吸收の法則は即ちかうである——多數價値の集合的實現は（對立的に、從つて總體的に）不可能事であるが、併し、多數の價値の中で一つ一つに考へられた各個は、同一の主體から、同一時期に實現され得るがごとき場合には、これ等の價値の最高なるものゝ財價値は、凡てのより低き價値の財價値を吸收する。即ちこの場合、「吸收されたる」これ等の價値の各個を選擇することは過誤である。より高き實踐的財が彼等と競合する場合には、彼等は常に實踐的に良好ではなくて、不良なのである。

この「形式的實踐」の法則は、他の本質的法則と交錯する。例へば、「總和の法則」のごとき、即ちそれである。——實踐的財の集合的實現は、これがかゝる實現に於て價値の減損を來させる場合に於て、包括された分部若しくは各部

の各自よりも、より高き價値を有する「總和財」を生ぜしめる。かくのごとき法則は、總ての可能的財價値の相互關係性若しくば、我々がまた言ひ得るがように、一人にして同一なる主體の目的を基礎づける。それは、商量、意匠、行爲に於て、一つ一つの價値を、それの一つ一つの實現と、それの爲す充足とによりて、恰かも持續的滿足狀態が作り出され得るかのように、それ自體のための單獨に顧慮することの不可能を論據立てる。滿足は個々の充足（それが、假令眞の價値に關係した純粹なものであつても）から生ずるものではない。それは全生活一般に於ける、最大可能的、不易的充足の確實性に基くものである。それ故に、理性的に理由づけられた滿足は、喪失に對して保障された成功的行爲に於て、彼れの全生活を、最大可能の程度に遂行し得べき、洞見的確實性の中に見出されるものであらう。

そこで、人間が益々無限界に生活し、そして、意識的に將來の生活と活動との可能性を概觀するに從つて彼れに取つては、愈々、可能的幻滅の果しなき無限性が明識されると共に、不滿を生ぜしめる。そしてこの不滿は、結局――固有なる選擇の自由との認識に於て――彼れ自からと彼れの行爲とに對する不滿となるのである。

個々の場合に於て意識される洞見的正認の可能なることとの認識、並びに、彼れの行爲を準備し、そして、それが、後に至つて偶然的なるがようにのみ肯定されるのではなく、洞見的の理性的商量によりて理由づけられたものとして、豫じめそれの正當性の保證を伴ふがように形成し得べき可能性の認識は、理性の責任意識若しくば倫理的良心を創造するものである。

既に彼れの理性能力を意識して生活しつゝある人間は、それによりて、凡ての彼れの活動に於ける正、不正に向つて、自己の責任を解する。それが認識作用であると、評價作用であると、若しくは、現實的効果を目的とする行動であるとは敢て問ふところではない。それの正當性若しくは合理性に關して、それが否定的である場合には、彼れは彼れ自づか

らを非難し、彼れ自づからに不滿を感ずるのである。

これに基いて、一つの可能的にして明白なる動機の形成中に、一つの合理的自己規定の願望と意志とが發生する。そしてこの合理的自己規定は、それの一般性そのものに於ては、かの生活をも包容するとは言ふものの、事實上一般的ではない純粹職業生活の自己規定と、到定同日に論ずべきものではない。即ち理性の意味に於ける凡ての彼の人格的活動に關して、全體的固有生活を、新たに形成せむとする願望と意思とは、一つの完全なる良知に由來する生活にまでの、若しくば、それの主體が、彼れ自からに對して、何時にても、完全に是認し得る一つの生活にまでの、更らに換言すれば、純粹不壞の滿足を伴つた一つの生活にまでのそれである。

D、純正人の生活形式。指導的目的觀念としての絕對的十全理想と人間的發展の理想。無上命令。

この方法に於て彼の全生活を「再新し」に從つて、彼れ自づからを、眞に合理的なる「新」人に形成すべき實際的可能性は、どの程度まで達するものであるかゞ、先づ問題とされ得る。「最善の覺知と良心とに從つて」行爲し得ることの、それ故に、隨時最善の能力に從つて、彼れの實行生活に、眞實性、合理性、正當性(即ち、明哲に眞、純、正なるもの)を成せしめ得ることの普遍的可能性の存在は、假令それが內容的には不完全に決定されたものであるにせよ、兎も角も初めから明白な事實である。そして、彼れ自づからと彼れの生活とを一般的に評價する者に取つて、明白な事實である。かくのごとき隨時に最善可能なる一つの生活は、それの主體自身に取つては、絕對に當爲的であつたものとして、特質附けられて居るものである。

この方法に於て「純正人」の生活形式が發展する。そして、彼れ自づからと、彼れの生活と、彼れの可能的活動とを判斷する者に取つて「純眞人」の、若しくば、理性人の必然的觀念が發生する。人間とは、單に、彼れが理性能力を有し、折々觸れてのみ、理性的洞見によりて、彼の作爲を規定し、正認するが故に、理性的動物と呼ばれるものを謂ふのではなしに、彼の活動的全生活に於て、如何なる場合に於ても常に、かくのごとく處理するところの者、その限りに於て、一つの原則的に普遍的なる自己決定に基きて、實踐的に合理的なるものを、一般に且つ純粹に、彼れの絶對の實踐的價値のために獲得せむと努むる者、從つて、その結果、實踐的に眞なるもの若しくば善なるものを、場合の如何を問はず、彼れの實踐的範圍に屬する最良のものとして、能ふ限り聰明に認識すると等しく、またこれを實現せむと精進するものを謂ふのである。

この點に於て、若し我々が理想的限界にまで、即ち數學的に言つて「極限」にまで達するならば、そこに、純粹なる相對的十全理想から、一つの絶對的十全理想が識別されることになるのである。そして、それは、絶對的、人格的十全の理想、從つて、理論的の、價値觀的の、そしてあらゆる意味に於て實踐的の、絶對的理性のそれにほかならない。言ひ換へれば、絶對的理性の意味に高められたる總ての能力の主體としての一人格の、そして我々にして、若しそれを、同時に「全能者」として考へたとするならば、總ての神的屬性を具有したでもあらう一人格の理想が、即ちそれなのである。超理的差別は別として、兎も角も、我々は言ひ得る、絶對的「極限」、即ち總ての純人間的努力の目標となつて居る總ての有限性を超越して存在する極地は、神的觀念であると。そして神的觀念そのものは、極度の純粹さに於て捕捉された「純眞の自我」である。そしてかくのごとき自我は、後に論ずるであらうように、何れの倫理人も彼れ自からの内に帶有するものであり、彼れが無限に愛慕するものであり、しかも、それとの隔たりが、常に無限に遠きものである

ことを、彼が自覺して居るところのものなのである。この絕對的十全理想に、相對的十全理想、即ち、完全に人間的なる人間の、「最善」能爲の人間の、隨時に、彼に取つて「最善可能的なる」良心による生活の理想が對立する。そしてそれは尙ほ常に無限性の刻印を自からに帶有する一つの理想なのである。

これ等の理性的理想と、これに關係させられた倫理人の實踐的觀念とを詳細に考察するために、我々は樂園人の生活形式、從つて、「樂園的無垢」のそれを引用することにしよう。それは、固より（若しも我々がそれを總ての種類の行爲に當て嵌めようとしたならば）充分には明らかにされがたき、從つて、それの可能性に從つて證明することの困難な生活形式である。最善の場合を想像しても、それは、他のかくのごとき可能性の一無限態から生ずる理想的限界の一場合であつたであらう。そしてそれは、確かに、我々が、決して十全理想とは、況んや實踐的理想とは認めることの出來ないかゝる一事例に屬するものであつたらう。「人間は誤ちをする、彼れが努力する限りは」、それ故に、彼れが人間である限りは。從つて、我々は、各種の過誤を、單に一つの明白なる本質的可能性だと認めるばかりではなく、また――旣に物質的自然に對する人間の本質からして――想像し得べきあらゆる人間生活に於て事實上避けがたき一つの可能性だと認めるであらう。併し、兎も角も、我々は、姑く、樂園人を存在するものと假定して、それの十全性を觀察することにしたい。樂園人は、所謂無過誤であつたらう。併し、それは神的無過誤、即ち絕對理性からのそれではなく、一つの盲目的、偶然的無過誤であつたであらう、何故なれば、かくのごとき人間は、理性に就いても、批判的證驗や正認に就ても、何等の豫想を有たなかつたであらうからである。それの無反省なる素朴性に於て、彼れは、恰かも、盲目的本能によりて、偶然に安定せる狀況に、正確に應化した一動物に過ぎなかつたであらう。十全のそして本來の意味に於ける人間は「自己意識」を有する（第一節に於て詳說されたがように）、彼れ自身に對する彼れの反省的關係性に於て生活する彼れ

は、單に素朴的に徒生して、彼れの外的環境に沒入するに止るものではない。彼れ自身と（彼れの本質に屬する）成功不成功の、充足、不充足の、幸福となり、不幸となることの可能性とを顧念しながら、彼れは判斷的自己評價と實際的自己決定とを行ふものである。こゝには、明らかに、人間の人間としての完全性の純粹なる本質上の差等が生じて來る。そして、正しき理想の構成は、凡てこゝにその資源を覓めねばならないのである。益々自由に、明確に、人間が彼れの全生活を概觀し、評價し、そして、實踐的可能性に應じて商量するに從つて、益々批判的に、彼れが生活界を扶殖し、將來の全體生活に向つて、總てを斟酌する評價をなすに從つて、益々決斷的に、彼れが認識される生活の理性的形式を、彼れの意思に取り入れて、それを彼れの生活の不動の法則たらしめるに從つて、彼れは、人間として、愈々完全の域に達して居るのである。こゝには、また、考へ得らるべき唯一の實踐的人間理想が存すると同時に、活動や、仕事や習性に從つて尙ほ區別せらるべき凡ての實踐的價値段階に對し、絕對的に必然的なる形式が存するのである。

人間としての人間は理想を有する。若し、人間が、彼れ自からを、彼れ自身の理性に於て、一理性人、一純眞人として承認し得べきものとするならば、この人格的自我としての彼れ自からのために、そして、彼れの全生活のために、一つの理想、而かも絕對的にして且つ相對的なる一つの二重理想を構成し、そして、それの最大可能的實現に努力せねばならいといふことは、正に人間の本質なのである。それ故に、彼れは、彼れ自身から、彼れの「眞の自我」としての最本源的形態に於て、先驗的に彼の內に宿つて居るこの理想を引き出すのである。この絕對的解釋に於ては、それは、彼れ自からに於て絕對的に正認されたる、そして絕對的に正認さるゝ行爲に於てのみ生活する彼れ固有の自我の理想なのである。彼れが一度この理想の光に接した場合には、彼れはまた彼れに適應せる生活形式、即ち倫理的生活形式は單に、相對的に最善可能なものであるばかりではなく――恰かも他の生活形式が、これと並んで、尙ほ一般に善きもの

と呼ばれ得るかのように——それは唯一のそれ自體に善良なるもの、即ち「定言的に」に要求されたものであるといふことを、聰明に承認しなければならぬ。彼れがまだ彼れの眞我の合理的理想を掴むに至らなかつた前には、假令、自我に取つて善良であり得たものでも、一度この合理的理想が捕捉された以上、最早、そのまゝで善きものたることは出來ない。そして、それ以前に自我が獲得し得た幸福は、何れも最早無條件にそれを値し、それだけで眞の幸福たる譯には行かない。絕對的に正認されるもの、從つて、それの個々に於てそうされるのではなく、實踐的可能の普遍態に於て、そして、實踐理性に、最善の良知に基く一生活にまでの普遍的意思によりて正認されるもののみが、こゝに初めて善なるものである。併し、以前に善と呼ばれたものが確認される場合には、これを眞實に善たらしめるものは、即ちこの確認なのである。

是に於て、考へらるべき最高の價値形態を有する人間生活の根本性質は、絕對定言的のそれである。從つてカントの言葉を以つて言ふならば、人間は凡て一つの「無上命令」の下に立つて居るのである。人間は、彼れが、自意的に、彼れ自づからを無上命令に服せしむる限りに於てのみ、「眞人」、即ち無條件に善として評價されるものたり得るのである。蓋し、この無上命令の言はむとするところのものは、次ぎの言葉にほかならないからである。——「眞人たれ!」、汝が如何なる場合にも正認し得る一つの生活、即ち實踐理性に基く一つの生活を遂行せよ」

本質的にかくのごときものであること、實踐的要求がかくのごとくなること、そして、到達すべからざる悠遠の彼岸を(絕對的理性から成る絕對的十全の觀念を)終局の生活目標としながら、その時々の最善可能事を爲し、その時々の可能さに應じて、益々かくのごとく改善されて行くことは、價値の要求の然らしむるところである。この方法に於て、初めて、一つの人間的發展の形式に於て化成する人間的理想は、絕對的合理化の過程に於て成立つべき十全なる人格的存在

の絶對的理想に適合することになるのである。

絶對的理想は、彼れの全體の理性能力に關して、絶對に合理的なる、そして、その限りに於て絶對に十全なる主體である。絶對的合理性に到達せむとする純粹に普遍的なる、そして、絶對に鞏固なる意思から、しかのみならず、我々が言つたがように、一つの「絶對的合理化」の過程に於て、絶對に合理的なるものとして、創造されるといふことが、それの本質である。併し、それは、一體に必然的生成たる生活が、この場合、徹頭徹尾絶對に合理的なる一行爲として原始的建設をなす理性意思から流れ出るものである限りに於て、そうなのである。それ故に、絶對合理的人格は、それの合理性に關しては、自己原因である。

これに對して、我々は、實踐的人間理想と人間的發展の理想的標式とを考察したい。それは、單純なる有機的發達に從つてまた、單純なる動物的發達の標式から、嚴格に區別される一つの發展である。それが標式的生成の一つの流れに於て、事實上一つの標式的熟成の形態に達するのは、客觀的には、一つの有機的發達に屬する。人間もまた、動物と同樣に、肉體的關係に於ても、精神的關係に於ても、それに相當の發展層を伴つた彼れの有機的發達を有つて居る。併し理性體としての人間は、自からに認識されたる(固有の合理的認識に於て自由に形成されたる)、自からに評價されたる形式に於て成立つこの全然別種の發展に達すべき可能性と、自由なる能力とを、また有つて居るのである。それは、そして、意志そのものゝ中に豫定されたる一つの目的觀念に向つて、自由に自からを導き、自由に自からを教育する自由なる倫理的人格への一つの發展なのである就中、人格的行動に於て。そして、これ等の人格的行動の何れもは、同時に合理的作爲たり、合理的所爲たらむとするものである。即ち眞の善を追求しつゝ、また他面に於ては、これを追求する努力そのものを先驗的に(しかも一つの善として)追求するものなのである。

倫理的に努力する人間に就ては、明らかに、全く同樣なことが言はれる。即ち、彼れは彼れの努力の主體であると同時に客體なのである。彼れは彼れ自からがそれの技師の任にある無限に運轉する工場なのである。これがために、倫理人生活形式は一つの特異なる性質を有する。彼れの生活は、凡ての素朴性を、そして、これと共に、自然的、有機的發育の本源美を失つたのである――明晰や、眞理や、合法やを求むる倫理的戰爭の、これに代るべきより高き精神美を獲得せむがために。そして、純正なる人品の、「第二の天性」となつた薫習的人品の美は、これに基いて生ずるのである。優れたる教化に達せんとする自己修養によりて、倫理的陶冶にまで熟成されたる自我の個々の動作は、それが格別の正認なしに行はれる場合に於ても、尚ほ從前の正認からして、習慣的正當性の現象論的形態を有するのである。この習慣的に植え付けられた。しかしまた隨時に、現象論的に顯勢する正しさの意識に於て、あらゆる行爲と精神的仕事とは、凡ての種類の素朴的動作から區別さるべき（氣づくと氣づかさるとに拘らず）それの倫理的形式を有つものである。例へば、以前に證明された原則が、それの新しき應用の場合に、科學者に意識され、若しくは堪能なる打算的思考に於て、習慣的にそれの正しさを意識せる新原則が考察されるがごとき、その適例であらう。この場合の自己教育に於ては、新たなる反省なしに、たゞ現象論的に、各作爲に轉付される被當爲の、若しくは志向の習慣的形式が、「良心に從つて」、「出來るだけ善く」行動せむと欲し、若しくは行動することに役立つのである。

C、原理的に過誤に陷る人間

純正なる人間性の絕對的理想として映ずる形態を、彼れの生活に與へるために、その時々の人間にその當時可能なる努力の理想的最大限度として、それが我々に考へられた限りに於て、我々は、特別に人間的なる發展形式を以て、人間

の理想だと考へて居たのである。人間は、この理想を、多く、實踐的實驗として、彼れの全活動生活に豫定し、彼れの人格的努力の全習慣性を通じて支配する目的觀念の力を、それに與へることが出來た。それ故に、假令、彼れが、時ありてか、若しくは長き時に亘りて、「外的感情作用」の奴隷となり、「人生の行路を誤る」ことがあるとしても、彼れは、倫理的に統一された自我として、習慣的に目的觀念によりて、指導されて居るものであり、また指導されて行かれるものであらう。自己發展の初めは、何れも不完全である。十全は發展を有效に指導する目的觀念にほかならない。併し、十全たらむとする單なる意思は、それだけで十全を成すものではない。それの實現は、無限の力爭と、力爭による鍛錬との必然的形式を條件とする。そして、この場合には、人間は、一つの「劫濁的」現世生活、即ち持續的に働く倫理的決意が、生活の上に置かれたる彼れの要求を（しかも、上記の意味に於て、意識的に）、絶へず主張するが故に斷じて素朴ではない一つの生活に陷没するものだといふ本質的可能性が、常に成立つのである。そして、「劫濁性」に於ける生活は、合規範性の習慣的形式の代りに、反規範性のそれを、絶對的當爲要求を充足する形式の代りに、それの非倫理的拋棄、即ち倫理的墮落のそれを有するのである。

倫理的不良性を有する意識の性質は、この場合、所爲そのものに、而かも、人格的自我及びそれと相關的に原罪的迷妄の性質を伴ふその作爲を反省することなしに、膠着する。しかのみならず、この性質は、作生的の（場合によりては「良心の警告」として活躍する）良心感情が全然顧みられないのと等しく、實踐的には看過されてあり得るのである。併し、本原的の倫理的生活意志の新たな回想と、それの力強き回復（新人となるべき意志の）とを、實踐的に、繼續して等閑に附し去つた場合には、結局、それの現實的動機力は萎靡せざるを得ない。かくて生活は、頑強なる劫濁性の、倫理的要求に對する意識的侮蔑のそして無良心の形式を取るのである。一定の間違つた目的に迷ひ込み、若しくは、自

由なる選擇に於て、それに沒頭し、それに執着した主體は、認識された規範を意志に於て是認することを拒否するだけではなくて、更らに、これ等の目的のあらゆる批判を、そしてこれ等の目的に抗議する規範のあらゆる實踐的承認を拒否するのである。

D、倫理的汎方法主義。倫理的生活及び倫理的人格に就ての廣狹の概念

眞に人間的なる生活、即ち際限なき自己教育に於て成立つ生活は、言はゞ「方法の」人間性への方法の生活である。倫理的生活の相對的完全程度が、どれだけ高いものであらうとも。それは、常に常住的自己管理の下に於ける一つの自制、自治の生活である。それの詳細なる構成は本質的に如何なるものであらねばならぬか、それの特別なる危險は何であるか、それの自己欺瞞、自己脫線の可能的標式、それの持續的退化、それの習慣的自己欺瞞、倫理的僞善の形式は何か――これを體系的に説明するのは、精細なる個人倫理學の職分である。

我々の形式的、普遍的本質考察に於ける純正に人間的なる生活の理想的構造は、一つの汎方法主義として注目に値ひするものであらう。そして、この汎方法主義は、自由にして合理的なる所爲に於て、動物に優越するものであるべき人間の普遍的本質を態様ずける上に於て、必然の結果なのである。理性的本質として、人間は、しかも固有の洞見に從つて、實踐理性の求心的概念に基く自治と自己開發とによりてのみ、純粹なる滿足に到達し得る。そして、彼れは彼れ自身から、それに適切なる一つの生活を、定言的に要求せねばならぬ。この人間的發展形式の一つの正しき生活は、不斷に繼續する自己向上のそれである。しかし、その向上は、常に、不完全から、より少き不完全へ、それ故に、無價値性から、より少き無價値性へ、自働的に移り行くことによりてのみ實現される。何故なれば、十全の絕對理想、即ち人間

的發展の目的觀念のみが、完全にして自證的なる價値性を與へるものだからである。

倫理的目的觀念の定言的要求に準據するあらゆる（また完全には正しいものでない）生活を、我々は、一般的に、且つ廣義に、一つの倫理的生活と名づける。そして、已れ自からを倫理的自制にまで決定するものとしてのそれの主體を——また廣義に於て——一つの倫理的人格と名づける。

是に於て、最高價値を有する人間生活の必然的、普遍的形式としての倫理的生活の觀念は、積極的にと共にまた消極的に、價値ある本質的可能性を包含したものである。我々の廣義に於て倫理的なる生活は、多少完全なる倫理的生活であり得るのであるが、それにも拘らず、一つの善き生活であるか、若しくは一つの惡しき——一つの「非倫理的になる」——生活なのである。この最後の表現は一つの倫理的生活の充實せる概念を指示するものである。この概念は、積極的に價値ある生活形式の等級のみを包容する、そしてその中には「最善の」即ち當該倫理的主體に取りて、隨時最善可能の「覺知と良心」とに從つて遂行される正しき生活の理想的にして最善なる形式を含むのである。

E、倫理的理性の一般性。特別的、個人的無上命令の普遍的形式としての無上命令

序論に於て既に强調された普遍性が、更らに注意されねばならないのであるが、それに於て、こゝでは、しかも本質的理由から、理性及び倫理的人格の概念が用ひられるのである。理性の概念は、或る人格的働作に於て、正當、不正當（若しくは正不正）が、合理的、非合理的が語られ得る範圍に及ぶものである。そして、それは、多樣ではあるが、明らかに本質的共通性を含有する一つの意味に於てゞある。それ故に、人格的働作の目的に關し、眞なるもの、純正なる

もの、善なるもの等に就いて、言はれるのは、凡て相關的である。こゝには、凡ての種類の働作が考察される。而るにその凡ては（從つて、また凡ての種類の理性は）、本質的法則によりて、相互不離に織り成されて居るのである。それ故に、理性の完全なる普遍性を包容する一つの理性論――しかも、一つの實踐的理性生活の本質的可能性を目標としての――即ち適切に一般的なる「倫理學」のみが完全なる原理的洞見を與へ、これによつて、最も完全なる原理的明晰に基く最高價値段階に位する倫理的生活を可能ならしめ得るのである。

理性の規範的觀念は、普通の意味に於て謂ふところの（環境に働らきかける）行動、並びに論理的及び評價的、例へば美的動作に關係する。完き倫理學は、凡ての普通の限定内に於ける論理學（論理的藝術論）、價値論殊に美的價値論）並びに普通に制義されるあらゆる實踐を包容する。あらゆる科學的認識もまた、例へば一つの「行動」である。そして職業的に眞理に獻げられたる科學者の生活は、それが若し、一般に、全き意味に於て適正なるもの、若しくば、合理的なるものであるならば一つの「認識論理的生活」である。彼れが、理性の「無上命令」に從つて、全個人生活の規定を要求することは、即ちその全生活が、理性の前に、そして、凡ての可能なる人格的動作に照らして、一つの最善可能的のものたるべきを要求することは、正しく、我々の現時の個人倫理的意味に於ける倫理人の本質的性質を成すものである。是に於て乎、かくのごとき一つの命令的生活の形式的範圍に於て、職業生活一般の形式が、それから特別的には、例へば科學的、藝術的、若しくば政治的生活のそれが、どの程度に於て是認さるべきであるか。そして、事情の如何なる形式の下に、如何なる限定的條件の下に、それが、倫理的生活として可能であり、且つ要求されて居るかゞ先づ確定されねばならないのである。

一體に、「無上命令」なるものは、それ自體命令であるとは言ふものゝ、併し、可能的に妥當であつて、一定の内容を

有する凡ての個人的命令に對しては、重要ではあるが、併し内容的には空虚な一つの形式に過ぎないものであることは明白である。精緻なる倫理學の先づ第一に努めねばならないことは、人間の本質に於て先驗的に理解された可能的生活形式の體系的研究と批判とによりて、可能的人格と可能的事情との形式に關して、定言的に要求されたる差別を、この一般的形式中に定立することゝ、この方法に於て、また、先驗的に行はれる倫理的品位の凡ての分化に於て見出される可能的職業生活の倫理的形式を記述することゝである。そして、こゝではまた、消極的に倫理的なる形式の本質的標式が考案されねばならないのは、言ふまでもない。

從つて、人間は何れも、彼れの個性と共に、また彼れの個人的なる倫理的觀念及び方法を有つて居る。彼れの個人的なるそして隨時具體的に決定されたる無上命令を有つて居る。倫理人の普遍的本質形式と、形式的に同一なる無上命令の下に行はれる一生活のそれとのみが、凡ての人間に、人間として共通的なものである。先驗的規範に於て見出される人間の「本質」から科學的、理論的(從つて、形式的)論理學が演繹し得る凡てのものが、また同樣であるのは勿論である。

F、文化の個人倫理的概念

最後に、我々は、文化の個人倫理的概念に就て、尙ほ一言しよう。凡ての特別に人格的なる生活は、活動生活であるそして、それは、かゝるものとして、理性の本質的規範の下に立つて居るものである。人格的自我の活動範圍は、可能にして自由なる活動の對象として、人間に認識され得るものゝ總體に於て認められる無限なるそれの範圍である。今これを適當に限定して見るならば、人間各自のこの實踐的環境は、彼れに意識される全體の環境、即ち、自然、動物界

及び人間界、臨時の文化、そして結句はまた、彼れ自身、即ち、彼れの肉體、彼れ自身の精神生活、彼れの動作、活動能力、及び不斷の受働的素地として作用する「心性」（聯想、記憶等）を包容する。この凡ては、個人的に遂れる程度に於て、意思に、目的を意識せる勞作に服する。人格的働きに於て（そして、特別には、合理的行爲に於て）到達された主觀的財の（特別なる場合に於ては、純正なる財の）全體が、彼れの個人文化の、そして特別には、彼れの「純正」なる文化の領域として、表示され得るであらう。この場合、彼れ自身が、文化の主體であつて、同時に、また文化の客體なのである。そして、更らに、彼れは、文化の客體であると同時に凡ての文化客體の原理なのである。即ち、凡ての純正なる文化は、純正なる自己開發によりてのみ、そして、それが規範を構成する倫理的範圍に於てのみ、可能である。完成された一つの美術品でも、例へば、抽象的に解するならば、それは創作者及び眞の鑑賞者を、一つの純粹なる意味に於て、「幸福」ならしめ得るものであるだけに、一つの單なる假定的價値である。所謂孤立的志向の上に立つ命令は、單なる「假言的命令」なのである、一般的評價、從つてまた絶對的價値附けは、一つの倫理的生活の範圍に於てのみ行はれるものであつて、而かも、それは、曩に凡ての動作に對して論述された趣旨に符合するのである。それ故に、完成されたる美術品もまた——純粹に充される美的志向の目的物としては、一つの價値「自體」たる——「各人」に對するこの價値客觀性の點に於ては、各人に對して——合理的に評價する各主體に對して——積極的に妥當的ではあるが、併し同時に假定的なる一つの價値可能性を有するに過ぎない。それの現實的價値は一つの現實的個性（この場合に於ては個々人の）に對する關係に於てのみ、そしてそれの全理性とそれの倫理的生活との一般性の範圍内に於てのみ、存するのである。一つの美術品に獻身する幸福は、この點に於てのみ、それの最後の、併しまた限定的なる正の規範を保有する。そして、それは「價値そのもの」の凡ての種に對して、また同樣なのである。倫理的正のみが、最後の正なのであ

る。通常無雑作に、それ自體に價値あるもの、または、善なるものと呼ばれて居るものは、それが一定の本質條件を充すが故にのみ、そう呼ばれるのである。そして、この本質條件は、價値計算に於て斟酌すべき一つの積極的價値要素として、一つの倫理的生活の範圍に於て、先驗的にそれを要求するものである。

結語

この分析によりて明らかなるがように、倫理的生活は、その本質上、實際、再新の生活、即ち常に再びその活動を新たにする一つの本原的再新意思に出來する一つの生活なのである。眞の意味に於て倫理的と呼ばれる一つの生活は、假令、發展能力ある本原的理性の素質が如何に僅かに豫定されてあらうとも、また、他人の範例と正しき指導とが、如何に有力なものであらうとも、決して、有機的受動狀態に於て、「自のづから」化成し、熟成し得られるものではないと等しく、また、外部から馴致され、暗示され得るものではない。自身の自由からのみ、人間は理性の聲に聽き、且つ彼れ自身と彼れの環境とを、理性的に形成し得るのである。そして、これに於てのみ、彼れの最大可能なる、即ち、理性に唯一の望ましき幸福を見出し得るのである。自己のために、そして、自己の中に、その存在の意義を見出す各人は、何時かは必ず、生活に於て、この一般的自己決定を遂行し、且つ、彼れの全生活を決定すべき決意を爲さねばならない。これによりて、彼れは、初めて倫理的に成熟したる人間となつて、彼れの生活を、倫理的生活として、本源的に基礎づけることになるのである。絕對的、倫理的觀念を目標として、方法的自己發展を演ずるこの自由なる原始的建設者しくば原始的創造によりて、人間は、彼れの古い人間の型を振り捨てゝ、彼れ自から、彼れの新しい人間性の形態を範示する新しい、純正な人間となるのである。倫理的生活は、その本質上「退嬰的傾向」を有する闘ひである限りに於てそれ

はまた、一つの常住不斷なる再新として、記述され得る。「倫理的奴隷狀態」に墮落した人間は、現在無力になつて居る本原的の倫理的生活意思を、徹底的に回想し、振作することによりて、若しくば、働きの中斷されて居る原始建設を新たに實行することによりて、特別なる意味に於て、再新するのである。

一定の規範的法則、殊に、社會の成員としての、社會的義務の主體としての倫理的個人に適用されるかゝる法則の、詳細なる凡ての論究と、凡ての基礎づけとは、個人倫理學の建設そのものに屬するのであつて、最早、それの原則的準備の立案に屬するものではない。この研究に於て、私の目標とするものは實に、これに外ならなかつたのである。

勞働政治、金權政治並に貴族政治

堀江歸一

一

昨年末英國に行はれた總選擧に於て、勞働黨の所屬議員が前回の百四十二名から百八十五名に增加して、保守黨に次ぐ一大政黨と爲り、政界に動かす可からざる勢力を擁するに至つたことは、世間に取つて、一の驚異たるを失はない。保守黨は三百四十六名から、二百五十八名に所屬議員數を減じ、明に總選擧に依つて、國民の不信任を表明されたに拘はらず、反對黨が自由黨と勞働黨との二者に分岐し、其孰れを以つてしても、下院の多數を制するに足らず、左ればと

て兩者の間に連衡の成立する見込みもないことを唯一の理由として、曖昧の裡に、政權を持續して居るもの〻、保守黨の威信は今や全く地に墜つるに至つた。ボールドウヰン氏が一昨年大藏大臣在職中、北米合衆國に使して、英國の合衆國に負ふ債務整理に關する難問題を解決し、倫敦市場をして安ずる所あらしめたのは氏の一大功績であり、續いてボナーロー氏の退隱後を承けて、首相の要職に就いた當時に於ては、ボールドウヰン氏の聲望隆々たる有樣であり、將來何處まで勢力を伸すかと、世間に囑目されたに拘はらず、首相と爲つて後には其爲す所、多く機宜に失し、求めて保守黨の勢力を減退させ、政界を不安の狀に導いた點に於て、四方の非難を蒙つて居るようである。今日の勢を以てせんか、勞働黨が一二回の總選擧に依つて、試練されたならば、現在以上に所屬議員數を增加し、確實に政權を獲得する日の來ることは必ずしも遠きに在りとす可きではない。勞働黨が多年に亘つて、假令ひ遲いとしても、堅實に其地步を擴大しつ〻ある點から考へても、其主義政綱が能く社會の實狀に調和しつ〻ある事實に徵しても、將た又勞働黨內に多くの知識階級に屬する人士を網羅し、人才其の如くに集まれる一事から見ても、此事のある可きは、何人に依つても、略ぼ想像される所である。即ち此時を以つて、英國には所謂勞働黨政治の實現を見るものであると云へる。

單に勞働政治と云ふ故を以つて、其名に驚いて、之を嫌忌する者がある。現に最近我國に於ても普通選擧を實行すれば、勞働者が政治上に跋扈して、恰も英國の如く勞働政治に陷するの危險があると云つて、之を普通選擧に反對する一論據とした者のあることを新聞紙上に於て、散見したが、斯る愚論は獨り日本に於て、行はれるばかりでなく、知見の相當に進んだ英國にも行はれて、資本家の間には勞働政治の實現に對して、之を提怖する念の盛なるが如くに見受けられる。固より勞働政治であるからには、從來の如く私有財產制度の擁護、私有財產權の發展を以つて、金科玉條とするものではなく、時に斯る制度を掣肘し、又斯る權利を束縛することのあるのは勿論であつて、斯くて資本家の憂慮を招くの已むを得ざるに至るものとも思はれるが、英國の勞働黨は決して共產主義者の集團でもなければ、過激主義者の結社でもない、其主義なり、綱領なりは、多年の鍛錬を經て、定まる所に定まつて居るのであつて、假令ひ今日直に勞働政治の實現に接したとしても、決して經濟組織の根底を撼搖するが如きことはない、單に從來自由黨と勞働黨との提携

の時代に行はれて居つた多くの政策に向つて一歩を進め、且つ其爲す所をして時代の進運に伴はしめるに止まる可きことは、略ぼ之を推察するを得るのである。

思ふに勞働政治實現の場合に第一に行はれ可きものは、自由貿易政策の眞意を發揮し物質の輸出入を自由にし、戰爭其他の機會に於て、行はれた貿易上の差別主義を廢止するの一事であつて、其結果として最も價格の低廉なる市場から物資が輸入されて、國民の生活を安易ならしめるを得る以上は、其利益の及ぶ所は獨り勞働者のみに止まるものではない。昨年末の總選擧に於て、保守黨の關税改革論に對して、自由勞働の兩黨が自由貿易論を以つて、之に當つた事實の存する以上は、勞働政治は自由貿易の形態を以つて、其一端を示すに至るものと考へられる。殊に保護貿易が外國物質の輸入を遮斷し、内國生產業者をして内地市場の獨占を行ふに容易ならしめ、獨占の結果として、消費者を虐げて、暴利の獲得に委せしめるが如きは、勞働政治の眞意に反するの甚だしきものであつて、此點に着眼しても、勞働政治は必す自由貿易を以つて終始す可きものと認められなければならない。

然しながら勞働政治の下に自由貿易の行はれるが如き、必ずしも事の奇抜なるものでなく、英國としては寧ろ平凡の事態に屬する。自由貿易政策の維持と共に行はれ可きものは、露國の承認であり、對獨態度の緩和であるが、前者は既に通商關係の開始されて居る今日に於て見れば百尺竿頭、一歩を進めたに止まる。後者に就ても、歐洲戰爭直後の英國と今日の英國との間には、著しく感情の相違があり、獨逸に對する態度を一變しなければならないと云ふことは、朝野に認められ來り、唯佛蘭西に對する關係に左右されて、曖昧に爲つて居つたのであるから、今後勞働政治の下に、對獨態度が確立したとしても、別に刮目す可き程の變化とも思はれない

唯勞働政治の下に、實際上の政策として、資本主義に牴觸する形に於て、或は資本主義を打破する形に於て、行はれるものこそ、世間の注目を惹くに値すると云はれなければならない。勞働黨も固より一個の政黨として、社會の活問題に處する以上は、其言論に多少の政略の加味されることは免かれ難き所であらう。殊に始終在野黨であり、又其然ることを覺悟して、自由奔放の言論を試みて居つた時代と異なり、責任ある地位に立つた場合に、施さんとする政策が平生

の言論と違うのは、已むを得ざるの數であるが、勞働政治の一端として、資本徴課金の制度こそ、勞働政治を通じて、第一に行はれなければならない所である。元來英國に於て、此制度が具體的に主張されたのは、實に歐洲戰爭中、戰後に於ける軍事公債の整理の至難なる可き事實の略ぼ豫想された當時からであつて、其後時に消長はあるが、此種議論の跡を絶たない。其後徴課金制度に關する主張の弱くなつたのは公債の負擔が特に輕く爲るような事實の生じた爲めかと云へば、決してさうではなく、公債の負擔の重いことに至つては、戰時も戰爭直後も、今日も其間に少しも徑庭を存しない、公債が山積して居ればこそ、財政上に於ては、其利拂の負擔が大であつて、收支の均衡維持を困難ならしめるし、經濟上に於ては、通貨膨脹の弊を免れない。斯くて一擧に公債整理の效果を收める爲めに、從來資本徴課金制度が主張されたのであつて、而して其主張を支持する根本的理由は大體下の諸點に緊る。戰時に於て、人命を擲つて、國難を救うの任に當つた者は專ら勞働者階級に屬する人々であるのに、有産者階級は却つて此國難に乘じ、或は多額の物資を生産し、之を高價に買却することに依り、或は其所有する物資を政府に賃貸することに依り、其れ〳〵莫大なる利益を占めて、憚らなかつた。其利得の結晶したものこそ、即ち彼等の戰後に領有した財産に外ならないとすれば、國難に應ずる國民の負擔に均衡を保たしめるには、如何なる方法を以てすることを可なりとするであらうか。戰爭中の負擔に當るに、人命を以つてした勞働者階級ありとすれば、戰後の財政を整理する負擔に當るには、有産者が其所有する財産を國家に供與することを以て至當とする。斯くて全國の有産者に就て、其所有する財産額を調査し、之に對して或る步率を定めて、計算された金額を徴課金とし、公債を所有する者は其儘公債を以つて、公債を所有せざる者は新に買入れた公債を以つて、徴課金を國庫に納付し、一方に國家自ら此公債を銷却するの擧に出でたならば、容易に公債の負擔を除き去るを得る道理である。唯國家は此計畫の下に、幾何の公債を銷却する方針を取るであらうか、其多寡如何に依つて、徴課金の額は自ら決定されることゝ爲るのであつて、議論としては財産の八分を徴課せよとか、一割まで上らしめよとか云ふような說もあつたが、具體的成案を以つて、許されない。然し徴課金制度たる、無産者たる勞働者と有産者たる資本家との間に於て、戰爭に伴う負擔の分配を公平ならしめようと云ふ見地に於て、主張されるのであつて

、之を主張する者は自ら勞働者であり、而して之に贊成する者は社會的正義を重んずる人士であることを當然とする。然らば勞働政治の下に、第一に行はれるものゝ、資本徵課金制度であることは、疑を容れないであらう。然し資本徵課金制度の實行たる、一時的條件に過ぎない。勞働政治の本領は今少しく永久的效果を有する方面に向つて、發揮されることを要する。私は之を數へて、第一國有國營主義の實行、第二國民的最小限度の國定、第三産業民主政治の普及と云ふ三者を擧げたいと思ふ。

國有國營制度の實行は其れだけ私有財産制度を制限し、私有財産權の運用される領域を狹隘ならしめる點に於て、有産者階級の常に反對する所であるが、從來の經濟組織に於ては、終始自由競爭の觀念に捉はれることの甚だしき一方には、財産權に對して、過度の尊重を拂つた結果、私有財産制度の威力、牢として拔く可からざるに至り、爲めに富の分配を不公正にして、社會の發達をして畸形的のものたらしめたこと少なしとしなかつた。即ち勞働政治に於て、國有國營の主義を擴張し、社會の公益に關係ある事業なり、獨占の傾向ある事業なりは、啻に富の生産を掌るものゝみならず其分配に與るものであつても、盡く之を國有國營に移し、私人をして暴利獲得、消費者虐遇の道なからしめることを期する。英國に於て國有國營の目的物として指目されるものは、實に鐵道と炭坑との兩者であつて、是等が先づ國有に移されたならば、續いて他のものにも及び、以つて經濟組織に變革を告げるに至ることは、論を俟たない。勞働黨所屬議員の一人であるジエー、エッチ、トーマス氏が千九百二十年公にした「勞働が支配する時」と題する著書は勞働黨が今日の如き勢力を收め、勞働政治の實現近きに在ることを豫想して、執筆されたものゝ如くに思はれ、此點に於て、讀者に多大の興味を與へるが、其一節に於て「勞働が政治を支配する時には、土地、鑛山、鐵道 運河、船舶の如きものが國家の絕對的管轄の下に屬するのは勿論、牛乳、麵麭の供給亦公共團體を通じて、同樣の地位に置かれなければならないと述べたとの如き、勞働政治と國有主義との關係を示したものと云ふことが出來る。

然も勞働政治の下に行はれる國有主義は國家が斯業に屬する資本を所有するとか、又は事業を經營するとか云ふような簡單なる形態のものに止まらない。從來多くの國に於て、又多くの場合に於て、國有主義が行はれながら、其結果は

如何であつたかと云へば、必ずしも社會公益を擧ぐるの機關と爲らずして、國庫に收入を與へる方便に使用されることの少なくなかつたばかりでなく、國有事業に於ける勞働者亦國家に依つて、優遇されると稱するを得ない、時に國家の權力を挾んで、勞働者の權利を壓迫した例すらなしとしない。隨つて勞働政治の下に、國有主義の行はれる以上は、斯業の從業者を擧げて、一個の團體を組織させ、更に其團體を地方別なり、仕事別なりに依つて、其れ〲適宜の區劃に分ち、斯く分劃された團體の代表者をして、事業の經營に參加せしめ、依つて以つて產業的民主政治を實現することゝしなければならない。從來勞働者の資本家に對する關係は單に一定額の賃銀に對して、一定分量の勞働力を賣却するのであつて、勞働組合の勢力が如何に發達し、標準賃銀制度の下に、賃銀が時勢の進步に伴ふだけの高率に上つたとした所で、勞働者に取つては單に高率の賃銀が獲得されると云ふだけの話であつて、資本家に對する隸屬と云ふ地位は何としても之を脫するを得ない。之を脫せしめない限り、勞働者は社會上に於て、資本家と對等の地位に立つ能はざる道理であつて、勞働者の地位を進める爲めに、產業民主政治が主張されるに至つたものとすれば、其主張の勞働政治の下に實現することゝ爲るのは、當然であると考へられる。

從來英國に於ては、種々の方面に亘つて、社會政策が行はれ、殊にロイド、ヂョージの所謂人民豫算提出以來其盛なるを致した。當時勞働黨と自由黨との提攜は甚だ鞏固であつて、社會政策の實行を容易ならしめたのであるが、是等政策の實行は果して勞働者階級に滿足を與へて、此の遺漏を生ずるものがなかつたかと云へば、決してさうでなく、社會政策の下に、勞働者は幾多滿されざるもの丶多きを覺へ、之を滿すの方便として、國民的最小限度の政策を一般的に勵行することを主張して、已まざるに至つた。工場法に依る勞働時間の制限や、衞生保健の設備の如き、敎育法に依る國民敎育強制の如き、最低賃銀局法に依る最低賃銀公定の如き、國民的最小限度の要求に應ずる爲めに、立案されたものに相違ないが、其効果の及ぶ所は國民中の一部分に止まる。更に其及ぶ所を廣くすると共に、最低限度の決定される標準を時勢の進步と共に高め、以つて文明的施設の與へる利益をして總ての國民に洽からしめようとするのが勞働黨の主張であつて、是れ亦其實行される程度の如何に依つて、經濟組織に重大なる變革を齎さなければ、已まないであらう。殊

にフエビアン結社に屬する人々と共に、國民的最小限度の政策を宣傳することに與つて力あつたシドニー・ウエッブ氏が今や勞働黨に屬する有力なる議員であり、勞働黨内閣の組織される曉には、必ず閣員の一人に擧げられるであらうと評判されて居るが如き、自ら深き因緣ありとす可きである。

二

勞働政治が何時に爲つて、英國に於て完成されるかは、何人と雖も、正確なる判斷を下すを得ないが、兎に角其時期の近づき來つたことは明瞭なる事實に屬し、吾人に刺戟を與へるもの丶少なからざる次第であるが、翻つて我國に行はれる政治の形態は何と見る可きであらうか。私は必ずしも勞働政治の萬能を信ずるものでもなければ、其實現を無條件に謳歌する次第でもない。唯勞働政治が社會民衆の利益を念とし、又民衆の要求に基いて、實現されるものであつて而して其政策を行ふや、民衆の爲めにする外に、何等の偏私なく、一の專制なく、殊に内外の關係に對して、平和を愛好することは、私の稱揚することを禁ずる能はざる所であつて、既にデモクラシーの行はれて久しき英國に於て、今勞働政治の實現せんとする兆候に接するのも、亦敢て異とするに足らない。我國に於て勞働政治の行はれるが如き、近き將來に就て云へば、全然架空の望みとするの外はないが、其れにしても我國に行はれる政治の形態が勞働政治に比較して、大なる懸隔の存することは、私の驚愕せざるを得ざる所である。從來我國に於て、政治の一形態として、顯著なる地位を占めたものは、所謂金權政治であつて、時の爲政者と金權者階級と相結託し、前者は其有する權力を濫用して、富豪や、彼等の出資に依つて成れる銀行會社の爲めに、特殊の利益や、恩典を與へる一方に、銀行會社をして政府の爲めに或る資金を醵出することに於て、或は政策に盲從し、又は之を擁護することに於て、代償を拂はしめることが屢々行はれた。第二次桂内閣の施政に於て、此種の流弊は既に其甚だしきを致したが、政友會内閣に至つては、益々其趨勢の著しきを告げて、已む所を知らざるの趣きを呈した。即ち特殊銀行や、特殊會社には政府の腹心と爲る者を擧げて、其重役とし、政府なり、政府を支持する政黨なりの爲めに、金錢上其他の便宜を謀らしめることは、公然の秘密として、

行はれ、南滿鐵道の如き、國際間に關係する事業を經營し、信用を重んずべき會社であるに拘はらず、政爭に累されて、疑獄事件を惹起し、永く中外の疑を招いたのみならず、一般の經濟財政策に於て、常に財閥、資本家事業主の如き、所謂金權者階級に屬する者の利益を擁護する政治は幾多の機會に於て行はれ、其行はれる度毎に無產者の利益を傷けることの甚だしきものがあつた。金權政治の要目として、其重なる條目を擧げれば、

第一、財政が如何なる窮境に居つても、公債償還の爲めに、常に若干の財源を減債基金に投じ、以つて公債市價の騰貴を謀つて、已まざること、

第二、積極政策の下に、財政に過度の膨脹を促し、物價騰貴の勢を煽揚して、生活費の增進に苦しむ一般國民の生活狀態を顧みず、一時の好景氣に依つて、利益する企業家の利益を擧げるに怠らざりしこと、

第三、外國から價格の低廉なる物資の輸入され來らんとする場合にも、輸入稅の增率や、輸入爲替に對する手加減に依つて、百方之を妨遏し、外國物資の輸入に依つて競爭を來らうとする內國當業者を保護したこと、

第四、增稅を行ふ場合には、一般國民の負擔と爲る消費稅を增率し、減率を行ふ場合には、有產者階級の負擔に歸する相續稅、地租、營業稅に於て、之を爲したこと、

第五、勞働者の利害の如き、全然之を眼中に置かず、幼稚なる工場法すら、永く之を實行しなかつたばかりでなく、治安警察法の勵行に依つて、勞働者團體の組織若しくは其活動に妨害を加へ、以つて事業主たる資本家の爲めに謀つたこと

の如きは、即ち之に當るものであつて、金權政治の爲めに、政府の爲す所は殆ど利す所を知らざるの趣きがあつた。

近來我國に於て國民思想が過激に爲つたとか、國民が直接行動を欲するとか云つて、大に時事を憂慮する人々もあるようである。何を以つて國民思想の過激であると、溫和であるとを差別する標準に充てるか、始め過激と見られた思想も時勢其ものゝ進步と共に、一個平凡のものと化し去ることもあつて、絕對過激の思想と云ふが如きは、あり得べからざるものではあるまいか。殊に思想と行動との間には、常に大なる距離の存するを常とする。無責任の地位に居つて、

言論に過激を極めた者も一朝局に當れば、温和を事とするに至るが如き例は世間に稀れなりとしない。又議會政治の行はれる國に於ては、議會さへ正しく國民の意思を代表する以上は、直接行動の起る可き餘地を存しないのであつて、如何に社會上に變化の起り、波瀾の湧くことを希望して已まざる者であつても、議會政策に依り、立法を通じて、自己の信ずる所を貫徹することを期するであらう。立憲國に於て、國民に直接行動を取るが如き者ありとすれば、吾人は議會が正しき道を歩んで居るかどうかと云ふことに就て、三思しなければならないのである。兎に角我國に於て、多年金權政治が行はれて、憚る所なく、有産者の利益のみ顧みられて、無産者の利益は爲めに蹂躙され、議會はあつても、民意の暢達する道と爲らなかつたことは、我國政弊の最も甚だしきものであつて、若しも聊かにても國民思想の過激に流れる傾向を生じたとすれば、其大半は金權政治に依つて、刺戟されたものと見る可きである。如何にして、此弊を杜絶す可きものであるか、之を杜絶する方法に就ては、幾多のものありとするを得るが、其最も穩和なるものを求めれば、普通選擧の實行を擧げざるを得ない。即ち普選の下に、政治を民衆化する、如何なる國民も其代表者を擧げて、政治に參與せしめるように爲つて、始めて金權政治の跋扈を掣肘し、金權者流の横行を斷絶するを得るものと考へられるのであつて、普選の實行は固より萬能藥でないとしても、尚ほ我國當今の病患に對する對症療法として、私の聊か望みを繫げた所である。

然も普選の如き、今日の時代に於ては、最も平凡である事の行はれるに就ても、我國には幾多の保守的分子あつて、之を妨害し、目下の狀況を以つてすれば、普選即行の望み絶無であるは勿論、却つて總ての進歩的思想に反對する保守固陋の内閣が貴族院を根據として、組織され、大正十三年の我國に於て、貴族政治の實現を見るに至つては、將に近く勞働政治の行はれんとする英國に對比して、恰好の對照を爲すものであつて、進歩と頑冥と、國に依つて、斯くまでに相違するかは、吾人の驚愕せざるを得ざる所である。

三

貴族院の我國政治組織に於ける地位の何ものたるやに就ては、今深く之を論ずることを避けるが、其職分は衆議院が爲す所が極端なる黨派的鬬爭に左右されて、偏頗なる政治の行はれんとする際に、貴族院の不偏不黨の態度に依つて、政治の公正を保たしめることに存しなければならない。隨つて貴族院と衆議院とを通じて、縱斷的に政治的勢力の分界點を劃するが如きは、少なくとも我國に於ては、貴族院の職分を混亂せしめるものと認められる。之を實際に徵して勅選議員の任選が專ら或る内閣の下に於て政務官を奉職した者や、其内閣に特殊の緣故情實を有する者に限られ、而して或る内閣の推薦に依つて任選された議員は其内閣の政治的系統を逐うて、議會に於ける進退を決するが如き、貴族院に政黨的分子を注入し、院の獨立公平を失する嫌なきを得ない。我國貴族院に於て、交友俱樂部が政友會の別働隊であり、同成會が憲政會の勢力圏内に居るが如き、既に貴族院としての職分を紊すものである。其上に、有爵議員の團體が其れ其れ鮮明なる政治的系統を有し、政論の公正と云ふことよりも、政黨の如何に依つて、嚮背を決するに至つては、貴族院の本分は何れの地に求められるを得るであらうか。其道なしとせざるを得ない。

然し實際問題としては、我國に於て貴族院が其本分を誤まり、衆議院に於ける政黨と共に、政治の實行者たる地位に在るとすれば、或る政治的系統の内閣の組織される場合に、之と系統を共にする貴族院議員の若干名が其才能に依つて、或る貴族院操縱の便宜に依つて、閣員に任命されることは、起り得る所であつて、之を以つて内閣が其基礎を衆議院に置き、民意代表を重んじて、組織されたものである事實を傷けるものとはするを得るであらう。此點に於ては、從來英國に於て組織された政黨内閣も我國に於ける擬似政黨内閣と同樣であつて、閣員は上下兩院議員の混成隊であり、各自の特長とする所に據つて、其れ〴〵の地位に就く、唯近年英國に於て、内閣首相たる者は下院に議席を有することが必要の條件と爲り、隨つて貴族の當主で爵位を有する者は内閣組織者たるを得ないと云ふことが殆ど一の不文律たらんとしつゝある一事を特色とするのみである。而して勞働黨内閣でも組織されゝば、閣員の全部が平民である可きことは論を俟たない。

然るに今回我國に於ては、貴族院を基礎とする所謂貴族内閣なるものが組織された、首相は從來樞府に職を奉じた爲

め、陸海軍大臣は現役軍人であり、外務大臣亦外交官として勤續中の人であつた爲め、何れも貴族院に議席を有しないが、他の諸大臣に至つては、揃ひも揃つて、選擧に依るか、又は任命に依る貴族院議員であり、而して其多數は有爵者である一方に、一人の衆議院議員を閣員中に包擁して居らない。世人は此内閣を呼んで貴族院内閣と云ひ、貴族政治を行はんとする爲めに、生れたものと稱するのも、不思議のない次第であるが、大正十三年の今日、恰も時代を藤原氏全盛の幾百年前に逆轉させて、我國に貴族政治の行はれるを見るが如き、果して何の意に出づるものであらうか、仰も亦斯の如くして如何なる政治が行はれ、又能く國民の信賴を收めるを得るであらうか。

由來我國には階級の差別なく、階級鬪爭の起る掛念もなく、六千萬の同胞盡く陛下の赤子であつて、上下一體、君民同治の實があると云ふ說が行はれる。私も我國の實際が此說の如く爲らんことを希望して已まない者であるが、如何せん、制度の上に、事實の上に階級的差別を生ぜしめるものゝあることを遺憾とする。而して華族制度の如き、我國に階級的差別を生ずるに至らしめる最も有力なる原因でありとされる。思ふに我國に華族制度の設けられたのは、華族を以つて、皇室の藩屛たらしめる趣意に基いたものと稱される。然し皇室の藩屛であれば、六千萬の同胞盡く其身を挺して之に當る可き譯であつて、我國民に此點に就て、覺悟の鞏固なるものがある以上は、社會に特殊の一階級を作爲して、之に皇室の藩屛たる任を託さうとするが如きことを要しないし、又之を託されて、自ら任ずる者がありとすれば、僭越の甚だしきものであり、斯る特殊の階級の存することに依つて、却つて皇室と一般國民との間を疎隔するやうなことがあつたならば、由々しき大事としなければならない。然し既に我國に華族制度が設けられたからには、華族と云ふ階級を何處までも存續せしめなければならず、又此階級に或る特典を與へることも必要と爲つて來る。即ち一旦華族の家に生れた者は如何なる暗愚庸劣の輩であつても、世襲財產制度の保護に浴して、生活上の安定を保障される。公侯爵の當主で、成年に達した者は世襲的に貴族院の議席を占めるし、伯子男爵の當主亦同族間の互選に依つて、無爵者の階級に居る者よりも、案外容易に立法部の一員と爲つて、國政に參與するを得るばかりでなく、華族たる榮稱を有する故に、俗界に大なる信用を博し、尊敬を受け、社會上に地步を得るの便宜が大である。然らば斯の如く今日の華族が榮爵を授け

られるに至つた理由は何れに在るであらうか。五攝家の如き古來の名門として、無比の位地を占める者は兎に角、他は大概封建時代に於て、祖先が一國一城の主人であつたとか或は支藩の小城を預つて居つたとか、明治政府に仕へて、幾十年間薄書刀筆の吏務に從つたとか、對外戰爭に從つて、一軍團、一艦隊の兵力を統率したとか、外國駐在の使臣として、偶々通商條約を締結したとか云ふような社會の大局から見れば、極めて些細な事柄が種子と爲つて、其本人には勿論後世子々孫々の末にまで、華族の榮稱を荷はせ、之を荷つた者をして特權的地位に立たしめる、而して今や此特權が政治上に利用されて、貴族院內閣の出現と爲り、貴族政治の實行と爲らうとする。貴族出身の人にして、其性行識見の稱す可き者は或は之を見出すを得るであらう。然し之を全體に就て云へば、我國の貴族社會に於ては貴族自ら其子弟を暗愚ならしめる惡習がありはしないであらうか。所謂乳母日傘で、育て上げられた華族の子弟が教育を受ける段に爲ると、平民の子弟との間に嚴然たる區別が設けられ、所謂華族の傳統的精神を傳へる爲めに、設立されたと稱される特殊機關の學習院に於て、同族の子弟若しくは物數寄極まる華族以外の家庭の子弟と共に、極めて鈍き競爭の下に、初等科時代から、高等科時代までの教育が行はれ、其間毫も外界の刺戟を受けない。而して學習院の教育を終了した者は或は特殊の聯絡を辿つて、關西の某大學に入學したり、或は外國に留學したりして、孰れも數年の後には、一廉の貴族と爲り年齡の到來と共に議院法に定められた資格なり、同族間の互選なりに依つて、貴族院に議席を占め、其或る者は何會の領袖として、今回の如く國務大臣の職に就いたり、內閣組織に容喙したりするとすれば、我國に於て華族に生れて、政界の有力者と爲るのは、誠に坦々たる道路を歩むが如く、或は道中壽語錄で、日本橋の振出しから、何時の間にか、五十三次の道程を終るが如きものであつて、是れ位容易な事は他に類を見ないであらう。而して斯る特殊階級の人々又は是等と同一の空氣內に居る人々をして國運の進展最も急を要する時に、國政を擔當せしめて、果して如何なる結果を生ずるであらうか私は一概に貴族政治を非なりとするものでもなければ、貴族政治の當局者に就て、兎角の批評をするものでもない。唯貴族政治の下に於て、何事が行はれるかを推究して是非の判斷を下したいと思ふのである。

私は考へる、我國に於て貴族政治が行はれ、華族の地位に居る者又は之に準ず可き輩が貴族に特有の思想や感情や利

害に訴へて、國政を處理するとしたならば、其大體の傾向は必ず民衆の利益を傷け、民衆の希望を斥、民衆の發展を妨げるに至るであらう。現に貴族政治の當局者は名を調査未了に藉りて、普選の即行を拒否し、曖昧裡に此問題を葬り去らんとするではないか、斯の如くして彼等は政治上に行はれる民衆運動の安全瓣を塞いで、如何にして其運動の緩和を謀り得るとするのであらうか。前内閣組織の直後に於て、普選即行の望を生ずるや、其時まで普選の實現に絶望して、直接行動に傾きつゝあつた一部の勞働者團體も翻然其態度を改めて、普選の下に議會主義の眞精神を發揮しようとして心構へて居つた。斯くてこそ勞働運動も自ら其守る可き所を守り、社會の秩序を維持しつゝ、運動の目的を達するを得る次第であるのに、今貴族政治の下に、當面に於ける唯一の希望を絶たれたとあつては、勞働運動は如何なる方嚮に向うであらうか、私の辯を要せざる所である。

貴族政治の出現其ものが勞働運動を左傾せしめることは免かれ難き所である其上に、貴族の如き本來其思想に於て感情に於て、勞働運動に何等の理解をも有せざる者であり、或は其貴族であつて、資本家を兼ねる立場から勞働者を見ること、封建君主の足輕下郎に對するが如くであるとすれば斯る内閣の下に、我國の勞働立法が寸尺の進展すら爲すを得ないことは之を知るに難しとしない。或は新内閣員の内には、清浦子の如き、身を月給六圓の小學校教員に起して、今日の榮達を得るまで、社會の風浪と鬪ひ、千辛萬苦を味つたと云ふ立志傳中の人物もあるが、一面から見れば某氏の如き多年忍從を事とした一個の循吏であり、他の閣員に至つては紈袴の貴公子か然らずんば典型的吏僚の個々貴族院に議席を有した者に止まる。循吏や貴公子に共通の性癖は其意思の薄弱なることであるが、我國現時の國政は斯る意思薄弱なる人の擔當し得る所であらうか。財政の整理にせよ、行政の整理にせよ、必ず或る方面に多大の犧牲者を生ぜしめざる限り、成就されざるものであつて、隨つて之を敢行するには、意志の堅固なることを要する、其際に循吏や貴公子の集團をして、國政を掌らしめ、所謂貴族政治の實を現はさうとする國民に取つて慶福とす可きものあるであらうか。

貴族政治の特色を強いて詮索したならば、其風雅悠長であることを推すを得るかも知れない。藤原氏の政權を擅するや、時の公卿は歌舞宴樂を事とするの傍、國政を掌つたるが如くであつて、自ら世間人心の急迫せんとする勢を緩和し

たかも知れないが、今日の如く國際間の關係の重大なる時代に、政治と風流とを混淆するが如きは、沙汰の限りである。然も彼等にして單に貴族的風流を事とするに止まれば、固より曠職の責は免かれないとしても、他に及ぼす弊害は比較的少ない。末世の今日に於ては公卿や大名の後裔にも利慾の念は甚だ熾盛である。新内閣の中心勢力と稱される研究會の如き、從來政友會と結託して、利權の獲得に餘念なかつたのは、世間公知の事實であつて、爲めに我國に政弊を醸成したことの幾何なるや、測り知る可からざるものがある。彼等能く局に當つて、利權慾を慎むを得るかどうか。研究會の所謂有力者とか、領袖とかを以つて目される人々の内には或は日本銀行の監事であるとか、日本興業銀行の監事であるとか、政府の管轄下に在る特殊金融機關の重役に任命された者も少なからずあるようである。畢竟原敬が政友會總裁時代に、貴族院殊に研究會を操縦する方策として、行はれた所であつて、斯の如くして政友會と研究會との聯繫は成立し、今日に至つて、尚ほ貴衆兩院に蟠居する勢力を成して居るとすれば、貴族の利權慾も亦旺盛であることが想像されるであらう。或は彼等は今回の如く政權を掌握した曉に身に重責を荷うことを顧みて、斯る欲望を制するかも知れない、然も衆議院に一の與黨を有せず、事々に既成政黨の歡心を繋ぎ、好意を收めて、政府の欲する所を爲さうとするに當り、政黨に利權を與へずして、能く政黨を操縦し得るであらうか。此所にも貴族政治の弱點を暴露せざるを得ない。而して貴族其ものが概して云へば、世襲財産制度に依つて、其所有する財産を擁護され、或は貴族であるの故を以つて、有利なる資本放下の道を與へられ、自ら一個の有産者を以つて居ることは、蔽ふ可からざる事實である。然らば彼等は單に自己と結託する者を助ける必要からするのみならず、自身の爲めにも、亦金權政治を行ふに至ることは、睹易きの道理であつて、斯る二重の意味から、貴族政治の下に、金權政治の行はれること、濃厚と爲つたならば、人心を刺戟し、無産者の性情を惡化せしめることの大なるは、論を俟たない。過日或る不祥事件の起るや、之に關聯して、都下の一新聞は社會主義的思想の鼓吹されることを以つて、人心險惡の原因であるとし、學者の戒愼を求めたと云ふことであるが、斯の如きは社會主義の何ものたるやを知らざる者の妄言であつて、其執筆者の無識驚くの外はない。人心を刺戟して、之を險惡ならしめるものは、實に少數者横暴階級專制の政治を以つて、其甚だしきに居るとしなければなら

ない、私は此點に就て、貴族政治の當局者に猛省を促さんとする者である。

世間に勞働政治を非難する聲の高いのは、勞働者と云ふ一部階級の爲めに、專私した政治の行はれることを根據とするものであらう。然しながら勞働政治の行はれんとすることの目前に迫り來つた英國に就て云へば、勞働者は社會の全體から見るときは、正に多數者であつて、其利益を發揚することが社會の利益と一致する爲めに、勞働政治の實現が可能と爲り、又勞働政治が或る制限の下に行はれて、弊を見ないし、又此制限を遵守するまでに、勞働者が訓練されるに至つたのである。我國今日の事實として、勞働政治を非難するのは、尙ほ可なりとしよう。然も斯る非難を發する人々が階級專制と云ふ點から云つて、勞働政治に比較して、更に極端である貴族政治を寛容しようとするのは何故であるか、我國貴族の品性高尙であり、精神亦鍛練されて居つて、專制的權力を揮ふ可き地位に在りながら、之を揮はないとするのであるか。或は彼等の臆病なる、專制的權能を揮ふことに躊躇することはあるかも知れない、然も雲閣の高きに居りて、社會民衆との聯絡を缺き、如何にして、社會全體の利益に調和する政治を行ふを得るであらうか。貴族政治をして出現するに至らしめた我國今日の、狀況は實に政治に於けるのみならず、經濟に、財政に、將た又社會に幾多の缺陷の存することを示すものがある。而して貴族政治の爲めに、更に其缺陷を深くされることは、吾人の忍ぶ能はざる所であつて、革正の必要を叫ばざる可からざる所以である。

二つの勝利

——無産階級の政黨問題——

山川均

一、

一九一八年、一九年にかけては、今にも全歐羅巴を呑みつくすかと思はれたさしもの無産階級革命の滿ち潮も、二一年になつては漸やく退き潮に轉じ、二二年二三年になると、反動勢力が各國に勝利を誇り、勞働階級の敗報は到るところの戰線から傳へられ、無産階級運動は全線に亙つて總退却を始め、積年の惡戰苦鬪によつてかち得たその陣地は、永久に失はれんとするかの如くに見へた。

然しながら失はれたと見へたのは、無産階級の陣地ではなくて、たゞこの陣地から、一躍して決定的の勝利をつかむことの出來る非常の瞬間が去つたといふだけである。ロシヤ革命や獨逸革命の浪がしらを立てつゝ、凄まじい勢ひで押しよせてゐた無産階級昂起の大波は、今日はもう見ることが出來ぬ。歐羅巴の資本主義は、決して戰爭前の常態に復することは出來ぬにしても、多かれ少かれ、その進行の過程が正常に復して來た。一九一八年一九年には、無産階級の最後の目標は、その着彈距離の圏内にはいつてゐた。たゞ問題は、無産階級が狙らひを過またずに、引き金を引くことであつた。當時の切迫した形勢では如何なる代價を拂ふても權力を握らうとする無産階級の斷乎たる決意と行動一つで、一切の形勢が決定するように見へた。資本主義發展の必然の『過程』は後方に押しかくされて、無産階級の『意志』が前方に現はれてゐた。ところが今日は、斯ような非常の時機は過ぎ去つた。無産階級は、よし依然として當年の陣地に據つてゐても、この同じ陣地からでは、最早や同じ標的を射落すことは出來ぬ。獲物は着彈距離から遠ほざかつたからである。

かように歐羅巴の資本主義の進行が、多かれ少かれ、危機に

を去つて正常に復し、無産階級はたゞ決意と果斷とのみでは、一擧にして決定的の勝利を望むことが出來なくなつて來ると、無産階級の『意志』は再び後方にかくれて、資本主義發展の必然の『過程』が、唯一の重大な決定要素として前方に現はれて來る。そして無産階級の戰ひは、勢ひ突撃と强襲の戰ひから、この必然の『過程』に沿ふた一歩一歩の、理詰めの戰ひになつて來る。この理詰めの戰ひによつて、無産階級は新たに有力な陣地と、軍略的地點を占領する。そして獲物が再びその射程の内に來る瞬間に備へることになる。

これは獨逸の形勢を見れば、よく分る。歐羅巴の近い將來に一大噴火が起るとしたならば(そして必らず起るに相違ない)、それは一度ゆるんだ資本主義の地盤が安定を恢復することが出來ないで、一大斷層を生じてゐる獨逸に噴火口を求めるに相違ない。獨逸は今も尚ほ、急速に無産階級革命に急いでゐる。けれどもこの獨逸に於てすらも、無産階級革命の形勢を促進してゐる力は、無産階級の『意志』よりも、獨逸資本主義の理詰めの『過程』である。無産階級は經濟的に壓迫すればするほど、革命的になるといふ主張は、獨逸に於て最もよく打ち破られてゐる。獨逸の無産階級は、過去數年間に亘る極度の困窮のために、殆んど最後の力をも剩さぬまでに疲れきつてゐる。けれどもそれ故に、獨逸の資本主義のために萬歳を唱へる者があるならば、その人は誤つて居る。獨逸の資本主義は、そのために何等の安定をも得て居らぬ。若し無産階級が敵の牙城に迫る戰ひは、たゞ非常の形勢の下に於ける突撃と强襲の戰ひだけならば無産階級が疲勞の極度にある獨逸では、資本主義は安泰を樂むことが出來る。けれども、事實は之に反してゐる。資本主義發展の理詰めの過程そのもので、日に日に、獨逸に無産階級革命の形勢を進めて居る。獨逸の無産階級は、この『過程』に沿ふて、この大きな流れに泛んで、この戰術を開展して居るのである。

これが一九一八年一九年から、二二年二三年に移る無産階級運動の大體の形勢であるがこの形勢は敵の陣營から見れば、無産階級の總退却とも見へ、無産階級の戰線の潰滅とも見へる。けれども無産階級が、資本主義發展の必然の『過程』に沿ふた理詰めの戰ひをする時こそ、實は無産階級の一番の强味の時であることを忘れてはならぬ。資本主義は、無産階級の突撃と强襲から脫することは出來る。けれども資本主義は、自己の發展過程の必然から免がれることは出來ないからである。

最近の總選擧に於ける英國勞働黨の勝利もまた、斯ような背景のうちにおいて見る時に、特に重要な意義がある。

二

昨年十二月の總選擧には、在朝黨たる保守黨は經濟的帝國主義に立脚する關稅政策を掲げて戰ひ、勞働黨は失業問題の解決と資本課税の旗印の下に戰ふた。その結果、保守黨は前年の總選擧にくらべて、約百萬の投票を失ひ、下院に於ける三百四十八名の絶對多數から、二百五十七名に落ち、自由黨は兩派を合して百五十八名となつたに過ぎないが、前年の總選擧に於て百四十二名に躍進した勞働黨は、再度の飛躍によつて百九十二名となつて、第一便の在野黨たる地位を確實にした。そして勞働黨内閣の出現は、差し迫つた事實として豫想せられるようになつた。

自由保守の二大政黨が、代はるがはる内閣を組織して、謂ゆる政黨政治の『妙諦』を示してゐた英國の政界に取つては、之は慥かに一大變化に相違ない。日本の或る政黨政治家は、「英國は二大政黨對立の時期は既に過ぎ、二黨聯立、若くは提携の時期に入つた」ものであつて、「英國の政治に範を取るところの少くない」日本に於ては、『特別の注意にあたひする』と語つてゐる。然しながら『特別の注意にあたひする』ことは、二大政黨主義の傳統が倒ほれたことではなくて、勞働黨内閣の出現を阻止するためには、二黨聯立——自由黨と保守黨といふ犬猿の間柄にあつた二つのブルジョア政黨の聯立——によつて當るの外なくなつたことである。これは二大政黨對立の時代が過ぎ去つて、新たなる二大政黨對立の時代が來たり、若くは來りつゝあることを意味して居る。總選擧の結果と勞働黨の擡頭を見て、單に英國に二大政黨對立の時期の過ぎ去つたことしか見えない政治家は、ただ政治を外形の上から見てゐるものである　この種の政治家は、今後の日本が、英國の政治からどんな「範」を取ることを餘儀なくされるかを覺らない

英國の有力な一新聞資本家は、勞働黨の勝利は、それほど憂慮するに足らぬと語り、世間の注意を引いたと報ぜられて居る。勞働黨の勝利は如何に目醒ましいにもせよ、下院の第二黨になつたゞけである。勞働黨が下院の絶對多數黨とならぬ間は、キヤスチングヴオートを握つて居るものは、自由黨である。勞働黨が單獨で内閣を組織するにしても、下院に於ける自由黨を全然向ふに廻はしては、如何なる政策をも行ふことは出來ぬ。勞働黨の勝利は、少くとも自由黨に取つては、それほど憂慮すべきものではない。

更らに勞働黨が下院の絶對多數黨となり、ブルジョアの兩政黨を向ふに廻して、堅固な勞働黨政府を組織するにしたところ

で、この勞働黨內閣が資本家から資本を沒收し、地主から土地を沒收し、炭鑛主から炭坑を沒收し、一切の產業を勞働組合の管理に移しすべてのブルジョアから選擧權を剝奪するような氣遣はない。この意味に於ては自由黨ばかりでなく保守黨と雖も、勞働黨の勝利を、さほどに憂慮する必要はないのである。

勞働黨の勝利が眞に重大な意味をもつのは、それが無產階級の決定的の勝利だからではなくて、決定的の勝利を導く新しい陣地となり得るからである。それは無產階級が、最後の目標を擊ちとめたものとして重要なのではなくて、英國に於ける資本主義發展の過程が政治の上に惹き起した理詰めの變化を代表して居るからである。英國の政界には、ブルジョアの二大政黨對立の時代が過ぎ去つて、ブルジョアジーと無產階級との、政治的勢力對峙の時代が來たのである。

三、

英國に於ける勞働黨の勝利ほどに、一般世間の注意を惹かないで、しかもそれ以上の重大な意義をもつものは、米國に於ける無產階級黨の成立である。米國では、無產階級の政治勢力の組織は、英國よりもおくれてゐた。そして其の主要な原因の一つは、米國勞働聯合會（エ・エフ・エル）が、謂ゆる政治的中立主義を固執してゐたことであつた。米國には社會黨があり、共產黨があり、無產者黨があり、勞働者黨があり、農民勞働黨があり、その他一州內に限られた色々の無產階級的の政治團體があつたが、いづれも無產階級中の一勢力ではあつても、全階級の政治的勢力を、全國的に結束したものではない。そして今日まで、米國に全國的全階級的な無產階級の大衆的政黨の起らなかつたのは、まだ無產階級の內容が、政治上の利害を一つにする純・な、階級になり切つて、ゐなかつたことが、多くの原因であつたに相違ない。またデモクラシー幻影が、米國に於ける無產階級の政治的覺醒を妨げてゐたことも爭はれぬ。けれどもその後米國に無產階級の大衆的政黨の起るべき形勢が既に熟して居りながら、しかも最後まで之を妨げ、今も尙ほこれを阻止しやうとして居るものは、勞働聯合會を率ゐてゐるゴムパース等の傳統的の政策に外ならぬ。彼等は、勞働組合は政治運動に卷き込まれないで謂ゆる政治上の中立主義を取ることを以つて、米國勞働聯合會の傳統的の政策とした。彼等は共和黨乃至は民主黨と結ぶことに反對したように、社會黨と結ぶことにも反對した。彼等はいづれの政黨政派と結ぶことにも反對したように、無產階級が獨立した政治的勢力として、無產階級の政黨を組織することに反對した。一切の政黨政派から超然として

（乃至は、一切の政黨政派から獨立して）ただ勞働階級に最大の利益を提供する候補者に投票すること、これが今日に至るまで、そして今日も尙ほ、ゴムパース、ジョンストン、キーテング、ストン等の勞働聯合會の毎年の大會によつて確認させられてゐる政策である。

勞働運動を經濟鬪爭に局限し、政黨政派に對する組合運動の獨立を强調し、謂ゆる政治上の中立主義を取る點に於ては、最も革命的だと謂はれたフランスの勞働總同盟（シー・ヂー・テー）とゴムパースの勞働總同盟とは、不思議にも全く一致した。そしてその結果と影響もまた、全く一致してゐたのである。ゴムパースは組合運動の獨立と政治的中立の塹壕を深くして、社會黨その他の無產階級の政黨政派の勢力が、組合運動にはいつて來ることを喰ひ止めた。斯くすることによつて、彼は四百萬の組合員の投票を、最も高値をつけるブルジョア政黨の候補者に賣ることが出來た。ゴムパース等の組合官僚主義者が今日に至るまで、謂ゆる政治上の中立主義によつて勞働聯合會を率ゐて來られたのは、詰りは米國の勞働階級が、政治的に成熟してゐなかつた結果であると同時に、米國の勞働階級の政治的成熟を妨げてゐた最も大きな原因の一つは、組合官僚主義者の、斯ような政策だつたのである。

一切の政黨政派に對する組合運動の獨立と政治上の中立主義とは、何時でも、無產階級の革命的政黨の勢力が、組合運動に侵入することを喰ひ止めるためには有効に用ひられたが、組合員の投票が、ブルジョアジーに利用せられることは少しも防止しなかつた。その結果、政治上の『中立』と『獨立』とは、事實上には、無產階級の政治勢力からの『獨立』『中立』と、ブルジョアの政治勢力への隷屬を意味してゐた。これはフランスに於ける革命的サンヂカリズムの結果も、アメリカの保守的組合主義の結果も、程度こそ違へ、全く同じであつた。ゴムパース等の組合官僚の徒は、組合運動の『獨立』によつて、過去十數年の間、アメリカの勞働組合を完全に彼等の官僚主義に隷屬せしめてゐたのである。

斯ようにアメリカの無產階級が、ブルジョアの政治的勢力から獨立して、一つの獨立した政治的勢力として組織せられることは、ゴムパース一派の魔法の杖たる『政治的中立主義』の終焉を意味してゐる。そこで米國勞働聯合會の組合官僚の徒は、今日に至るまで、有ゆる惡辣な手段を弄して、無產階級黨組織の運動を防害したりサボタージして居つた。彼等はこの運動を謂ゆる『赤化運動』に結びつけたり、『共產黨の陰謀』に結びつけたり、『ロシアの宣傳費』に結びつけたりするような、恥すべ

き行動さへも敢てした。それにも拘らず、アメリカには昨年七月、遂に無産階級の大衆的政黨が生まれ出た。即ち『聯合勞農黨』(精密に云へば聯合農民勞働者黨、フエデレテッド・フアマース・レエボア・パアテー)がそれである。無産階級黨の出現は、米國に於ける勞働運動の久しい傳統を打破したものであつて、組合運動に於けるゴムパース主義が、根底から崩ぶれかゝつたことを意味してゐる。

四、

たゞ之れだけでも、既に重大な意義があるが、米國に於ける無産階級黨の成立に、それ以上に重大な意義があるのは、歐洲戰爭の五ケ年間に受けた、米國の社會狀態の變化を代表してゐるからである。

英國には自由保守兩黨が對立して、この二つのブルジョア政黨が政權を代はり番に廻り持ちすることを指して、『代議政治の妙諦』と云つてゐた。それは慥かに、ブルジョア・デモクラシーの『妙諦』であつた。米國も大體その通りで、民主共和の兩黨が對立して、代はる〲政權を握つてゐた。共和黨が大資本を代表すると、民主黨は時として小資本の利益を代表して之に對抗したことがある。しかし大體に於いて、大資本と小資本との利害は、それほど明白に對峙してはゐなかつた。これは丁度日本でも、政友會が大地主と大資本とを代表する時に、憲政會が之に對抗する必要から、一般商工階級の利害を代表する傾向を示すのと同じであつた。ところが資本主義の發展に伴ふて資本の集中がもつと進行し、全米國の經濟上の支配力が、事實上、少數財閥の掌中に握られてしまうようになると、是等の大資本の利害と一般の小商工階級や中流以下の農業者の利害とは、だん〲乖離し對立するようになる。そしていくらデモクラシーの幻影でごまかしても、政黨は最早や二人の主人に事へることは出來ぬ。大資本の支配に歸してゐる共和黨も民主黨も、最早や大資本の利害を代表しつゝ、同時に是等の階級の利害を適切に代表することは不可能になつて來た。そこで一般の小商工階級、農業者、その他の中流乃至は中間階級は、大資本に對して、獨立して自己の利害を擁護する政治機關の必要が、追々と增して來た。この不滿と必要とが、機會のあるごとに政界の表てに現はれたものが、即ちブルジョア急進分子による謂ゆる第三黨の計畫である。

そこで米國では、經濟界の不況期が來るごとに、第三黨の運動が擡頭した。何故ならば、不景氣の壓迫を先づ第一番に感じるのは、小資本や中流以下の階級だからである。そしてこの事

實は、やがてまた第三黨運動の小ブルジョア的性質をも、遺憾なく物語つたものである。第三黨の運動は、既成政黨の方面では、共和民主の兩黨と通じて之を横斷することを意味してゐる。今新しい階級的利害に應じて、米國の政黨が合理的に整理せられるとしたならば、共和民主の兩黨が分解して、その一と片れづゝが集まつて大資本黨と小ブルジョア黨となるべき運命をもつてゐる。これは日本の政友會と憲政會の場合とほゞ同じである。

けれども小資本と一般商工階級と農業者とが大資本の勢力に拮抗するためには、無産階級の援助を受けなければならぬ。そこで第三黨は、いつでも其の小ブルジョア的性質を押しかくして、財閥大資本の獨裁に對する、一般民衆の運動といふ裝ひを以つて現はれる。それにも拘らず、第三黨運動には、常に小ブルジョア的な弱點の蔽ふべからざるものがあつた。小ブルジョアと中間階級は、その階級的立場が曖昧であり不安定であるように、その階級的特質は、常にブルジョジーと無産階級との中間を彷徨して、決定的の態度を缺くことである。不景氣と共に沸騰した第三黨運動が、いつでも、不景氣風が吹き去ると共に、水蒸氣の如く消散するのは、この運動の小ブルジョア的性質を物語つたものに外ならぬ。

第三黨の運動は、資本主義發展の過程が、米國の社會的構成の上に發した一大變化を反映したものであつて、因より重大な意義がある。然るに財閥大資本の支配に對して、一般の民衆といふ大きな傘の下に、その他の諸階級を包容して一つの政治的努力に結束しようとする第三黨運動が實現せぬうちに、却つて純粹の無産階黨の生まれたことには、更により大な意義がある。就中この新たに生まれた無産階級黨が、却つて第三黨運動を母胎に借りたことは、單なる皮肉と見ることは出來ぬ。

五、

是より先、無産階級黨組織の要求が高まつて來たので、一昨年二月、リリーヴランドに『進歩的政治行動』の協議會が開かれた。けれどもこの協議會では、米國勞働聯合會の保守的官僚主義者が、依然として無産階級黨の組織に反對したばかりでなく、第二インタナショナル所屬の社會黨までも、組合幹部の意向に迎合するために、一般勞働階級の要求を無視して無産階級黨組織の尙早を主張したので、協議會は失敗に歸した。ところが政黨組織要求の聲はます〳〵高まつて來るので、シカゴ勞働聯合會の會長ジョン・フイッツパトリックの率ゐる農民勞働黨（フアマース・レエボア・パーテー）が主催となつて、昨年の七月

三日から三日間、シカゴに於て、政黨問題の全國的協議會が開かれることゝなつた。この協議會でも、農民勞働黨の指導者等は、極力、無產階級黨の組織を延期しようと試みたにも拘らず農民勞働黨の一般代議員は、即時に政黨を組織しようとする堅い決意をもつてゐた。カリフオルニアの無黨派同盟から送られた一農民代議員が、『勞働黨の組織を見ないでおめ〳〵歸つて往つたなら同僚は私の生皮を引き剝ぐにきまつてゐる。彼等は私をこの協議會に送るために、一人前十弗づゝも工面した。』と叫んだのは、協議會の空氣を——そして勞働者及び農民大衆の要求——最もよく代表したものであつた。フイツツパトリツリ等の組合官僚主義者は、いつもの通り、『赤化』『ボルセヰキ』『ロシヤの陰謀』などの讒誣と中傷によつて、即時政黨組織說の急先鋒たる勞働者黨(ウオカアス・パアテー)を孤立させる作戰を取つたにも拘らず、即時說を主張する勞働者黨の提案は、四十票に對する六百票に壓倒的多數を以て通過し、フイツツパトリツクはその一味と共に協議會を脫退した。この協議會には全米の勞働團體、農民團體、その他の無產階級の政治團體から、約六十萬の勞働者と農民を代表する六百五十の代議員が參加した。殊に注意に値ひすることとは、ゴムパアス等の完全な支配の下にある米國勞働聯合會の州聯合會は、多くはこの協議會に參加を拒んだにも拘らず、その他方團體の多數が、競ふて代議員を送つたことである。聯合勞働黨の成立は、一面に於てはブルジョアの政治的努力に對する無產階級の反逆であると同時に、組合官僚主義を、その政治的中立主義とに對する、組合大衆の反逆を意味して居る。

組合の運動獨立といふ美名の下に、組合大衆を無產階級の政治運動の努力から隔離しておいて、結果に於てはブルジョアジーの政治的努力を助ける道具にするゴムパアス主義から倒れ、デモクラシーの幻影によつて無產階級の階級的利害を曖昧にし斯くて財閥大資本に對する鬪ひを、小ブルジョアの指導と統制の下に置かうとする第三黨運動が失敗して、却つてそのうちから、無產階級の獨立した大衆的政黨の生まれたことは、何を意味するであらうか。無產階級黨組織の機運を捉進するためには過去三年間に亘つて、幾多の鬪士の不斷の努力が拂はれた。殊に一九一九年の鋼鐵大罷工の指導者として有名なフオスターは莫斯科から歸つて來ると、勞働組合教育同盟を起こして、全力を組合の產業的合同と政黨問題に傾倒した。聯合勞農黨の成立は、固より是等の人々の努力を待つところが多いに相違ない。けれども是等の人々の努力を實らせたものは、米國に於ける社會的形勢の變化である。資本主義發展の程度は、一方には、工業勞働者と農民の利害を、大資本と大地主大農業者の利害とを

愈々ますく〵離反し對立せしめたと同時に、都會と農村とに於ける種々雜多な無産階級分子の利害を、漸次に一樣にした。資本主義がまだ今日ほどの發展を遂げぬ時代には、均しく無産階級とは云つても、種々雜多な要素の間では、必ずしも利害が一致しなかつた。都會の熟練工と、何等の技術のない農業勞働者と、農民と、頭腦勞働者との間の利害は、時としては、却つて是等の階級と小ブルジョアとの間の利害の相違以上に相違して居る場合が少くない。この場合に相當するものは、寧ろ第三黨運動であつて、斯ような形勢の下には、純粹の無産階級黨の實現は望まれない。然るに五ケ年間の戰爭の刺戟によつて急速に進行したアメリカの資本主義は、その發展の程度によつて、複雜であり雜多であつた米國の無産階級の内容を稍ほ純一にした。聯合勞農黨の成功に現はれた無産階級運動の勝利は、この資本主義發展の必然の過程に沿ふて戰はれた押詰めの勝利である。そしてこの勝利の歴史的意義もまたこゝにある。

アメリカの聯合勞農黨の綱領は、英國の勞働黨以上に妥協的だと云ふ人がある。或はそうかも知らぬ（現在では暫定的の綱領が採用せられて居り、本年一月に第一回の正式大會が開かれる筈）。聯合勞農黨の現在の綱領と要求とが、無産階級の最終の目標よりも遙に讓歩したものであることだけは、一點の疑ひがない。けれども聯合勞農黨の成立に重大な歴史的意義が含まれて居るのは、その綱領が、無産階級の最終の目標と最大限度の要求とを、大膽に表示してゐるからではなくて、今日まで政治的には離散して居り、從つてブルジョアジーの政治的勢力に支配せられてゐた無産階級の有ゆる要素を、この勢力から奪ひ返して、大膽に之を獨立の階級的勢力に結束したところにある。

米國の聯合勞農黨が、どんな綱領と要求とを掲げるかは、重要な問題である。けれどもそれは第二に重要な問題であり、今日以後に重要な問題であつて、第一に重要な問題は、無産階級の一切の要素を、ブルジョアと小ブルジョアの政治的勢力から引離して、獨立した政治的勢力に結束することであつた。そして聯合勞農黨は、この方面に於いては、僅かに成功の第一歩を踏みしめた。聯合勞農黨の當面の綱領と要求とが、、無産階級の最終の目標から遠いことを見て失望する人は、聯合勞農黨の成立を聞いて直ちにアメリカに無産階級革命でも起つたかの如く昂奮する人と同じく、共にこの勝利の歴史的意義を解せぬ人である。

六、

いろ〳〵の點で「國情」を異にするこの二つの國に於ける、

この二つの事實は、そもそも吾々に何を語つてゐるだらう。吾々は之によつて、資本主義發展の必要の過程は『國情』を異にするこの二つの國に於いて、形に於ては異なるが、その神髓に於ては全く同一な形勢と、勢に基づく無產階級の勝利とを齎らしたことを知るのである。唯にそれのみではない。吾々はその同じ力が、更に『國情』を異にする日本に於ても、同じ形勢を醸成しつゝあることを觀過することは出來ぬ。それでこそ、日本のブルジョア政治家が、『範』を英國の政治に取ることも出來得る譯である。

勿論、アメリカに起つたことは、英國に起つたことではない。日本に起らんとすることが英國や米國に起つた事でないことも自明である。日本は勞農ロシアでないばかりでなく、フランスでもなければ獨逸でもなく、アメリカでもなければ、また如何にその『溫健』に私淑するところがあるとは云へ、英國ですらもない。日本はこの意味に於て萬國無比である。それにも拘らず、日本のブルジョア政治家が、『範』を英國の政治に取つて怪まぬのは、この相異のうちにも、否むことの出來ぬ共通の或物があるからである。この意味に於ては、日本は『範』を英國の政治に取り得るように、米國にも、獨逸にも、その他の如何なる國にも取ることが出來る。否な現に之れを餘儀なくされてゐる。日本の政治的形勢は、獨り英國ばかりでなく、根本に於ては、すべての資本主義國と共通の軌道の上を進展してゐるものである。資本主義發展の必然の過程を踏んで進んでゆく一事に於ては、日本のブルジョア政治家が欲すると欲せざるとに拘らず、日本は英國と、米國と、その他すべての資本主義國の政治に、『範』を取りつゝありと云つてよい。

日本が『範』を資本主義の先進國たる英國や米國の政治に取つた當然の結論は、無產階級の政治的成熟といふことに外ならぬ。

日本の二大ブルジョア黨たる政友會と憲政會が、最早や財閥大地主の利害と共に、一般商工階級や、小地主や中間階級の利害を代表し得なくなつたのは、恰も米國の共和民主兩黨が、大資本を小ブルジョアとの、二人の主人に事へられなくなつたのと同じである。そこで米國では共和民主兩黨の內部に、分解作用が起つて居るように、政友會と憲政會の間にも、分解の作用は、暗々裡にその働きを始めかけてゐる。この分解作用が、米國ではブルジョア急進分子の第三黨運動となつて現はれ、日本では新政黨樹立の計畫となつて現はれて居る。非政友合同運動の如きも、この形勢の無意識の現はれの一つであつて、非政友合同そのことには何等の意義がないにしても、新しい階級的

構成に從つた政黨の整理を必要とする形勢が、知らず知らずの間に、この運動の背景となつて居ることは爭はれぬ。

ブルジョアの政治的陣營の間に斯ような變化を齎らして資本主義發展の過程は、同時に他方には、無産階級の階級的成熟をも促進した。無産階級の大部分は、今も尙ほ、思想的にはブルジョアの完全な支配の下に隷屬はして居るが、その經濟的の利害は、日に日にブルジョアジーの利害に遠ざかつて行くばかりでなく、無産階級に屬する種々雜多な要素間の利害は、之を反比例に、愈々ますます接近しつゝある。曾ては工場勞働者と、頭腦勞働者と、小作人と、小自作人農との間には、その生活狀態に於ても甚しい相違があり、その經濟上の利害に於ても、各々特殊な利害を持つてゐた。彼等の特殊の利害は、時としては、彼等と資本家大地主との間の利害以上に相背馳することとすらもあつた。ところが今日では、事情は著しく變つて來た。資本主義發展の道程は、無産階級の種々な要素の間にあつた種々雜多な利害を一掃して、その跡に唯だ一つの共通の利害――無産階級の利害――を作つて居る。曾ては經濟的にも社會的にも有利な地位を占めてゐた頭腦勞働者の立場は、今日では、筋肉勞働者と事實の上に選ぶところがない。たゞこの新しい經濟上の事實に照應した。新しい心理が、また充分に出來上つて居らぬだけである。無産階級の二大要素である工業勞働者と小作人との經濟上の利害が接近したことは著しい事實であつて、農村と都會との利害の相違を强調し、若くは誇張することによつて、農村に於ける地主と小作人の利害の對立を蔽ひ隱そうとする一切の企て（農民聯盟、農政研究會、岡山縣に於ける縣農會の傀儡たる農本黨、その他帝國農會や農事協會の一切の畫策）が、到底小作人を欺くに足らぬのは、この事實を有力に語つて居るものである。斯ように日本に於ても資本主義發展の必然の過程は、一方には、ブルジョアジーの內部にあつては、小商工階級と小ブルジョアとの利害を大資本と大地主の利害からますます分化させ、他方に於ては、無産階級の利害を是等の大資本と小ブルジョアの利害からいよいよ分化せしめると同時に、そして之と相伴ふて、無産階級の內部にあつては、その反對に、各々の要素の間の利害の相異を取り去つて、無産階級の內容を純一化しつゝある。

內容の純一な無産階級の成立、無産階級の階級的成熟、政治の方面に於ける之がブルジョアの政治勢力から完全に獨立した無産階級黨の要求となつて現はれざるを得ぬ。日本に資本主義が必然の發展過程をつゞける限りは、言葉を換へて云へば、日本が『範』を英國に取る限りは、無産階級の獨立した政黨の現

はれることは必然であつて、たゞ問題は『何時か？』といふことである。一度び『時間』がこの問題を解決し、そして日本に無産階級の獨立した政黨が生まれたなら、遲かれ早かれ、無産階級黨内閣の出現を沮止するためには、それまでは同じお勝手元の殘肴に啀み合つてゐたブルジョア政黨の『聯立若くば提携』を必要とする時期が來たるに相違ない。幸福な日本のブルジョア政治家は、この點に於ても『範』を英國の自由保守兩黨の經驗に取り得る幸運を持つてゐる。

七、

日本に於ても今や當面の問題となつた無産階級の政黨問題は、斯ような形勢を背景として見た時に、初めてその眞實の意義を知ることが出來る。

或る人々は、政黨問題を以つて、單に普選實施の豫想によつて生まれた問題と解してゐる。政黨問題が、普選實施の際を機會として初めて當面の問題となつたことは事實である。また政黨組織を主張する人々の間にも、或は普選實施の聲によつて煽ふられた、謂ゆる普選氣分に醉はされてゐる人があるかも知らぬ。更にまた政黨論者の間にも、選擧權の獲得と議會運動に對する誇張した期待と幻影から、無産階級の政黨組織を呼んでゐる人がないとも限られぬ。けれども無産階級の獨立した政黨といふ問題は、普選氣分と共に燃え上がり、普選氣分と共に消え失せたりするほどに、しかし根底の薄弱なものではない。政黨問題を當面の問題とするものは普選の豫想であるにもせよ、この問題の底には、もつと大きな力、資本主義發展の必然の過程といふ大きな力が流れてゐる。そればかりでない。單なる普選の實施は、決して無産階級の獨立した政黨を實現せしめるような、新しい形勢を打開するものではない。若し日本の無産階級が、資本主義發展の過程によつて、既に或る程度の階級的成熟を遂げ、或る程度の政治的成熟をして居らぬなら、この場合に於ける普通選擧の實施は、たゞ既成政黨の地盤の上に變化を起すに止まるか、さもなければ、無産階級がブルジョア急進分子の指導の下に率ゐられることを意味する第三黨運動とはなつても、無産階級黨の問題を、單に普選實施といふ背景のうちにのみ見て居る人々は、政黨問題の意義を知らないものである。

また或る人々は、日本の勞働組合運動が今日まで歩んで來た道は、誤つた道である、日本の勞働階級は、この誤つた道をすてゝ政治運動に方向を轉換するものである、政黨の組織は、即ち日本の勞働階級が今日まで陷入つてゐた誤謬に對する訂正であり、正誤であると云ふ見解を取る人がある。現に言論界に於

ても、斯ような見解に基づいて勞働階級の政治運動を歡迎し、無産階級の政黨組織に賛成を表した人がある。けれども無産階級の政治運動、乃至は政黨問題に對して、斯ような見解を取る結果は、極めて重大であることを忘れてはならぬ。

勞働階級の政治行動は、從來の經濟行動が誤つてゐた——乃至は行詰つた——ために方向轉換であると云ふことは、言葉を換へて云へば、政治運動を以つて、從來の經濟運動に代へることを意味してゐる。更に言葉を換へて云へば、政黨を以つて組合の代はりにすることを意味してゐる。然るに政治行動と經濟行動とには、各々特殊な領分があるように、政黨と組合には、各々特殊な機能と職分がある。政黨の職分が組合によつて滿たされぬように、組合の機能は政黨によつて代行することは出來ぬ。假りに從來の經濟運動（組合運動）に誤謬があつたとすれば、それは經濟運動の領域內に於いて訂正せらるべきものであつて、その正誤を政治運動に求めることは出來ぬ。

無産階級の政治上の目的は、經濟上の部分的の鬪爭を綜合したものに外ならぬ。一切の階級鬪爭は政治的の鬪爭である。政治的鬪爭に階級鬪爭がないように、經濟上の鬪爭を根底とせぬ無産階級の政治的鬪爭は、もとより考へることは出來ぬ。無産階級の政治運動は、今日までの經濟的鬪爭を否定することではなくて、之を肯定するばかりでなく、之を擴大することに出發點をおかねばならぬ。

從來の經濟行動、乃至は組合運動の誤りを認めたゝめに、または之に對する失望から勞働階級の政治運動を主張する者があるとしたならば、その人は明かに、組合と政黨との、職分の相異を忘れた人である。若し斯ような錯覺に基づいて無産階級の政黨が組織されたなら、その結果は、組合と政黨——無産階級經濟上の組織と政治上の組織——との行動は、絕えず扞格し衝突するに相違ない。無産階級の政黨は、組合の職分と政黨の機能とに對する、明白な區別と明白な觀念から出發しなければならぬ。

大西洋を隔てゝ、クラシツクな資本主義國の英國と、黃金の神のしろしめす米國とで、昨年中に無産階級運動が收めた二つの類似した勝利は、日本の無産階級運動の上にも、有力な刺戟と教訓とを與へるに相違ない。日本の無産階級が同じ勝利を得るまでには、そして日本の無産階級が、獨立した政治的勢力として、無産階級の政黨の組織に成功するまでには、尙ほ色々の問題を解決しなければならぬ。新たに生み出さるべき政黨はどんな構成分子を持つべきであらうか。日本の實際の形勢の下

に、無產階級の當面の必要を滿たす政黨は、如何なる要素を包容しなければならぬか。更に日本の無產階級の實際は、如何なる政黨なつて現はれるべき、階級的の成熟を遂げてゐるだらうか。その綱領を當面の要求とはそも〳〵何だらう。

政黨問題に關聯した、重要な問題は尙ほ幾つもある。けれども如何なる綱領と要求とを掲げた政黨が生まれるにせよ、生まれるべき政黨が無產階級の政黨である限りは、それは無產階級の大衆的の政黨でなければならぬ。そして生まれるべき政黨が無產階級の大衆的の政黨である限りは、それは無產階級の大衆の熱情のうちから生まれ出でなければならぬ。ブルジョアの政黨は、財閥の金庫を父として、待合のひそ〳〵話のうちに孕まれるかも知れぬ。けれども無產階級の政黨は、たゞ大衆の熱烈な要求と熱情のうちからのみ生まれることが出來る。

無產階級の政黨が、大衆の熱情から生まれた大衆的の政黨となるためには、政黨問題が、出來得る限り廣く一般大衆の意識に訴へられなければならぬ。一切の主要な問題は、出來得る限り廣い範圍に亘つて、無產階級の大衆の間の公然の討論（有ゆる機關により、有ゆる機會に）に上ぼり、この討論によつて醸成せられた形勢のうちから、初めて大衆的の運動は自づから生まれて來る。遲かれ早かれ生まれるべき無產階級の政黨組織がどの程度の成功を收めるかは、どれだけ廣く無產階級の大衆をこの討論に參加させることに成功するかによつて決定する。米國に於ける無產階級黨組織の成功は、過去三年間の公然の討論によつて獲られた勝利であつた。

自然美と藝術美

恒藤恭

一

觀照され能ふところの有らゆる美的價値は、必然に何等かの官能的實在要素との結合において其內容を顯現するものであると云ふことを、われわれは經驗に基いて知つて居るのであるが、斯くして顯在的形態をとる一切の美的價値の內容は、いづれとして他のあらゆる美的價値の內容から別たれ得る所の個性を具へないものは無い。而して從來實在の世界の內面に存立してゐなかつた實在要素の一定の配列狀態が、何等かの原因に促されて新たに成立することにより、美的價値の新しき個性的內容を捉把し得る可能性が觀照的意識に與へられるに至る過程を、吾々は美的價値の創造と呼ぶのである。普通に、藝術的活動は美的價値の創造であると考へられてゐるけれど、藝術的活動は一切の美的價値の產出の原因であると言ふことは能きない。吾々は何等の人爲をも交へない自然の過程に因り美的價値の創造が行はれることを知つて居るが、斯かる過程は藝術的活動たるものとは思惟され能はぬ。藝術的活動は美的價値の成立の原因の一部分に過ぎず、それと並んで藝術的活動以外の過程に基く美的價値の顯現の作用が吾々に知られてゐると言はねばならぬわけである。てみぢかに言へば、自然の現象と藝術的活動とは、美的價値の創造される二樣の過程として並び存するのである。此命題の中に含まれてゐる複雜な問題を、茲では單に藝術的文化の論理的構造といふ一つの視點から考へて見たいと思ふ。

吾々は少くとも三樣の立場から美的價値を吾々の意識のはたらきに關係せしめることが能きる。先づ美的價値は藝術

的創作活動の對象と爲し得られる。次に其れは觀照的意識の對象とされることが能きる。終りに其れは、實在的要素との關聯において、理論的認識の活動の範圍内に持ち來らされ得るのである。この第三の立場において、美的價値が自然の過程によつて産出されたものと考へられるか、又は藝術の過程によつて産出されたものと考へられるかに隨つて、自然美と藝術美とを區別し能ふであらう。但しこの場合に謂はゆる自然美と藝術美との分類は、普通に考へられてゐる自然美及び人爲美の對立と、その根本の意味を同じくするものではない。普通の考へ方では、自然的事物と人爲的事物とは、われわれの認識に倚存することなく其れ自身に與へられて居る所の實在的對象の異なる二種別であり、かやうな意味において實在する自然的事物のうちに顯現する美的價値は自然美であり、人爲的事物のうちに顯現する其れは人爲美であると思惟されるのである。しかるに茲で自然美と藝術美とをわかつのは、自然と藝術との相違を以て認識方法の相違に基いて生まれるものと考へ、さうした意味において互ひに異なる所の自然と藝術との二者のいづれを原因として美的價値の個性的内容が實在的地盤に内在するに至るかと云ふことを標準として、自然美と藝術美との區別を立てやうとする趣意に出るものである。だから普通の意味における自然美の中に茲にいはゆる藝術美を見出すことも可能であれば、普通の意味における人爲美の中に茲にいはゆる自然美を見出すことも等しく可能たるのである。おそらく自然は藝術の産出能力の及ばぬやうな美的價値を産出し得るであらうし、同じやうに藝術は自然の到底産出し得べくもないやうな美的價値を産出する能力を有つてゐるであらう。すなはち自然美と藝術美とを比べて見て、各者はそれ其れ特有な内容を其裡に包藏して居ると言ひ得られるであらう。そして或る特殊の見地からは兩者の間に何等かの階級の差別を立てることすらも不可能ではなからう。この場合に、私たちは藝術美を所縁として自然美の把捉にみちびかれることが多いといふやうな事情は、右の立言の意味を左右する力をもつものではない。併しながら美的價値の論理的一般的性質の上から考へるならば、自然美と藝術美とは全く同一の構造を示すものでなければならぬ。自然美には自然美に獨自なる論理的特質があり、藝術美には藝術美に獨自なる論理的特質があり、其點からして初めて自然と藝術とが區別されるといふのでは無くて、自然美と藝術美との差異の認識に先立つて、他の見地から自然と藝術との論理的差別が定立された後、かくして

對立せしめられた自然なり藝術なりに關係せしめられることに由り、自然美としての美的價値の意味と藝術美としての美的價値の意味とが明かにされるといふのが、正しい論理的順序であらうと思はれる。

元來、自然といふ語は甚だ多義な語である。其れが文化といふ語と關聯せしめて用ひられる場合において殊にさうである。宗教、道徳、教育、法律、經濟などの各種の文化に關する問題について、自然といふ概念の使用される種々の意義を吟味すると、其れが文化といふ概念に關する種々の解釋の仕方を反映するものたることが知られて興味が多い。藝術の場合についても同樣である。たとへば『古代人及び中世人は、違つた意味に於いてではあるが、自然美に對して無關心であつた。古代人を代表する希臘人は人間美に心を奪はれた。中世人は超自然的なるものの美にあくがれた。近代人がはじめて十分なる意味において自然美を見出した』と云つた樣な言においては、自然は人間だの、社會だの、超自然的なるものだのに對立せしめられて居る。この場合には、自然は謂はゆる經驗的實在論の立場から對象的に分たれた實在の一部分であり、人間や、人間の生活や、人間の社會やは當然に自然の世界の外に置かれる。且つ又此れらの事物と同樣に、一切の超自然的なるものも自然の世界の外に在るものと考へられるのである。前に言及した所の通常の意味における自然美と人爲美との對立は、かうした仕方で思惟された自然の概念に立脚するものである。但し普通の意味における自然美と人爲美との對立は、更に、右の如き自然の概念と連關しながらも多少趣を異にする所の別樣の自然の概念ともつながつて居る。すなはち歴史的發展の結果たるもの、文明的なるもの、都會的なるもの等に對して、原始的なるもの、素朴的なるもの、田園的又は山野的又は海洋的なるものなどが、自然の世界として考へられる。人間も、人間の生活も、はた彼等の社會も、斯かる自然の世界の原始性、素朴性と合體してゐる限りにおいては、自然の成分の中に數へられるのであり、且つ其上に自然美は展開するものと思惟されるのである。或はまた藝術は自然の模倣であるとか、さうでは無いとか、自然は藝術よりもうつくしいとか、その反對が眞であるとか云つたやうな意味の事柄が屢々論議される。この場合には、前の場合とは違つて、自然に對立せしめられるものが特に藝術に限定されてゐるといふ點に、觀方の差異は存するものの、自然と藝術との對立はひとしく素朴實在論的見地から想定されて居るのである。すなはち自

然は吾々の認識から獨立にその作るが儘のすがたに存立するものと考へられ、斯やうに其れ自身に具有する一定の性狀及び形態において與へられた自然に對し、藝術的活動は如何なる態度を把持するものであるか、その所産は如何なる內容的關係を有つかといふやうな問題が提起されるのである。

以上のやうな自然の考へ方はそれぞれ特色があり、或る正しい思想を含んでは居るけれど、認識論的には粗雜な思想に立脚するものと言ふ外はなく、藝術の意味を論理的に規定しやうとする見地においては採擇され難いものである。それとは違つて、藝術上の主張の表白として自然主義といふ概念が用ひられる場合に自然といふ概念に託せられる意味は、より深いものであるやうに思はれる。自然主義の思想の創唱者たちは、理論的に見れば元來素朴實在論的な考へ方から出發したものであるにもせよ、その歸結においては、さうした見地から逸脫して自然と藝術との對立の意味を方法的に理會せむとする立場に近づいて居るのである。藝術上の自然主義の思想は、一見、右に舉げたところの——藝術は自然の模倣であるか否かといつたやうな問題を問題とする立場をとる人々の見解と同然であるかの樣に思はれるけれど、その實は、前者は後者に比して遙かに透徹した自然觀に立脚するものである。すなはち後者は、自然的對象なり藝術的作品なりの存在をナイイヴに其在るが儘の現實的存在において問題とし、自然なり藝術なりを外面的に注視する態度を把持しながら、兩者の內容とか形態とかを比較し論議するものであるに反し、自然主義の前提する所の自然の概念は、或る意味において自然科學的認識の對象としての自然の概念に著しく近似せるものであつて、何等の評價的觀方をも、何等の想像的意圖をも交へない所の純粹なる知覺的意識に映じ來る實在の形相を把捉し表現することが、藝術的勞作の目的であるかの如くに、自然主義者たちは思惟するのである。自然主義を支配する主知的な機械的な人生觀及び自然觀を脫却して、藝術の本質を理想主義的に解釋しながらも自然を以て有らゆる藝術的創作の極致と觀る思想においては、自然は一切の藝術的價値の根源とみとめられて居るのである。其れは最早自然と文化とを同一の平面に置いて考察する立場に立つものではなく、文化よりは一層高い平面に存立する價値其者の世界と文化の世界との連繫をたづねる立場に移つて居るものと言はなければならぬ。或は又知的判斷のいささかも混入して居ない純粹なる體驗の世界と自然とを同

一視し、其處に盡きざる藝術的構想又は藝術的內容の源泉を求めるといふやうな見解も見受けられるのであるが、この場合における自然の概念も、自然と文化とを實在の二個の分野として視やうとする立場においては、その繼承認され得ないものである。

二

藝術を認識の對象として考察する立場においては——そして認識の問題に關して批判的觀念論の見解を是認するとすれば——一切の實在的對象とひとしく藝術も亦獨自の先驗的認識形式によつて構成された思惟の所產として理會されなければならぬ。しかも藝術を藝術として認識するのは、實在の世界一般を定立せむとする實在的認識一般のはたらきではなくて、實在の世界の內面に特殊の文化の世界を定立せむとする文化的認識のはたらきでなければならぬ。然るに文化的認識の特性は、單に價値に關係せしめて實在を考察する方法、即ち價値關係的認識方法たることを以て盡きるものではない。美的價値について言ふならば、美的價値に關係せしめて實在を考察する方法、即ち美的價値關係方法の成立は、其れ自身思惟し得られるのであつて、吾々は斯かる方法の所產としての對象を『美的なるもの』といふ如き概念によつて表明することが能きるであらう。

美的なるものといふ概念は、未だ以てわれわれが藝術的なるものとして理會するところの對象の意味を、十分につたへるものでない。簡單な例證をあげるならば、夏のゆうべに輝き映える雲の一とかたまりとか、池のほとりをあるきまはる水鳥のおどけた姿態とか、又は荒天の下にたけり狂ふ怒濤の岸を打つひゞきとかいつたやうなものは、いづれも廣い意味における美的なるものとして價値關係的認識により定立される對象であるが、これらの對象を以て藝術的對象であると判斷することは、私たちの背んぜざる所である。これらの對象は、人事の世界に對照せしめられたものとしての自然の世界に存立する對象であるが、他方においてかやうな對照における人事の世界の對象としても、それが美的價値に關係せしめられて認識されるといふだけでは、藝術的なるものとして理會されえない。例へば、すずしい瞳をみはつ

て晴ればれとわらふ小兒の顔だとか、或る男と女との曲折に富んだ戀愛の經過だとか、一人の勞働者のひきしまつた逞ましい筋肉にあらはれた體軀だとかは、人事的なる且つ美的なるものであることは疑ひないけれど、さりとて此れらの對象は、それ自身藝術的作品であるとは、思惟しえられない。藝術的なるものの把捉は、美的價値關係方法が分化して自然美的價値關係方法と藝術美的價値關係方法との差別を成立せしめる段階においてはじめて成り立つのであつて、私たちが藝術的認識の立場において藝術的なるものとして認識するところの對象の存立地盤たる同一の實在的要素も、美的價値關係方法の立場においては、單に美的なるものとして認識される外はないのである。

價値關係方法一般が文化的價値關係方法又は文化的認識方法にまで特殊化されるのは、自覺の主體による價値（又は反價値）の實現といふ思想が、新たに認識の指導的要素として加はるからである。自覺の主體といふ語の代りに人格者といふ語を用ひるならば、人格者の活動といふ觀念が價値關係的方法一般のうちに採擇されることにより、文化的認識方法は成り立つのである。美的價値について言へば、自覺的に實現された美的價値に關係せしめられつつ實在が考察される處に藝術的認識は成り立つのである。言ひ換へると、人格者の活動に因り美的價値又は反價値の實現される支盤として考察される限りにおいて、實在的要素は藝術的認識に參加するのである。而して或る對象は假令價値關係的方法からしては其裡に美的價値又は反價値の內在するものとして認識しえられるものであるとしても、それ自身必ず美的なるものとして存立するわけではなく、自然的認識の立場からは何等美的價値と關係なきものとして認識しえられるのである。同樣に、或る對象が、藝術的認識の立場からは、その裡に美的價値に向けられた自覺の要素が內在するものとして認識しえられるのであつても、單なる價値關係的認識の立場からは、藝術品としてではなく、單に美的なるものであるとして認識しえられるであらう。すなはち或る對象が、美的なるものとして認識されるか否かといふこと、及び藝術的なるものとして認識されるか否かといふことは、偏へに認識主觀の認識の態度に由るのであつて、對象その者に原本的に固有する性狀如何に由るのではない。だから或る對象が、美的價値を具有するものとして認識された場合に、それとはちがつた價値その者の認識の立場からして、その對象は何等の美的價値をも具有するものではないといふことが判明し

たとしても、その對象を美的なるものとして定立した認識は、その目的をあやまつただけであつて、一般に美的價値關係方法のみたすべき形式的條件は十分之をみたしてゐたわけである。同樣に、或る對象が自覺的に實現された美的價値を具有するものとして、即ち藝術品として認識された場合に、その對象に内在する美的價値は自覺的に實現されたものではないといふことが、他の認識方法により判明したところで、藝術的認識の形式的條件を十分にみたした認識が、唯その目的において過つたといふにすぎないのである。

或る對象において顯現してゐる美的價値が、人格者の自覺的活動に基いてその對象において顯現してゐるのであるといふ思想は、當然に、或る人格者の一定の時における自覺的活動と、或る對象における美的價値の顯在との間に、因果關係の存立することを豫想するものであるが、この因果關係の認識その者は藝術的認識の一成分たるものではない。唯或る對象において顯現してゐる個性的價値内容が、何等かの人格者によつて自覺され、この自覺がその對象におけるその價値内容の顯現を惹起したのであるといふことが、一般的に意識されることを以て足りるのである。本來あらゆる種類の文化的認識は、人間中心的思惟方法たることを本領とする。斯かる人間中心的思惟方法の所產としての文化の世界が、より深い形而上學的見地から、如何なる仕方でその意義を闡明されるかは、別問題として、經驗科學的思惟方法としての文化的認識の理論の立場においては、實在に内在して其れをして文化たらしめる要素たる自覺は、飽くまでも經驗的主觀の自覺として理解されるのである。藝術的認識の場合においても、一度形而上學的見地に立つならば、藝術をして藝術たらしめる所の自覺の要素は、超經驗的なる何等かの主觀に關係せしめられ、可能的なるさまざまの仕方でその意義を解明され得るであらうけれど、文化的認識の理論の立場においては、經驗的に認識しえられる主觀に關係せしめられる外はない。そして美的價値の意味を自覺し、これを表出せむとする自覺を有する主觀としては、經驗的には、人間以上の者も、人間以下の者も、私たちに知られて居らず、人間のみがさうした能力を有するものとして知られてゐる以上、藝術における自覺の要素は、必竟全然人間的なるものとして認識される外は無いわけである。藝術の範疇は、一面から言へば、人爲の範疇の一種別である。藝術の本質は飽く迄もその創作者の側から理會されることを要する。

語"Aesthetical" といふ語が "Aisthetikos" といふ希臘語からみちびき出されたのは、右の點と關聯して考へると興味ある事柄だと思ふ。"Aisthetikos" といふ語は「感覺に訴へるもの」を意味するのであつて、一切の美的なるものの特性を恰も觀照的意識との關係の側から表明するものだからである。純粹なる美的價値の觀照其者にとつては、その價値の創造される過程如何は、問題ではない。假令藝術品には、それが人間による創造の所産たることに基いて、純粹なる美的價値以外の特有の價値が添はるにしても、斯かる特有の價値と純粹なる美的價値とは、その本質を異にするものであると、言はねばならぬ。更に、これらの兩樣の價値の抱合により、新しい綜合的價値が生まれる場合を考へても、斯かる綜合的價値の觀照は、純粹なる美術觀照と同一の意識のはたらきたるものではない。

五

實在的對象がそのうちに自覺的に産出された美的價値を內住せしめてゐると認識される限りにおいて、その對象は藝術品たる意義を有する。その平面において、實在的對象のうちに美的價値を顯現せしめやうとする自覺的努力として認識される限りにおいて、人間の行動は藝術的活動たる意義を有するのである。但し或る對象が藝術品として認識され、又は或る行動が藝術的行動として認識される場合に、美的價値がその對象なり行動なりと關係せしめられると云ふのは、認識者がその對象に內住するものとしての又はその行動によつて産出されるものとしての美的價値を、價値觀照又は價値判斷の態度において問題としてゐるのではなく、全く論理的に理解された美的價値の意味が認識を指導することを、表明するものである。だから藝術的認識の立場においては、顯現せる美的價値が積極的價値であるか又は消極的價値であるかといふ點、それが如何ほど積極的價値に富んでゐるものであるか又は如何に大なる消極的價値を含んでゐるかといふ點は、當然考慮の外に置かれざるを得ない。從つて消極的價値の多くの段階を經て積極的價値に上昇し、更に限りなくより高い積極的價値の段階に至るまでの價値系列の無數の項において、或る對象の價値が如何なる地位を占めるものであるかを問はず、苟くも或る對象に何等かの種類の何等かの階級の美的價値が附着して居り、且つ後者が人間の自

覺的活動に基いて存立するに至つたものであると認識され能ふ限り、私たちは其處に藝術品を認識し、それの創造作用としての藝術的活動を認識するのである。素より事實上は、積極的美的價値の系列の中のかなり高い段階に位すべき價値が高度に發達せる自覺に基いて創造される場合についてのみ、藝術的活動なり藝術的作品なりが問題とされるのが普通ではあるけれど、論理的には、さうした限られた範圍に拘束されるべき理由は無いわけである。たとへば、偉大なるソクラテスの行爲も、無數の凡庸なる人々と共に凡庸なる生活に生きたアテネの或る一市民の行爲も、經驗的認識の見地においては、全く同一なる道德の範疇によつて認識されるやうに、人生の情味に徹した芭蕉の俳句も、陳腐その者の標本であるかのやうな月並の俳句も經驗的認識に對しては、ひとしく俳句として認識されるべき平等の權利をもつのである。

自然的對象も藝術的作品も、その實在的構成要素に卽して觀るときは、到底見きわめ盡すことの能きない無限に雜多なる直觀的內容に充滿してゐる點において、毫も異なる所はないが、藝術的作品において、創作者の自覺的努力が美的意味の自覺表出に成功してゐる程度に應じて、實在的要素の一定の形式化又は一定の配列方法は美的意味の表現をより的確ならしめ、從つて鑑賞者の意識をして、比較的に確實に創作者の自覺せる美的意味を把捉し得させるのである。けれども斯うした意味での自然美と藝術美との差違は程度の差違であり、自然的對象と雖も藝術的作品に見られるやうな形式的單純化に全く缺けてゐるわけでなく、假令自覺的にではないにもせよ、自然の企圖とでも謂へばいはれるやうなものが、實在的要素の多樣を支配してゐる場合のあることを、われわれは經驗し得るのである。美的價値內容の表出を目ざして行はれる所の自覺的努力による實在的要素の支配が、著しい程度において高まつた場合には、その價値內容を支持してゐる對象は、必然に藝術品として認識せらるべきものであるかのやうな權利を主張するに至るのであり、通常われわれはこの種の對象のみを藝術品として觀るやうに傾き易いことは、右にものべた所である。素より一定の思想內容の表出において自覺がそれを支配する程度の高まりは、決して必然に作品の美的價値の上昇と平行するものとは限らない。すぐれたる思想內容の自覺なくして、表出の技巧に關する自覺的努力のみが、いかほど旺んにはたらいた所で、價値ある作品の生まれるべき筈はなく、表出の技巧における自覺の支配が不足であつても、豐かなる思想內容が自然の無

自覺的なる統制によつて、目ざましい表現にまでみなぎり出づることもあり得るからである。唯すぐれたる思想內容の自覺と、適切なる表出方法についての自覺と、後者によつて前者の表出を支配する自覺的意志とが、並びはたらく場合においてのみ、十分なる藝術的價値の創造の行はれることは明かである。勿論創作的活動の開始が專ら純粹なる創作的衝動に促されて生ずる場合もあれば、その他の何等かの外面的なる動機に基く場合もあるわけであり、創作的活動その者に對する自覺の支配がその活動にとつて外面的なる事情によつて左右されないか否かが、作品の出來ばえに及ぼす影響は、決定的な意義を有するであらう。そして藝術的活動は、一定の思想內容及びそれの表出の技巧に關する明瞭なる自覺が先づあらかじめ創作者の意識に存在し、計畫的豫見的なる自覺的意志が創作の過程を展開せしめて行くといふやうなものではなく、さうした場合も勿論あり得るであらうけれど、通常の場合においては、創作の過程は遙かに複雜な態様を示すべく、表現の意志が半ば盲目的に表出素材に猪突する傍から、表出せらるべき內容の自覺が意識の深みから湧き上ると同時に、實在的要素における表出の過程の瞬間的發展は、新たなる思想內容の組み合せを示唆し、それに基く內容の綜合が駭くべき速かさと複雜な仕方とにおいて行はれ、斯かる內容の自覺が意識の內面における深き眠りからめざめて現れ出る內容の自覺と合體して、表出の技巧に己れの運命を託するのである。表出の技巧に關する自覺についても事態は極めて複雜である。この方面においては、活動の進展は、心理的事情のみならず、生理的物理的原因によつて影響を受ける程度が甚だ大きく、過去における自覺的努力の結果として體得された習慣的定型的技巧と、十分なる現實的自覺及びそれに平行する統制をそなへた技巧と、統制の力が自覺に伴はぬ半成の技巧と、創作の主體の側における活動の根柢を成す心理的物理的世界にはたらく無數の機械的原因及び表出の客觀的手段の側における外面的事情の交叉に基いて生まれる所の謂はば自然的なる技巧とが、錯綜し合つて表出の過程を構成し、その間にも生長を止めない創作者の個性の力によつて、種々なる程度、種々なる仕方での統一をあたへられるわけである。かくて、論理的には、或る對象のうちに經驗的主觀の自覺的活動に基く美的價値內容の創造のみとめられる限りにおいて藝術が成り立つといふやうに、認識されるのであるとしても、事實的には、或る對象のうちに顯現された美的價値內容は、創作者の自覺に基く

成分と然らざる成分との渾然たる融合體を呈示するのであつて、裹まれたる自然の事情は、つねに或る作品の美的價値を左右する何等かの力をもつのである。

四

右にあたへた規定からすれば、藝術の立場にとつては、普通にいはゆる自然の事象及び物象のみならず、また人間自身の生物的、生理的、心理的等の生活の方面のみならず、種々なる文化的生活の各方面も亦、それ自身としては、自然の領域に屬するのである。美的價値內容の產出が自覺的に行はれる限りにおいて、藝術的生活はあまねく成り立つのであり、かくして產出された美的價値は藝術美とよばれるべきである。そして其れ以外の仕方で產出された美的價値は、それが人間の生活を支盤として成立せると否とに關はる所なく、すべて自然美とみとめられねばならぬ。かやうな概念的規定をみとめるならば、天空、山嶽、森林、原野、海洋などの區域において、無數の物象及び事象が絕え間なく表現する美的價値の外に、人間が文化的生活の諸方面において何等の自覺なくして展開するところの多樣にして豐富なる美的價値の一切も、自然美の內容を形成するものと考へられなければならぬ。素より先驗的意識の立場に立てば、あらゆる美的價値內容は、悉く先驗的觀照的自我の法則的なる活動の所產として理會され能ふべく、自然美と藝術美との分類を爲すことは、何等の意味をも成さぬであらう。しかしながら經驗的認識の見地において、人間の文化的生活の諸相を問題とする場合には、美的價値の產出の自然的過程と藝術的過程とを對立せしめることが、要求されざるを得ず、それに對應して自然美と藝術美とを對立せしめることも、意味なしとせない。更に、玆で試みた概念的規定は、藝術及び藝術美の成立の範圍をあまりに廣汎に劃しすぎて居り、通常藝術及び藝術美としてみとめられて居ない所の多くのものが、藝術及び藝術美としてみめられる事となりはしないかといふ批難が、加へられるかも知れない。けれども通常藝術及び藝術美の成り立つ範圍として考へられる限界が極めて不定であるといふ點を、しばらく考へに入れないとしても、同一の論理的構造の支配する限り藝術の成立範圍を擴大することは、論理的にはゆるされ能ふと思ふ。

美的價値の發現の地盤としての自然と藝術との關係を、右の如く理解することとして、自然及び藝術が支持する美的價値を比較するならば、美的價値の種別を異にするに隨つて、その關係が多樣であることを知るであらう。すなはち或る種の藝術において表出される美的價値內容は、到底自然の過程においては成り立つべくもないやうに考へられる。例へば發達せる音樂の內容に比肩すべきものを、自然は何處に提示するであらうか？。其處には、自然が產する如何なる聲音の諧調又は旋律との比較をも絕するところの內容が、人間の自覺的意志の定立した精妙なる規律にしたがつて、はるかに自然を超越する其れ自身の世界を展開する。同じ事は、建築の場合などについても、言へるやうである。自覺的精神は、自然の機械的法則を自由自在に驅使して、盲目なる自然の產出力の到達し得べくも無い所の、線と面と塊りとの組み合せの上に、建築の理想のさまざまの形態をあらはれしめる。音樂や建築やにおける藝術的內容の表現は、物理的實在要案によつて制約される所が大きく、從つて自然の機械的法則の支配を受ける程度が著しいにも拘らず、否むしろ正にその故に、自覺的精神が拘束と制縛とに閉ぢ込められる境涯から解放されて、己れみづからの規律によつて翺翔する境地が、高く自然の上に懸るのである。しかるに繪畫だの彫刻だのにおいては、自然美と藝術美との平行關係がかなり著しくあたへられてゐるやうな觀がある。先驗的觀照的意識の見點からいへば、自然が美的對象を美的對象としてその儘われわれの意識に提供するのではなく、われわれの精神の積極的なる働きが、獨自の形式に則つて、自然の提供する直觀的素材の中から種々なる美的對象を構成するのであると、思惟されなければならぬであらう。しかもこの事は、ひとり自然の過程において產出される美的對象についてのみでなく、藝術の過程において產出される其れについても、ひとしく妥當する筈である。先驗的意識の立場からは、創作者の創作的意識のはたらきと、觀照者の觀照的意識のはたらきとを分つ界線が撤去されるとすれば、同じやうに、自然の過程における美的價値內容の產出のはたらきと觀照者の觀照的意識のはたらきとを隔てる界線も拂拭されなければならぬ。すなはち先驗的認識の立場からは、一切の美は自覺的精神の所產として理會されるであらうけれど、上來執り來つた經驗的認識の理論の見地においては、自然の所產としての美は、經驗的自覺的精神の所產としての美から、あく迄も區別されなければならぬわけである。

われわれは自然の美を觀る眼を藝術家の自覺を所緣としてあたへられてゐる場合が甚だ多い。或は自分みづからの藝術的體驗に基いて自然の美に對して解釋を加へてゐる場合も尠くない。しかしながら、われわれがほしいままなる空想又は幻想にふける場合でない限り、一定の仕方で既に形式づけられた美の定型を自然のうちに觀取し得るためには、自然の一角が、その美の定型の表象を成り立たしめるに十分なる實在的要素の一定の配列を有するのでなければならぬ。かくて、われわれが自然のうちに、一定の美的價値內容を觀照し得るに至つた所緣又は因由の何たるかといふ問題から超越して、自然はそれ自らの美的價値內容の產出者として認められるわけである。經驗的智識の立場から言へば、自然は美的價値內容の表出の意志をもたない。從つて、或る一定の內容の表出の樣相を永續的に保持せむとする企圖を示さない。自然の現象は、絕え間なき流轉と變化との運命に服する。しかるに藝術は美的價値內容の表出の意志を中核とするものであり、多くの場合において或る一定の內容の表出の樣相の保存が企圖されてゐる。勿論、藝術品を構成する實在的要素その者は、自然の世界の所屬者として不斷の變動の流れにうかぶものであるが、その上に印象された自覺的精神のはたらきの痕跡は、容易にその印象を磨滅されることなくして存續する。繪畫とか、彫刻とかの場合において殊にさうである。しかしながら、假りに或る繪畫が幾瞬間の後には全く褪色し又は變色すべき性質をもつ彩料を以てゑがかれたとしても、それが成立した瞬間における美的價値その者は、それの顯在の現象的持續の問題からはなれて、それ自らの個性的內容を具有するのである。だから或る瞬間の自然の風景の美と、それを寫生した繪畫の美とを比較し、前者の非永續性、後者の永續性を以て、兩者の本質の差違を規定せむとするが如きは、多くの意味を成さぬのである。

或る個人が自然の風景の美を觀照せむとする場合には、必ずや一定の視野を選定し、その視野にむらがる印象を統一的全體として受け容れなければならぬ。その限りにおいては、自覺が彼の意識を統制するのであるが、斯かる點からして、自然の風景の美は、その個人の自覺的所產として觀照されると、云ふことは能きない。經驗的個人的主觀にとつては、或る一定の視野の選定と、その視野における印象の統一とが行はれてはじめて、美的表象が彼の意識のうちに成り立つのであるけれど、先驗的主觀の立場から考へれば、自然の風景の美は、個人的主觀の精神のはたらきに、論理的に

も先立つて既に成立せるものと、言はざるを得ない。經驗的主觀に對しては、自然美は飽くまでも共れ自らの存立を有するものとして對立する。そして例へば或る自然の風景とそれを寫生した繪畫とを比べるとき、それらの二個の對象が觀者の意識にあたへる印象の心理的意義は、本質的に異なる所があるとは考へられぬし、各者の有する美的價値も亦必ずしも本質的相違を有するとは限らぬであらう。だから一般には、その繪畫の藝術的價値の鑑賞は、構圖や、色彩や、色調や、筆觸や、陰光やなどにあらはれた自覺的精神の支配に關する考察から出發せざるを得ないわけである。尤も繪畫に表現された事象なり物象なりが、その自然的現實的對應者のもつ性狀なり形態なりから異なる表現をあたへられる程度にしたがつて繪畫の美的價値内容に變化を生ずることは言ふまでもないが、文化財としての繪畫の論理的構造を一般的に問題とする上からは、繪畫における自覺的精神のはたらきの考慮が繪畫の價値内容の鑑賞の上に極めて重要なる意義をもつことを指摘すれば足りるわけである。

五

經驗的には自覺的精神の唯一の主體として現れるところの人間及びかれの生活は、自然と藝術と、自然美と藝術美との關係の問題について、複雜なる地位を示す。繪畫や彫刻やの如く人間及びかれの生活を純粹にその官能的性質の方面から問題とする藝術に對して、人間及びかれの生活が原型を提示する關係は、他の生物や無生物やの場合と異なる所はなく、人間の肉體の靜的及び動的姿態、人間の種々多樣なる生活の樣相は、それを對象として取扱はうとする藝術的企圖に對して、自然美の支持者としてあらはれるのである。他方においては、人間はさまざまの動機から自己の肉體の靜的及び動的姿態その者、並びに彼の諸種の生活の樣相の上に、自覺的に美的内容を表出しやうと努力する。かうした努力は、論理的には、ひとしく藝術的活動と思惟さるべきであり、これに對して、斯かる自覺的努力に因らずして人間及びかれの生活の上に顯現する美は、自然美として認識されざるを得ない。

人間の容貌にあらはれる多樣なる美は、かうした意味での藝術的努力に對して、重要なる目標となる。そして純粹な

る表出的衝動の外に、社會的感覺が最も著しくその努力を左右することは言ふまでもない。顔面や頭髪に對する人爲的修飾は、野蠻人から現代の文明人に至るまで、かれらの生活にとつて輕からぬ問題とされてゐるが、それについては、習俗や儀禮やの社會的規範との交渉の外に、美的價値内容の表現その者が著しい程度において努力の意義を成してゐると言はねばならぬ。廣い意味での化粧の外に、表情や身振りやも、それが自覺的に爲される限りにおいて、個人の生活の藝術的要素として、それに特有な作用をいとなむ。これらの場合には、藝術的志向がいはゆる實生活と緊密に結合されてゐるといふことの外に、自然美と藝術美とは巧みに融合して美的價値内容の個性を形成する場合が多い。繪畫や彫刻やの場合とはちがつて、これらの場合には、表出された内容の支持者と表出の意志の所有者とが同一主體に合一してゐるのであり、從つて表出された内容が表出の藝術的企圖以外の種々なる目的のために役立つ場合が多いが、その表出が美的價値内容その者の表出の自覺を伴ふかぎり、本質において藝術的なる努力が觀取され得るわけである。たとへば、不幸な出來事について友人に對し悲しみの表情をかたちづくる人の努力、法廷において裁判官が威嚴をつくろふ心づかひなどは、その本質において、俳優が舞臺の上で劇的效果を生ぜしめるために爲す努力と共通な藝術的要素を含むものである。この點について、實生活的企圖と密接に相表裏して、多分の藝術的分子を包含しつつ、生活の過程にあらはれ來るのは、媚態についての努力である。或る表情なり容姿なりが、觀者によつて媚態として意識されるのは、「それにおいて表出された内容が、相手の特殊の感情に訴へる效果を生ぜしめやうとする目論見のために表出されたものであること」が直覺されてゐることを意味するのであるが、媚態が媚態として成り立ち得るためには、その企圖に適應するだけの技巧によつて、身體の或る部分の筋肉の活動が支配されなければならぬ。この自覺的支配その者は、他の動機から獨立してその働作をして藝術的意義を具有せしめる力をもつものである。媚態にあつては、人間の利己的動機と藝術的動機とが、微妙なる抱合において人間の働作を支配するのであり、われわれは、それによつて表出された内容をとほして、根強く人間に内在する弱點を憎むと共に、之を愛するのである。道徳的といふよりは、もつと本質的な意味において、その媚態の表出にみちびいた精神的なるものを憎み、しかも同時にそれに惹きつけられるのである。さういふ直覺的

な、多少知識的分子を交へる程度の大きい意識が、媚態における特殊の美的內容を構成するのである。だから媚態がその效果の達成において失敗してゐる場合には、その結果は著しく悲慘であり、滑稽たらざるを得ない。一般に私たちは藝術において自覺的要素に對し、すなはちそのうちに內在せる人間的なるものに對し、最も深い興味をいだくのである。偉大なる作品に對して私たちの感じる讃嘆、渴仰、畏服、などの感情は、そのうちに現れた人間的なるものによつて自己のうちにおける人間的なるものが昂揚され又は壓迫されることを意識するところから發生するのであり、反對に、可憐なる、輕妙なる、感傷的なる又は溫雅なる作品に關しては、それの內容の表出を支配してゐる精神に對する對人格者的なる親しみなり、なつかしみなりが、私たちの評價意識に溶け入るのである。媚態において、さうした藝術的努力に內在する人間性との內面的交涉の一つの相に私たちは觸目する。なほまた媚態とは反對な方向において、ことさら媚態を避けやうとして、それを否定せむとする如き表情の實現につとめる人か、或るとりすました容姿なり容貌なりをあらはすとすれば、それはそれで特殊の價値をも反價値をも生み出すであらう。

人間の肉體其者の靜態又は動態における美的價値の自覺的表現と密接に關聯してゐるものには、服裝をはじめとして身體によそほふさまざまの物質的手段による美的價値の表現の努力がある。これらの物質的手段の生產は、主としては經濟的價値の產出を目的とするものであるけれど、或る種類のものについては藝術的動機が著しく支配する。更に身體の種々なる部分に種々なる物質的手段がよそほはれるのは、一般には直接的生活目的や社會的目的やのためにするものではあるけれど、或る人々にとつて、又或る場合において、藝術的目的がかなり多分にあらはれることも、知れわたつた事實である。その他各種の實用的建築物や、その內部における生活器具や、日用の雜多なる生活用品やについて、さまざまの仕方で行はれる美的價値の自覺的表出も、その限りにおいては藝術的努力を意味するものと言はなければならぬ。そしてその努力は、それらの物の製作者の側においても、使用者の側においても、ひとしく觀取しえられる所である。生活のこれらの方面にまでも藝術の概念の適用を及ぼすことを以て、藝術の概念の濫用であると批難する人があるかも知れぬが、前にも述べたやうに、極めて價値の高い藝術品も、極めて價値の低い藝術品も、藝術品としての論理的

條件をみたすかぎり、ひとしく藝術品としてみとめられるべきであるとの前提をゆるす以上は、かうした歸結を展開することもゆるされなければならぬ。美的價値内容の表出以外の何等の並存的用途をも伴はぬ作品のみを、藝術品としてみとめることは、論理的に可能ではあるが、かやうな概念的規定の下では、たとへば、多くのすぐれたる建築や、彫刻や、繪畫や、音樂やが、宗教上の用途のために製作されたものとして、藝術の域外に放逐されねばならぬであらう。

六

風にゆるぐしなやかな樹の運動や、空にただよふ浮き雲の運動や、なぎさに寄せては返す浪の運動やにおいて、われわれは動的なる自然の美をたのしむ。鳥の群れが空をわたり行くすがたや、蝶などの飛びかふかたちや、重き荷を曳いて行く牛の四股の動き方や、ひれをなびかせて水中をくぐる魚のすがたなどにおいて、われわれは自然のうちに生命の躍動する姿態の美を感じる。或る種の鳥の舞踊するありさまは、そのうちに藝術的動機のひらめきさへも觀取せしめる純然たる宗教的動機や、經濟的動機などから、ほとんど無自覺的に行はれはじめた、原始社會における舞踊の如きは、同じやうな意味での動的なる自然の美として視えられるであらう。原始人がいつしか自らの舞踊の藝術的意味を意識しはじめたところから、かれらの舞踊の働作の自覺的統制があらはれ初める。それは或る意味において墮落でもあれば、勝利でもある。舞踊は、舞踊者の側からいへば、身體の働作につれて彼自らの意識の中に湧き出る官能的内容の律動的發展であるが、それが觀照者にあたへる效果は視覺的官能に訴へられるのであつて、舞踊のあらはす美的價値内容は、必ずや先づ視覺的表象において受け容れられなければならぬ。この點に、舞踊における自覺的表出の努力の特性は成立するのであり、舞踊美における自然美と藝術美との必然的なる錯綜融合が胚胎するのである。繪畫における一個の線の揮劃、音樂における數音の彈出にも、つねに自覺的表出の冒險性が賭けられてゐるのであるが、舞踊における一切の働作においては、その冒險性が著しく大きいと言はねばならぬ。一般に、論理的には藝術における自覺の要素とよばれる所のものが、事實的關係においては能作的原因として現れ來るとき、藝術作品の創作者の自覺的働作に因つて發生する

結果の中には、それの發生が創作者によつて明確に豫見されてゐたものから全然豫見されてゐなかつたものに至るまで無數の段階において考へ得られるところの成分が、渾然として包容されてゐるのである。そして此れらの成分が、觀照的意識との關係においては、藝術作品の內容の構成要素として統一的意味をつくり出すのであり、それに因つて個々の藝術作品の個性なり特色なりは成り立つのである。しかも斯うした意味での藝術における無自覺的要素は、自覺的要素との關聯においてのみその特有なる意義を具有するのであつて、斯かる關聯から全然孤隔せしめられたものとしては、到底斯かる關聯において其れの具有するやうな特有の意義を發揮しえないものであること、從つて藝術における無自覺的要素の意義を明かにする上にも、先づ謂ふ所の自覺の要素を十分明瞭に意識することが必要であることを知らねばならぬ。藝術內容の自覺的表出に伴ふ冒險性の著しく大なる舞踊などにおいては、さうした藝術における二樣の要素の交錯が、ことさら吾々の興味を誘ふのである。

舞踊において、單なる肉體的運動のあたへる美的效果の外に、象徵的意味の託せられる程度が大きくなれば、次第に劇的成分が加はるといふやうにも、考へ得られるであらう。斯かる傾向が他の極端に發展せしらめられる處に、劇は成立する。劇の構成要素たる脚本の文學としての意義は別問題として、劇其者の表現する美的價値內容と同一の種別に屬する所の美的價値內容についても、それが自然的過程によつて表現される事實を、私たちは經驗するのである。人間の肉體の靜態や動態や、人間の生活の諸々の樣相やを描寫してゐる繪畫の美に對して、人間の肉體の靜態や動態その者、人間の生活の諸々の樣相その者があらはす美が、自然美として考へられるやうに、劇において表現せられる人生の諸々の樣相の發展の美的價値內容に對照して、人生の現實的樣相の發展過程その者があらはす美的價値內容は、やはり自然美として觀照され得るであらう。畫家が、繪畫的內容の無限に豐富なる源泉として、自然の世界を觀るやうに、劇作者にとりても亦、人生の自然的現實は劇的內容の無盡藏なる寶庫であらねばならぬ。われわれが觀照的態度を以て自然の一角を凝視するとき、其處に繪畫的美的內容を把捉し得る如く、われわれの生きて行く生活の無數の場面は、それに對してわれわれが觀照的態度をとり得る限りは、劇的美的內容をわれわれの意識に提示するであらう。この場合において

も、或る人生の一隅における事象の發展の一連續によつて表現される劇的美的內容は、經驗的個人的主觀の觀照的意識によつて初めて產出されるのではない。經驗的主觀の立場においては、美的內容の觀照は何處までも受働的なる意識のはたらきであつて、決して美的內容の能働的產出のはたらきたるものではない。經驗的主觀は、人生の現實において產出された劇的自然美を受け容れて觀照する關係に立つのである。勿論、現實の人生において成り立つ劇的自然美は、劇的藝術美に見られるやうな劇的內容の自覺的形式化、すなはち單純化や、誇張化や、様式化や、事件の發展の自覺的統整や、劇的效果の自由なる配列やを十分な程度において示すものではない。しかしながら自然の恐るべき藝術的潛勢力は、この方面においても人爲を絕した無技巧的技巧を以て現實の人生を支配することは、稀れでなく、價値の見點から劇的自然美をおとしめることは正當でない。そして現實の人生において種々の役割をつとめてゐる人物の中の一人、二人又は數人が、人生の事相の發展を自覺的に劇的興味の見地から左右しやうといふ意志を以て行動する場合には、その限りにおいて、現實の人生を地盤として劇的藝術的努力が行はれ、劇的藝術內容が表現されるのである。十分な意味においての劇は、かうした傾向が極端に發展せしめられたものであり、演劇者みづからは、現實の人生を構成する者の一人としては現實の生活を生きながら、その現實の生活の地盤の上に純粹に藝術的內容の表出を目的として行はれる所の劇的過程に參加するのである。

言語を以て表現手段とするところの藝は、言語の支配の行はれる領域においてのみ成立する。そして一定の思想內容を表現する言語の一連續が、藝術品たるか否かは、そのうちに美的價値內容が自覺的意志によつて表現されてゐるものと認識されるか否かによつて、定まるべきである。現實の生活における會話や、演說や、講義や、說敎やが、言語の具有する概念的意味を通じて、美的價値內容を自覺的に表出せむとする努力を示す限りおいては、藝術的努力を伴ふものと云ふべく、歷史や、傳記や、哲學的又は科學的著作や、經典や、宣傳文書や、新聞記事や、書信や、日記やについても、同様の事柄が妥當するのである。そしてこれらのものにおいて、美的價値內容の表出が無自覺的に行はれてゐると認識される限りは、われわれは自然的文藝美を觀照するのである。たとへば現實を生起した或る生活事象を、能ふか

り客觀的な觀察な態度を持することに努めながら叙述した記錄が、甚だ豐かなる小說的內容を表現してゐる場合のあることは、往々にして私たちの經驗する事柄である。この場合に、小說家的企圖が叙述者の意識を支配するにつれて、自然的小說美は藝術的小說美に地位をゆづるのであるが、その關係は極めてデリケートであると言はねばならぬ。かの生活內容の個性の認識を目的とするところの歷史的記述の如きも、かうした意味において、藝術的表現に轉化しがちな路程をたどり行くものである。日常の生活における會話などについても、或る人々において且つ或る機會において、一方には劇的效果の表出が自覺的に企圖されるが、他方には會話の內容の選擇配列とか、會話における用語並びに表白の工夫などの上から、小說家的意識が力强くはたらく場合を、吾々は經驗するのである。素より通常の對話においては、統一的意識が二人以上の話者の各自の會話の內容を支配するのでないから、かれらの對話の全體は藝術的表現としての統一的意味を有つことは能きず、自然的小說內容として認識される外はないが、實生活における二人以上の人物の對話が、彼等の合作とも謂へば謂はれるやうな藝術的效果をあらはす場合のあることも、私たちの往々にして發見する所である。

若しも藝術の本質についての以上の如き觀方が妥當であるとするならば、生活と藝術とは普通に考へられるよりも遙かに內面的な、はるかに深刻な關係において互ひに連繫するものであると言はねばならぬ。一般に、生活することが何等かの限られたる人々のみに許された特權ではなくて、あらゆる人々に許された――と云ふよりは寧ろあらゆる人が謂はば有つて生まれた權利であるやうに、生活としての藝術も、特殊の人々のみが實現し得る生活樣式ではなくて、すべての人々にとつて可能なる生活樣式である。生活の藝術化の要求の如きは、かへつて生活と藝術との深き內面的關聯に想ひ及ばざる處から提起されがちなことを知るのである。

現實觀の成長

片上伸

1

現代の日本文學に、現實の表現が不足してゐると言つたら、人は直ちには承認しさうもない。しかし、それはある意味でたしかに事實である。

リヤリズムは現代文學の基調だと言つてよい。而してそのリヤリズムも、十年も前に比べると、ずつと自由になつて來た。ずつと廣濶になつて來た。文學構成の上で、その題材としての現實のうちに、はじめから理論的に範圍が限られてゐたりしたのは、日本の文學でももう大分古い話になる。自然主義以後當分の間は、現實の範圍の問題だけですら隨分烈しい論戰が行はれた。今日では、さういふ問題はなくなつた。現實は、自由に廣く文學の題材として取り扱はれてゐる。それが今日の事實である。

しかしながら、題材としての現實に制限がなくなつて、自由に廣く取り扱はれるやうになつたといふことは、自然主義を中心とするリヤリズムの傾向が、當然に招いて來た一つの結果に過ぎない。それは現實のうちに題材としての區別を立てようとするやうな邪魔を拂ひのけたといふまでのことである。リヤリズムの消極的な特色の一面に過ぎない。少

くとも今日では、現實のうちに題材としての區別を立てないといふだけでは、リヤリズムの精神に特に新生命を附與することにはならない。それはリヤリズムにとつては、あたりまへのことに過ぎないからである。

題材としての現實は自由に廣く取り扱はれてゐる。細かさもある。人生的意味も必ずしも空疎貧弱無味といふではない。現實のそれ〳〵の斷片が、人の心にうつすほどの一と通りの陰影は、現代の文學もまたおの〳〵の趣きに於いて與へつゝある。その上技巧はたしかに洗煉を加へて來た。確實で、明快で、安んじて讀まれるだけの手堅い巧みさがある。實際日本現代の文學のうち、中んづく短篇小說の中には、世界の文學と肩を比べて、少しも見劣りのしないばかりでない。寧ろかなり立ちまさつて見られるだけのものも、決して少なくはないと言つてよい。リヤリズムの文學として、ある意味で一つの完成せられた形に達してゐるとさへ見られるのがある。このことは、いかに現代の日本の文學に對して多くの不滿を懷くものといへども、公平に認めざるを得ないところの事實である。

それでゐて、現代の日本文學に、現實の表現が不足してゐるといふのは、どういふ意味であるか。

題材としての現實は自由に廣く取り入れられてはゐる。表現の技巧も洗煉せられ、確實に、明快になつて來てゐる。しかし、その取り扱はれてゐるところの現實は、いはゞ人生の一つの波としてのみ取り扱はれてゐる。一つの襞としてのみ取り扱はれてゐる。言ひかへれば、その取り扱ひかたが靜的である。複雜な生の推移と波瀾との間に、たま〳〵現はれて來る一つの波として、一つのひだとして、その一局面を注視したものに過ぎない。いかに大波瀾の間にあつても、その間に一波の姿は、これを靜的な一面として注視するをとが出來るやうに、現實の一斷片が、その部分だけを切り取つた一つの靜的な世相として注視せられてゐる。一つ一つの波があつて、それ等の全體が集り成すところの、もしくはそれ等の一つ一つの由つて來たるところの、海波の海湧乃至干滿の全的生命が表現せられてゐない。少なくとも、その

全的生命の消息に觸れてゐない。更に言ひかへれば、その全的生命の消長を念とする心の浮動が感ぜられない。一つ一つの波の趣きはある。しかし海洋の廣大無邊を、その自由とその不安とを、限りなく思ひめぐらしめるだけの力がない。あくまでも靜的である。安全である。

それは、現實の斷片が、その包含し得るかぎりの一切の生命乃至意義を以て、表現せられてゐないからである。現實の斷片が、その形態と、そのある程度までの生命乃至意義を以て表現せられてゐる。しかし、それは既に過去に於いて潜り抜けて來た程度の生命乃至意義である。現實の斷片から、人はそれ以上の廣さと、深さと、鋭さと、――つまりそれ以上の新らしさを有し、それ以上の切實さを有するところの生命乃至意義を要求してゐる。また必ず今日に於ける現實は、さうであるべきことを要求してゐる。少なくとも、文學に於いて、人はその要求が當然であることを感じてゐる。而かも、現代の日本文學が與へるところは、現實の有する今日に於ける、乃至は明日に於ける生命と意義とではない。その多くは、昨日に於ける――今日までに於ける生命と意義とを、昨日のよりも確實な、明快な、危なげのない洗煉せられた技巧を以て表現してくれるのに過ぎない。

これは、現代が文學の普及して來た時代であることを示してゐる。また、かういふ文學は、その當代に於いて普及すべき性質を有する。その意味で、現代の日本文學は、殆ど凡て通俗的である。この種の文學の需要と取引とは、可なり盛況を呈する。而してまた實際に於いてさうである。

現實の斷片の形態は、たしかに今の文學に於いて、一層精細に、一層確實に、また一層巧みに手際よく描寫せられてゐるでもあらう。形態の描寫といふ上では、現代の文學は、リヤリズムのはるかに進んだ點に立つものと言へる。しかし、世相の形態は變化しないやうに見えてゐる間に、その現實の生活に對する心持ちは、著しく變つてゐるのである。

少なくとも、現實の生活が表現すべき生命乃至意義に對する要求と期待とは、著しく變り動いて來たのである。現實の生命といふもの、現實の意志といふものは、つまりこの現實が表現すべき生命乃至意義にほかならない。即ち現實が包含すべき意味と味ひとにほかならない。現實が包含すべき意味と味ひとに對する要求は成長してゐるのに、この要求を充たすべき文學がないのである。この要求の自然であり道理あることも分つてゐないではあるまいが、急かにはそれに應じかねるといふのが事實である。とにかく、その要求を充たす丈けに、現實の包含する今日に於ける、もしくは現實の包含すべき明日に於ける、生命と意義とを表現する文學のまだ現はれないとは、何れにしても事實である。

今日の日本文學に、現實の表現が不足してゐるといふのは、かういふ意味に於いてゞある。

現實の取り扱ひ方は自由にもなり、廣くもなつた。しかし、その自由さと廣さとは、多く個人生活の、生理的乃至心理的消息の範圍に限られてゐる。その倫理的意義は、社會的集團生活の多くの皺襞のうちの一つの襞を切り離して示すに過ぎない程度のものである。社會的集團生活の、目に見えない、緩漫な、しかしながら不可避の勢ひで動きつゝあるところの、大海の潮の干滿が感ぜしめる、あの運命的ともいふべき生命の移動、――その暗默の大移動が、いかに現實の全圓をゆり動かしつゝあるか、それに伴ふ不安、それに伴ふ疑ひ、――それ等と交錯するところに、自のづから醱酵せられる個人生活の生理的、心理的乃至倫理的消息、――これこそは、今日までに於ける現實の表現が、その生命乃至意義として攝り入れるまでに至らなかつた新要素である。リヤリズムの文學は、凡そその本質に於いて、これ等の一切の要素を、その題材としての現實のうちに攝り入れて來べき約束を有してゐたのである。廣い普通の意味での社會問題

といふやうな點では、イプセンその他の文學が、既に早くその題材としての現實のうちに、幾多の新意義を加へて來たのである。しかし、今日の實生活が要求するところは、現實の一切の事物のうちに、經濟的社會的倫理的意義を主要な中心點として讀むことである。この中心的意義を、現實のうちに讀むことなしには、現實の批評が不十分なりとせられるのである。この中心的意義を包含せられてゐない限り、文學の題材としての現實は、十分に表現せられてゐないとせられるのである。現實の生命乃至意義が、この中心的意義を拔き取つて不十分とせられるなら、文學の題材としての現實が、この中心的意義を何等かの意味で包含し攝取し得てゐないときに、その表現に於いて不十分であるとするのは當然である。而して、このことは、理論でなくして實感である。この點が殊に重大である。

人はよく現實に徹するといふ。しかし、現實の形態ですら無限に變るといふやうな意味をほかにして、現實の生命乃至意義は、いふまでもなく無限である。現實に徹するとは、つまりこの無限の生命と意義とを有する現實のうちに、一層深く、一層廣く、一層新らしき生命と意義とを把握することを意味するにほかならない。今日までに於ける現實の表現が包含するところの生命乃至意義に滿足しないといふことは、現實のうちに讀む自己の生命が成長して來たのである。自己の意志が、現實のうちに、新らしい生命と意義とを見出して來たのである。この現實に見出して來たところの新生命乃至新意義は、現實の經濟的社會的倫理的消息である。少なくとも、今日までに於ける一切の現實觀が示し味はしめるところの現實の生命乃至意義も、その經濟的社會的倫理的消息の光りを加へて來て、はじめて、往くべきところに往き、究め盡くすべきところを究め盡くした滿足の感を與へる。そこではじめて、現實の包含するあらゆる生命と意義とに觸れて見た感じを與へる。かくして生ずる現實の不安こそは、眞に不安とするに足るべき現實の力のあらはれである。かくして生ずる現實の暗さも悲しみもをかしさも、眞に現實の暗さとし悲しみとしをかしみとするに足るべき、

現實の力のあらはれである。而してそれは、今日に於ける現實の生命乃至意義を表現するものであるとともに、たやがて明日に於ける現實の生命乃至意義を表現するものである。

人間の生理的心理的生活の科學的事實が、かつて文學の題材としての現實に新生命新意義の中心を成したやうに、人間の經濟的社會的倫理的生活の科學的事實が、今日以後の文學の題材としての現實に、新生命乃至新意義の中心を成すことは、今日に於いては、既に事實として認容せられねばならない。人間の生きようとする意志が、成長して、自のづから選び當てたところの必要――眞に必至の關心事が、そこに中心を置くやうになつて來たのである。これは生きようとする意志の伸長であるとともに、現實觀の成長――現實觀が一層明確になつて來たことを意味する。現代の文學が、その作品の上に、この一層明確になつて來た現實觀を未だ表現し得てゐないといふ意味で、今日の文學のリヤリズムは、今日までのものである。それは、今日及び明日に於ける現實の表現ではあり得ない。今日の文學のリヤリズムが、今日及び明日に於ける現實の表現となり得るためには、それは當然崩壞乃至分裂しなければならぬ。今日に於ける文學のリヤリズムが――或る意味に於いては一つの完成せられた形にまで達してゐる如く見える今日のリヤリズムが、新らしき現實の生命乃至意義に觸れて、いかに崩壞し分裂し、もしくはその間から甦生し成長して行くかど、恐らくは、今日以後に於ける日本文學の中心問題であらう。

批評について

近來の文壇のそこここで目につくことは、經濟方面の言說が、甚だしく亂雜放縱になつて來てゐることである。今の文學界には、眞の主張上の離合がない。このことはつひ近頃他の場所でも序でに書いて置いたが、批評らしい批

評がない。詩歌の詩歌としての批評も、科學的な知識的要素の克つた批評も、ともに損はない。しかし批評らしいものは可なり賑やかである。ただ批評に重要ないろいろの要素が甚だしく不足してゐるのである。

批評の一形式として、放言と見えるやうな形のものも敢て惡くはない。たゞ、その放言と見えるものにも、言說を行るもの自からに於いては、必ず自己の心の眞實から發してゐるといふ意味で、その言說に責任を負ふだけの誠實を求めたい。それがあつて、その放言と見えるものからも、はじめてその人を受け取ることが出來る。これと爭ふと爭はざるとは、勿論自のづから別である。

好惡の卒直な表白も必ずしも妨げない。たゞそれが一つの批評であるかぎり、說明を避けてはならない。自己の好惡を是認せしめるだけの說明を避けてはならない。說明のない場合に於いて、その好惡の判斷に就いては、動機を讀まねばならぬ。その動機が眞に藝術のため乃至人生のためであるか、もしくは何等かの他の不純な要素にくもらされてゐるかが讀まれねばならぬ。この動機の批判にも堪へ得ず、主張する判斷の說明をも加へ得ないやうな言說は、批評として過するに及ばない。

月評といふものが、だん〳〵批評家自身の社會乃至藝術に對する態度の表現の機縁として書かれるやうになつて來た。批評はいつでもさうであつたし、またさうあるべきだが、近來殊に月評の上で、この傾向の明らかに見えて來たのはよい。報知紙上の生田君のものはさすがに老練だ。たゞ自分の藝の巧みさを自から樂しんでゐる間に、つひ批評の對象をも自分の主張をもすべらしてしまふやうなところが、あき足りないといへばあき足りないし、おもしろいといへばおもしろいとも言へよう。朝日に書いた武藤直治君のものも、少し慌しかつたが、はつきりしてゐてよかつた。もつと十分に、言ひたい丈け言ひ切れるやうな場所で書いて見たらよからうと思ふ。月評といふ中には入らないが、朝日の新刊批評に出た江間道助君の武者小路氏の「ある男」の批評も、極めて短いものではあつたが、思ひつきの批評でない、可なり打ち當てたところのあるものであつた。たゞ、あの上に、もつと熱意が加はつて來ると、批評が更に光つて來るであらう。

世界政黨の趨勢

「苦勞人」の英國勞働黨

林　癸未夫

個人を評するに「苦勞人」といふ言葉がある。老練で、もの解りが良くて、人情の機微に通じてゐて、相當に操守を保ちながら、案外打算的で融通のきく人を指すらしい。若し此言葉が團體にも適用できるならば、英國の勞働黨の如きはまさしくそれであると私は思ふ。

さる十二月の總選擧で、勞働黨議員は多分現在の百四十餘名から百二十名くらゐに減るだらうと豫想されてゐたのに、意外にも百九十二名に增加して、隆々たる勢を示した。若し統一黨内閣が瓦解すれば、新内閣組織の大命は當然勞働黨總理たるラムゼー・マクドナルドに降下しなければならぬ。多年英國朝野の恐怖でもあり希望でもあつた勞働黨の政權獲得は、どんな鈍感の者にも緊切な現實問題として考へられなければならない形勢となつた。かういふ一代のクライマックスに近づかんとしつゝある勞働黨總理のマクドナルドは、卒然として「勞働黨は必ずしも資本課稅論に執着しない」といふ聲明を天下に與へた。資本課稅（キャピタルレヴィ）──それは過去三回の總選擧に於ける勞働黨の主要な標語であつたのみならず、統一、自由の兩黨から最も反感を以て迎へられた提案でもあつた。その折角の提案を、彼等が目ざましき勝利の曉に──政權掌握の前夜に、簡單に高閣に委ね去らうとするのは一體何故であらう。疑ふを止めよ、そこに英國勞働黨特有の持ち味が發揮されてゐるのである。資本課稅論は實は尙一箇の學說である。在野黨が宣傳用の旗幟としては適當であつても、在朝黨の實行的政綱としては尙頗る未熟である。しかのみならず勞働黨は第二黨ではあつても單獨に天下を保つわ

けには行かない。第三黨たる自由黨の援助なしには一日も政權を運用することができない。しかも今頃の總選擧の直接の係爭問題であつた保護關稅に對しては、兩黨の主張は一致してゐるが、資本課稅案では到底一致する筈のない關係に在る。そこでマクドナルドの聲明に深長な意味が讀めると同時に、「苦勞人」たる英國勞働黨の一面が了解されるのである。

○

昨年三月二十日、勞働黨領袖たるフヰリップ・スノウデンは、「資本主義制度を漸次撤廢し、之に代ふるに、生産及分配機關の公有と民主的統制とを基礎とする産業的及社會的新秩序を以てするために、立法的努力を傾注すべし」といふ決議案を下院に提出して、英國議會に珍らしい學究的討論の一幕を演じたが彼は本案提出理由の説明の中でから述べた。「吾々は決して革命を主張するものでない。又吾々は財産剝奪を主張しないばかりか、私は寧ろそれを嫌惡する。何となれば、それは目的に到達するに最も迂遠な道程であるのみならず、災禍を惹起することが確かだからである。社會主義とボルシエヴヰズムとの間には共通の何物も存しない。事實此兩者は對蹠的なものである。ボルシエヴヰズムは其理論に於ても實行に於ても、獨裁と財産剝奪を旨とするものであるから、それは社會主義ではない。却てそれはダイハード式の保守黨主義(トーリイズム)である。」

面白い論法ではあるが一種の詭辯である。詭辯ではあるが、かゝる論法を用ゐなければ英國民の前に資本主義撤廢論を議ずることのできないのが――もつと正確に言へば――かゝる論法を用ゐることによつて、英國民を社會主義といふ言葉に怖氣付かせないように、斷えず注意を拂つてゐることが、「苦勞人」たる英國勞働黨の持ち味なのである。

○

昨年の秋『勞働黨の目的』と題する小冊子が、領袖七人の名によつて公にされた。それによつて見ると、勞働黨は其理想と現實政策とを區別して、次のやうに說明してゐる。

彼等は言ふ。若し勞働黨內閣が成立した場合に、政府の目的が何處に在るかと問はれるならば、躊躇なく、それは社會主義國の建設に在る、言ひかへれば資本主義の廢止に在ると宣言するであらうと。これが簡單な彼等の理想の表明である。

が、此理想に向つて進む當面の現實政策として、彼等の取らんとする手段は何であるか。彼等は言ふ。租稅と産業法制によつて、資本家と企業家との地位を次第々々に低落せしめ、團體

交渉と勞働立法とによつて、勞働者の地位を次第々々に向上せしめる。此方法が十分功を奏すると、資本家や企業家の有つてゐた唯一の職能、即ち企業の擔手、經營並に新資本の蓄積を行ふことが、當然總熄するであらう。それと同時に勞働者等は、現存の如き産業狀態の下に其職能を果すことを、次第に嫌惡するに至るであらう。かくの如くにして、步一步、全産業組織の崩落に近付いて行くのであると。

隨分氣の長い現實政策である。が併し、それは英國勞働黨の傳統的持味の一表現だと思へば、すこしも不思議はない。此小册子は議會解散の數箇月前に發表されたものであるから、勿論今回の總選擧のために用意されたのではないけれども、併し、總選擧の前に勞働黨候補者の多數によつて發表された政見の內容も、前記のスノウデンの非ボルシエヴヰズム論、及この『勞働黨の目的』以外には出でなかつたに相違ない。かゝる政見によつて勞働黨は議員百四十四名から百九十二名への激增を贏ち得たのである。さうして數年前死物狂ひで直接行動論を主張し、英國の朝野を震駭せしめた炭坑夫の大親分ロバート・スマイレーも亦、議會主義に看板を塗りかへて、今度は首尾好く當選したのであつた。

○

一九二〇年の夏、ウエッブ夫妻は『英國社會主義共和國の憲法』と題する一書を公にし、又當時トレード・ユニオン・コングレスの執行委員長であつたゼー・エチ・トーマスも『勞働者が天下を取つた時』といふ一書を公にした。此兩書は殆ど時を同じくして世に出たのみならず、一つは社會主義學者の立場から、他は勞働組合員の立場から、英國の勞働階級が政權を掌握した曉に實施しようとする政治の輪廓を說明する點に於ても亦同じであつた。固より兩書の中に取扱はれてゐる題目には多少の相違があり、又共通の題目に對する意見にも多少の相違がある。が併し、彼等の意見は、或は主要なる一點に於て、正しく一致してゐた。其一致とは、英國皇室の尊榮を永久に維持するといふこと之である。

今日から見ると、それは彼等としては何でもないことのやうに考へられるかも知れぬ。併し、此兩書の書かれた當時に於ける英國勞働運動の形勢から見ると、それは決して何でもないことではなかつたのである。當時に於て、社會主義學者としての權威並ぶ者なきウエッブと、勞働組合界に於ける聲望隆々たりしトーマスとが、かゝる皇室擁護論を發表するには、かなりの決斷と勇氣とを必要としたのであつた。

英國の勞働組合は、思想的には常に勞働黨に先立つて前進する。一九一五年に炭坑と鐵道と運輸との勞働組合間に三角同盟が成立つた時には、勞働黨の最高幹部は、ロイドジョージとの妥協に忙しかつた時代であつた。その後の二年間に、革命的なショップ・スチュアートの活躍を先登として、英國の勞働組合は日一日と左傾して行つた。勞働組合の行くところには必ず勞働黨が追隨しなければならぬのが（後に說くやうに）英國に特有な事情である。其結果として出現したのが、一九一七年六月の勞働黨の大宣言『勞働と新社會秩序』であつた。此宣言によつて、英國勞働黨が社會主義の洗禮を受けたことが、世界に公表されたのであつた。

が、何にしても、當時は未だ戰爭最中であつた。勞働黨と政府との妥協も、大分水臭くはなつてゐたものゝ、まだ破れてはゐなかつた。所が此妥協は一九一八年十一月の休戰と共に終熄した。政府對勞働の戰端は、一九一九年の一月に再開された。其先陣を承つたのが坑夫聯合會のスマイレーであつた。彼は炭坑國有案を振り翳して、遮二無二、政府と資本家とに突撃した。直接行動問題は議論沸騰の頂點に在つた。英國に勞農革命を爆發せしめようとする陰謀の噂が、朝野の神經を極度に刺激した。モスカウの使節カメネフ及クラッシンの兩名は、通商條約談判を名として倫敦に駐在し、赤化宣傳に秘策を弄しつゝあると傳へられた。露國と波蘭とが戰爭して、赤衞軍が、ワルショウに迫つたので、英佛兩國政府が露國に宣戰を布告しかねまじ形勢を見て、トレード・ユニオン・コングレスの臨時大會は總同盟罷業斷行の決議を通過した。

こんな鹽梅で、一九一九年と一九二〇年の二箇年は、英國に於ける勞働運動の振子が未曾有の左傾を示した時代であつた。かういふ險惡な雰圍氣の渦卷く中心に巨然として立つてゐながら、皇室擁護論を發表することは、如何に羅馬のフワビヤスの戰略を學ぶウエッブにしても、如何に「黃色」に染つてゐるトーマスにしても、さう容易にできることではないのである。世間の人氣ばかりを氣にしてゐる何處かの國の社會主義者や勞働運動者などには、夢にも眞似のできることではないのである。それを彼等兩人は敢てした。勿論それは彼等の決斷と勇氣とにも據るのであるが、併し又彼等の屬する英國勞働黨の持味が、これを可能ならしめたことにも據るのである。

○

右に述べたやうな英國勞働黨特有の持ち味は、何によつて生れたか。それを私は少しく吟味して見よう。

今更言ふまでもなく、無產階級解放運動の二陣營は、政黨と勞働組合とであるが、この二つのものゝ關係を歷史的に見ると、英國と大陸諸國との間に、著しい一つの相違を認め得るのである。英國の勞働黨は勞働組合の中から生れ、勞働組合によつて育てられ、今尙勞働組合によつて包容されてゐる。ところが獨逸や佛蘭西では、政黨——政治運動を主眼とする學者及思想家の團體——が勞働組合を造り、之を育て、而して後に或は分離し、或は提携しつゝ、各々獨立の成長を遂げて今日に至つてゐる。英國では勞働組合員の全部が勞働黨員ではないが、勞働黨員の全部（極めて少數の學者を除けば）が勞働組合員である。從つて兩者の關係は、謂はゞ切つても切れぬ肉親の間柄で、其主義も感情も殆んど常に一致して、決して齟齬したことがない。これは勞働組合運動の牛耳を執つてゐる人が、同時に勞働黨の領袖であるといふ事情からも、さうなければならぬことであるし、又無產階級全體のために重要な問題に就て、進退や作戰を決定する場合には、必ず兩者幹部の會議を經るといふ慣例からも促進されてゐるのであるが、併し其關係の根本は、本來が一元的であつて、同一體が同一目的のためにする運動の各半面づゝを、勞働組合と勞働黨とが分擔してゐるといふ事實に據るのである。

獨佛兩國の如く、勞働組合と社會黨とが二元的な存在を保つてゐる所では、勞働組合員中の一部が社會黨員であると同時に、社會黨員の一部が勞働組合員である。從つて社會黨議員が選擧で得る投票のかなり多數が勞働組合に無關係な人々によつて與へられるのみならず、議員の顏振も英國と異り、勞働組合に籍を有たない學者、辯護士、新聞雜誌記者などの選出される場合が甚だ多い。其點、勞働黨議員の殆ど全部が勞働組合員である英國とは、餘程事情が異つてゐるのである。

獨逸や佛蘭西では、社會黨の領袖は大抵知識階級の出身者か、さなくば一かどの學者になりすました一ゼネレーション昔の勞働者で、彼等は現在の勞働組合員等より一段高い地位に自身を標置してゐる。從つて彼等は宣言や綱領の內容を學理的に論議したり、時事問題を大局高所から批判したりすることには、熱心でもあり、長じてもゐるけれども、勞働階級と生活を共にしつゝ、直接に其喜憂を頒つやうなことは餘り力を入れない。つまり彼等は理想主義の采配を振つて、無產階級を統率指導することを好むけれども、自ら勞働組合の中に在つて、その卑近な併し痛切な日常の現實問題に心身を勞することを欲しない。これが大陸諸國で、社會黨と勞働組合との戰略や感情が充分渾一的であり得ない一つの理由なのである。

英國では、之に反して、現役の勞働組合幹部が、日常の現實

問題を處理するの傍ら、勞働黨議員としての任務を兼ね行つてゐるのである。從つて勞働黨議員が一段の高處から勞働組合を統率してゐるのではなくて、勞働組合が一つの別働隊として勞働黨議員を政治界に差遣して居ると見る方が適當なのである。從つて英國の勞働黨は勞働組合運動の前衛を務める場合はあつても、それは決して勞働組合運動を指導してゐるのではない。寧ろ單に勞働組合運動の旗手の役目を承つてゐるのである。前に、英國の勞働黨は勞働組合に追隨して行くと述べたのは、此意味である。

○

方今、世界各國の社會運動團體中、凡そ英國の勞働組合ほど現實主義に徹してゐるものがあらうか。彼等は何の憶面もなく自己現實の利害を計量して共進退を決する。彼等に理想とは只明日の問題を意味するに過ぎない。明後日の問題は空想に屬し、それから後の事は夢にだも見ない。徹頭徹尾彼等は現實主義に終始するのである。そして又其方面には極めて賢明でもあり、豐富な經驗で鍛へられてもゐるのである。

かくの如き母體から生れ、育てられ、そして今尚其懐中に、しかと抱擁されてゐる英國の勞働黨が、同じやうに現實主義であることに何の不思議があらう。この現實主義を彼等の流義に從つて奉仕すると、老練で、もの解りが良くて、人情の機微に通じて、相當に操守を保ちながら、案外打算的で融通のきく——つまり「苦勞人」的な持味のエッキスとなつて殘るのである。

英國勞働黨が此持味を失はない限りは、好し近い將來にラムゼー・マクドナルドが宰相の印綬を帶びても、次の總選擧で勞働黨が絶對多數を占めても、英國には斷じて暴力の革命も、私有財産の無償沒收も、プロレタリヤの獨裁も實現される虞れはない。そして勞働黨が其持味を決して失はないであらうとも、私に取つては殆ど確實である。

無産階級解放運動の歴史は、常に必ず、左から右へ、左から右へと展開して行く。從て昨日の極左黨は今日の左黨となり、今日の左黨は明日の中央黨となり、明日の中央黨は明後日の右黨となる。これが當然の順序である。而して英國の現狀からすれば、自由黨が中央に座を占て、左右兩翼に勞働黨と統一黨とが對峙して居るが、恐らく遠からぬ將來に於て、自由黨は二つの部分に分解して、一部は勞働黨に、一部は統一黨に吸收せられ、そして勞働黨が自由黨の後を襲うて中央に座を占めるに至るであらう。そして同時に、勞働黨の漸進的政策に慊らぬ急進論者が同志を糾合して、新左翼を形造るに至るであらう。が、

それは當面の問題でない。唯此際の問題として私に取つて毫も疑ひのない一事は、勞働黨が大を成すに伴れて其「苦勞人」的持味はますく濃厚となり、全英國民は安心して勞働黨政府の下に其生活を樂むであらうといふこと之である。

米國に於ける政黨政治の趨勢

安部磯雄

專制政治の下に在る國民は一切政治に關して容喙することが出來ないから、彼等の間に政黨の存在すべき理由がない。國民の參政黨が發展すればする程政黨の必要は生じて來るのだから、政黨はデモクラシーが生み出す必然の結果であるとも言へる。

米國は兎に角英國と同じくデモクラシーの最も發達して居る國であるから、政黨政治も比較的完全に進んで居ると言ふことが出來る。これは永き間に於ける國民的政治教育の然らしむる所であるとも言へるが、米國の事情が此の如き結果に導いたといふことも看過する譯には行かぬ。米國の政權は餘りに分立的である。單に立法、行政、司法が分立して居るのみでなく、中央政府、州政府、地方政府との間にも可なり大なる分立が行はれて居る。其上に國土が尨大であるから、國民の意見を統一する機關がなかつたならば政權の調和は容易に得られないのである。米國に於ける政黨の發達は斯る事情に起因するものであつて、現今の政治組織が根本的に改造せられざる限り、政黨政治の衰微を來すが如きことは決してあるまじきことゝ信ずる。

勿論私は米國の政黨政治が完全に行はれて居るものとは考へて居ない。現に政黨改善を唱へて居る人も少なくないのだから、改革の餘地があることは明である。政黨の管理が比較的少數の有力者によりて行はれて居るが如き、勝利を得た政黨が當然の權利として主なる公職を獨點するが如き、何人もこれを以て方黨の弊害と認めて居るに相違ないけれども、此等は早晩改善せらるべき可能性を有するものであるから、これを以て政黨

政治を非難するのは決して當を得たものでない。

米國は建國以來殆んど二大政黨を原則として居るかの如くに見ゆる。近年に至り禁酒黨や社會黨などが現出したのであるけれども、數の上に於ては未だ天下を三分するといふ程の勢力となつては居ない。ローズヴエルトの時代に進歩黨と稱する第三黨が頭を出しかけたけれども、これも物にならなかつた。リパブリヤン黨とデモクラシー黨が永久に天下を二分して居ることが出來るや否やは疑問であるけれども、英國に於けるが如き三黨鼎立の時代は容易に來らないだらうと思ふ。

米國は二大政黨で突き通ふして來たけれども、建國以來其主張も幾變遷を來し、其形式も內容も度々變動したのであるから今日の政黨は決して建國時代に於ける二大政黨の後繼者ではない。且つ獨立戰爭や南北戰爭に於ける當時の政黨は可なり緊張して格鬪をやつたものであるが、現在の二大政黨には心血を濺いで爭ふべき程の好題目がないため、米國の政治舞臺は何となく寂寞といふ感がある。四年每に行はれる大統領の選擧に多少の景氣は見せて居るものゝ、大體から見れば米國は經濟的にも政治的にも泰平無事である。

之に比すれば英國の政治舞臺が如何にも花やかであることが私共の目を惹く。英國には關稅政策といふ大問題が十九世紀末から今世紀の初めにかけて統一黨と自由黨との間に論議せられて居た。穀物條例廢止以來自由貿易主義は殆んど英國の信條となつて居たには拘らず、統一黨は時代の變遷に鑑み、保護政策を採用することが英國の利益たるべきことを主張し、チエムバーレンの如きは自ら大臣の椅子を拋つて全國遊說の任に當つた位である。然し一九〇五年自由黨內閣が組織せられたゝめ、統一黨の保護政策運動は遂に中止の已むなきに至つた。歐洲戰爭の際には所謂擧國一致內閣組織せられ、關稅問題の如きは全く閑却されたのであつた。然し戰爭終結後政權が再び統一黨の手に移るや否や關稅問題は再び重要問題として對議されるようになつた。昨年十二月六日に行はれた總選擧は近年稀なる緊張味を示したのであるが、統一黨の慘敗と勞働黨の躍進とは實に世界の耳目を聳動したのである。多年實行し來つた自由貿易主義を捨つるといふことは英國人に取りて可なり重大なる問題あるに相違ない。然しこれにもまして英國人の心を刺戟して居るのは勞働黨の將來といふ問題ではないかと思ふ。今や英國は一政黨の力のみでは內閣を確實に組織することが出來ぬといふ窮境に陷つて居る。若し自由黨が統一黨と握手し、若くは勞働黨と提携することが出來れば問題は解決されるが、萬一これが不可能とすれば、二三回の總選擧を經る中に自由黨が解體して、遂

に統一黨と勞働黨との二大政黨主義に歸着するのであるまいか私共は英國に於ける政黨政治の進展に就き多大の興味を感ぜざるを得ない。

米國のリパブリキヤン黨とデモクラツト黨に全力を傾注して相爭ふ程の題目はないけれども、關税問題は確に主要なる爭點の一として認めることが出來る。リパブリキヤン黨は輸入税を増加することに、デモクラツト黨は之を輕減することに贊成して居るから、前者は保護の傾き、後者は自由に傾いて居ると言へる。然し此二黨を英國の統一黨と自由黨に比較することは決して當を得ない。リパブリキヤン黨は外交上に於て帝國主義を取り、デモクラツト黨は比較的平和主義に傾いて居るといふのも、前者が資本家黨であり、後者が貧民黨であるといふのも單に幾分の眞理を含んで居るに過ぎない。

過去數年間に於て若し此二大政黨が其論議に緊張味を示したことがあつたとすれば、私は國際聯盟加入問題を擧げて見たい。大統領ウヰルソンは歴代大統領の慣例を破つて平和會議列席の爲め自ら歐洲に出掛けた。彼は列國會議の中心人物となつて活動した位であるから、勿論米國は國際聯盟に加入すべきものと考へて居た。然も反對の地位に立てるリパブリキヤン黨は多數を以て米國の加入を否決した。若し世界人類の福祉に重きを置けば米國は國際聯盟に加入して歐洲諸國の救濟に努力すべきである。若し又自國の利益のみ主とすれば、モンロー主義の訓へるが如く全然歐洲の政治に容喙せぬことが得策である。米國は今後に於ても屡此問題に直面するに相違はない。久しく自國貿易に慣れた英國が關税改正を重要視した如く、傳統的にモンロー主義を信奉せる米國がウヰルソンの國際主義を異端視するのは決して無理ではないやうに思はれる。米國が國際聯盟に加入するか問否かの題は今後も尙ほ二大政黨の間に可なり激しく論議せられるであらうと思ふ。

如何に米國の政治舞臺が平和であり平凡であつても、二大政黨は充分に存在の理由を有して居る。我國の政黨の如く何等主義主張を有して居ないものでも、在野黨は絶へず政府黨を監視するといふ重要なる任務を有して居るといふ點に存在の價値がある。米國の二大政黨には既に述べたる如く多少の特色がある。一方が他に比して幾分か進歩的、平和知、平民的であるといふ位事は言へる。從つて Check and Balance といふ作用が有効に行はれるといふことも記憶しなければならぬ。若し保守的政黨が益保守に傾くようになれば、國民は必ず反對黨に投票して保守的傾向を抑制することになる。自由主義が極端に走る場合にも同樣の抑制が行はれる。斯くして社會は常に中庸の道

を進むことが出來るのであるから、私共は米國の二大政黨に對して何等非難すべき理由を見出さない。

近き將來に於て米國も亦英國の如くに勞働黨の躍進を見るであらうか否かは可なり面白き問題である。露國に於て勞農階級が勢力の中心となつて居ることを見ても、獨逸の社會黨や英國の勞働黨が年々其勢力を增加しつゝあることを見ても、米國が遂に同一の經路を踏むやうになるのではないかと考へるのは決して無理な推論ではない。然し約三百萬の會員を有する米國の勞働組合は英國の其れの如く政治的運動に努力して居ないやうに思はれる。換言すれば米國の勞働運動は經濟を主として、殆ど政治を顧みないといふ有樣である。

社會黨は大統領の選擧ある每に自ら候補者を立てゝ競爭を試みて居る。社會黨が一九一二年の大統領選擧に得たる投票數は九十萬であつて、一九一六年の選擧に得たる投票數は六十萬であつたと言はれて居る。

以上の事實によりて考ふれば、近き將來に於て米國に勞働黨若くは社會黨の躍進を見ることは多分ないだらうと思はれる。私は其の理由に就き少しく述べて見たい。

何と言つても米國は富の程度に於て他の諸國に優つて居る。恐らく世界中米國の如く勞働者に對して高き賃銀を拂ふて居るものはあるまい。都會に於てこそ時に貧民の群を見ることもあるが、田舍に於ける農民の生活は實に羨ましき程である。經濟界の變動に伴ふて往々多數の失業者を生ずることもあるが、これを他の諸國の狀態に比較すれば其處に大なる相違がある。國土は廣く天產物には富んで居る。米國は斯くして地球上の樂土たる名に背かないのである。勞働組合に屬する人々は比較的安樂な生活を送つて居るがために資本制度に對して激烈なる反感を有して居ない。彼等は主としてデモクラット黨に投票して其要求を達せんとして居るのであるから、社會黨に投票する必要を感じて居ないのではないかと思はれる。

米國の農民は一時窮境に陷つて居たがため農民を代表する政黨を組織せんとの運動が起りかけたこともあつたが、中央政府が適宜の方法を講じたゝめ、農民の不平は漸次緩和されるやうになつた。數年前まで米國を通じて農家の有する負債は四十億弗といふ巨額に達して居たのみならず、これに對して平均七分四厘の高利を拂つて居たのである。然るに中央政府は一九一六年七月中央農業貸金法なるものを發布し、農家のために低利にて長期貸出をなし、農業者の便宜を謀ることになつた。目下の形勢から推測すれば農民黨の設立の如きは單なる空想に過ぎない。

或意味に於てデモクラシーは米國に最も良く發達して居る。封建的階級思想の如きは殆んど米國に於て見ることは出來ない。宗教上からも政治上からも凡ての人は平等である。天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずといふ思想は米國人に取りて最も重要なる信條である。米國に於て勞働黨や社會黨の發達しないのは此等の事情に起因することが少くないと思はれる。若世界を通じて資本主義が漸次崩壞し、社會主義が此に取つて代ることがありとしても、其潮流に捲込まるゝ最後の强國は必ず米國であるに相違ない。

以上述べた所により私は米國の二大政黨が現在の形式のまゝに尙ほ數十年間は繼續するものと信ずる。富裕にして平和なる米國の大統領選擧はリパブリキヤン黨とデモクラツトの競爭によりて何時までも行はれることであらう。米國民はエール對ハーヴアードのフツトボール競技に對する如く、否其以上の興味を以て其勝敗に注意するであらう。

英國諸政黨の內面的進化

蠟山政道

一八六六年以前の英國政界

英國が議會制度の發祥の地であり、政黨政治の濫觴の處であつて、總じて近代デモクラシイの政治組織を研究する學徒にとつてカナーンの聖地であることは、普く認められてゐるところである。然し乍ら、現代當面の生きた政情を理解するが爲めには、我々は左程に古き歷史の巡禮を試みる必要はないのである十七世紀に於けるホウイツグ、トウリー兩黨の起原や、十八世紀初頭よりその末葉に至る長き間のホウイツグ黨の執政や、十八世紀末葉よりナポレオン戰爭後に至る迄のトウリー黨の擡頭やの歷史は、目下の我々にとつて多くの興味を與ふるものではない。なぜなら、この當時に於ては、議會も政黨も我々が今日意味するものとは、非常に內容の異るものであつたからである政治は、王室と貴族との私事であつて、大臣も議員も王の私臣であつたと言つても過言ではない。一七八二年にエドマンドバークの行政整理案が通過して、政治をして私事から公事化せ

しむる所謂綱紀肅正史の第一歩が踏み出されたけれども、肝心の議會改革がフランス革命の反動の爲めに、頓挫してしまつた爲めに、英國の政治は依然として私黨の玩弄物たるを免れなかつたのである。

一八一五年に終りを告げたナポレオン戰爭後の形勢は、然しながら我々をして、一顧を拂はしむるに足るものがある。この戰爭の爲めに長い間阻まれ堰かれてゐた政治改革を要望する潮流は、猛然として起つて來た。この潮流に乘れるものが、産業革命の遂行者たる新興のブルヂョア階級であることは云ふまでもない。そこで問題は、このブルヂョア階級をば、從來のトウリー及びホウイック兩黨が如何に操縱し馴化したかに在る。政府黨たるトウリー黨は、反對黨たるホウイック黨が從來の門戶閉鎖主義に泥み、進取の氣魄に乏しきに乘じ、寧ろその機先を制して、中産階級の要望に應へんとした。就中カンニング、ハスキツソン、ピール等の進歩分子は着々として、トウリー黨の民主化を圖つたのである。然し乍ら、終局に於て地主貴族を大黒柱とする同黨の大勢は、所謂議會制度の根本に寸毫も觸れまいとするに一致して、遂に一八三〇年ウエリントン公の內閣を最後として政權を離れるに至つたのである。他方ホウイック黨はフランス革命並にナポレオン戰爭に際して、從來の權門勢家を多く失ひ、比較的革新分子に富んでゐたのであるから、大いに議會改革の衝に當り得る筈であつたのであるが、時々トウリー黨と聯合內閣を作つたことが寧ろ禍因を爲して、改革的精神を失つてゐたのである。それに、同黨の首領チャールス、グレーは、その若年の頃『人民の友』と云ふ團體を作つて、議會改革の宣傳に從つたことさへあるのであるが、その後時勢の變遷に鑑み、中産階級の間に於て議會改革を熱心に且つ眞面目に要望する機運の熟する迄は、隱忍自重すると宣言して、思を議會改革に斷つてゐた事も原因してゐやう。然しグレーの謂ふ所の改革の條件が具はるに至る時期はやがて來た。即ち既に述べた一八三〇年十一月ウエリントン內閣の辭職に續いてグレーは內閣を組織し、同時に彼はトウリー黨內の自由主義者を併せて新黨を組織したのである。爾後四十年間英國は大體かくの如くにして成立したるホウイック黨の天下であつた。而して最初の十年間は改革の時期とも云ふべく、第一回選擧法改正（一八三二年）、植民地に於ける奴隷の解放（一八三三年）、公共教育の國庫補助（一八三三年）工場法（一八三三年）、新救貧法（一八三四年）、市制法（一八三五年）、等はその主要なるものである。この時期に於て、政黨の內面的變化として注目すべきは、ホウイック黨が自由黨となり、トウリー黨が保守黨となり、大體その後の二

大政黨對立の素地を作つたことである。第二の十年間は、その最初の五年間は、ピールの保守黨內閣に政權を與へたのであるが、かの穀物條例問題に於て、保守黨內部に自由貿易論者と保護貿易論者との二派に分裂を來し、自由保守兩黨の陣容に更に一大變化を與ふるに至つたのである。これ十九世紀初頭に於ける保守黨の民主化にその原因を胚胎せる種子の成長したる結果に他ならぬ。カンニングに愛せられ、ピールに導かれたグラッドストーンが、その搖籃の地たる保守黨を離れて自由黨に移れる經過の如きは、蓋しその好箇の適例であらう。第三の十年間即ち一八四七年より五九年に至る時期は政爭の平穩を保てる時期であつて、ラッセル、パーマーストーン、グラッドストーン等の自由黨と、ダービー、ディスレリーの保守黨とが交互に政權を把握したのであるが、その政權の移動は、多く保守黨內の自由主義者の向背によつて左右された形であつた。これを以つても當時如何に政界の大勢が自由主義に傾いてゐたかが察せられやう。第四の十年間即ち一八五九年より七四年に至る時期は、十九世紀初頭に於ける自由主義の勃發と言ふ大地震に伴ふ餘震が全く收まり、自由及び保守兩黨の陣容は自らその落ち付きを得て徐ろに別箇の展開を試みんとした時期であつて、十九世紀の英國政治史上に於て、最も興味多き時期である。換言すれば自由黨はこの時に至つて單に政權を完全に把握して確固たる地歩を占めたるのみならず、從來のホウイッグ黨的貴族分子を排除して、全くその自由黨なる名稱に應しき內容を得たのである。パーマーストンの率ゆる守舊的分子には一八三二年の選擧法改正の意味するところを以て滿足し、敢てそれ以上に出でざらんとした。然るに一八六五年に於けるパーマーストーンの死は、同時にこの守舊分子全體の消滅を物語るものであつて、古き自由主義は新しき自由主義に代られねばならぬ時期に到達したのである。ジョン・スチュアートミルの社會思想に起れる變化は、やがてエワート・グラットストーンの政治思想に起れる變化と見られる。この時期が我々にとつて興味あるは單にかくの如き自由黨の變化のみに依るのではない。それは同時は保守黨に於ける新保守主義の勃興であつて、それのエキスポーネントはディスレリーその人であることは云ふまでもない。「平和、節約及び議會改革」の標語を以て新自由黨の旗幟とするならば、新保守黨も同じく改革と社會立法とを高唱し、寧ろ後者の武器を以て、自由黨の缺陷を衝かんとしたのである。斯く論じ來るならば聰明なる讀者は何故にしてかくの如き變化が齎らせられたるかに就いて疑問を發し、且つ推察されるであらう。言ふまでもなく、一八三二年の改革にとり殘されたる中流階級とチャーティスト

運動に失敗せる無産階級とが默從不動の二十年を經過して、今や隱然たる新勢力となつて政界の表面に立ち現はれるに至つたからである。この新勢力を如何にして自家藥籠中のものにすべきかゞ、兩黨政治家の苦心の存したところなのである。

一八六六年の選擧法改正の意義

我々は英國の政治史を學びて一八三二年の選擧法改正の意義に就いては、餘りに多くのインポータンスの置かれてあるのに氣がつく。然しながら、現代の英國政界の情勢に對しては、この改革は直接の意義を有しないのである。而して、一八六六年に始りたる改革こそ眞に現在を知る爲めに必要なのである。なぜなら今日の英國政界の重大問題は、無産階級を代表する勞働黨がその政權を得て、貴族とブルヂョアとによつて永年統治され來りたる英國の政治界を統制し得るか否かにかゝつてゐるのであるが、その勞働黨擡頭の原因は、この年の議會改革に胚胎するものであるからである。

無産階級の選擧權擴張の要求に對しては、自由、保守の兩黨は何れも自己の手によつて之を行はんとした。總て政黨は何れの國に於ても然かる如く彼等にとつては黨是も理論も第一義ではなく、自黨の利益の保障に對するバランスが最も關心事なのである。このことは、一八六六年の選擧法改正に於てよく現れてゐる。始めラッセルの自由黨内閣は一八六五年に選擧法改正案を提出し、大藏尙書グラッドストーンは該案の通過に就て大いに奮鬪した。しかるに、自黨内に於ける守舊分子（Adullamites の反對あり、之れに保守黨の政略的反對が加つて、該案は遂に否決の運命に逢ひ、内閣は瓦解したのである。しかるに之を受け繼いだ保守黨内閣も選擧權擴張の止むなきを看取し、ディスレリーの天才的謀策の下にその翌年反つて一層急進的なる擴張案が通過し、殊に市部の住民に向つて大いに擴張されたのである。而して、その結果は皮肉にも、次の總選擧に現れてこの保守黨の人氣取政略の裏をかき、自黨の大勝となつて現れた。かくして成立したるグラッドストーン第一次内閣（一八六八―七四年）は、歷代の内閣の中最も改革事業を實行せる意義ある内閣であつた。愛蘭に於ける國教會の廢止（一八六九年）、愛蘭土地法の制定（一八七〇年）、義務教育の國家的統制（一八七〇年）、議會及び地方議會の投票方法の改正（一八七三年）等これである。古き自由主義の爲すべき仕事に最早完全に果された。かくて、英國のこれより赴くべき道は茲に二方面に展開するに至つた。それは一方國内に於ては、資本主義の發達に伴ふ勞働問題の發生に對する解決の道であり、他方國外に於ては北米合

業國並びに獨逸の勃興に伴ふ帝國主義に對する方策の道である。これ自由黨と保守黨との鎬を削つて爭ふ場面であると共に、彼等の何れが國民の輿望を負つて廟堂に立つか否かを決する瀨戸際なのである。然かも大體に於て、今後一九〇五年に至る四十年間は、先きの四十年間が自由黨の天下であつたに比して寧ろ保守黨の天下であつたと見るべきである。その理由に就いては一言を以て盡すを得ないが、この當時に至つて一方自由黨の使命はその大體を果したると共に、他方保守黨は新時代の要求に應ずべくその陣容を改整したる事がその主たる理由であらう。大體我々はこの二大政黨を中心とする政權移動の趨嚮が、大體に於てリズムを描いて、或は振子的運動の形式を以て行はれる事實に就いては、之を單純に解釋し去つてはならないのであるヘンリー・メーンやマコレーの如く人間性に於ける自由及び保守の心理を以て之を説明せんとする如きは、複雜なる事實に對しては餘りに遠い感がする。注意すべきは、寧ろその律動の振幅が、現在に近づくに從つて短縮されると共に、その律動の原因が、益々國民生活の實質に觸れ來つて複雜化し來ると言ふ事實である。

一八六六年の選擧法改正の意義を注意した者にとつては、一八八四年の選擧改法正を見逃してはならない、それは前者が市部の住民即ち都會勞働者に向つて爲されたる擴張であるに對してこれは農村の住民即ち小作農及び農業勞働者に向つて爲されたる擴張である。而してこの擴張が先きに一八六六年の擴張をも爲すべかりし筈のグラッドストーンの自由黨内閣の手によつて爲れたる事は蓋し當然の事であらう。かくして、十九世紀に於ける前後三回の選擧權擴張によつて、英國の人民の何程が選擧權を得るに至つたかに就て、茲に一瞥を投じて見よう、グラッドストーン自身が一八八四年二月二十八日、これに就いて演説してゐる。(John Morley, Life of Gladstone Vol. III P.)

「一八三二年に英國民の自由のマグナ・カルタと稱せられてゐるものが通過した。そのマグナ・カルタによつて先きにジョン・ラッセル卿が計算したやうに、五十萬人が増加されたわけなのであるが、實際の結果から見ると全國に亘つてその數は五十萬より遙かに少なかつた。一八三二年の後に我々は一八六六年に來た。その當時我が英國の全選擧民の總數は百三十六萬四千人であつた。一八六六年から六九年に於ける改正法によつて、その數は二百四十八萬八千人に増加した。その現行法によつて今日の總數を見ると約三百萬人と言へよう、そこへ若し本案が通過するならば、イングランド丈けで更に百三十萬を増加するであらう。スコットランドは一層好條件にあるので二十萬を増加するであらう。又アイルランドは四十萬を増加するであらう。つまり總計で現在の三百萬に加ふるに二百萬を以てするに至つてであらう。即ち一八

六六年當時よりは二倍となり、一八三二年當時よりは四倍に增加するであらう。』

二大政黨の社會化と勞働者階級のこれに對する態度

時代の進展につれて、二大政黨が除々として、自家存立の爲め、必要なる範圍内に於てその政綱と組織とを社會化したことに就ては、旣に一言を費した。この點に於ては、自由黨と保守黨とに別はない、その程度の差異とその方法の相違はあつても兩黨何れも新に選擧權を得たる階級に迎合し、その接近を企てたのである。然らば新に政治上の地步を得たる勞働者階級は、如何なる態度と理由とを以てこの二大政黨に對したかを觀るも興味ある事とならう。なぜなら、勞働者階級を以て直ちに自由主義の信奉者となし、從つて自由黨への贊成者と見るを得るならば問題は極めて簡單であるけれど、事實は概念の如くしかし簡單ではないのであつて、デイスレリーをして『勞働者階級は天性の保守黨なり』と言はしむるが如き一面が存してゐたのである。勞働者階級が政治的に統一ある行動を有するに至るは、勞働者階級自身に於ける組織と重大なる問題を有するのであつて、その因果關係を見逃してはならぬのである。換言すれば、勞働者階級が自己の政黨を有するに至るまでは、旣成政黨と何等かの關係を有するものであるが、その關係を規定するものはしかく簡單ではないのである然らば英國の勞働者階級は如何なる關係を二大政黨に對して持たであらうか。

英國の勞働者は理論や主義の實現の爲めではなく、現實の苦痛や惡弊の除去の爲めに政治運動に熱心になる傾向があるこの傾向は彼等が政治的組織を有しなかつた以前に於て殊にさうであつた。從つて保守黨がその勞働者保護立法を以て彼等を誘ふ時に、彼等はそれが保守黨なるが故に反對すると言ふことはなかつた。シドニー・ウエッブがその『勞働組合史』に於て論ずるやうに、一八七四年の總選擧に於ける自由黨の敗北の如きは、全く保守黨の手によつて勞働者階級の苦痛とする法制の改廢を望んだが爲めである。(山川、荒畑共譯『勞働組合運動史』三〇七—八頁)。

『一八七四年の選擧に於ける、意外なる自由黨の敗北は、非國教主義者の感情を害した爲に、彼等の棄權した事よりも、寧ろ職工組合主義者の强烈なる敵意によるものではなかつたかと言ふ事は、英國政治家にとつての問題であらう。時は恰も、職工組合主義の高潮に達した時期であつた。當時事業は好景氣で、何れの職工團體でも會員が激增して居つた。坑夫、農業勞働者殊に纖維業の職工が續々組合に群つたことは、一八三四年の躍進を想起せしめるものがあつた。一八七四年の總選擧前に開かれた。シェフィールドに於ける職工組合大會は二十

五萬の炭坑夫、同數の綿絲工、十萬の農業勞働者を包含する百十二萬の組合職工を代表すと稱せられた。この大會の議事錄は、當時の自由黨の領袖等の勞働者の要求に對する無理解が、如何に猛烈なる憤りを發せしめたかを示してゐる。……斯やうに自由黨が、新有權者を冷遇して居る一方に、保守黨候補者は穩顏を以て職工の要求を聽き、惡法律の廢止を誓約して居つた。」

然しながら大體の傾向から察する時、英國の勞働者階級は職業上、宗教上その他の點からして大體に於て自由黨の信奉者であると言つて大過ない。宗教上の關係から見ると、非國教徒は多く自由黨員であるといふ歷史的因由もある。但しウエスレーアンたるメソヂスト教徒は二派に分れてゐたが、その他の非國教徒はイングランドに於てもウエールスに於ても大體自由黨に屬してゐた。職業上の關係からすると企業家、商人、自由職業者の大部分は自由黨に屬してゐるが、勞働者階級の大半も之れに屬するのである。然しながら、地理的關係から云ふと南部は保守黨の根據地で北部は自由黨の勢力が多いのであるが、リバプールを始めランカツシヤアの木綿工業地は從來保守黨の根據地とされてゐるが如き例外もある。又バアーミンガム地方が、チヤンバレーンが出でた後、彼の個人的勢力に支配されて、彼の赴くまゝなつたと言ふが如き個人的事情の存在も考慮に入れる必要があらう。

最後に議會に於ける勞働者代表が既成政黨と如何なる關係を結んだかに就て一言して見たい。勞働者の間に既成政黨を離れて自己の代表者を議會に送らんとする企圖は、一八六九年より一八七〇年に至る間の選擧の場合に行はれ、かの『ジユンタ』の一人なるヂヨーヂ・オツヂヤーが立候補を試みて大いに人氣を博した事がある。然しながら、直接の選擧運動が勞働組合の援助を得るに至つたのは、一八七四年の大會に於てゞあつて、その年の總選擧には十三人の候補者を出したが、多く保守黨候補者の利するところとなり、僅かに全國坑夫組合の領袖アレキサンダー・マクドナルドとトマス・バアトの二人が下院最初の勞働議員となる事が出來た。これは、この二人が自由黨と款を通じ、自由黨も亦彼等に讓步して自由黨への投票が彼等に向つて投ぜられたからである。バアトは心髓から自由主義者であつて、議會に在つては自由黨に終始し、一八九二年から九五年の自由黨內閣には商務院次官として働き、一九〇六年には Privy Counceler となつた位である。マクドナルドは不幸にして一八八一年に死したので、彼の院內に於ける活動は目覺しいものがあつたが、その後の變化を見る事が出來なかつた。一八八〇年の選擧に於ては、ブロードハーストが同じ自由黨との提携によ

つて新に議席を得た。彼は既に長く勞働組合大會の對議會政策の組織に潜心鞅掌して來た人であつた。一八八五年の選擧に於ては十一人の勞働議員がウエストミンスターに選られた。それ以後一九〇〇年の選擧に至る迄數回の選擧があつたが、勞働議員の數は一進一退であつた。彼等の多くは、グラッドストーンの追隨者であつて、何等獨立の政綱と方案とを有しなかつた。彼等は寔ひグュットラーの說明が肯綮に當れる如く、勞働者階級の代表者と言はれるより、寧ろ彼等が直接に代表せる組合の利益代表者たるに過ぎなかつたのである。(G. Güttler, Die englische Arbeiterpartei, S.57)。然かるに、この時代に於てもこの勞働議員の中に、三人の注目すべき人物があつた。彼等に於て始めて、一八八〇年以後英國の社會を風靡した『社會主義の復活』が齎らせる勞働運動の新方向が示されたのである。その一人こそかのケーア・ハアデイである。彼は一八八七年の補缺選擧に於て、始めて獨立勞働候補として、自由及び保守兩黨の候補者と爭つたのであるが、僅かに六一九票しか得られなかつた。彼はその後同志のカンニングエーム、グレーアムと協同してスコツトランドに獨立勞働黨を組織した。一八九二年の選擧に於ては、彼は首尾よく當選すると共に、同時にジョン・バーンス及びジー・エッチ・ウイルソン等二人の獨立勞働議員と議會に於て相見るを得たのであつた。志操堅固なるケーア、ハアデイ一人にして既に一黨の重さを爲したのであるが、彼は翌年一八九三年遂に獨立勞働黨の成立に成功したのである。一八九五年の選擧に於て同黨は二十四人の候補者を出したが、不幸にして一人の當選者もなく、彼ハーデイー自身すら落選の運命に逢つた。ブルヂョア議會に於ける獨立勞働議員の前途には未だ多くの難關の横るを見る。然しながら、一方この獨立勞働黨の不撓不屈の運動と共に、他方勞働組合大會自身の政治的覺醒とによつて、遂に一八九八年に勞働組合大會、獨立勞働黨、フエビアン協會、社會民主同盟等の勞働組合、消費組合並に社會主義團體の聯合によつて勞働代表委員會(Labour Representation Committee)なるものを作り上げるに至つたのである。この委員會の最初の委員に選ばれたものが、獨立勞働黨に於ては、ケーア・ハーデイと今日の勞働黨の總理たるラムゼー・マクドナルドであつた。フエビアン協會を代表して出たものが、かのバーナアド・ショウと同協會史の著者たるピースとであつた。因に又社會民主同盟はその後この委員會より脫退するに至つたのであるが、この時委員として出でたものはエッチ・クエルチとエッチ・アール・テーラーの二人であつた。この勞働代表委員會がやがて一九〇六年の選擧に於ける大勝の後、今日の勞働黨と成

長したものであることは人の普く知る所であらう。勞働黨がその後、他の二大政黨と如何なる關係を持し、如何にそれ自身の發達を遂げたかは、勞働黨自身の歴史として取扱ふに適し、最早豫定の頁數を超加しつゝある本文の企て及ばざる所である。又英國諸政黨の內面的進化を論究する本文としては、同黨の發生經過の一斑を示すを以て足りるであらう。終りに一八六六年即ち始めて勞働階級に向つて選擧權が擴張せられたる年以後最近の歐洲戰爭前に至る迄の下院議員の黨派別に關する表を揭げて、讀者の參考に供しよう。

略字（自）＝自由黨
（保）＝保守黨
（愛）＝愛蘭國民黨
（自統）＝自由統一黨
（自勞）＝自由勞働議員
（勞働）＝勞働黨
（統一）＝統一黨

1868		393（自）	265（保）	
1974	303	47（自）（勞 2） 53（愛）	350（〃）	
1880	419	357（自）（勞 3） 62（愛）	233（〃）	
1885	413	331（自）（勞 11） 82（愛）	217（〃）	
1886	272	188（自）（勞 10） 84（愛）	314（〃） 81（自統）	395
1892	354	273（自）（勞 15）（獨勞 3） 81（愛）	268（保） 47（自統）	315
1895	259	177（自）（勞 12） 82（愛）	340（保） 71（自統）	411
1900	268	176（自） 8（自勞） 2（勞代） 82（愛）	384（保） 68（自統）	402
1906	513	376（自） 29（勞代） 25（自勞） 8（愛）	130（保） 27（自統）	157
1910（一月）	397	275（自） 40（自働） 82（愛）	273（統一）	
1910（十二月）		272（自） 42（勞働） 82（愛）	273（統一）	
1912		264（自） 40（勞働） 84（愛）	282（統一）	

勞農露西亞の政黨政治の趨勢

鈴木茂三郎

一、

嚴密にいふなら過去現在の露西亞に政黨政治なるものは無い。政黨政治はブルジョア・デモクラシーの爛れた最後の政治形態だとすれば、一九一七年の三月革命から十一月革命に至る歷史的行程の瞬間に、それらしいものを認め得られる。

しかし政黨又は政治團體はもとよりあつた。一八七〇年代にさかのぼるとゼムリヤー・イ・ウオーリヤ黨、國民自由黨、チョールヌイ・ペレゼール黨などは革命的情熱に燃えた小ひさいながら政黨である。一八九〇年代に至ると露國社會民主勞働黨、ブンド黨、露國社會革命黨、レット人、ウクライナ、リスト＝アの社會民主黨と云つたやうな非合法的政黨が專制治下の地殼を破つて出現したのであるが、明るみへ躍り出でたのは一九〇五年の十月詔書の前後からである。立憲民主黨、民主革改黨、帝王黨、十月黨、無政府黨、マキシマリスト黨、國民社會黨、その他民族黨は十月詔書によつて生れたものである。

その他なほあるが、立憲民主黨(カデー)、社會革命黨(エス・エル)、社會民主勞働黨は所謂三大政黨であつて、後に國民自由黨と看板を塗り換えたカ・デー黨は、創設者のストルーベが彼の主宰する「自由」に「人民の參政」を高潮したやうに憲政運動から發達したものである。マクラコーフ、ミュリュコフ、ネクラーソフなどが首領株としては知れてゐる。

エス・エル黨とそして首領のケレンスキー、チェルノフ、ルサフ、カムコーフ、などのことは多く知られてゐるが、プレハーノフから「反革命黨」の榮冠をいただき、そしてまさしくその榮譽を恥しめなかつたエス・エル黨はカ・デー黨のブルジョア自由主義の毒盃をあげて、勞働者と農民に叛旗を翻したことにより、腐つた大木が倒れたよりも雜作なく、大政黨の終焉を告げ

たのであるが、テロリストの業團民意黨から政黨化しそして農民の間に擴つたものであるから、カ・デー黨から毒酒を呑まされるまでは、無産階級の畑地に相當深い根を下ろしてゐたものである。

ニス・エル黨に「反革命黨」の紫衣をかむせたプレハーノフは、レニンと共に社會民主勞働黨の領袖であり、黨内にあつても彼はデツチやオートドクスらと統一派を率ひてレニンの向ふ岸に起つてゐたが、彼が芬蘭に客死してから、クレムリン宮殿前のエツフエル塔型の記念塔に、マルクス、エンゲルスとならんで彼の名は金洲の文字にきざまれたのである。言ふまでもなくプレーハノフは社會民主勞働黨の創設者であつて、一八八三年に彼はジエネバに勞働解放團をつくり、勞働解放團は一八九八年國内のミンスクに社會民主勞働黨を形成し、一九〇三年のロンドンの第二回大會において、レニンのボルセヰキとマールトフ、マルトヰノフらのメンセヰキの二派に分裂したのであつた。

二、

政黨はずつと早くからあつたが、議會政治は遲れて行はれたのである。議會政治のブルジョアデモクラシーの形は整つても、帝政露國に於ては政黨政治は、遂ひに出現しなかつた。一八六一年の農奴解放、一八六四年の地方自治制の制定、一八八一年のローリス・メリコフの憲法草案の作製が、諸政黨の擡頭、憲政運動の起る豫備的條件にはなつたが、一九〇五年の日露戰敗を動因とする革命によつて、憲法制定を約束する十月詔書が公布され、翌年三月には始めて國會議員の選擧を行ひそして第一回の議會が召集されたのである。

しかしこの議會の開設は、國民の嵐のやうに荒れる憤激を、當座鎭めやうとする頓服劑と、專制を仰向ひて見開ひた國民の眼に、眼潰しの礫として與へられたものだつたのである。

第一議會は全人口の一割五分にしかあたらない貴族階級から、全議員の三割六分五厘といふ多くの議席を贏ち得るやうな選擧上のからくりが構えてあつたに拘らず、ブルジョアリベラリストの諸政黨に議席の絶對過半數を領有されて、七十二日で解散し、第二議會は百四日で解散となつた。社會民主黨は第二回の選擧にあたつて始めて選擧權を行使した。第三の選擧には「法律に忠實なる議會」をつくりあげるために、リベラリスト、農民、勞働者の選出を、困難であるやうにお手盛の選擧法の改正をなして豫め備へられたのである。

第三議會は、そしてその後は政府の思ふ壺にはまつて法律に

忠實なる議會として開かれた。進歩的政黨が無慘に叩きのめされたことは勿論であるが、のちに三月革命後の臨時内閣に列した十月黨のヴエゴードネフ、テレシチエンコ、首領のグチコフ、立憲民主黨のミリウコフ、ネクラソス、シンガーレフ或はロヂチエフなどは、ブルジョアジーの殘壘を固めた左翼派では鳴らしたところの闘將だつたのである。

そのやうに貴族と官僚は、それらの組織する政府の、法律に忠實なる議會を、完全に腰のまはりに引きつけて、ブルジョアデモクラシーと革命運動の濤搖きを參觀する特等席を確保したのであつた。ドゥブローヴインの率ひる猶太人殺戮を事とするチョールナヤ・ソートニヤの加はる帝王黨、その他にあまり有力ならざる政府黨はあつたが、政府を構成せしめる必要はなかつた。彼等にとつては議會は國民に對する顚服劑として既に樂有効あり、たゞ眼潰しとしての必要以上には不必要だつたからである。そしてその間にブルジョジーの勢力が根を張り、それに幾倍して議席から放逐された左翼諸黨派の勢力が、議會の外に向つて扇のやうな翼を力一ぱいにひろげて行つたのである。

三、

一九一七年の三月革命から十一月革命に至る期間はブルジョア・デモクラシーの展開であつた。形の上にのみ現れたブルジョア政治形態を、貴族と官僚の手から奪取し、ブルジョア獨裁政治を完成したものである。立憲民主黨と大地主と資本家の加擔する十月黨の協力により、そしてケレンスキーに政權が移動してからは、エス・エル黨を躍らせて、はじめて政黨政治が行はれたのであるが、しかしそれは最初から急迫した情勢のうちに發展したものである。

政黨政治の行はれる間の初期に於ては、古いものと新らしいもの、都會と農村、保護關稅と自由政策、と云つたやうな漠然とした政治爭闘が演じられるが、ブルジョア・デモクラシーの翼の下にはぐくまれ無產階級政黨が力を加へ來り、ブルジョアデモクラシーを脅威するに及んでは、政黨は階級的對立に分裂する。政治的闘爭は議會を爆破せねばやまぬ。政治形態を覆沒する態の、絕對的な急迫した情勢を、もち來たらすのである。

かかる情勢のもとに十一月革命を承認するためにモスクワに召集した憲法議會は、エス・エル黨が多數を占め、そして十一月革命を承認しなかつたにも拘らず、ボリセウヰキと合同社會民主黨國際派のトロツキー、ルナチヤルスキー、バザーロフと、エス・エル黨の左翼は退場し、その瞬間に事實上憲法議會は消滅し、權力はサウエートに把握された。

十一月革命の前後、有名無名の政黨がふるひ起つた。キーエフに起つた進歩國民團、地主同盟、共和中央黨、或は十月黨の解脱したロジヤンコ、グチコーフなどの率ひる自由共和黨、勞働黨と國民社會黨の合同した勞働國民社會黨、その他共和民主黨、急進民主黨、などがある。どれも急進ブルジョアの徒黨で、どれも孑孑の如くに死滅して了つた。

前にも云つたやうに無產階級政黨の爭鬪は、共產黨(ボルセウヰキ)によると、議會制度を暴破することである。そして新たなる鬪爭的機關としての政治形態サウエート制度を打ちたてることである。ブルジョア政治に於て全國民の參政といふ假面をかむる必要から、反對黨の存在を議會の內部に認めるやうなことは、革命の機關車たるサウエートに於ては絕對に不必要である。そして飽くまでも無產階級獨裁によつて突張らふといふのであるから、議會制度のやうに兩岸に嚙み合ふ兩黨の對立といふことは起らない。それ故に共產黨は政治上の權力を持たない。又必要としない。一切の權力はサウエートに集中されてある。從つて帝政、共和の露國と違つて勞農の露國には、政黨政治など有り得ないことである。

帝政黨、ブルジョア・デモクツトはサウエート政治の埒外へ完全に放り出されたのであるが、共產黨に云はせると無產階級に屬し、即ちサウエート被選舉權を持ちながら、無產階級の裏切者なるエスエ・ル黨は、メンセウヰキの徒が、サウエートの內部に幾分燻(くすぶ)つてゐるが、しかしそれは甚だしく見すぼらしい殘骸である。

第九回サウエート大會のとき共產黨員千五百廿二人に對してエス・エル黨は僅かに二人だつた。二人のうちの一人が、議席から何にか反對意見を持ち出さうとしたら、「オイ兄弟、怜悧な奴は今頃はみんなボリセウヰキになつてゐるよ」と浴びせかけたので、オペラ座の金泥の壁がおつこちるほどに、滿場は動搖めいたものである。この外マキシマリスト、トルストイ宗の無政府黨が何程かはあるが、云ふには足りないものである。

フランス第三共和國と初期社會黨の議會運動

小牧近江

フランスは一八四八年以來普選を實施してゐる。共和國で、世界中での民主國だと自稱してゐるが、どうもその意味が徹底してゐない。共和國の危機といふことはかのブランジエ將軍の事件以後なん遍も繰返し繰返へされた。そして、最も皮肉なことには、このあつてもなくてもよささうな共和國擁護の叫びは一度ならず初期社會黨議員によつてあげられたのである。かくして、シヤルル・デユプイ內閣がもろくも倒れたのである。時は一八九三年十一月廿一日。首相シヤルル・デユプイの極端な反社會主義政策の聲明が終るや、ジヨレスとミルランの猛烈な質問戰に移つた。ジヨレスは、政府はその共和主義的政策を回避することなくして、社會主義を撲滅することの不可能なる理由を述べた。彼はいはく、「政府は無權力なる迫害を以て民衆を高壓する間に、吾人は浩々と、政府が提出し能はざりし所の幾多の社會政策を提出するであらう。政府が好んで共和主義的政策を忌避せんとするならば、吾人社會主義者は進んでそれを實行するのみであると」。この質問戰があつて四日目に時の內閣が瓦解したのだといふ。

この點で、社會黨員と左翼共和黨員とは昔からの古なじみである。そして、それが、將來統一ある院內社會黨をつくる上に幾多の曲折を生んでゐる。フランスの社會黨が院內で一時、相當の勢力を占めることの出來たのも、一面からいへば、自由主義の色彩であるこの左傾派の共和主義者の折合であつたといへる。政黨一日にしてならずで、社會主義者がその足場を當初ブルジョアの最左翼においたことは止むを得なかつた現象だつたとも思へる。が、結局それと分裂することになつたのであるが、それは後で述べる。

當時のブルジョア最左翼といふのが、今の社會急進黨である。社會急進黨もカイヨーなどの失脚で、今日では大部衰微したが、とにかくこの黨のさういふ運命にたちいたつたのは例の政教分離がものになり行詰つたことに基因もするが、社會黨の勢力が漸次旺んになつて來たことにもよる。これは一面、自由主義のさうした運命を物語るもので、中間勢力のどうすることの出來ない行詰りであらう。

內務省の調べによる、一九一九年十一月十六日の總選擧の結果と、一九一四年のそれとを比較して見ると、

	一九一四年	一九一九年	增	減
保守黨	六五	一一一	四六	—
進步黨	五〇	一二五	七五	—
左翼共和黨	九六	一三九	四三	—
急進並急進社會黨	二四九	一四七	—	一〇二
共和社會黨	三七	三四	—	三
統一社會黨並分裂派	一〇五	七〇	—	三五
計	六〇二	六二六	—	—

それで見ると、保守黨の勢力はまた偉らいものである。これは戰後の反動思想のさうした機運だつたかも知れぬが、フランスの保守派なるものも今日からいへば、必ずしも昔でいつたところの嚴密の意味での王統主義者、舊貴族地主階級、カトリックやレジチミストの總稱ではない。今日では昔の純眞貴族階級なるものが、或は結婚政策上からその他の現象でフランスとはいはずアメリカまでもの共和國の大ブルジョア階級であるところの鐵王、乃至は砂糖王と結合してゐるのである。從つて、かつて、十八世紀の末葉に於ける特權階級聯合――貴族、僧侶對ブルジョア、町人の對立が、十九世紀の末葉にいたり、それが工業革命の結果、大ブルジョア、貴族聯合對中產及び無產階級聯合に代つたわけであつて、その點からいへば保守派なるものは、むしろブルジョアジイに通ずるものと見られる。

かくの如く、舊フランスである保守階級は、一方財閥階級に、他方ブルジョア的リベラリズムに屈してゐるのであるが、この間にあつて、それにもこれにも屬しやうとはしない反動派がある。それこそいはゆる保守派ではなくて、オタンチツクな反動派なのである。そのグループはシャルル・モオラスと例のアクション・フランセイズ紙にたてこもつてゐる。フランスをして政治的デカダンスに導いたものは何人であるか、といふ問に對して、モオラスは答へる。「それはデモクラシイである」と。しからばその、デカダンスの斷末魔を未然に防ぐものは何んであるか、といふことに對して、又もモオラスは答へる。「それは力强

い權力の出現である。即ち王政である」。それによつて、選擧といふ奸策がなくなるだらう。それによつて、財閥といふ潜勢力がかき失せるだらう。それによつて、階級が調和され、社會の平和が保たれるといふのだ。

ジョルジユ・ギイーグランはかつて、「廿世紀のフランスは十八世紀のフランス人によつて支配されてる」といつたことがある。十八世紀のフランス人とは取りも直さずクレマンソーのことである。クレマンソーはヴオルテールであり、時として、デイドロであり、また、兵卒のない大將ともいはれる。今はポアンカレーの時代ではあるが、とにかくかういふ氣合も一つの政治層をなして來たのである。要するに、今日の政界は保守派なるものが昔とは異つて、大ブルジョア、財閥であるところのブロツク・ナショナルと代り、之に對するに中産並に無產階級の大同團結である左翼聯合、ブロツク・デ・ゴオシユが對立してるといふ形勢なのである。そして、今のところ、その勢力が漸く衰微期に入つたといふものの、とにもかくにも、右翼聯合のブロツク・ナショナル天下である。そうした機運がとにもかくにもミルランを大統領にまで祭上げてしまつた。

フランスの社會黨畑からブルジョア派にくら替したものに、ブリアンあり、ヴイヴイアニあり、ステフアン・ピションまでもあるが、このミルラン程、大きい渦を卷いたものがない。尤も、その當時の社會黨といふものは、今のそれではない。日本でいふならば、當時の自由黨だといふ人もあるが、そういへば、そんなものでもあつたらう。

さて、どういふ風にして、その自由黨のやうな社會黨が新らしい政黨として擡頭したらうか。それが、日本の現狀に照し合して、ちよつと興味のあるところである。フランスの院内社會黨の成立を記する段になると勢、社會黨そのものの統一された話から初めねばならぬが、そうなると、話が社會主義史になりそうだから、ここでは非常に斷片的ではあるが、議會を中心とした社會黨のことについて述べたい。

古い話からすると、フランスに勞働黨が出來かけたのは、一八七九年頃である。それが、一八八二年のサン・テチエンヌ大會で分裂して、ポシビリスト派とゲデイスト派とに二分し、そこへ亡命歸りのブランキストが入込んで來て、中央革命委員會なるものをつくつた。で、一八八〇年から八二年にかけて、この三の巴がてんでに勞働者、闘士の略奪ごつこをなし、それによつて、お互にプロレタリアをこつちのものにしやうとした。が、この三つの社會主義團體のプログラムといふものは、そんな具合だつたもんで、どちらかといへば、極めて、ドクマチツ

クな、あまりにセクテールなもんだつたことはいふまでもない。

これをつまんでいつて見れば、勞働黨の組織を科學的なマルキズムで行かうとする派と、最少限度の要求で行かうとする派とであつた。前者はジュル・ゲードの草案であり、後にいたり、エンゲルスからベルンスタインに宛た手紙によれば、マルクス自身もそれに手を入れたといふことである。後者の言ひ分によれば、社會主義は最後の目的なのだから、勞働階級が、直接當面の要求を問題にする最少限度のプログラムで先づ行かうとするのである。

それでは、これでは互に決着がつかない。それではいけないといふので、一八八〇年共和社會主義聯合なるものが出來た。主として、パリ・コムミユンの殘黨と、新顔では前外相で日本出兵論者で有名なステフアン・ピションもゐた。外相ピションといへば、これは餘談だが、いつか議會で、社會黨議員から「外相ピションはクレマンソーの從僕だ」と浴びせられ、傍に居られた議會見物の安達謙三氏、「フランスの野次もずゐぶん無作法だね」。が、このアリアンス・ソシアリスト・レプユブリケエヌの生命も一年そこらかの極めて短命なものだつた。ところで、その最少限度のプログラムといふのがどんなものかどいふと、

言論、集會、結社の自由
宗教に關する豫算の廢止
兵役年限の短縮、常備軍をミリス制にすること
元老院の廢止、
勞働時間の短縮（何時間とも明確にせず）
老人並に勞働廢人に對する年金法
其他

この聯合が解體の後は、ある者は改進黨、またある者は勞働黨に入つたが、一方ポシビリスト、他方ゲデイストの內訌が漸く劇しくなつて、たうとう一八八二年のサン・テチエンヌ大會で、ブルースとゲードはたもとを分つまでに成りいたつた。

この間、一八八一年の總選擧で、かつてマルセイユのコムミユンで三年の懲役になつたことのあるクロヴイス・ユグーが主義者として初めて國會に當選した。翌年の部分選擧で、帝政時代の反逆者として民主的なガムボンが更に國會に送られた。彼は常備軍廢止案を議會に提出してゐるが、其理由とする處は、「常備軍は公の自由を危くするものなること」、「國民を侮辱するものであること」、「出產率を少くし、國民精神の不振の原因たること」「國家的破産の原因となること」といふのだつた。

しかしながら、社會主義者が、議會での一つのまとまつた力となつたのは一八八五年の總選擧の時からである。この度は二つのリストが出來てて、それに從つて主義者は殆んど全國に亘つて當選した。そのリストの一は革命社會主義合同であり、他の一は社會主義自由聯合である。革命社會主義合同はジユル・ヴアレスの主宰する「民の聲」に支持應援されたが、主としてゲデイスト、ブランキストや獨立社會黨員が候補に立つた社會主義自由聯合には改進黨並に獨立社會黨の新顔が見えた。これらの選出は當選したものの院内で未だ確とした團結が出來てなかつたのであるが、アンチド・ボエールの發起で、いよいよ院内社會黨をつくる運びまでなつたが、その時の最初の名は勞働團といふのであつた。これが將來院內社會主義團となるべき前身であるのだ。インターナショナルや、パリ・コムミユンで知られたカメリナなどもこのグループに屬したが、そのうちにミルランなども割込んで來た。同グループの聲明といふものは大體下の如きものであつたのである。

　個人の自由、市町村の自治
　各國民の世界的聯合
　死刑の廢止
　婦人の解放
　政教分離
　言論、集會、結社の自由等

議會の運動が一般につくと、これを對立して、社會政策協會といつたものが出來た。それが一八八五年のことである。その協會は、ブノア・マンロの主宰する「社會主義」誌の發案で生れたものであるが、どういふことがこの協會の目的であつたかといと、即時實行の出來る社會政策を考究することを目的とする研究會であり、實行運動や政治運動の團體ではない。といふ看板だつた。しかし、この協會の自治的生命もやつと二三年のところで、その後「社會主義」誌に合體した。そして、それが前身となつて獨立社會黨といふのが生れた。それが一八九九年のことである。ブノア・マロンの他にユレジユ・ド・フランスに入つたジヨルジユ・ルナールなどもこの協會に立籠つたのである。どちらかといへば社會主義でもなしフオルミズムの臭氣でいつぱいだつたのである。

　現大統領ミルランが社會主義の中に割込んで來たのは、その頃からのことである。ミルランはどつちかといへばラデカリストだつたのだが、それがだんだん社會黨の方に接近して來た。そして、僅か三ケ月しか存在しなかつたさうだが、「聲」を創刊した。それが一八八九年のことである。そして、一八九一年に

なつて、ミルランはこん度こそ本物に社會黨に入つたのである。同時に、ラ・プチト・レピブリック。フランセイズ紙の主幹となつたのであるが、それが後にいたつて、ラ・プチット・レピュブリツクと改題されフランス社會主義史とは切つても離されぬ役割を演じたのである同紙には、ジョオレス、ルネ・ヴイヴイアニ、ゲード、ヴアイアン、ブルースといつた多種多様の主義者が論客となつた。

議會に勞働團が出來、院外に社會政策協會が出來、更らに社會主義新聞まで出來たが、その頃の組合運動がどうであつたかといへば、到るところの工業地にブールス・デュ・トラブアユが創立し主義運動は青年、學生、ブルジョアの間にまで深く、廣く浸潤して行つた。そして、それが一八九三年の總選擧には非常な成績を擧げる原動力となつたのである。その年、フランス勞働黨ではジュル・ゲードを、ブランキストはヴアイアンを、アルマニスト（一八九〇年十月のシヤテルロー大會でポシビリストは分離し、アルマン等は別に革命社會主義勞働黨をつくつた）ドジカント、グルシエを、獨立社會黨からはミルラン、ルネ・ヴイヴイアニ等を選出した。マルセル・サムバは一八九一年ブランキスト派に加盟したが、其の選擧では獨立社會黨員として當選した。これより先き、ジャン・ジョレスは同年一月二十二日の部分選擧でタルンから再選してゐる。

これらの選出はミルランの發案で、初めて社會主義の名ある院内社會主義團といふ合同團をつくつたが、多數の急進社會黨員、ブランジストまでもがこれに流れ込んだ。

かくして、徐々と社會主義者の大同團結の機運に進んだのであるが、それが一層明白な機會をつくるにいたつたのは、一八九六年五月三十日レストオラン・ド・ラ・ボルトドで催された宴會であつた。これは數多の社會主義的の政治運動の成功を祝ふための集會であつて、この祝勝會こそフランスの社會運動の記錄から忘るることの出來ないサン・マンデの會であり、その席上でなしたところのミルランの演説は取りも直さず有名なサン・マンデのプログラムなのである。この宴會にはアルマニストを除くの他凡ての社會主義團體がこれに參加し、院内社會主義團は資本主義制度の治下に於ても當面の改良政策の實現を支持貫徹せしむること、無産階級の政權掌握による資本主義の倒滅を申合せた。

が、これは表面上の團結であつて、社會主義者の間にはもうこの時からただならぬ暗雲が漂つてゐた。それは、初めはブルジョア政黨の最左翼と提携せんとする者と、これを非とするものと、一切の豫算を忌避せんとするものとせぬものと、次ぎ

にはブルジョア内閣に入閣することの可とするものと非とする者との反目であつた。當時フランスはドレフュス事件の眞最中にあり今日のやうな最も反動時代であつた。そこへワルデツク・ルソー内閣が出來て、ミルランの入閣說が傳はつた。ここに於て紛糾が更に紛糾となり遂にこの問題が世界の社會運動に一大波紋を畫したのである。社會黨たるミルランがブルジョア内閣に個人として入閣するのが已に問題となつた許りでなく、現に同内閣には、かつてはパリ・コムミユンの虐殺者、下手人たるガリフエ將軍が入閣してゐるのであつた。

この問題は可とするものと、非とするものとの非常な爭ひとなり、遂ひに一九〇四年のアムステルダムの國際社會主義大會の大問題となり同大會で片やジユル・ゲード、片やジヤン・ジョレスの大論戰となつたが、ヴアンデルヴエルドやアドレルの中庸案があつたにも不拘、結局階級鬪爭を無視せんとする改良主義政策を徹底的に排除するの案が可決しジョレスの顏がつぶされた。ゲードはこの大會で「ジョレスは危機に瀕してもない共和國を救もし得なかつた」とやりつけた。この大會の結果は貴重の二票で決せられてゐる。それは唯一の日本人片山潜の二票で、これが中庸案も何もかにも不成立にをはらして、階級鬪爭派のものとした。

その結果フランスの社會主義運動は、在來のブルジョア左翼派との交渉をさけ、方向轉換を左にするやうになつたのであるが、それが、フランスの院内社會黨は伸びるところまで伸び得なかつた原因といひ、また、それで社會黨を危機から救つたのだと後々まで互に理屈をこねつけてゐる。片山潜の一票はとにかく不思議に一國の運動を支配したものである。

フランスの社會主義諸團體には、その頃、ポシビリスト（ブルシスト）、アルマニスト、獨立派等の團結であるパルチ・ソシアリスト・フランセと、ゲデイスト、ブランキスト等の合同であるパルチ・ソシアリスト・ド・フランスと大體二つのグループに分れてゐたのだが、アムステルダム後、ジョレスの無條件的妥協でやつと統一社會黨が成立し、一九一四年の總選擧には一〇五名の院内團をつくることが出來たのである。それが一九一九年の選擧で七〇名に減少し、今まではその七〇名の内共産主義者わづか十一名かそこらである。

一昨年亡くなつて社會葬になつたジユル・ゲードは、クレマンソーはヴオルエールならゲードはカルヴアンとまでいはれた老主義者であつたが、あんなにまでセクテールなのであつたのか一九一四年の國防内閣でまんまと、無任所大臣になつてゐる。そして、妥協派のジヤン・ジョンスは愛國主義者と稱する一凶漢に狙擊された。不思議な運命といはざるを得ない。

今日の社會黨はずつと減つてゐる。そして、又もや、ブルジョアの最左翼政黨と左翼合同をつくらうとしてゐる、つくつてゐる。要するに歷史は幾度も過去をくり返すものと見られる。

普選が實施されると否とにかかわらず、日本のミルラン、日本のブリアンが、出現すると否とに不拘日本の無産階級の議會運動も何らかの形式になつて早晚現はれるだらう。さて、それがどういふ風に運轉して行くものだらうかなど、これをものしながら、いろいろと考へさせられたのである。



新吉原物語

村松梢風

一

慶長十七年、庄司甚右衛門といふ者が、御府内に於て遊女町一箇所取立て度旨幕府へ願ひ出た。甚右衛門は北條家の浪人で、其の頃駿府の旅宿の主廿五人と相談の上其の家族奉公人等を引き伴れて關東へ來て、御府外荒井宿に留まつて遊女屋を營んでゐた。大井神社の森の邊に軒を並べ、家々の紺暖簾の端に鈴を付けた。客が暖簾を潜つて這入る時にちりんちりんと鈴が鳴るのが一種の情調を添へてゐた。それから旅人は其の場所を鈴ケ森と呼び始めた。

其の頃迄江戸には纏つた遊女町といふものが無かつた。糀町に十軒、鎌倉河岸に十四五軒、元大橋内に十四五軒、京橋に若干と云つた具合に府内に散在して遊女屋があつた。が遊女屋の組織も極めて單純で、別段それに對する取締り法といふやうなものも設けて無かつた。で、甚右衛門の願書といふのがすべてさういふ處へ着眼してある。

一、遊女を買遊び候者、遊興好色に耽り、分限を不辨、家職を忘れ、不斷傾城屋へ入込、長居致候。傾城屋の儀は、其者より金銀だに申請候へば、幾日にても留置馳走致候。然る間自ら主人親方へ奉公を缺き、剩え引負押領致候事、傾城屋共金銀をむさぼり幾日も留置候故と存候。一箇所に被成下候はゞ、只今迄有來り候傾城屋共一所に集り、吟味仕、一日一夜の外長留致申間敷候事。

一、人を拘引致候者之儀前々より堅く御禁制被遊候へども、

御手に入申間敷奉存候。此度願ひの通仰付被下置候はゞ、此儀別而念入、何者にても、不屆者傾城町を徘徊致候はゞ急度御訴訟可申上候事。

一、御公儀様廣大の御慈悲を以て願の通被爲仰下置候はゞ、有難奉存候、以上。

此の運動は翌年に至つて成功した。慶長十八年、即ち元和元年、幕府では甚右衞門を評定所に呼び出し、老中本多佐渡守出座の上、遊女町取立ての事を許可し、日本橋葺屋町に於て二丁四方の地を下賜された。其の時公儀から甚右衞門へ仰渡された る五箇條

一、傾城町の外、傾城商賣致すべからず。並に傾城町圍の外、何方より雇來り候共、先々へ傾城を遣候事、向後一切停止たるべき事。

一、傾城買遊び候者、一日一夜より長逗留致間敷事。

一、傾城之衣類、總縫金銀の摺り箔等一切着せ申間敷事、何地にても、紺地染用ひ可申事、

一、傾城町家作普請等美麗に不可致、町役は江戸の町格別之通、急度相勤可申事、

一、武士町人體の者に不限、出所慥かならず、不審の者徘徊致候はゞ、住所吟味致、彌々以て不審に相見え候はゞ、奉行所へ可訴出事。

甚右衞門は總名主を仰付られた。直ぐ樣葭を切り開いて工事に着手した。元和四年に至つて其の工事は落成した。其の廓を最初は葭原と云つたが後に吉原と改めた。町はすべてゞ五ケ町あつた。

元吉原時代の遊興は可成り厳格なものだつた。客は多く馬に乘つて白晝通つて行つた。先づ揚屋へ着くと、揚屋からは遊女屋へさし紙といふ物を送つた。それは

今日客御座候に付、方々の内奥州と申女郎雇申候、此客元々被仰出候御法度の衆には無御座、慥かなる仁に御座候、若し横合より御法度の客なりと申す者御座候はゞ、我等何方迄も罷出申譯可仕候、爲後日仍如件。

月　日　　　家　主印

　　　　　　月行事印

吉原は果して非常な繁昌を見た。最高級の遊女を太夫と稱した。有名な太夫が茶の會を催す時など、大名達が誘ひ合つて出掛けて行つた。遊女を廓外へ出す事は御法度だつたが、評定所へ茶の給仕に太夫を召す事だけは例外になつてゐて、其の慣例は寛永年中迄續いた。

葺屋町時代（元吉原）の挿話として傳へられてゐる話を一つ

二つ記して置く。其の頃廓內に泉風呂といふ風呂屋があつたが、其家の下男の久助といふ男が傴僂で、それがいつも番臺へ座つて長煙管で煙草を吸つてゐた。其の恰好が『及』といふ字を聯想せしめた。で「久ではなく及だよ」と云つたのが元で、それから番臺へ座つてゐる者の事を誰彼無しに「及」と云ひ初めて、つひには濁つてぎゆうと呼ぶやうになつてしまつた。妓夫と書いてぎゆうと讀ませるのは後世の當て字である。傴僂が長煙管で脂下つてゐる形から『及』の字を聯想した處は、當時の江戸人の感覺が馬鹿にできないことを語つてゐる。

慶長の頃迄は、女でも駕籠へ乘る者は稀れで、大ていは人に負はれて歩いた。負ふ者の脊には負木といふ物があつて、それへ足をかけて負ぶはれてゐるのだつた。だから、廓の傾城が揚屋の行き戻りにも雨の日なぞは斯うして負ぶはれて往き來した。其の上雨除けの傘をさしかけさせて歩いてゐる古風な圖を讀者よ想像して見たまへ。

二

明暦三年大火の後吉原は葺屋町から淺草の北の地へ移された。其の時公儀から金三千兩下賜された。此の廓を新吉原と稱した。廓內の構造は人々の周知の事だから管々しく記すまいが、さは云へ現代とは餘程趣きを異にしてゐた。日本堤から、見返り柳、衣紋坂を下ると、五十間といふ道路の兩側には編笠茶屋が並んでゐた。此の道路は途中で三曲りに曲つて廓を外に現はさぬやうになつてゐた。大門があつた。門は屋根有の木造で總黑塗だつた。大門を這入ると右手に會所があり、左手に番所があつた。會所には名主、月行司が詰めてゐて是れは廓內の事務一切を司る所、番所には與力同心が詰めて警察事務を扱つてゐた。門は曉方に開き、夜の四ツ（十時）に閉められた。今のやうに時間構はず出這入りは出來なかつた。

新吉原になつてから長足の發展をとげた。寛永廿年の調べによれば、遊女屋二百軒、揚屋十八軒、其の內、太夫七十五人、格子女郎三十一人、端女郎八百八十一人、といふ統計で、揚代金は、太夫晝卅七匁（夜同）格子廿六匁（夜同）端女郎三匁乃至五匁だつた。それが後に至ると遊女の階級が複雜になると同時に統計の面が餘程變化してゐる。元祿十五年の調べでは、太夫四人、格子八十六人、散茶五百一人、梅茶二百八十人、局一千二十九人、となつてゐる。太夫が減じて下の階級の遊女が增してゐるのは、太夫といふ大名道具を買ふ事は容易でないので安値な方へばかり人が走つて行つたからで、是れは一面大名の遊所通ひを幕府で禁止した事も影響してゐる。

太夫といふ者は實に容易ならんものだつた。容貌姿が勝れてゐる上に學問でも遊藝でも何んでも通じてゐる者でなければ其の資格がなかつた。太夫が揚屋入りをする事を所謂道中と云つたので、其の扮裝は、金襴、緞子、繻珍、縮緬、と毎日衣裝が變つた。鐵漿をつけ、櫛笄をさし、元祿頃には帶は前結びだつたが天和頃からは後結びが始まつた。黒塗の高駒下駄を履いて八文字を踏んで歩いた。六尺が箱提灯を提げて先に立ち、太夫、番頭新造、振袖新造、二人禿、鴇手、といふ風に續いて、若い者が一人太夫に長柄の傘を差し掛けてゐた。元祿以後は揚屋が無くなつて、仲ノ町の茶屋へ太夫が出張るやうになつた。芝居でやる通り、煙草盆を控えて長煙管で煙草を吸ふのだが、煙草は紙に包んで持たせて來た。太夫が抱え屋へ歸る時は更に大業だつた。先づ六尺が先に驅け込み、「太夫樣お歸りイー」と呼ばはる。すると家では、行水係が絹漉しの湯で早速行水を差し上げる、料理番が膳立てに掛る、醫者坊主が恭々しく罷り出てお脈を取つた。是れだけの太夫を買つて遊ぶのだから客の散財も莫大なものだつた。元祿以後の太夫の揚代金は晝夜七十四匁だが、別に樓主へ祝儀銀三枚、內所へ二枚、總內へ二枚、若い者へ二枚、鴇手へ二枚、編笠茶屋へ一分、入口茶屋へ二分、總計銀九枚と一兩一分の散財が當然の義務で、而も百日前から申込まなければ買へなかつた。

太夫の權勢は豪儀なものだつた。揚卷の科白に「慮外ながら揚卷でござんす、其の棒の端が、わちきの身に一寸でも障るが最後、此の五丁町は闇ぢやぞゑ」と言ふ。それ程の自負心を有つてゐた。

松葉屋の瀨川に、其の頃の人氣藝人であつた常盤津文字太夫が想ひを掛けたが、藝人では客になれないので、日ごろ懇意な揚屋町の鳥羽屋正藏を頼み込んで瀨川に其の旨を通じて貰つた。すると瀨川が逢ひませうといふことになつたので、文字太夫は天にも登る心地で大めかしにめかし込んで、表向きはさる大盡といふ振れ込みで揚屋へ行つた。やがて瀨川が來た。瀨川は文字太夫に向つて「今宵のお目もじはわたしにとつても此の上なく嬉しい事です、ついてはあなたの得意の淨瑠璃を一段聞かして下さいませんか」と言つた。文字太夫は大いに喜んで、一つ自分の天性の美音を以て瀨川を恍惚たらしめて遣らんものと考へ、直ぐに承知して最も得意の淨瑠璃を一段汗を流して語つて聞かせた。瀨川は感心して聽いてゐたが、文字太夫が語り了ると、豫て用意の金子千疋を紙の上に載せて出して、「大變面白かつた、御苦勞であつた」と言ひ捨てゝ座を立つてしまつた。

それ位の權式を有つてゐた女だけに、瀨川は才學共に優れて

ゐた。諸藝に通じ、双六だの蹴鞠などの技まで達してゐた。書は頗る能書で廣澤、烏石の流をくみ、畫は大雅堂の門に入つて專門家の畾を摩し、俳諧を好んで乾什、米仲等の徒と交を呈し易は平澤左内を師として、常に筮を立てゝ自ら樂んでゐた。文章もめでたかつた。朋輩であつた丁字屋の雛鶴が客に身請けされると聞いて贈つた文に、

きゝまゐらせし處、此里の火宅をけふしはなれられて、涼しき都へ御根引の花、めづらしき御新枕、御浦山敷事はものかは、殊に殿は木、そもじは土、二陰陽を起し、陽は養ひにして御一生やしなふといふ字の卦、萬人を養育し、萬人にかしづかるゝと雞母敷も、めでたき御仲と、ちよつとうらなひまゐらせ候、穴賢

序で乍ら、ごく昔は客が傾城を身請けする時には、客から抱主へ身請證文といふ物を入れた。三浦屋の抱え薄雲の身請證文が大門口の茶屋か田原又兵衛方え傳はつて、洞房語園の作者に依つて收録されてゐる。

證文之事

其方抱の薄雲と申傾城、未年季の内に御座候得共、我等妻に致度色々申入候所、無相違妻に被ㇾ下、其上衣類夜具布團手道具長持まで相添被ㇾ下、忝奉ㇾ存候、則爲ニ樽代ㇾ金三百五十兩、其方へ進申候、自今以後、從御公儀樣ㇾ御法度被ニ仰付ㇾ候江戸御町中ばいた遊女出合候座敷は、不ㇾ及ㇾ申、道中茶屋旅籠屋等、遊女屋がましき所に差出申間敷候、右樣の遊女に差出候と申者御座候はゞ、御公儀へ被ニ仰上ㇾ何樣にも御懸り可ㇾ被ㇾ成候、其時一言之儀申間敷候、右薄雲離別致候はゞ、金百兩に家屋敷相添、隙出可ㇾ申候、爲ニ後日ㇾ證文仍如ㇾ件、

元祿十三年辰七月三日　買主　源　六　印
請人　善右衞門印
同　半四郎印

四郎左衞門殿

薄雲は猫を愛して、揚屋へ行く時も猫を抱えて道中した。其の猫が厠で蛇を嚙み殺して飼主の恩義に報ゐたといふ話が傳はつてゐる。

京町の猫通ひけり揚屋町

これは其角が、薄雲が猫をつれて道中する處を發句にしたものだ。

三

初期の吉原には、太夫といふ最高級の遊女が多く、又下級の遊女と雖もなかく格式張つてゐたから遊興の手續きが面倒だ

つた。それが年次に簡略になつて來て、天明頃には太夫、格子、兩つ乍ら絶えてしまつて、遊女の階級は、散茶、梅茶、局、の三種に限られるやうになつた。併し、散茶と云つても其の內に三つの區別があつた。一番の上位が『呼出し』と云つて所謂入山形に二つ星、細見の源氏名の上に仌かういふ印しが打つてある。其の揚代は晝夜一兩二分。次位が『中三』と云つて晝夜三分の花魁。三位が『つけ廻し』是れは晝夜二分。梅茶の內にも『座敷持』と『部屋持』の區別があつて、前者は晝夜一分、後者は晝夜二朱の揚代だつた。往時は、同じ妓樓の抱えであつても、遊女の品質の如何によつて階級が附せられた。一軒の家に『呼出し』もあれば『中三』もあつた。妓樓の階級としては大見世、中見世、小見世の三種で、其の內大見世の遊女は『中三』以上に限られ、客は引手茶屋から通ふのが規則になつてゐた。かういふ風に細かな分類こそあつたけれど、太夫、格子の廢絕後は全體の格式氣風が年々下降して極めて平民的になつて行つた。其の原因は、大名の廓遊びを幕府が嚴禁した事もあづかつて力があつたが、元祿以後の江戶は、社會全般に亘つて武家の勢力が衰へ、それに代つて人の勢力が伸張した時代で、吉原に來つて一夜に千金を散じて、豪興を盡すは今は大名武家に非ずして一攫巨萬の富をなした町人の輩らであつた事が、直接の主因となつたのだ。大名に代つて大盡が持て囃され、武士よりも町人の世の中となつた。吉原の空氣は急速度に民衆的化して行つた。廓は平民の氣を吐く唯一の場所となつた。

元祿時代の吉原で黃金萬能の氣を吐いて豪奢を恣にし、無數の逸話を後世に遺した者に紀文と奈良茂があつた。紀文は二代目で、本八丁堀に宏大な家屋敷を持つてゐた豪商で、其の家には年中七人の幇間がはいつてゐたといふ程大掛りな生活をしてゐた。奈良茂は靈岸島の材木問屋で是れも二代目で四十萬兩の富を有してゐた。併し、紀文が初松魚を食ふ爲に江戶の入荷の全部を買占めて其の中の一尾を料理せしめたり、節分に引手茶屋の二階で豆の代りに小粒の金銀を撒いたり、朋友に一個七十兩の大饅頭を贈つたり、遊び敵の奈良茂が茶屋の二階で雪見の宴を張つてゐるのを見て往來へ三百兩の金銀を撒いて雪を蹴散らかさせたとかいふやうな豪快を遣る遊興のうちにも自ら現代の成金根性とは異つた風情がある。それは時代の趣味性に基く事は無論だが、當時是れ等の大盡の宴席を斡旋した所謂取卷の力も、遊興を美化する上に於て大いに効果を與へてゐた事を見逃し難い。俳諧師の寶井其角、書家の佐文山、畫家として機智の意匠を以て一世を風靡した英一蝶、是等の輩は皆當時の富家に附隨して遊里に放浪してゐた取卷末社であつた。其の他樣の

鉦侍、坊主小兵衛、二朱判吉兵衛、等の職業的末社も生れて來た。是れを太鼓持又男藝者とも云ひ、廓内では太夫衆とも呼んだ。廓に女藝者が始まつたのは寶曆頃扇屋歌扇を以て濫觴とする、これが安永年間に至ると七十人の女藝者が廓内にあつた。女藝者は專ら藝を賣り、客と關係すれば追放、周旋をした茶屋は一ケ月間營業を停止されるのが規則だつた。序で乍ら町藝者は吉原より稍遲れて天明の末から天和へかけ深川仲町に起つた。遊女と見境を附ける爲に宴席へ來ても羽織を着てゐた處から、深川藝者の事を「羽織」と總稱するやうになつた。

公娼廢止等いふ語は夢にも想像出來なかつた江戸時代、殊に豪華を競つた元祿の時世に於ては、傾城買といふ事は人生享樂の最大目的で、江戸の吉原京の島原と云へば現世無二の理想郷と思はれてゐた。「よろづに事かゝぬ津に住みて、女郎の名さへ知らず暮し、揚屋の酒も呑まず、何を樂しみに灸すへて命を大事にする事ぞ」と云つた寛潤大臣氣質の作者の言葉は、やがて元祿町人の時代思想であつた

吉原は、元祿に至つて全く完成し、寶曆天明時に及んでそれが爛熟の極致に達した。花街の文明は恰も百花一時に開くの觀があつた。里言葉といふ物も元祿年間に完成した。おいらん、ぬし（客）わちき、なんす、すます、さし（差合あつて逢ひ難き意）其の他澤山の花街語が出來た。お茶を挽くといふことは古語である。ひやかしといふ言葉は、往時淺草の紙漉職人が紙の原料を水に浸けてそれがひやけるまでの時間潰しに廓内をうろ付いて歩いた連中を目して云つた語だ。彼等自身も、小格子の花魁なぞが「にいさん、おあがりなんし」とでもすゝめると「おいらあひやかしだよ」と答へたものだ。そこで登樓らずに廻つて歩く者の事をひやかしと總稱するやうになつた。素見と書くのは後代の當て字である。

花街の全盛は自然名妓の輩出を誘引するに至つた。其の代表的名妓は代々の高尾であつた。高尾は京町の三浦屋四郎左衛門の抱えで、初代萬治に始まつて九代迄續いた。高尾に關しては隨分異説があつて、研究し始めたら吉原の博士論文が出來る位だが大體の處で年代順に列記して見ると、

初代。萬治高尾

野州鹽原の産、一に鹽原高尾とも云ふ、伊達綱村に落籍された。品川の伊達家の下屋敷に住ひてお相の方と敬稱され細村幽閉後も幸福な生涯を送つた。大崎の三叉で綱村の爲に吊し斬になつたといふ傳説は無稽である。

二代。石井高尾

彦根藩士石井某と深く馴染み、主人から鞍替を命ぜられて

自殺した。

三代、水谷高尾

公儀御用達水谷六兵衛の妻となり、六兵衛不都合の廉に依つて死刑に處せられた後は手代九兵衛の妻となつた。此の高尾はんの字の名筆だつたので、一にはね字高尾とも云ふ。

四代。西條高尾

本郷の蠟燭商西條吉兵衛の妻となつたが、吉兵衛が所拂ひになつたので、後淺間武兵衛の妻となつた。此の高尾に通つて來た或る太守が或る時美事な酒盃を高尾に與へた。高尾は其の盃を京の吉野太夫に廻した。吉野太夫は更に大阪の高圓太夫に廻した。盃は最後に大阪から江戸へ廻されて高尾の手許へ戻つた。

五代。島田高尾

島田重三郎といふ武士の妻となる。

六代。紺屋高尾

神田お玉ケ池の紺屋の妻となる、元祿の末である。

七代。子持高尾

自らの生んだ子を抱いて座敷を勤めたので其の名が起る。

八代。六本高尾、

足の指が六本あるといふ噂から、

九代。榊原高尾

寶保年間、榊原式部太輔に千八百兩にて身請さる、榊原は此の事の爲めに幕府の譴責を蒙り越後高田十八萬石に轉封された。

四

江戸人は、賣娼といふ本來の醜業を淨化する爲に、遊女に標式を持たせ、嚴ましい花街道德を制定して、客と雖も一歩大門の内に足を蹈み入るゝからには、所謂別世界である處の此の廓の風俗習慣に盲從させずにはおかなかつた。若しそれを無視する者があれば野暮天として誰も顧てくれなかつた。爰に於て客の遊興の形式も洗練に洗練を重ねて益々粹を發揮するやうになつて來た。客と遊女とが兩々相俟つて美しい情的世界を實現した。其處からは様々の文化が生まれた。江戸時代の文明は吉原に華が咲いたのであつた。歌舞伎芝居は元遊女と客の情生活を寫す事以外に使命は有たなかつた。淨瑠璃及び三弦樂も芝居と同じ目的をもつて發達を遂げた。京傳の藝術も、歌麿の藝術も其の他江戸時代の有らゆる文化的産物が吉原に根原を發して絢爛を競つてゐる。江戸文化＝吉原＝○となる次第である。廓で

は、この歡樂鄕を彌が上にも華やかにいろどる爲に四季を通じて種々の行事を設けた。夜櫻、燈籠、俄、等は其の代表的の催しであつた。夜櫻は寛延三年から始まつた。燈籠は、享保十二年の盂蘭盆會に中萬字屋の玉菊追善の爲に催したのが爾後恒例となつたのだつた。玉菊は、角町中萬字屋の抱へで、酒が好きだつた。當時酒興に拳相撲が流行し、玉菊これが上手で、拳まはしがあつたといふ逸話を京傳が書いてゐる。河東節を好んで廿歳の時病氣に罹り、療養に手を盡して平癒し、醫師は更にこれに灸治をすゝめ、玉菊は灸事のうち半太夫河東兩人に淨瑠璃を語らせ、聞き乍らすへたいと言ふので、樓主が承知して家内の女郎を總仕舞にして、聞きに來た人々へは酒肴本膳を侑めて馳走したといふ逸話が遺つてゐるくらゐだから、羽振りのいゝ花魁だつた事は確かである。廿五歳の時再び病の枕に就いて遂ひに死去した。河東節『水調子』は竹婦人の述、玉菊追善の爲に作られた曲であつた。死後三年目の盂蘭盆會に、廓内の家々では同じく、玉菊追善の爲に燈籠を掛けたのだつた。

俄は享保十九年、廓内九郎助稲荷正一位宣下の祝に催されたのが初まりで、其の後は年々八月が來るとやつたものだ。此の他にも十月の夷子講、十一月八日の火伏せ、十二月の酉の市、大晦日の狐舞などゝいふ年中行事があつて、廓内では是れをもいん日と言つた。

營業時間はどうなつてゐたかと云ふと、これは晝夜に分かれてゐたが、寛永年中と享保年中とに夜の營業を禁止した事があつた。廓内で物騷な刄傷沙汰などが起つた爲晝だけ客を入れる事にしたのだが、色里の夜を封じられては營業が成り立たないのでいつも其の法令は永續きしなかつた。晝見世は正午から午后四時迄、夜見世は午后六時から同十時迄を張つた。

「傾城に誠なしとは誰がいふた」といふ文句があるが、遊女とても人間だから無論誠が無い筈はない、只、通つて來る客の全部に誠は盡し切れないといふまでのはなしだ。てれん手管なぞといふ言葉も玆から出來た。「傾城の泪で内の藏が漏り」「傾城の泪珊瑚の珠となり」なぞといふ川柳がある。それは遊女が普通の客に對する常套的手段であつて、彼等が特に選拔した或る一人だけに對しては、堅氣の女以上の實意を示し、是れを間夫と稱へ、勤めのうさ晴らしと云つて、恰もそれが遊女の特權であるかの如く振舞つた。そこで人々はみな其の間夫たらん事を志して遊里へ通つたが、間夫の率は極めて僅少なので多くは其の選に漏れた。偶々選まれた者は暫し幸福であつたが、「廓の金には詰るが慣ひ」と言つて、男は直きに產を破り、女も借金だらけになり、揚句の果が心中を遂げた。心中といふものは廓

の產物と云つてもよいくらゐだつた。心中の流行は、一つは淨瑠璃の影響にも由つた。享保頃から全盛を極めた豐後節の淨瑠璃は題材を專ら花街遊里に取り、遊女と客との情意纏綿たる狀を寫し、最後は心中を以て結末を附けた、豐後節が極度に心中を美化し鼓吹した處から、遊女も客も悉く其の思想に心醉し讃美して爭つて心中を遂げた。爰に於て官では元文四年令を發して豐後節を停止した。更に後年文化の初め頃には新內節を停止したが、是れは特に七月十三日を限つて新內語りが廓に入る事が許されてゐた。數限りなく行はれた廓の心中の內、有名なものだけ舉げると、

權八濃紫。濃紫は三浦屋の抱え遊女で、情人平井權八が惡事露現して鈴ケ森で仕置になつた後、目黑の其の墓の前で自殺を遂げた。趣意を知れる者不びんがつて權八の塚と並べて葬つた目黑の比翼塚と云ふ。延寶七年の出來事。

揚卷助六。助六の死後三七日の命日に揚卷が自殺した。承應二年の事で、兩人合葬の墓が山谷易行院に殘つてゐる。

尾上伊太八。伊太八は實は津輕岩松の家來で原田伊太夫といふ者、女は尾上。

浦里時次郎。浦里實は三浦屋の美吉野、時次郎は伊之助。本所猿江慈眼寺の比翼塚がそれ。

藤枝外記大菱屋綾衣。外記は直參の旗本、天明二年七月十四日、吉原田圃の農家に於て合意の心中を遂げた。

吉原ほど度び〳〵の火災を蒙つた處はない。明曆以後大正十二年迄に三十九回火事に會つてゐる。火事で燒けると、普請が出來上る迄假宅の營業が許された。假宅の場所は、淺草山の宿日本橋の中洲、深川、根津等だつた。假宅はいつも非常な繁昌をした。それはいづれも小さい家なので、六疊一間へ屛風を立つて三人位の客を入れるといふ遣り方だつたが、それが却つて人々の好奇心を挑發して盛るのだつた。で、吉原ばかりは必ず燒け太りと極まつてゐたので、不景氣な年が續くと、「もういゝ加減に火事でもありさうなものだ」と云つたくらゐだ。假宅の期限は一年ときまつてゐた。其の期間が了へて吉原へ戾る際には、全盛の花魁になると人目を駭かすやうな華美を盡したものだ。維新前の紀の字屋の火事で、假宅から廓へ歸ることになつた時、稻本の小稻と平泉屋の泉州といふ全盛の花魁が競爭し合つて、小稻は石橋の刺繡の打掛を着て、其の裾をわざと駕籠の左右に垂れて道を引き摺り乍ら吉原へはいつた。泉州の打掛に金銀絲で鯉の瀧登りの刺繡で、是れも道へ裾を引き摺らせ、帮間の一同黑紋付の着附に仙台平の袴、一文字笠を被つて駕籠脇に附いて靜々と繰り込んだ。双方共是れ丈に千兩以上の金を費

つた。

五

京町の新屋といふ家に吉田といふ太夫があつた。仲の町の浄月といふ揚屋を常宿にしてほかの揚屋へは一切行かなかつた。茶の會などをふだんの遊びとして、三味線は騒がしいと云つて手にも取らせなかつた。吉田が揚屋へ通ふ時には禿が二人に草履取が一人、それに浄月の亭主も附いて送り迎ひするのが例であつた。

　其の吉田が或る晩妙な夢を見た。夢の中で三十位の女が來て「是れは約束の文だ」と云つて吉田に渡すので開いて見ると、たゞ七七七と七の字が三つ書いてあるばかりだつた。吉田は合點がいかないので「是れは何んの事か」と女に尋ねると、女はそれには答へずあべこべに「早く返事をせよ」と云つて、吉田の顔を睨み付けた。其の形相が非常に怖ろしかつたので吉田は聲を揚げようとして、其處で眠が醒めた。ひどくうなされたと見えてビツショリ汗を掻いてゐた。

　夢の中の女の顔と其の出來事とがはつきりと吉田の頭に映つてゐた。吉田は終日此の夢を氣にかけてゐた。

　其の晩も吉田は浄月へ行つた。すると取巻醫者の星野玄庵が其處へやつて來た。吉田は又夢の事を思ひ出して、それを玄庵に話して見ようと思つたのだが、籔から棒に、

「もし玄庵さん、わちきや昨夜はきつい汗を掻きいした」と言つたので、玄庵老は妙に感違へをして、

「いや、参る早々おのろけとは驚いた、たまらぬ〳〵」と言つて扇子で己れの頭をピシヤ〳〵叩いた。

「おや、好かない玄庵さんざます、わちきが汗を掻きいしたと申すのは、夢を見てうなされたといふのざます」

　話が食ひ違つたので吉田は一寸腹を立てゝつんと横を向いてしまつた。玄庵は當が外れたが、何んとかして太夫の機嫌を取らなければならない。

「これは飛んだ粗忽を申して愚老が悪うござつた、したが太夫様、夢は五臓六腑の疲れより出ると申せど、必ず吉凶のあるものでござるて、太夫様のお夢はどのやうなお夢でござつたかな愚老が占つて進ぜませう」

　吉田は機嫌を直して

「それは〳〵不思議な夢でありいした」と言つて夢の話をした玄庵は仔細らしく首をひねつて考へてゐたが、やがてポンと膝を叩き

「太夫様、其のお夢は吉夢でござる、先以てお目出度い儀でご

ざる」

「どういふわけざます」

「さればさ、女が七の字を三つ認めた文を持參したとあれば、太夫樣には必ず近くお身請の御相談がござらう、即ち女篇に七を三つ書けば嬉といふ字になります、總じて女中方には略字が相應してござる。處で、お身樣にとつては、身請ほど嬉しい事はござるまいによつて、必ず近いうちにお身請の相談が參るでござらう」

吉田は大變喜んだ。三日過ぎてから、吉田は參合せの祝をするのだと云つて、新屋へ出入誰彼を廿人餘りと、俳諧師などを招いて、二汁七菜の料理で饗應した上に、名物の伽羅一包宛引出物に出した。

參の爲に是れ程の散財をさせて、若し年季の明く迄身請の相談が來ないやうなことがあつたら、星野玄庵は吉原を夜逃げでもしなくてはなるまい、と云つて人々は噂し合つた。

處が、それから二た月ばかり經つと、吉田は偶然にもさる大身の客に身請されて廓を出ることになつた。其の時吉田は玄庵に小袖一重と銀十枚を置き土産にした。

廓の者は、爾來星野玄庵のことを、邯鄲の玄庵と呼んだ。

同じ新屋に千歳といふ太夫があつて、全盛おさ／＼吉田に劣らなかつた。

彌生の頃だつた。宵から降り出した雨がしとしとと濕い音を立てゝゐた。夜はいたく更け、世間はひつそりと靜まつてゐた千歳は客と二人、平左衛門といふ揚屋の二階にゐた。客はさる大身の若殿で、光る源氏の再生かと思はれるほど美しい男だつた。けれども、かうして會ふのは今夜が初めてだつた。だから話もとかく種が切れて、二人は默つて戸外の春の雨の音に耳を馳らせてゐるやうなことが多かつた。

と客はつれ／＼のまゝ枕元の硯を側へ引き寄せて鼻紙へサラ／＼と何か書いてゐた。千歳はそれを覗き込んだ。

一雙玉手千人枕
半點朱唇萬客嘗

「それは何の事さます」

客は笑つて答へなかつたが、千歳が頻りに聞くので詩句の意味を説明して聞かせた。すると千歳は何んと思つたかハラ／＼涙をこぼした。

「何を泣くのぢや、氣に障つたら許してくれよ」と客は驚いて言つた。

「いゝえ、氣に障るのなんのといふ事はありいせん。したが

くその詩の通り、浮き川竹の身は淺間しい事でありいす、今宵からしてぬしにあうて、勤めの身の冥加と嬉しく思ふにつけ、あすはまた何處の田舍者が來て、厭な客の機嫌を取らねばならぬかと思へば、行末までも案じられて、わちきは悲しくてなりんせん」

かう言つて千歳はさめ〲と泣き出した。客はどう言つて慰めたらよいものか分らないやうな顏をしてゐた。

其の夜が逢ひ初めだつたが、それから此の客はしげ〲と通つて來て、間もなく千歳を身請して屋敷へ伴れて行つた。

是れにても前の星野玄庵について話がある。千歳の身請の話が新屋へ申込まれた時、丁度其の朝千歳は風氣で寢てゐたので玄庵を呼んで診察させた。

「明け方にきつい寢汗をかきいした」と千歳が言ふと、

「其の時、何ぞ怖い夢を御覽じなさらなんだかな」

と玄庵が言つたので、後でみんなして、玄庵の奴吉田の夢占ひで當てた味をいまだに忘られないと見えると言つて大笑ひをした。

歌麿の繪によつて世界に名高くなつた昔の吉原は、耽美主義の結晶體だつた。それは、其の時代思想や、人々の趣味性と感覺によつて築きあげられたところの一箇の殿堂であつた。我れ〲は今や長い過去の歲月の誰の彼方に、おぼろげにその美しい夢の世界に住める人々の生活を回顧することができるのみである。（完）

イバニエスと彼の作品

千葉龜雄

彼の作物の二色調

一九二三年十二月、横濱埠頭の夕日に立つた、ブラスコ・イバニエスのプロオフアルを憶ふ。

ウヰンセント・ブラスコ・イバニエスの、作物の堆積の中に長く立つことは恐らく危險である。なぜなら、彼の勞作は、感情の最高音のみによつて組み合せられた音樂である。その音樂の緊音である。聽衆は長くそれを聞いて居る場合には、あまりに極度に、感情を高揚させ、緊張させることによつて、つひに心臓を破裂させずに止まないから。彼には恐らく情緒といへるものさへもない。あらゆるものが直ぐ情熱に飛躍して了ふ。それだけ、彼の感情の振幅はおそろしく強く、感情の足跡はあらゆる領域に亙つて居る。憎み、憤どをり、悲しみ、傷み、苦しみ、惱み、歡樂の力一杯の表現が、彼のどの作物の音樂にも横流して居る。現代スペイン文壇を二分して、ビオ・バロオバが北極に立つ時に、彼が南極に立つ所以である。

なるほど彼は、近代社會思想を、自由に、大膽に作物の中に盛る事に於て、殆んど現代に類が無いといつて宜しい。その意味で、彼を近代思想家として、極端な軍國主義ぎらいとして眺めるに異議はないのであるけれども、さて、彼の感情を組み立て居る纖維を討檢して見ると、現代のフランスや、又はラシアの舊作家達の持つて居るやうな、プラチナのやうな描線のしなやかさが乏しい。肌膚がずつと粗く、神經があれほど纖巧だとは云へない。イバニエスの感情は、どちらかといへば、寧ろ原始的なものを多分に持つ。だから其色調が、いくらか單色であるにかゝわらず、其線の太い純眞な逼迫力が、殆んど類の無い潜熱をふくんで、ぐんぐん世界を征服して行く理由がそこにある。

彼の「寺院の蔭」が英譯された時に、ニユウヨオクで發行す

る一新聞がそれを批評して、「最近刊行された世界小説の中で、特にその宣傳する思想が過激であり、アメリカの立ち場から見て危險なものとして」この「聖院の蔭」を指彈したのである。

社會批判の藝術

「僧院の蔭」には何が描かれて居るか。

漂泊の子ガブリエル・ルナが、肺を病んで故國に歸つて來た。見る影も無く痩せさらばいて、トレドの聖院の蔭にかくれた。彼はもと天才と呼ばれたそこの僧侶であつた。彼はプルウドンを讀み、クロポトキンを讀んだ。彼の飽くことを知らぬ知識は更にあらゆる近代思想を貪ぼるやうに讀んだ。かくて彼の獲たものは何であつたか。

「ガブリエルは彼れの新宗教に出逢つた。彼はこの新宗教の胃の腑を通じて、人間の更生が來るべきことを夢想した。そしてそれに全たく自分を打ちまかしてしまつた。なるほど來生の信仰は、此の世の不幸な者に對して、死後の幸福と慰めを與へるかも知れない。しかしこの慰さめは詐はりである。凡ての宗教は詐はりである。「人生」は現世の外にはないのだ。ルナは公憤に燃えた。現代においての、何百萬何千萬の民衆は、少數の特權階級の幸福の爲めに、云ひやうの無い貧乏と悲慘の刑罰を受けねばならないのだ、こんな社會的不正には、どこまでも反抗せねばならないのだと彼は叫んだ。あらゆる害毒の根である權力は、彼とは最とも相容れない死敵であつた。それは悉く打滅されねばならぬ害惡であつた。そして人類は、專制者や僧侶や軍隊がなくて、生きる事の出來るやうに改造されねばならない。」

彼の長い漂浪の眼は、ますます深くこの自覺をはぐくみ育てた。彼はかくして祖國スペインの惰眠と老衰を呪つた。またこの老衰を早めるところのスペインの宗教の腐敗を罵つた。トレドの聖院も、またこの毒の花の一つの世界でなければならなかつた。彼は先づこの毒の花の世界の中から、この呪ふべき宗教の殼を棄てて了へと、トレドの僧院の世界に向つて宣傳した。彼の心は白熱に焚えさかつた。

「神はどこに居るか」と問はれた刹那に、彼は答へた。「我々が神自身なのだ。われわれをめぐるあらゆるものが神なのだ。人間が神なのだ。世界もまた神なのだ。」彼は神と共に現代社會の不平等を彈劾し、更に祖國であるスペインを否定した。「スペインはもう國ではない、めちやくちやに排列された塵まみれの博物館に過ぎないのだ。そこでは、たゞユウロオプの好奇心を惹きつけるところの古物で滿ちて居る。そしてその廢墟さへも

が、もう廢頽して了つたのだ」

古い歴史に陶醉する僧侶達が、この劍呑な新聲に恐怖を微感し始めたに不思議がない。けれどもそれと同時に無知な少數もまた目ざめ始めた。けれど無知は遂に無知であつた。ガブリエルは自由を說く、聖院が無意義だ。魂をそれから解放されねばならぬと宣する。然るにかれ等無知な人々は彼れら自身の無知に即してその無意義であることを、たゞ無價値であると解釋した。だから聖院は、どんなに凌虐しても差支ないと考へるようになつた。かくして彼等はある夜團結して、聖院の寶物を掠奪し始めた。ガブリエルは意外な結果に驚ろいた。病み衰へた身をもつて、力限りそれを止めさせやうとしたが苦も無くそこへ打ち倒された。暴徒はアメリカへ逃げのびた。そして瀕死のガブリエルは、使嗾者と認められて、牢屋の中で臨終の眼を閉ぢた。

イバニエスは、この悲劇をかう解釋して居る。「彼れガブリエルは、手つとり早く收穫を獲やうとして、彼等の中にその思想を蒔ひた。それが恐ろしい早さで生長したまではよい。然し、無理じゐに、人工的にやつた畑仕事は、いつも不自然なり物を獲るに終つて了ふ。彼の宣傳の收穫も、所詮は道德の廢頽を招ぐに止まつた。枝になつた果物は皆な腐れて了つた」と。けれどもイバニエスは、ガブリエル・ルナにかう考へさして居る。

「我等は平等化の改造が、人性の良心の中に、醱酵する日まで待たねばならない。それから後ならば、社會の基礎をかへる事は、極めて造作なく出來る仕事なのである」と。

人類の無知、人類の惱み

かう考へて來ると、イバニエスの凡ての作物を概括して、大體二つの傾向に分つことが出來る。第一のものは、現代社會の成因と傾向をしづかに省察して、新らしい世界を創始する人類の惱みをいたみ、その世界の創造を妨げるところの、人間性の呪ひと、社會の禍の根を、鋭どく指摘したものであり。第二のものは、南ユウロオプの不斷の暖光に惠まれた爛熟した兩性が、內から湧きのぼる愛慾の悶えに身も世も無く、甘い戀愛の現實に陶醉し、享樂する、その恐ろしい愛慾の葛藤と華やかさを捉へたものである。「默示錄の四騎手」、「僧院の陰」、「葡萄の實」「闖入者」、「ソンニカ」、「死者の統治」、「女の敵」、「小屋」が第一に屬する。「血と砂」、「女性の勝利」、「五月花丸」、「急流」、「惑はしの女」、「我等の海」が第二のものに屬する。その外に短篇である「ルナ・ベナモオア」には、それ等とはやゝ違つた色調のものが集められて居る。といつて、第一のものにも、もとより南歐的な戀愛が、その深刻な人類の惱みを織りまぜて居るのである

が、少なくとも、イバニエスの藝術を、世界的に知らしたものの機縁が、第一のものにあることは爭へない。五年に亘る世界戰爭は、彼と、ノオルウエイのヨハン・ボオエルをして、社會改造の勇敢な鬪士として、新らしい藝術の地平線上に飛躍せしめた。そして彼はスペインの一作家から、にわかに世界的の作家に飛躍して了つた。その鍵が彼の作物にある。

私が彼の「血と砂」を讀んだのは、大戰の始まる一年前の一九一三年である。それはその年に、ギルレスピイ夫人に英譯されたもので、恐らくブラスコ・イバニエスの名が、英語を讀む人人の前にデビユウした第一の日であつたらう。——それは「鬪牛者」として、二三年前別人の手にも英譯された——、次で一九一七年に、「小屋」が英譯された。私はそれを讀んだ。そして彼の人間惡に對する强烈な抗議に、しみじみと惹き入れられた——といふよりも、むしろひどく興奮した。そして譯者フランシス・スノウのイントロダクションを讀んで、これは變つた作家が出て來たぞと、好奇といささかの驚異をまじへた感激に搏たれたのであつた。

スノウはかう說いて居る。ブラスコ・イバニエスは、嵐のやうな半生涯をおくつてから、今では議員に選擧されたのであるが、彼は少なくとも、知識的無政府主義者である。彼の批判はたとへ暴力による社會更生を信じないにもせよ、理論としては、殆んど、ヘルレルの一使徒であるといつて差支ない。彼の作物の或るもの、たとへば「寺院の蔭」「闖入者」「葡萄の實」などはみなその精髓において政治的パンフレツトである。明らかに宣傳の部類である。イバニエスは、硬化しきつた現代世界組織を間斷なく抨擊する。鬪牛、國家、教會、ジエスエツト宗のあらゆるものを。けれどもそれと同時に、民衆の惡德が、同じ力强い公正な筆をもつて激しく鞭打たれて居る。彼れの深刻な心理の介剖によれば、最も非難さるべきものは民衆それ自身でなければならぬといふのである。なぜなら、彼等は底の底まで無知で我慾で、根性が狹くて、偏見で、頑迷で、狂信的で、その上に中古的な慘忍性を潛めて居る。イバニエスの信ずるところによれば、之を救ふのはたゞ教育の外にはない。それから現代思想に友愛(フラタニテイ)の信念を、諄々と教へ込む事である。宿命といふものは、彼の哲學の中にない。だから、あらゆる此等の社會惡は、決して機會の結果でもなければ、また機會によつて直されるものでもない。國家の下層は、上層と共に全く新たに更生されねばならないのだ……と。

「小屋」は、單に種族がちがう他國者たるの故をもつて、環境と土地人から、あらゆる壓迫をうけるところの、あわれなバチ

ステエの半生を捉へて居る。私の見るところ、すべてのイバニエスの作物の中でもこれほどしみじみした悲しみをもつて、淋しい悲劇を浸した純眞な哀調は珍らしい。測り知れない涙の量と、おさへ切れない怒りの焰が、ぴつたりとそこに交響して居る。家族がたをれ、棲家である「小屋」が焼かれ、田畝が焦土のやうに荒らされて了つた。「バチステイは、彼の無効であつた旅先から、焼け氣味になつて歸つて來た。誰一人、答へる者も無い。しづまりかへつた平野は眉をしかめて、永久に彼の家族に左樣ならをいふ。彼等は、沙漠の眞中にあつたよりも、なほ百層倍も淋しかつた。人間の憎惡から來る孤獨は、自然の孤獨よりも千倍も淋しい、彼等はこゝを立ち去らねばならぬ。そして飢餓が彼等のかどとに追ひついて來ることを永久に感じながら、また新らしい生活を始めねばならなかつた。彼等の勞働の廢墟を後に殘し、小さい家族の一人のなきがらを後に殘して……、あゝそして彼の氣の毒な小さな子供は、この狂はしい憎惡の戰ひに罪の無い犧牲となつて、地の底に永久に腐つて行くのだ」たまらなくなつたイバニエスは、自分で創作の表に躍り出してかうした咏嘆を、この悲運な主人公に手向けて居る。

人類の無知と、人間の慘忍性！、彼れの社會改造を希求したた凡ての作物は、どこまでも、この咏嘆と傷みと抗議のはけ口でないものがない。

「默示錄の四騎手」

けれども、彼の名はその時にも、また多く世界に知られては無かつた。そして一九一八年七月になつて、始めて「默示錄の四騎手」が英譯された。そこで始めて、イバニエスの影像が、巨人の如く、世界の仰視の上に躍り出して來た。一體イバニエスとは誰か？。……と、誰も叫ぶ。

「默示錄の四騎手」は、戰爭を描いた藝術として、人のいふやうに、後にも先にもない藝術的價値を持つものであるか、それを斷定するには相應な躊躇がある。けれども、あの創作が、そうした落付いた藝術的定義を與へられる前に、もう已に他の視角から恐ろしい注集力を集めて了つた。一つはその內容である。まざまざと、生きた現代と、現實を取扱つて、スケエルの大きいことと、結構の華やかさと、ぐんぐん人を惹いて行く技巧の力が、一つに合化したことである。他の一つは思想である。少なくとも、それは、これまでの戰爭文學の不文法であつたところの、愛國魂謳歌を根本から否定して、大きな人類愛の魂から大戰を呪つた熱烈な反抗であり。その呪ひの下にある人類への深ひいたみであつた。ロマン・ロオランが「戰に超越して」で説

き、ジョルジュ・ジュアメルが「文明」によつて呪ひ、レオニイド・アンドレイエフが「一凡人の告白」で呪つた一切を、イバニエスがこの「默示錄の四騎手」の中に萬遍なくとかし込んだ。あの星夜の下に世界の運命を天啓するところの、ラシアの哲人チエルノフの大豫言を、「四騎手の出現」の一章に聞くときに誰か粛然として、おゝのき、そして恐怖しないものがあらう。けれども、「四騎手の殘忍な疾驅の下に、人類の苦惱は已に始まつたのである」(一八〇頁)

過去への反抗

「默示錄の四騎手」が世界的になると共に、かれの舊作であるところの、「葡萄の實」や、「死者の統治」や、「五月の花丸」や、「ソンニカ」や、その他がぞくぞくとして市場に現はれて來た。そして彼が、「默示錄の四騎手」によつて、始めて人道の戰士となり、社會改造の前哨に立つたわけではなく、彼の半生の理想そのものが、已にすべてそれであつたことが始めてこゝではつきりとわかつて來た。「葡萄の實」では、セリイ酒の釀造元たるドン・パブロ・デユポント家が、この大きな釀造市を支配する唯一の資本家になつて居る。そこに使はれて居る勞働者がみなみじめな暮しに忍從して居る。それをドン・フアルナンドオがたまらなく思ふ。フアルナンドオは、勞苦がらまくで學問がある。熱烈な社會改造の精神にもえて、自分はパンと水だけで生活しながら、たゞ第四階級の權利と正義のために盡さうとする。けれども勞働者は、結局資本家の籠絡の手におちて、牢から出て來たフアルナンドに裏ぎつて了ふ。こゝでも民衆の無知に絕望したイバニエスが居る。「葡萄の實」において、現實の悲慘に當面したイバニエスは、更に「死者の統治」において、過去の因襲と執念深い傳習の幽靈を、相容れ得ぬ死敵として苦闘する。死者とは過去である。「死者の統治」の主人公は青年侯爵である。一人は田舍娘に戀をしたが、村の舊い傳統と頑くなな習性は、この貴族が村娘の手を求めることを斷じて許さない。「一番始めに人間生活の手本を教へたものは、この働らきの中に、後世の人類がそれに同樣に閉ぢ籠められねばならないところの、一つの鐵の範を拵へて置いたらしい」。それが彼にとつてはどうしても我慢されないのである。凡そ現在を改造する者にとつて、必らずやらねばならない二つの事業がある。一つは將來の創設であり、他の一つは過去の破壞である。「死者の統治」の主人公は、この十重廿重にからめられた、過去の幻影の包圍を悉く征服し、一人の平民なり、無產者なりになつて遂に娘との戀を得た。かくして「死者はもう彼の主權者ではない」自分を統治するものは、

唯だ生である。生の上に「愛」である」「彼の苦闘は終つた、今新たに生が開かれた！」

イバニエスは「僧院の蔭」で叫ぶ。世界の現狀に、どんな療治をすれば好いと聞くのか。自分は療治などは持たない。たゞ人間の進歩だけあればそれでよいのだ。」また叫ぶ「あらゆるものは、我々人類の爲めに存在するのである。大地は日光のやうに、空氣のやうに、取のけが無く各人について居るべきである。さらばその生產が、適當な分量で、彼等の必要に應じて分配さるべき事も明白の理であらう。世界に金持ちとか、貧民とかゞあつてはならない——たゞ、人間だけがあるべき筈だ！」

イバニエスの半生

彼が今日までの生きる歷史を眺める刹那に、彼のかうした作物が、彼といふ時代の反抗兒を離れては、どうしても生產され得ないところの、それほどユニイクで、有機的な生產であることが會得されるのである。彼れの叛骨は先天性である。なぜなら彼の祖先はアラゴンから來たもので、アラゴンは、大奈翁の戰爭の中で、こゝよりも猛烈な防禦を見たことが無いと驚嘆された、あのサラゴッサの悲劇を生んだ土地である。また或るスペイン王が即位した日に、アラゴンの裁判長が新王のもとへやつて來て、此の土地では、われ等人民が、王様よりもえらいのですよ」と注意した有名な歷史があるほどで、イバニエスが、自由と平等の爲に苦闘し、また彼の持つ冒險的な精神も、疲れることを知らない精力も、またこの風土と環境から產まれて居ることは爭そへない。彼の父は小さなワレンシヤの呉服屋であつたが、彼は法律家になるべく市の大學へ入れられた。彼が法律の研究から出立したところの、祖國改造の信念の小手調べは先づ十八歳の學生として、政府を罵しつた短詩を作つた曉から始まつた。彼はこれが爲に六箇月の禁錮を命ぜられたが、それから以來のべつに入牢させられた。が、彼はその位ゐに凹む人間ではなかつた。「牢獄は第二の家庭だよ」と口くせのやうに笑談を云ひながら、彼は新聞「人民」を發刊して、盛んに祖國の政治を思想の腐敗を罵つた。彼の主張は、急進黨の中でも最も劇烈なものであつた。二十二歳の時には、例のキユウバの内亂が起つた。彼はそれに對するスペイン政府の手段を攻擊して少しもペンをゆるめなかつた爲に、又もや政府から睨まれたので、國を逃亡してパリイに入り、更にイタリイに逃げ込んで、もう好からうと歸國すると、直ぐ捕縛されて一年間入牢した。出ると共和黨に押し立てられて首領となり、ワレンシヤから選ばれて議員となつた。その外何回か追放もされた。彼は彼の祖國に愛着す

る、すればするほどに、彼のなをど愛するのはフランスとアメリカである。自由の國としてである。一つは藝術上の祖師としてフランスに、ユウゴオとゾラを持つ爲もあらうが。

彼の政治上の活動は、決して彼がペンを執り書物を讀む勇氣を挫かなかつた。彼は文學や、歷史や、哲學書の夥しい數を翻譯すると共に、美術の批評家としても知られて居た。「女性の勝利」が、その一面を語る。そうかと思へば南米移民事業に大へんな興味を持つて、長い間そこに滯在し、またアルゼンチンに廣い地面を買つて、殖民の計畫にさへ着手した。「惑はしの女」は、正しくその頃の體驗を土臺としたものであらう。そこで或る批評家がかう肯定する。「これが他の現代の作家であると、その作物と人生は、同じ力から出て別々な姿を見せて來るのであるが、イバニエスになると、彼が生きた通りに彼の作物も生きて居る。彼の一身の脈搏中に燃える熱情が、やがて作物の主人公を興奮させるのである」と。正しい鑑賞である。けれども、彼は今や、生れ故鄕のワレンシヤでは、生き神のやうに崇拜されて居る。近頃のこと、ワレンシヤ市では、彼の生誕の日に一日の祝日が催ほされ、その紀念として、帆の上に、イヴ・ニエスと描かれた船が船卸しされた。

サアヴンテスを憶ふ

イバニエスについて憶ひ起されるものは、三世紀前において、「ドン・キホオテ」の世界的大作を殘したところの、ミギウル・ド・サアヴンテス・サアヴエドラでなければならぬ。彼はシエエクスピイヤの死ぬ十日前の、一六一六年にマドリッドで死んだのであるが、いわゆる「子供は頁をかへし、靑年は讀み、壯年は理解し、老年がそれを賞讃する」といはれる「ドン・キホオテ」は彼が負債のために入獄した時に、六十歳に近い彼が獄内で書いた勞作であつた。彼の生涯は悲慘と貧乏の延長であつた。それにかゝはらず、彼の作物は、スペインが一世を擧げてデカダンスに陥ゐらうとする、絶望の國民に理想の光を與へやうとした偉大な藝術であつた。世界中の最强で、何物も打克ち得ないと信じられた大アルマグ艦隊が、見る影もなくイギリスに打ち破られて、北海の荒波に漂つて居た。或は沈んだ。一五八八年、スペインはこの一線を境として、永久に强國の權利を失つた。國民の大半が深い絶望に沈んで居る。或るものは、せめてものの甲斐ない過去に縋りついて居る。又た或るものは、そうした現實の悲劇に眼を閉ぢて、どこまでもスペインの偉大を信じやうとする、すべては懐疑と不安の世界に漂ふて居るのであ

る。「ドン・キホオテ」の生れたのは、そうした當時のスペイン人の白日夢を諷刺し、それと共に、百も千もの艱難と危險を快活に、平氣に通つて行かうとするその勇氣、忍耐、正直さ、それ等は凡て彼の祖國人が、これから辿り行かねばならぬ道を啓示すべきものであつた。それは批評家と宮廷人には不機嫌で迎へられたが、國民は皆な歡迎した。國民が、だまりこくつて暗默の中に模索しつゝあつた理想の光が、この大作によつて始めて反映され、純眞な國民の感情が、これによつて始めて表白されることになつたからである。また「世界文學」は著者リチャアド・モルトンの云ふところによれば、「ドン・キホオテ」は、歷史的展開の、最も興味ある尖點に立つものだ。なぜなら此時代は、騎士の世界が過ぎ去らうとし、來るべき産業世界が、しづかに地平線に現はれんとした時期だから」「かくしてサンチヨオ・パンサは、我等の前に、大衆に共通するところの、階級感覺を見せて呉れて居る」と

サアヴンテスが三世紀前に採り上げた途を、三世紀後に踏んで行きつゝあるものはイバニエスである。たゞサア・ヴンテスが諷刺をえらんだのに對して、イバニエスは、正面からの攻撃によつて行かうとするだけのちがひだ。いな、サア・ヴンテスがたゞ祖國を目覺まさうとしたものを、イバニエスは、祖國とともに、更に世界人類に呼びかけやうとする一點に時代の相違がある。そして、サン・ヴンテスが貧乏と不遇の谷間におちこんで死んだのに、イバニエスは著書の版權と賣行きから集まる素晴しい富みと、はなやかな名聲の誇りに、昂然として濶歩して居る!。

戀愛作家としての彼れ

彼の容貌にあらはす表情は、活動の人としてよりも藝術家である。彼の眼の光は鋭どい。鼻が大きくて恰好がよく、額が廣くて肉附がゆたかに、耳が丸くて大きい。牡牛のやうな短かい首で支へられた彼の頭腦は、深い思想家、鋭どい觀照家、そして精力にあふれた人格を反映すると或る批評家が語る。

觀照家としての彼を現はすものは、彼の大戰後の第三作たる「女の敵」でなければならない、そこでは、ランア生れのルビモフ公爵が、歐洲大戰を海青いモナコに逃れて、貪慾の修羅場におちこんで行くところの、世界人類のいたみを、限りのない人類愛をもつて詠嘆して居る。「蒼空はわれ等の悲しみの何ものをも知らぬ。われ等は、この無窮の中にたゞ獨り住むものだ。頼りとするものは、たゞわれ等自身の人生と、幻影と望みたゞそれだけだ。」……人間が頼るべきはたゞ人間だ」けれど

も、公爵ミハイル・ソエドル・ルビモオツフは、悲しげに自分を見かへる。「彼はこれから何をしやうとするのか。彼の如き人間が、彼等の同胞人類に何をしやうとするのか」飽くなき享樂に生の焰を殘り少なに燃やしつくした彼は、さびしい幻滅の老境を、世界動亂の暗い影に浮べて深い省察に沈む。この作物は、おそらくイバニエスが、慌たゞしい社會激動の感激から離れて、大戰後における世界の運命と、人類の悩みに、深く沈潜しやうとした企たてにおいて、落ち着いた彼の、心的生活の沈靜を語るものであり、そこに彼れの作物として、一つのエポオクをくつきりと劃するものとして記錄される。彼れの最長編であるにかかはらず、彼の作物の中でも、もつとも現實的に、また思索的に考へられる作物でもある。

戀愛の種々相

けれども、彼が一たび戀愛の詩人として、また郷土色の色彩畫家として創作する場合には、彼は南歐特有の燃えつくやうな激情と情緒の熱を、ありつたけ傾け盡して飽くことを知らない。たゞもう嫉妬のやうな愛慾の淵へ眞逆樣に飛び込んで、身も、心も、法悦地獄の焰に燒きつくしてしまう。そこに近代型であるよりも、ずつと原始的なものが多くひそむ。「激流」と「五月花丸」がその標本である。「激流」では、女優レオノラと、青年政治家ラフアエルの熱愛と戀ざめの、二つの心の世界が取扱はれて居る。愛が深刻であるやうに愛の憎みも深刻である、激流の戀である。「ラフアエルよ、どんな事があつても私を捨てちやいやですよ。愛して下さい、さあ、私を愛することをこゝで誓つて下さい、いつまでも、いつまでも愛すると、——こんなに私の熱情をかきみだして置いて、それで捨てるといふなら殘酷ですよ」、夜の鶯が、愛の唱歌をうたひつゞける深林の下で、限りの無い抱擁にひたつた夜のそのレオノラは、その後月日が何千と流れたマドリツドの町の中で、偶然に出遭つた艶やかしい政治家ラフアエルに、「二人の間に横はるものは死骸だけですよ、それが私共の近寄らうとするのを妨げるのです」と答へる。「死骸?」と、ラフアエルが尋ねると、「さうですともさ、貴方は戀を慘殺したぢやありませんか、たゞそれだけです」と冷笑したレオノラでもあつた。恐らく美女レオノラが一生の中で、この笑こそはかの女の一番美くしい、すごい艶やきの一刹那であつたらう。

「五月花丸」は、愛の三角闘爭を捉へて、イバニエスの戀を描いたものの中で、一番物凄い、殘酷な愛熱を歌つたものである。また最も戯曲的なものである。それはズウデルマンの「沈

默した水車場」と同じやうなシインでありながら、ドイツの作家に見る憂鬱がない。弟の愛人を妻として、自分の子としての一人子を持つ、けれどもその一人子は、實は弟の種であることを知つた兄がそこにある。燃べられた沈默の怒りが、南國的情熱を浸した男性の胸をついて逆り出る刹那に、どんな烈しい噴火となつて湧き上ることか。二人とも漁夫である。兄は戰爭に出て人間の血を味はつて居る。時は來た。兄が新造した五月花（ザ・イーフラワア）丸に弟と子供を無理に同乘さして嵐の日の沖へ乘り出した。大荒れが來た。黑い風よ、白い浪よ。兄は弟と子を殺さうとするのだ。狂ふ大自然の中に狂ふ人間の悲劇がある。殘刻な海が死の運命をしつかりつかんで居る。イバニエスの殘酷な客觀的描寫は、その激動の高調と、非類のないロマンチツクな舞臺を、魔のやうにぴつたりとつかんで髮一本もゆるがさない。

また戀愛心理の複雜性を、大戰といふ大きなスケエルに入りまぜたところの「我等の海」の獨探の女優こそは、イバニエスの女主人公の中でも、最もドラマチツクな悲劇を描いたものと云はねばならない。それは性格悲劇であり、同時に境遇悲劇でもある。虛榮の悲劇を描いたものでは、彼の作には、この外に最近の「惑わしの女」がある。南米における大仕掛けな拓殖事業の滅落が、一人の女性によつてひき起された虛榮の女性である。けれども虛榮は Bad ではない。それは「あまりに多くを望んで、あまりに少なくしきや酬はれない」刹那に、どの女性にも痛感させる必然性の矛盾である。こゝに美くしい女性の、生れながらの悲劇がある。が、それは心理上の悲劇である。道德性がそれを審く權威をもたぬとイバニエスが考へる。だから彼はこれ等の女性を、心からいたみ、泣きこそすれ。決して彼等を憎惡しない。彼れの女性觀の一つの特異である。

「女性の勝利」こそは、彼の美術觀と、女性觀をしつくりと飽和さしたものである。キリストの聖像のみを描くところの、師ラファエルの古典的な聖心にあきたらず、近代型の裸畫に心を惹かれた偉大な畫家レノオヴルスが、飄然として師の門を去つた。そこに時代の心の差別がある。そして貞潔そのもののやうな妻のヨセヒナをすてゝ、肖像畫をたのまれたアルベルカの伯爵夫人と戀に落ちる。が、彼はあまりにしつこく、熱着深く、妖魔的な、そして近代的に頽廢した伯爵夫人の戀の壓迫に遂に堪へきれなくなつた。そしてその息苦しさから逃れ出て見るとやさしいヨセヒナの憶ひ出が今更にひしひしと心を浸す。彼はつひに狂はしくなつた。これからは、たゞ氣が拔けたやうに畫室にとぢこもつて、死んだ妻の肖像を描く。永遠の女性の面影をそこに鑄込まうとするのだ。女性の永遠の勝利である。

感情解放の悲哀

彼の崇拜するヴヰクトル・ユウゴオもよく戀愛を描いた。たゞその間に相容れない差別がある。ユウゴオの戀は、みな犧牲するものの戀である。いな、彼の作品の重なる主人公は、みな犧牲に生きる人生である。「哀史」「九十三年」、「海に苦しむもの」、いづれかそうでないものがあらう。イバニエスの戀愛はそれと對蹠に立つ。彼れの戀はみな自我の解放であり、自我の葛藤である。一歩も相ゆづらない。たゞ闘ふ。死ぬか、敗れるか、征服するかである。いな自我の葛藤とはかぎらない。人類と、來るべき社會に奉仕すべき、信念と熱情に燃えるシインにおいてさへも、彼の作物の結末は、いつも淋しい絶望か、哀れにおはつて居る。そして彼れの作物では、かさの厚い重苦しさが、いつも讀者の胸をつよく壓迫する。なぜ彼の作物が、そうした絶望にのみ終るかとなれば、彼れの作物そのものが、たゞ強い感情の放出と衝撃そのものであり、そして彼の作物の最後のクライマックスが、そのはりつめた最高度の感情が悉とく放散されつくした刹那の、ぐつたりした疲勞の心理そのものであることから來る。だから、彼の社會的作物は、その結末において、いつも來るべき人道の世界を、希求し、理想し、また當來をかたく信仰するのではあるが、一方にその當來を信仰する熱烈さは直ちに現在に絶望した悲觀の强烈さを反照するものである。「スペイン文學史」の著者フオドが、「どんな愉快な色彩も、彼れのあらゆる作物に掩ひかゝつて居るところの、陰鬱の氣分を救ふことが出來ない。彼は彼の綺絹に、たゞ陰影と悲慘の場景を表現するだけの美術家である。それはすべての光明と歡樂をぬりけして了ふことを意味する」と言つたのは、イバニエスの、燒きつくすやうな社會人類改造に對する、あの信念において忠實な批判とはいへないが、また他方イバニエスの作物に、そうした傾向をも充分に宿して居ることは爭へない。たとへば「血と砂」のやうな、力と戀に衰へて行くところの、闘牛士の悲哀にこもる淋しい哀調の如き。

彼の藝術的地位

彼がゾラとユウゴオに最もよく似寄つた一點は、彼がフランスの二作家と同様に、そのおそろしき豐富な歴史的知識を、裸かな知識として到るところのその作物にたゝき込む習癖にあるけれどもそれは多くの場合に、無用であり、邪魔であるとも、そして作物の緊張を妨げるとも、決して助けにはならない。「我等の海」の地中海、「死者の統治」のカブリ島、それから、フヲ

ウペルの「サランボオ」と、同じ時代とハンニバルを中心にした「ソンニカ」が、到るところで、ギリシヤの社會生活を說教するなどもその一つである。われ等はお蔭で、小說以外の知識を得る。けれどもいさゝか目障りであるには相違ない。妙な趣味である。

彼はゾラのやうに、社會改造の信念に燃えると共に、あまりにユウゴオのロオマンチシズムに陶醉して居る、前代ロオマンチシズムの唯一の死線は、內から或る人生の生長を凝視せずに外から或る人生を構圖し、組織することであつた。が、人生はいかなる場合にも、人の考へるやうにそう都合よくまとまりがつくものでは無い。然るに前代のロオマンチストは、遮二無二辻つまの立派に合つた、巧みにまとまつた人生を作り上げねば承知しなかつた こゝに人生の眞實と眞理に對する反逆がある無理がする。しかし通俗人は、元々藝術を一つの技巧とし、假想としてルウズに考へ、現實に求められぬものを、藝術に求むべきものだと肯定する故に、かゝる假想の人生をかへつて歡迎する。けれども、人生の現實と眞理に信念する眞の藝術から見れば、それは當然にゆるされ得ない詐僞であると考がへられる即ち近代において、現實的ロオンチシズムが誕生したのは、この意義の修正として意義があつたのだ。然るにイバニエスが、或る點まで、舊ロオマンチシズムの通俗味を脫けきれないと眺められるのは、彼のあまりに豐富な體驗が、どうかすると、自ら知らずに、そうした、あまりに都合のよい脚色を拵らへあげるところにある。それとも一つは、彼がイタリイや、ロシアやフランスのやうな、或は殆んど廢頽の一線にまですべり込んで來た處の、神經纖維の纖細をいくらか缺いて居るとにもある。

けれどもこれはイバニエスばかりではない。すべての現代のスペイン作家は、一人のこらず、ピレニイ山脈を起して來たところの、自然主義と浪曼主義の交錯した藝術の中に、洗禮されそしてそれを潜在する。そしてそのさんらんたる表現をもつてスペインの民衆が獨自に持つ藝術觀念と、藝術感情を自由に世界に向つて表白して居る。元來環境と國民性を全然異にするところの、或る國と或る國の作家の價値を比較するのは全く意味のないことだ。藝術家はみな箇性の創造としてのみ價値があるからである。だからイバニエスは、イバニエスで充分である。その豐滿な感情と、偉大な體驗と、雄大なスケエルと、力に滿ちた技巧と、憧憬をこめた鄉土色の美の咏嘆とは、どれもみなイバニエスの藝術の色調を特異にするものでなければならぬ。たとへ彼と相並んだスペイン現代の作家ピオ・バロオハが、彼れ獨特の皮肉で、イバニエスの「我雜」を嘲けつたにしても。

けれどもイバニエスを、廿世紀の世界藝術界の前哨線に置いたものは、何といつても、彼が熱烈な人道的愛の感情をもつて世界改造を提唱したところの、時代の聲の表現者としてでなければならない。彼は嚴密な意味で思想家とはいへない。が、少くともその銳どい時代感情の敏感と洞察が、現代以下の藝術家に暗示する或るものがあることはたしかな筈だ。



回顧四十年

馬場孤蝶

（六）

硯友社の勃興は、坪内氏によつて始められたと見るべき前はど明治の新文學の運動を直ぐに受けて起つた現象と云つて宜しからうと思ふ。創作の主義は坪内の主義と全く同じな客觀主義、前期寫實主義と云つていゝものであつた。その社中の重なる人々が皆當時大學豫備門に籍を置いて居た點などから云つても、かくも坪内氏が當時の最高學府卒業者の位置から身をその當時では世人から全然度外視されてゐた小説の創作界へ投じたことの影響を受けたものであることは明だと思はるゝ。

硯友社が開業となつたのは何年頃であるのか正確には今知るを得ないのだが、僕自身が『我樂多文庫』といふその機關雜誌——四六四倍版位の折りッぱなしの新聞形のもの——を手にしたのは、明治十九年以後ではなかつたやうに思ふのである。それはその雜誌の十號とか二十號とかいふやうなのではなく、少くとも印本になつてから僅に數號だつたものであつたやうに記憶してゐる。その號には、何ういふ人々が執筆してゐたのか、それも今はもう何等の記憶もないのだが、唯山田美妙齋の『夏木立』か何かの批評が載つてゐたかと思ふ。硯友社創立の當初には美妙齋もその加盟者の一人であつて、間もなく何かの事情で脱退したといふ譯ではなかつたらうか。

とにかく『夏木立』は美妙齋の短編小説集のやうなものであつたやうに思ふ。武藏野で討死する武士の話などがあつて、その挿繪か何かのところに、『古里に今宵限りの生命ぞと知らでや人の我を待つらん』といふ歌が引いてあつたやうに思ふ。序に一言して置くが美妙齋は、長谷川二葉亭と共に、我國小説界

での言文一致の創始者として、歴史的には忘るべからざる人である。二葉亭は『だ』とか『のだ』といふやうな章尾で、一種の文章體を採つたのだが、美妙齋の方は『ます』『です』といふやうな口語體を用ゐたのであつた。

勿論二葉亭も明治の新文壇へは早く出た作家の一人であつて、翻案の趣き——ツルゲエネフの『餘計者の日記』などからの——のあらはな『あぢけなし』といふ小説の出たのは、矢張り明治十八、九年の頃であらうと思ふ。系統——親近した先輩から筋を引くとだけのものだが——から云へば、二葉亭と嵯峨の家おむろは坪内氏の系統に屬する人々と云つて宜しいのであつて、硯友社とは、別派であつた。當時不知庵と云つた内田魯庵氏も、坪内氏の方へ近い人で、硯友社とは別派であつたと思ふ。

所で、硯友社では、尾崎紅葉、川上眉山、江見水蔭、石橋思案、巖谷漣山人、春亭九華、などといふ人々がその重なる作家で、刑法學者の岡田朝太郎氏も幽心亭といふ號で、その一員であつた。廣津柳浪氏の加盟は少し遲かつたのではなからうかと思ふ。

『我樂多文庫』は間もなく、四六四倍版位の、赤で落款の形を擬つ[illegible]つた表紙つきの雜誌になつて、數號刊行されたと思ふ。紅葉の二宅樂といふ女學校の習字の教師が女生徒のうちの美人——少し足りない生れの娘——に懸想するといふ筋のものが載つてゐたことを記憶する。他の小説も大抵男女の學生の生活を題材にしたものであつた。勿論、坪内氏の『書生氣質』よりは、描寫の幾分複雜なものであつた。その時分でさへ、紅葉の作物は、その筆致に才氣の溢れてゐる點や、固よりまださう太したものではなかつたが人生知識ともいふべきものゝ、社中の人々よりは幾分多かつたらしく見える點などに於て、一派の主領たる勢を可なりに示してゐたやうに思ふ。

『我樂多文庫』は、やがて『文庫』と改題して、菊版になり、それが又『閨秀文學』となり、『江戸紫』——これは別紙の表紙を用ゐない折りツぱなしの菊版位の大きさの雜誌——になつた。

ところで、淡島寒月氏なんださうであるが、愛鶴軒といふ名で西鶴のことが紹介されたのは『文庫』の誌上であつたやうに思ふ。

井原西鶴の諸作、續いて江島屋其碩（自笑）などの所謂る八文字屋本に、當時の新文壇の人々が接觸した結果が、それ等の諸作から殊に西鶴の忌憚なき人生に對する觀察及び人間の肉慾に關する透徹せる描寫からは固よりのこと、その含蓄に富める

簡結、——時には遒勁の域にも達したる——の筆致から、當時の文壇に於ける俊秀の人々が學び得たるところの多かつたことは、今更こゝに贅するには及ばぬと思ふ。

さういふ風な所謂る元祿文學が創作家の思想及び文體に影響を及ぼし得る力は、明治二十八、九年頃までは、確にその勢を持ち續けたことは明である。

（七）

硯友社の『我樂多文庫』によつての旗上後は明治小說界の行路は殆ど坦々たる平路の如き觀があつたと云つて宜しからう。

硯友社の外の文學團體としては、可なりルーズの團體ではあつたらうが、饗庭篁村、森田思軒、條野採菊、前田香雪（健次郎）、南新二氏などの『新小說』派を擧げて宜しいであらう。

雜誌『國民の友』の發刊が何時頃であつたか明には記憶せぬが、大抵二十年頃であつたらうとは推定せらるゝ。始めは勿論、政治の議論專門のものであつたのだが、直きに發行者德富氏の烱眼は、當時長足の進步を示し始めた純文學が我文化の現象の一として決して輕視し得べきものでないのを看破したる爲めか、それとも、當時の正典派とも目すべき森鷗外、落合直文氏等が、英國流進步派の機關として、青年間に可なりの勢力を有してゐた『國民之友』の一部をば、文學的機關として活用するの目的を以つて、森氏等の方からして、進んで德富氏を動かしたものであるのかその孰れであるかは、此所では判じ得ないが、森氏、落合氏などの筆になつた譯詩集『おも影』『新聲社』輯といふやうな署名の下に、『國民之友』の附錄のやうな形で出たのは、明治二十二年頃のことかと思ふのだが、それには、ゲエテの『ミニヨンの歌』バイロンの『マンフレッド』などが譯出されてゐたことを記憶する。

鷗外氏の『しがらみ草紙』の旗上げは、確に此の『おもかげ』を先驅としたものと見て宜しからうと思ふ。

坪內逍遙氏を盟主とし、島村抱月、後藤宙外、水谷不倒等の諸氏に加ふるに、遊擊の意味で饗庭篁村氏を加へた『早稻田文學』の發刊も『しがらみ草紙』と殆ど同時位と見て宜しからう。

小說專門の雜誌『都の花』が金港堂から發刊されたのは、明治二十二年頃であつたらうかと思ふ。初號には、美妙齋の『花車』といふのが卷頭に出て居たと思ふ。二葉亭の『めぐりあひ』『あひゞき』嵯峨の家の『初戀』が出で、露伴氏の『露團々』が出たのは、此の雜誌であつた。ずつと後になつてのことであるが、二葉亭の創作小說『浮きくも』が、矢張り此の雜誌に出た。

硯友社の諸氏の作物は『都の花』には殆ど出なかつたやうに記憶する。

饗庭氏等の據つた『新小説』が春陽堂から出たのは、幾分『都の花』に對抗したやうな意味かとも思はれるのだが、後者の方が新進の作家を紹介する主義であつたやうなので、後者の方がはるかに賑かであつた。そんなところを見ると、前者の執筆者の方では、別に對抗といふ程の心持もなかつたらうかと思はれる。春陽堂が、饗庭氏が讀賣新聞へ書いたものだらうと思はれる短篇を集めた『むら竹』を刊行したのも、大凡その時分であつたらう。

工學士（？）吉岡氏經營の吉岡書店から『新著百種』といふ創作小説の叢書が出たのは、二十二年より遲くはなかつたやうに思ふ。第一卷は、紅葉の『色懺悔』であつた。筋は傳奇的の戀愛物語の部に屬すべきものであつて、當時に於てさへ決して推賞すべき程のものではなかつたが、文體――それも未だ熟したものとは云ひがたかつたけれども――に於て、如何にも若々しい華やかさと、氣鋭の作家に共通な幾分新味の試みの含まれて居る點に於て、若き讀者の心を魅した傾があつて、作家の文壇に於ける位置がこれでよほど確保されたことは疑ひないと思ふ。

『新著百種』の第二卷は饗庭氏の『堀り出し物』であり、第三卷が巖谷氏のものであり、廣津柳浪氏の『殘菊』はそれから少し後になつて出たと思ふ。これは肺病の女か何かを取扱つた極くヂミな小説であつたと記憶するが、柳浪氏の文壇への出現は大凡此の作の發刊からと見ても宜しいであらう。岡田虛心亭氏のものもそのうちの一卷として出たのであるが、今はその内容は勿論、表題までも憶ひ出し得ない。

『新著百種』は四六版の、色刷りの紙表紙二百頁かそこらの少さい本であつた。『むら竹』も同じ型であつたが、何れが先きであつたかは、今記憶してゐない。その時分には、さういふ型のものが稍流行の傾きでもあつたのだ。

（八）

少し話が後戻りする嫌ひはあるかも知れぬが、明治二十五、六年頃から以後の文壇の新潮流を語らんが爲めには、こゝで是非とも言及して置かなければならぬ出版界の現象がある。

明治十四、五年から始まつた飜刻のことは前に擧げたのだが、明治二十一、二年頃からもまた盛に飜刻が行はれだした。前の時代の飜刻は、文學の方面で云へば、主として、文化、文政度の小説であつて、先づ民衆に娛樂的讀物を供するといふだ

け位の目的を以つてしたに過ぎなかつたのだが、後の時代の飜刻は、出版者が讀書界の進歩に着眼して、謂はば日本文學の研究資料となり得るやうなものを供給するといふやうな意味があつたと見做して宜しいと思ふ。固より、なかには、稍稀覯書になつて居るものを飜刻してみるといふやうな考の出版者のあつたことはいふまでもないことではあるが。

それらの有意義な飜刻のなかで、吾々の今も尙記憶して居るもの丶うち、第一に擧ぐべきは、神田宮本町の武藏屋といふ小さい本屋から出た近松門左衛門の丸本であるが、これは四六板で大抵一篇が一冊になつて居るのであつたから、極く薄いパンフレットであつた。大近松のもの丶みならず、『大塔宮曦鎧』とか、『心中二河白道』とか、『末廣十二段』といふやうな出雲、海音の曲も二三篇出た。西鶴もの丶飜刻も武藏屋が一番早かつたと思ふ。『五人女』と、『一代男』が小冊型で出た。挿畫はなかつた。

『一代女』は大阪の本屋から出た。其所からは『西鶴置きみやげ』の外に、『古著百種』の表題で、其頃の『傾城曲三味線』『傾城禁短氣』その他の収められたものが刊行された。これは、四六版假り綴ぢの本であつたが、表紙にも何か模様のやうなものがあり、なかには原畫が復刻してあつた。『文反古』も、少しも飾りのない四六版の本で出たが、今出版者を記憶してゐない。

春陽堂からは、紅葉の校訂で『本朝若風俗』（男色大鑑）が出た。無論、四六板の假綴ぢの本ではあつたが、印刷、校正の具合など可なり丁寧なものであつた。

當時文學靑年であつた吾々はさういふ飜刻を通して、所謂元祿文學に接したのであつた。

尤も、熱心な人々は、もう旣に原本の蒐集を始めてゐた。物價の安い時分であつたので、今日百圓以上でなければ何うしても手に入らないやうなものが、五圓足らずで大威張りで買へたのであつた。現に西鶴の好色本が一部（五冊もの）が五圓だといふのであつたが、その時分にはその五圓が吾々には可なりな金高であつたので、買ひ兼ねたのであつた。今日になつては、全く夢のやうな話ではないか。

それでも、島崎藤村君などは、原本を買ひ集めてゐたやうであつた。藥研堀あたり、あれはもう濱町何丁目かになるのであらうが、小柄なコチ／＼と痩せた爺さんの店主の小さい和本屋があつたが、島崎君はそこから古い和書をよく買つたやうであつた。

島崎君から『武士義理物語』の一冊欠けた本を貰つて、今尙保存してゐるが、この本も右の濱町の爺さんのうちから出たも

のではないかと思ふ。

僕自身もその店で、丸本を少し買つたことを覺えてゐる。

日本の古典の飜譯が安い叢書になつて出始めたのも、矢張り明治二十一、二年頃からだと思ふ。博文館から出た『日本文學全書』『續日本文學全書』『日本歌學全書』『續日本歌學全書』——前二者は落合直文、小中村（池邊）義象二氏校訂、後二者は佐々木信綱氏校訂で、各四六版の十二冊から成つてゐた——は當時の讀書界に取つては、極めて、便利なものであつた。

大阪からであつたと思ふのだが、『湖月抄』——これは二三他の註釋書の加はつたものであつたやうだ——が四六版の五六冊本で出た。

『萬葉集略解』——これは菊版——が飜刻されたのも、大凡同じ頃であつたらう。

『百家說林』（正續）——菊版で二十冊——が吉川書房から出、『溫知叢書』——四六版で十二冊が博文館から出たのは、それより幾らか後になつてである。

俳書の飜刻も幾つか出た。これは四六版で無論洋紙に刷つたものではあつたが、大抵和書の體裁を模したものであつた。『芭蕉一代集』『俳諧七部集』はまだそれ程和書型ではなかつたが、『本朝風俗文選』、『俳諧寂栞』、『鶉衣』、『俳諧畸人傳』などは、更紗の帙に入つて居た。

念の爲めに、記して置くが、明治十四、五年の德川文學の飜刻は大抵日本紙であつたのだが——當時の文學的新刊書が大抵日本紙刷りであつたと共に——こゝに云ふ明治二十一、二年頃以後の一般書籍は洋紙刷りになつてしまつたのであるから、以上に擧げた飜刻書は皆洋紙刷りであつた。此の時代では、餘程特殊な書籍でなくば日本紙には刷らなくなつてゐた。又之を裝釘の方から云つても、前代の文學書の表紙に彩色畫を用ゐるといふやうなことはなくなつて、精々のところで、模樣を描いた表紙を用ゐる位なことになつてゐた。尙、さういふ風な裝釘に進步を來した結果、クロツスの使用が廣くなり、念の入つた裝釘の書にあつては、前代よりはズツと良質のクロツスが用ゐらるゝと共に、小說書の口繪——これのみは日本紙刷り——に刷り彩色に手數の加はつたものが附けられるやうになつた。尤もさういふ美裝小說は大抵春陽堂から出版されたのであつた。本文なかの挿繪はさういふ謂はば高級出版物では最早廢されてゐた。要するに、本文のなかへ幾つも挿繪を入れる代りに、口繪に念を入れるといふ譯になつたのだ。

序に記して置くが、春陽堂からは、紅葉の『此のぬし』、篁村の『勝鬨』などを收めた木版刷りの日本紙の叢書、それから

紅葉の『七十二文生命の安賣り』緑雨の『かくれんぼ』などを收めたもう少し薄い叢書——これも日本紙の木版刷りが出た。

（九）

讀賣新聞が改進黨の機關紙となつた關係上、高田早苗氏が同新聞の幹部になつた爲めであらうと思はれるのだが、同新聞が文學に重きを置くことになり、坪内氏先づ一臂の力を借し、次いで大學出身者であつた紅葉を社員として聘したので、硯友社の人々が自然讀賣新聞に據ることになつたのは、明治二十三年頃のことであらうと思ふ。

因みにいふ。尾崎紅葉、川上眉山、石橋思案（當時は思案外史と署してゐた）の三氏は、硯友社創立の當時は大學豫備門在學であつたのだが、石橋氏は退學し、尾崎、川上の二氏は大學の法科に進んでから、やがて文科（國文科？）へ轉じたのだが、直きに退學してしまつたと聞いてゐる。當時の文學者では、內田不知庵氏と石橋忍月氏とが豫備門に學んだ人であらうと思ふ。內田氏中途で退學したが、忍月氏は法科に進んで卒業した。山田美妙齋も豫備門にゐたのではなからうかと思うのだが、これは確には知らない。漣山人（巖谷小波氏）は獨逸協會の出身だと聞いてゐる。

硯友社の諸氏が文壇に於て十分に地歩を占めると共に、その作物發表の壇上としては讀賣新聞を有し、出版書肆としては、春陽堂をその藥籠中に收めるといふ勢になつて來たのであるから、前日の如く『我樂多文庫』その他のやうな意味の機關雜誌の必要はなくなつたのではあらうが、尙硯友社の風を望んでその傘下に集り來たらんとする後進の爲めとでもいふのでもあつたらうか、一、二の小雜誌が發行された。その一つは『千紫萬紅』といふので、會員組織といふやうな風になつてゐたので僕は或る日、金富町の石橋思案氏を訪ふて、入會の申し込みをしたことがある。何でも三月分か、六月分かの雜誌代を持つて行つたと思ふ。誰だか先客が座に在つたやうに思ふのだが、石橋氏から

『何かお出來ですか』

と云はれたことだけは覺えてゐるが、何んな話しをしたのだか、何ういふ風にして、別れたのだか、その邊の記憶になると全く夢のやうに朧氣である。多分さしたる事は語り得ず、又問ひも得せずに引きさがつたに違ひなからう。

尾崎氏との初對面の方はそれよりはズッと明に記憶してゐる。

時は明治二十四年の八月上旬、場所は相州の酒匂の松濤園に於てであつた。

親類の者が病氣であつたので、その附添ひに行つて松濤園の離れの二階に泊つてゐた僕は、病人が晝寢のひまに、ゾラの『ナナ』の英譯を持つて、松濤園の母屋の庭の松の根方に腰をかけて、頁をめくり出したが、一寸と一間位離れたところに二十六七位に見える、眼の鋭い、如何にもキリ丶と引き締まつた顔だちの若い男が、踞がんで、砂を握つては指の間から滾ぼし、又握つては滾し丶て、如何にも無聊らしい風で居る。着てゐるのは宿の借し浴衣か何かで別段注意を引くやうなものではなかつたが、締めてゐた、しごきは當時の僕のやうな全くの書生には、一寸眼につくものであつた。濃い納戸色か何かの豆絞りであつたが、何うも縮緬ではなく、羽二重のやうなものではなかつたかと思ふ。

『ゾラをお讀みですか？』

と先きから言葉をかけられたので、

『え丶、面白いものだと聞きましたもんですから、友達四人程で云ひ合せて、「ナヽ」を四冊取つて、讀むことにしたんですが、私は今それを讀み始めたところです』

と、答へると、

『それは惜しいことでしたな、同じものをお買ひなさらずとも、皆さんがちがつたものを一冊づつお取りなすつて、交換してお讀みなすつたら、よかつたでせうに』

と、いふやうな意味のことを云つてから、ゾラの作物の話をいろいろしてくれた。坪内氏からもゾラの諸作物の話を聞いたのだが、何とかいふ作は斯ういふのださうで、又何とかいふ作は母子の不倫の戀を取り扱つたものだといふやうな話であつたと記憶する。

話しの樣子で考へると、その人は文學の智識を可なり豊富に持つてをるらしいのであつたが、何ういふ人であるのか、まだ一寸と見當がつかなかつた——當時はまだ新聞は勿論のこと、雜誌にも文學者の肖像などの出ることはなかつたのだ。

勿論、話はおもに先きからのみ語り續けられるのであるが、それでも、何となく親しみは加はつて行くやうな感は增して行くので、それが如何なる人であるか、此方から聞くか、先方から名乘るかしなければならないやうに、だん／＼なつて行くのであつた。

此方からも『貴名はどなたですか』とブッキラボウに聞くのも、何だか我殺なやうな氣がしたし、先きも又、『實は私はかういふ者だ』とぢかつけに名乘るのも何だか不遜のやうな感じを

此方かもしれぬといふやうな遠慮もあつたものか、自分の身の上を暗示するやうなことはなか〳〵云はなかつた。さうなつて來ると、此ちらからは少しづつ話を進めて、先きの身分を言ひ當てる範圍を次第に縮少して行つて、『あなた何それ君でせう』と云ひ得るやうな點に達することに骨折り、先きは先きで又、少しづつ此方からさう云ひ得る點に達するのに便利な材料をそろそろと供給しなければならないやうになつて行くのであつた。

文壇の話が始まつた序に、僕は『千紫萬紅』のことで石橋氏を訪うたことを話した。けれども、それは話の始まつたずつと始めの時なので、その時はまだ先きを誰だとも少しも見當のつかなかつた時であつたと思ふ。

そのうちに、或る新聞から頼まれて、奥州の方へ或る史實を調べに行つたが、その史實に就ての重野（安繹）さんの意見はかうかうであつたといふやうなことを、先きから話しだした。

『では讀賣にご關係ですか』

と僕がいふと、先きは

『えゝ、さうです』

と、答へた。

もう大抵分つたやうな氣がしたけれども、まだ何とも云はずにゐた。

やがて、話が西鶴の作品のことに轉じて、西鶴の好色本に淫猥の挿繪のあるものがあつた、それは可なり高價なものであるといふ話もしてくれた。それから、西鶴が作中の人物の肉交に至るまでの描寫の段取りともいふべきものゝ見事なのを激賞した末に、遂にかう云つた。

『西鶴の文中には師匠の西山宗因の俳句が大分使つてあります。私が或る本屋から頼まれて「男色大鑑」の校訂をやつた時にも、方々に宗因の句が使ひ込まれてゐるのに氣がついたので、註でも入れて置かうかと思つたのですが私の氣の着かぬのが若しあつては、それもせんのないことだと思つたんでやめました』

其所で、僕は笑ひながら、

『あなたは尾崎さんですね』

と云ふと、先きでも

『えゝ、さやうです』

と、云つて、快く笑ひ出した。やつと、それで双方とも重荷をおろしたやうに感じたのだ。

その晩、尾崎氏の部屋――母屋の二階の一室――を訪うて雜談をしたが、尾崎氏はサイフホンのラムネを飲みながら、僕

の質疑に答へてくれた。正直正太夫の名で、短文の評判を讀賣へ書ひてゐた齋藤のことを聞いてみたのだが、

『あれは唯あゝいふ皮肉なことを書くだけの男で、何でもありません』

といふやうな答へであつた。緑雨がまだ眞伎倆を發揮しない時分のことであつたので、此の評はさして無理ではなかつたであらう。

その外の話しでは、越路と綾瀬との優劣論とでもいふやうなことを一寸やつたことを覺えてゐる。尾崎氏は、ひどく綾瀬を擧げたが、僕は承服しなかつた。

翌朝になると、病人に附いて箱根へ行くことになつたので出發の挨拶に來た女中頭のやうな女に、

『母屋の二階のお客さんに宜しく云つてください』

と賴むと、その女中頭が

『彼の方は一體何ですね』

と云うので、僕は唯

『新聞に關係のあるエライ人なんだ』

と、云つて置いた。

僕は八月末に東京へ歸つて來ると、職業をさがすのに忙殺され、それからその年の十二月に、高知の私立の英語學校の敎師の口を得て、土佐へ行つたので、尾崎氏を訪ふ機會がなかつた。

（一〇）

時代は大方飛ぶことになるけれども、序だから、尾崎氏に關する話だけを此所で書き終はつて置かう。

僕はもう一遍尾崎氏に逢つたことがある。

明治二十九年の一月であつたが、川上眉山君のその頃住まつてゐた小石川の上富坂町の家へたづねて行つて、訪なうと、內で、『來た、來た』

と、云つて二三人の笑ひ聲がする。座敷へ通ると、尾崎氏の年始廻りらしい袴羽織の出で立ちで、戸川秋骨、平田禿木などと、笑ひ話の最中であつた。

松濤園では何か事件があつたことは、兼ねて大體川上氏から聞いてゐたのだが、もつとくわしく尾崎氏の口づから聞いてみ度かつたので、その話を持ちだすと、

『イヤ、あの時は大しくじりさ』

と、尾崎氏は輕く笑つて、それから、翌朝になつてみると、財布が紛失してゐる。隣りの部屋に何うも怪しげな者が泊つてゐたのだが、そのことを尋ねると、もうとつくに立つてしまつ

たといふ。實は讀賣新聞のかういふ者だが、勘定は東京へ歸つて送くるまで待つて貰ひ度いと云つたが、宿では承諾しないそれでは昨夜來たむかうの離れの客が、私の身分を知つてゐる筈なんだから、あの人の證明を得て吳れと云つたところが、あのお客ももう立つてしまつて居ないといふ、それで何うにもしやうがないので、持つてゐた時計をかたに置て、宿を出た。といふ話しをして、

『イヤ、その宿を出て來る時なんぞは騙りの面をよく見てやれといはんばかりの風で、家ぢう帳場まで出て來ましたね』

と、云ふ、

『それでね、あんまり癪に觸はつたので記行を書いて、あの宿屋をこツぴどく退治てやらうと思つたんだが、後でこつちの身分を誰れかに聞きでもしたものと見えて、むすこが菓子折を持つてあやまりに來ました』

と、話を結んだ。

それから、閑如來君が折角自分の好みを盡くした正月着が出來後れたので、社の二階か何かに引つ込んで何處へも出ずに居たのだが、着物が出來てくると、早速まんべんなく年始廻りを始めたといふ話をし、

『着物が出來たら、やつさぞ方々廻るだらうと思つてゐたところが、果せるかな、知り合ひを一軒殘らず廻はつてゐる』

といふ風な口調で、一座を笑はした。

そのうちに、戶川氏が揮毫を賴んでゐたと見えて、

『僕に書けといふのは何ですか』

と云つて、戶川氏が『マアロオ詩集』——昔しの版のマアメエド叢書の分——を出して、これへ願ひますといふと、

『よし、早速書かう』

と、如何にも勢好く早口に云つて、焦茶色のズックの革鞄のなかから、旅卷の筆と銅の墨池を出して、詩集の見返へしへ、

『お目出たいものを書きますぜ』

と、云うが早いか、直ぐすら／＼と、如何にも達筆に書いて戶川氏の前へ詩集を輕く突きやつて、

『狼の人喰ひし野も若菜かな』

と、讀んで聞かした。

遒勁と優美を兼ね具へたクリストフアー・マアロオの詩集の見返しに書いたものとしては、如何にも適切な句だと云つて、戶川氏はひどく喜んだ。

僕は此の時きり尾崎氏に逢ふ機會がなかつた。

右のマアロオ詩集は、平田氏の手もとへ行つてゐて、明治三十一、二年頃、神田明神裏の平田氏の下宿が火事に逢つたので

その時燒けてしまつたとか聞いてゐる。

此所まで書いて來ると、『新著百種』のなかに幸田露伴氏の出世作と云つて宜しい『風流佛』が入つてゐたことを書き漏らしたことに氣がついた。當時の讀書界は露伴氏のあの作をあの叢書の光りと見なしたのであつた。

博文館から『日本之文華』といふ菊判の雜誌が出たのは、矢張明治廿一、二年頃だらうと思ふのだが、露伴氏の『緣外緣』が載つたのはその紙上であつた。その作は後で『對髑髏』と改題されたのだと思ふ。『五重塔』はもう少し後になつての作であらう。露伴氏は新聞『國會』の社員になつたやうに聞いてゐる。

（二）

明治二十五、六年頃の文壇は勿論小說が中心であつて、その小說壇の中堅となれるものは硯友社の諸氏であつたのだが、客觀主義に基いて作くらるゝ紅葉氏の小說にあきたらずして、もう少し主感を以つて讀者に臨み得る文學の他の形式はなからうかといふ風な考を持つた文學青年がだん／＼出來だしたと共に、文學者の評傳とか、作品の批評とか、思潮に對する評論などをもとむる氣運が讀書界に生じて來た。『早稻田文學』創刊の當時に於て、坪内氏が唱へた『沒理想主義』、それに對して森鷗外氏が『しがらみ草紙』に於てなしたる駁論、さういふ論爭は評論界に非常な活氣を吹き込む効果のあつたものである。坪内氏の『沒理想論』は勸懲主義排斥といふ位の意味のものであつたので、議論の陣立が十分でなかつた爲めに、森氏との取り組みではとかく受太刀の觀なくんばあらずであつた。その他森氏が『しがらみ草紙』に據てなしたる諸種の美學的論議は、當時の文壇に取つて多大の刺戟と指導になつたことは疑ひなきところである。

所謂る新體詩即ち新邦詩の曉明期も此の時分であつたと見て宜しからう。

中西梅花道人は專門の新詩人であつたが、專門でない人々の間にも、新詩に對する努力が致され始め、山田美妙齋氏の如き前記の『おも影』に執筆した諸氏の如き、十分尊重すべき態度を示してゐた。

北村透谷氏の劇詩ともいふべき『蓬萊曲』といふ長篇が刊行されたのは、明治二十五年頃であつたであらう。

少し詳しく書き度いこともあるのだが、紙數に制限もあるので、此所から直ちに、僕自身關係者の一人であつた雜誌『文學界』の一團のことを書くことにするが、その順序として、當時の文壇の分野といふやうなものを略記することゝする。

第一に擧ぐべきは、前に云つた硯友社の一團、次ぎは、早稻田文學の一團、それから、春陽堂の『新小說』を機關誌としてゐた森田、饗庭、篠野氏などの一團、新聞派ともいふべき半井桃水、右田寅彥、村井弦齋、村上浪六、遲塚麗水などの諸氏、遊星とみるべき內田魯庵、幸田露伴、山田美妙齋、齋藤綠雨——もうその時分には、綠雨の『かくれんぼ』も『油地獄』も出てゐたと思ふ——長谷川二葉亭、嵯峨の家おむろの諸氏、森鷗外氏の『しがらみ草紙』の一團、それから最後には、民友社の『國民之友』の文學的色彩が濃くなつて其所に集まつた山路愛山、人見一太郎、塚越停春樓などの評論家諸氏の一團、先づ大凡さういふ風に分れて居つたと思ふ。

所で、當時の思想界ではまだ基督教界の人々が新思想家であつたのだから、准基督教文士と云つて宜しかつた德富蘇峯氏の傘下に集まつた山路氏等の意氣はなか〱盛なるものであつたが、當時の基督教界での花形の觀のあつた巖本善治氏は明治女學校を經營する傍、「女學雜誌」を發行してゐて、巖本氏はその雜誌を以つて、『國民之友』に並んで、基督教界の思想兼文學雜誌にまで發達させよう——『國民之友』よりももつと深みのある、もつと情味のある雜誌にしよう——といふ考があつたのだらうと思はれるのだが、明治二十四、五年頃から、基督教に關係ある若い人々を明治女學校の教師として迎へ、傍ら『女學雜誌』への執筆を奬勵するやうにしたのであつた。

『文學界』の同人のなかでは、星野天知氏が一番早く明治女學校へ迎へられたのではなからうかと思ふ。島崎藤村氏は巖本氏には少し前から接近して居たやうであるが、明治二十四年の秋頃から『女學雜誌』に執筆し——僕の記憶してゐるのは、アデイソンの『ヴイジョン・オフ・マアザ』の評と、セキスピアーの『ヴイーナス・アンド・アドオニス』を近松振りの淨瑠璃體に譯したるものであつたが——て居るうちに、明治女學校で教鞭を執ることになつた。所で、島崎氏が二十五年の秋になつて、教師を辭したあとへ、北村透谷氏が入り、二十六年になつて北村氏が退いてから、戶川秋骨氏がその後を襲つたとでもいふ順序かと思ふ。

それはとにかく、二十五年になつては『國民之友』の純文藝に對する態度が極まつた——鷗外氏の創作小說『舞姬』が「國民之友』で發表されたのはその少し前であつた位で、夏期附錄と云つて、當時の一流の文人の作を三四篇程集めて載せることはまだ始めてゐなかつたかも知れぬが、何れにしても、純文學を誌面へ取り入れる意向は顯著になつてゐた——のであるから、それに對抗の意味もあつたのであらうが、『女學雜誌』でも

文藝欄を豐富にしたし、それが次第に進んで、星野、島崎、戸川、平田の諸氏に戸川殘花氏を加はへて、一大活動をしやうといふことになり、矢張り『女學雜誌』の一部をその機關に使うといふ議に始まつて、中頃から別に新たなる雜誌を女學雜誌社から出す方がよからうといふ議になり、最後にはとうたう社名も別にして、發行所をも外に設けることに決してしまつたのだと聞いてゐる。

『文學界』創立の諸氏は、みな一度は基督教信徒であつたのだが、文學をやり出してからは、基督教の信條とか、基督教の道德觀などの範疇外へ、思想がだん／＼踏みだして行つて、殘花氏を除いた他の諸氏の書いたものは、『女學雜誌』に載つたものでさへ、既に巖本氏が基督教界の名士である立場からいふと、極めて迷惑なものがあつたらしいので、新たな雜誌發行の時分になつては、尙一層累を巖本氏に及ぼす虞が深くなつたらしかつた。されぱと云つて、巖本氏に遠慮して、おだやかなもののみを書いてゐるといふ氣分なぞは到底なれようはなかつたので、一同『女學雜誌』とは袂別して、『文學界』といふ雜誌を發行することになり、出資と經營とには、星野天知、星野夕影(男三郎)の兩氏が當ることに決したのは、二十五年の末頃であつたらうと思ふ。

雜誌『文學界』の初號が出たのは、明治二十六年の一月の末だと思ふのだが、同人の重なる人々は、この結社は、單なる文藝の創作を目的とするのではなくして、文藝をとほして、靈界への突入、物に生きずして靈に生きる努力といふやうなことを主義とし、主張するものであるといふ意氣であつたやうに見える。

島崎藤村君は當時は古藤庵無聲といふ號であつたが、同君は不意に、同じ年の二月に、高知にゐた僕のところへたずねて來て、『文學界』發行の主旨や、藤村君自身の藝術及び人生に對する態度を詳細に物語つてくれた。

露西亞の作家アレクサンドル・クウプリンの評傳を見るといふと、その小說のなかに、

『今日までに王國と王があつた。けれども彼等のものとして殘つてゐる遺跡は唯沙漠の風のみである。多くの長い無殘な戰ひがあり、その終りには、將師の名が星のやうに輝いた。は

けれども、時が彼等の記念をこと／＼くかき消してしまつたけれども葡萄園の哀れな娘と大なる王との戀は、決してかき消されずに、常に人間の心のうちに生きるであらう、何となれば、戀は眞正に美くしいからである、何となれば、戀するところの有らゆる女は女王であるからである、何となれば、

彼女は死よりも強いからである』

といふ言葉があるといふのだが、藤村君のその晩の言葉が餘程それに似たものであつたことを記憶する。

『文學界』の始めのうちは、島崎君は隨分よく書いた。初號から二三號は確に續いた『秘曲琵琶法師』といふ詩――一行十七字のもの――から同じく劇詩の『茶のけむり』、『朱門のうれひ』外に『かたつむり』、『馬上人生を懷ふ』『刀工堀井瀧吉』の如き散文といふ風に、驚くべき健筆であつた。

けれども論爭家としては、北村透谷が最も世人の注目をひいた。山路愛山氏の『文學は人生に相渉るを要す』といふ、文學功利主義、物質主義の論議に對して、北村君が駁撃を加へた『人生に相涉るとは何の謂ぞ』といふ論文などは、今日これを見ても、唯少しく用語が古いと感ずるのみで、尙その力は少しも失つてゐないものであると思はざるを得ない。

愛山君が、文學は事業なり、何となれば、第一、爲すところあるが爲めなり、第二、世を益するが故なり、第三、人生に相涉るが故なりと云ひ、文章の事業たり得ざるものゝ條件を擧げて、第一、空を撃つ劍の如きもの、第二、空の空なるもの華辭妙文の人生に相涉らざるものと云ひたるに對する駁論のうちに、北村君の次のやうな語がある。

『極めて拙劣なる生涯の中に尤も廣大なる事業を含むことあり極めて廣大なる事業の中に尤も拙劣なる生涯を抱くことあり見るを得る外部は見るを得ざる内部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて、眞摯なる縱劍を空際に撃つ雄士は、人間が感謝を拂はずして恩澤を蒙むる神の如し。天下斯の如き英雄あり。爲すところなくして終り、事業らしき事業を遂することなくして去り、而して自ら能く甘じて自ら信じて、他界に遷るもの、吾人が最も多く同情を表せざるを得ざるところなり。

吾人は記憶す、人間は戰ふ爲めに生れたるを。戰ふは戰ふ爲めにあらずして、戰ふべきものあるが故に戰ふものなるを。戰ふに劍を以てするあり。筆を以てするあり。戰ふ時は必ず敵を認めて戰ふなり。筆を以てすると劍を以てすると戰ふに於ては相異るところなし。然れども、敵とするものゝ種類によつて戰ふものゝ息を異にするは其の當なり。戰ふものゝ戰の異なるによつて勝利の趣も亦た異ならざるを得ず。戰士陣に臨みて敵に勝ち、凱歌を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と云ひ、批評家は評して事業と云ふ。事業は尊ぶべし。勝利は尊ぶべし。然れども高大なる戰士は斯の如く勝利を携へて歸らざることあり。彼の一生は勝利を目的として戰は

ず、別に大に企圖するところあり。空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなして、戰爭の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。

斯の如き戰は文士の好んで戰ふところのものなり。斯の如き文士は斯の如き運命を委ねてあるなり。文士の前にある戰は一局部の原野にあらず。廣大なる原野なり。彼は事業を齎らし歸らんとして戰場に赴かず。必死を期し、原頭の露となるを覺悟して家を出づるなり。斯の如き戰場に出て斯の如き戰爭をなすは文士をして兵馬の英雄に異ならしむる所以にして、事業の結果に於て大に相異なりたる現象を表はすも之を以てなり』

所で、此の一節は、今にして思へば、透谷君自身の暗澹な生涯を説明したものゝやうになつてしまつたので、今日これを讀んでは感慨いとゞ深きものがある。明治二十六、七年頃は、まだ出版界も讀書界も極めて狹いものであつて、新文學の師徒が唯一枝の筆のみで生活しようといふには、實に困難な時代であつた。妻あり、子ありといふ透谷君の生活上の苦心は察するに餘りがある。北村君は、外には思想の爲めに戰ひ、内にあつても生活の爲めに戰はなければならなかつたのであらう。僕は北村君の夭折をば、北村君のさういふ苦しい戰の爲めの疲勞の結果と思はざるを得ない。

（一二）

平田禿木君は『文學界』での花形の一人であつた。藝術の技巧の微細な點にまで感觸が及ぶのであつた鋭敏な感覺の持主であつた禿木君の、當時の文壇の諸作品に對する批評は、文界の注意をひくことが少くなかつた。『西洋料理と日本料理とを一緒に食つてヘドを吐いたやうなものだ』と云つた尾崎紅葉氏の評は『文學界』全體にあてたものだか、禿木君の評論をさして云つたものだか、今は記憶しないが、『三人妻』か『隣の女』であつたか、何か新刊を評してくれといふ手紙をわざ／＼禿木君のところへよこしたことがあつた。

柿色の太い線で縁を取つた大きい封筒――確に半紙の幅より少し長い位の竪で、横幅も四寸位はあつたらうと思ふ――であつたのだが、あとになつて、その話しを川上眉山君にしたら、尾崎氏は原稿を横に折つたのみで封じることができるやうにといふので、そんな大型の封筒をこしらへたといふのであつた。

硯友社の人々は、皆並みの半紙の下へ罫を引いた紙を入れて書くのであつて、罫線のある原稿紙は用ゐなかつた。勿論、原稿紙は一般に半紙若くは唐紙に罫線を印刷したものであつたの

だから、皆毛筆で書いたことはいふまでもないであらう。

樋口一葉君が『文學界』に作を載せ始めたのは、二十六年の二月の『雪の日』からであつた。一葉君の處女作は二十五年の春に、半井桃水氏主宰の雜誌『武藏野』に載つたといふのだが僕の見た一葉君の作は、二十五年の秋頃に『都の花』に出たと思ふ『埋れ木』であつた。その次ぎが同じ雜誌に出た『曉月夜』であつた。

『雪の日』も、その後で出た『琴の音』もさして、文壇の注目に値ひする程のものではなかつたのだが、二十七年になつてから『文學界』へ載り始めた『闇夜』からは、一葉君の筆が可なりに自在に動き始めた。『花ごもり』にも、後の名作の光となつたやうな鋭い筆つきがところどころ見えだして來てゐたのだがその作風の大體が本當にきまつたのは、二十七年の暮に出た『大つごもり』からである。

二十六年の夏から翌二十七年の春位までは、一葉君の大音寺前時代であつたのだ。一葉君が菊坂町の家を捨てゝ、一時下谷龍泉寺町へ移つて、荒物駄菓子といふやうな小あきなひを始めたのは、自分の文學的才能に對する信念が更にできて居なかつた爲めであることは明である。僅に二年後位にあれ程までに優れた賦才を發揮し得た一葉君にさへ、已れを信じ得なかつた時代が直ぐその前にあつたといふのは、餘程面白いことだと思ふ一つは、文學が職業になし難い時代であつた爲めもあるには相違ないのだが、前代の人の方は概して、今の人々よりも、已れを信ずることが薄かつたやうでもあるのだ。一葉君の傑作『たけくらべ』は二十八年の春頃から『文學界』へ載り始めたのだが、廣くそれが世に知られて、鷗外、露伴氏等から激稱さるゝに至つたのは、二十九年になつて全部が一遍に『文藝倶樂部』に再掲されてからであつた。勿論、それは、一葉君の『にごりえ』と『十三夜』が前の年の秋に同じ『文藝倶樂部』に載つてから後のことであつた。

（一三）

二十六年の八月頃になると、その年の始めに東京を出たきりで、近江に滯在してゐた島崎藤村君が東歸することになつたので、透谷、秋骨、禿木君などが、東海道吉原まで出迎へに行つた。藤村君の『春』が其所から筆を起してあることは、人の知るところであらう。

一行は元箱根の青木といふ宿屋まで來て、其所へ藤村、秋骨の二君だけが殘つて、月末近くまで滯在してゐた。高知の學校をやめて歸つた僕が兩君をたづねて行つたのは、その月の十日

頃であつたらうかと思ふ。

兩君とも學校時代は極く眞面目であつて、うつかり女の話などをしやうものなら、顏をしかめられさうに思へた位であつたが、しばらく振りで元箱根で逢つてみるといふと、さすがに猥談をするまでにはなつてゐなかつたけれども、平氣で『艶福』などといふやうな言葉を口にするまでに、兩君ともさばけてゐたので、一寸勝手がかはつて少し瞠若たらざるを得なかつた。

『文學界』へ僕の作を載せて貰つたのは、二十六年の十一月號からで、それは『酒匂川』といふ極めて幼稚な長詩であつた。その次ぎには、『想海漫渉』といふ論文と感想文との合ひの子のやうなものを載せて貰らひ、翌年の一月號位には『片羽のをし』といふ小説めいたもの、續いて『流水日記』といふこれも先づ小説といふよりほかなかりさうなものといふ風に、續々拙劣を極めたものを載せて貰らつた。

けれども、二十六、七、八の三年間位は誰も彼れも、文壇へ足を踏み込んだ當座であつたので、とにかく熱心だけは十分にあつたのだ。不才僕の如きさへとにかく熱の籠つたものだけは書き得たのだ。その時分の作物を今日若し眼先きへ突きつけられたら、全體としてのその拙劣さに冷汗背をうるほすことになることは必せりだとは思うけれども、部分的に云へば、今日ではとても書けぬやうなところが一二ヶ所位はどうもありさうな氣がするのだ。

まして、他の才分多き人々の當時の作などのうちは、沿革的の資料としては勿論のこと、作そのものの價値から云つても、保存に堪ゆるものが少くなからうと思ふ。全集のなかへも何も入らずじまひになるのは、如何にも惜しいと思ふのだ。

支那との戰爭の後を受けた二十八年頃からは、文壇の勢がます〳〵盛になつた、とにかく出版界だけでも、活氣を帶びて來た。

博文館が、『文藝倶樂部』と『太陽』を出し始めたのは、その頃からであつたであらう。前者の卷頭には、川上眉山君の『大盃』が乘り、後者の小説は紅葉氏の名で『取り梶』が出た。これは既に『豫備兵』と『義血俠血』の作者として、批評家の注目をひいてゐた泉鏡花君の作だと認られてゐた。

その前から『文學界』に加はつた上田敏君が、文科の選科へ入學した戸川秋骨と共に、大學の若い文士の間に勢力を持ちだしたのもこの頃からであつた。

もうその頃には、正岡子規氏の俳諧の結社ができてゐたらうと思ふ。その社中に加はつた大野酒竹氏は、秋骨君の從弟であつたといふ關係で、『文學界』の同人のやうにもなつてゐたので

あつた。

尾崎紅葉氏は『三人妻』の長篇から、『心の闇』、と『女の隣』といふ風に續々敬重すべき作品を公にして、當時の大家たる實力を十分に示してゐた。

露伴氏の『新葉末集』は何うであつたか今一寸確言し得ないが、とにかく、氏の文壇の重鎭たる位地も動かしがたくなつてゐた。

森氏の『めさまし草』に集まつた人々は、露伴、綠雨、篁村の諸氏であつたのだが、何にしろ、當時は、既に坪内氏と共に文壇の元老格の位地を占めてゐた鷗外氏の威力は偉大なるものがあつた。

此の調子で書いて行けば、此の追懐記は隨分長く續くわけであるのだが、『改造』の方から註文の枚數都合があるのだから、以上を前篇位に見做して、此處で一先づ擱筆する。

年月などの不正確であることや、前後したところなどもありさうなことなどは、殘念であるが、本も何も殆ど見ずに唯思ひ出す儘を書いてみるといふ此の回顧記のことであるのだから、さういふ不正確な點もまた一興かと思ふのだ。



滿鮮吟行

高田保馬

一九二三年夏、七月十九日、門司出帆の臺南丸にて大連に向つた。二十一日大連着、そこにて講演四日。次に奉天に入りて一泊。歸路は朝鮮を經由し、玄海をこえて七月末日九州に入る。此旅、書を携へたけれども讀まない。感興の生むに任せてたゞ數々の歌を日記のはしに記した。

青海波(せいがいは)、はてなき上を淋しくも一人泳げる五
日月かな

わが船のひく尾と見えて黒烟なびけばくるる
七發の島

大海のこの水平を弦として七色の虹今弓をは
る

名もなくてやがては消ゆる海の波わが人間の
悲しさに似る

はてしなく船波を追ひはてしなく心わが子を
離れぬ夕

わが船のゆけば離れず波の上五日の月の戀の
ながしめ

龍宮のそこのありかを指すに似て波ひとところ銀に光れる

はても無く此靑だゝみしき連ね雲が躍れる朝
ぼらけかな

名も知らぬ紫モスの子のうしろ見えかくれする山東の山

船ばたに君し立てれば海燕群れつゝ去れどまた追ひ來る

今見るは幾億年のこしかたを埋めて青く漂へる海

人間に非ざるものゝ幸見よと帆にたはむるゝ海のつばくら

はてしなく海綾織ればはてしなく日が波そめてやむ時しらず

鐘はなる、食堂に入る水色のモスの背吹く海の風かな

わがふめば臺南丸の甲板も日本戀しとなる今宵かな

臺南丸、君桃色の帯戀ひて波はひねもす船ばたによる

波と月、まどかの戀を亂さじと忍びかにゆく臺南丸よ

海よ海よ、何を目あてにいつまでかはかなき綾をくづしては織る

あゝこれも何の縁ぞ海燕一つよぎりて波に消えたる

三つ四つジャンクも白く山も見ゆ人間の世にまたかへるかな

亂せども海は怒らず船のあと忘るゝに似て波靜なる

海つばめ人間の身の拙さを見よとばかりに船ばたをとぶ

鳥なれば金を拂はず海燕マストの上に大海をゆく

かがやかに日ぞ照る親子打ちつれて波には波の喜びあらむ

今知るは生物學者丘氏の指のかなたの大連の山

戀人がベエルかゝぐるさまに似て今見えこむる支那の山山（以上、船中にて）

荷馬車ひく騾馬の背をも並木をもかくさぬほどの霧雨ぞふる

アカシヤに風のわたれば物思ふわが魂もゆらぐ朝かな

馬車馬のしき石をふむ音までも子を思はしむ旅にしあれば

食堂の大煽風機夕されば吹くは黑髮ブロンドのかみ

オオケストラ、悲しくなれば食堂の隅になげくか、わが銀のさじ

煽風機めぐればゆらぐ食卓のスウプの湯氣とそのシネラリア

支那馬車の鈴鳴りひゞき大連の朝を告ぐるか此旅人に

朝の卓ましろき指ににぎらるゝその喜びに鳴る銀のさじ

御者ふみて鈴をならせば紫のパラソル疾くもわが前を過ぐ

アカシヤの並木のかげに支那人の賣りつゝ瓜の青き七月

朝の風盜人市の片すみにわがなでし驢の耳を忘れず

旗青き盜人市の地の上に博打つ子等の相語らさる

泰華樓、卓未だ空じ支那ボーイのゝしるさゝて海の船見る

支那料理ひるげの胡瓜わがはめば故郷の野の匂ふ心地す

泰華樓、支那のボーイがわれやりし錢を入れたる白きポケット

相ねたます、仲よくならぶアカシヤの並木のうれの七八日月

まひるどき日の暑さとの戰の恐れにゆらぐ朝のアカシヤ

夜は十時、夢の曠野をつくらまし遠く子も來よわが妻も來よ

支那あんま、笛の流れてゆく先の並木の下の市のともし火

シヤンシヤンと驟馬の鈴なり旅の子に今明けそむる大連の朝

此五日、わが喜びも悲しみも皆知る室の大鏡さらば

大鏡、ブロンドの子のま白なる胸をうつして次の日はあれ

ましろなるベットよ告げな、宵毎に遠方人を思ひいねぬと

十五號室、われ東海の悲しき子五夜いねぬと忘らへであれ

わが立つ日町も悲しと見ゆるなり並木も屋根もそぼぬるる雨（以上、大連にて）

何事の喜びありや朝風に蜀黍の葉はむれて躍れる

大地が廣さを見よと誇りかに胸開けたる此大野かな

雨もまた淋しからまし日ねもすを南關嶺のアカシアの上

苦力の工夫今見よ、日の本のブルヂョアの爲つるはしをあぐ

あゝ苦力、君に聖者の德を見るつるはしあげて倦ます恨ます

野羊も恨まず、されど苦力は恨まず怨まず、
鶴嘴をとる

草赤く羊と馬のむれ白き牧の大野の夕ぐれの
風

羊かひ君を羨み一人われ涙落ちつゝゆくと知
らめや

わが一つ魂を吹け、高粱の葉より外には何吹
かぬ風

わが軒に巣くひし子等も交るべし滿の廣野を
飛ぶつばくらめ

蜀黍(もろこし)の穂よりも外に吹くもの無き風のゆくて
にわが汽車走る

もろこしの波に浮べる朝(あした)の日沈めとばかり吹
く西の風(以上大連よりの車中にて)

朝明を入ればあふるゝ湯の色の玉とも見ゆる
白きしきいし

旅もはや八日となりぬ雲さへも東に急ぐもろ
こしの風

朝の風白鳥を吹きまこも吹きいま湯上りのわ
が素肌吹く(以上湯崗子溫泉にて)

忘れてはわがふるさとを行くと見る柳のうれ
にかさゝぎの飛び

水の上、まこもは吹かず楊柳の梢をわたる七
月の風

もろこしのはてなく續きわが眼路のすてどこ
ろなき此廣野かな

もろこしの青さを海の色と見よ船のむれにも
似たる村かな

かささして、もろこしの葉の海泳ぐ支那の女
にふりそゝぐ雨

つばくらめ東(ひがし)に飛べ、楊柳の中をし行くとた
ゞ告げよ子に

柳の枝風にゆれつゝ其枝にとゞまりあへぬ青きつばくら

泥屋根の小き窓より顔出せし裸三人の忘れかねつも

普蘭店(プウランテン)、驛夫の聲を忘れ得ず金髪の子ととなりしてきゝ

白塔の上をむれとぶつばくらめ見なやましき朝の風吹く（遼陽）

地の上、柳のむれに風やます何知らぬ氣に白塔は立ち

沙河は今豆の束葉を風吹きて止まりあへぬ燕(つばくらめ)とぶ

風吹きて高粱のむれ一齊に歎聲をあぐ眼路(めぢ)のかぎりは（奉天への車中）

奉天驛たゞ下げ髮の似るまゝに知らぬ五つの子を抱き居り

あはれ國亡びてもなほ夏きぬと燕(つばくら)とび野の花はさく

野の牛はひとり肥えたり亡びたる國の草をも何しらず食む

家と云ふにあまり小さし藁の巣をつくりてすむかこゝのはらから

白衣の子人やせたれど青々ときび榮えたる鮮の國原

濁り水江をひたして帆も見えず燕三つ四つ青き線ひく

ゆるゆると尾を打振りて野の牛は桔梗のひまのかや草を食む

秋風嶺朝の日は今相共に伏してなげける藁屋根に照る

旅人は涙やまさり高麗の野の行けども行けど家の小さき

そゞろにも涙し流る一様に白き衣きる鮮のはらから（以上釜山までの車中にて）

君かつてこゝ渡れりと知るまゝになつかしみ踏む釜山棧橋（子の母かつて朝鮮の旅よりかへる）

君をとめ、若き素肌を吹かせつゝかつてこえけむ海の風かな

淸正はわれに要なし、乙女にて君ありし日を語れ浦波

釜山鎭、浦の波々をとめにて君こ江し日を知ると思へば

發船の銅鑼がなる、かつて君これをきゝつゝ別れしやたれ

波はまた岸にもどれど子の母の君ををとめに見るよしも無し

甲板のしぶきにぬれて思ふとも知らぬ秋子をはや十日見ず

青波の白き泡吹く不思議さに戯むれてとぶ海燕かな

すさのほの尊、そのかみ漂ひし波をけりつゝ行く新羅丸

吾子（あこ）の爲乳母が泣く泣くこえしてふ對馬の沖は白浪躍る

わが秋子思ひて乳母の忘れえず涙落せしこの海の波（以上關釜聯絡船上にて）

かへるとて門邊に母のまちまさぬ故郷なれど戀しきは旅

思へども秋子は遠し、火の國の宿に按摩の宵の笛きく

顔あげてめくら手たゝきうたへどもたゞ行き過ぐる人の群かな

對馬洋かもめかぞふる湯上りのわが背を過ぐ

る海の風かな

夏の町若きひとみの投げ交はすながしめを吹く暮れがたのかぜ（熊本にて）

みごれば妻がかへらぬ故郷の庭に數ふる朝がほの花

眼つむれば小さき手つきて見送りし子の姿みゆ曉がたの雨

見つめやる星の光のめでたさは遠きわが子のまたたきに似て

大船に夜の大地をたとへまし燈臺に似てシリアス光る

田の蛙、ゐまさぬ母を思ふまにいとも夜更けしさえわたる聲

かやのうち、ふと眼さむれど母上のうめききこえず、このうつろがや

（以上故郷の家にて）

世が世なら

山川菊榮

世が世なら出來る相談

『世が世ならばなア！』

から長太息して滿堂を笑はせたのは結婚難に惱まされた或青年だつた。

『だが誤解しちやいけない。年寄の云ふ「世が世なら」は過去を指すのだが、吾々のいふ「世が世なら」は未來を指すのサ。全く世が世なら一人の嫁のためにこんなに苦勞するでもないからなア！』

さう云はれて見ればそれも尤もである。今日眞面目に社會運動に從ふ青年の中には、世間並み以上に傑出した英才も少いか知らぬが、さりとて世間並み以下に無能な低級な男子が揃つてゐる譯でもないのに、特に結婚難の甚しいのは、社會運動に對する迫害の烈しさと、その結果としての世間一般、特に婦人側の無理解の故でなければならぬ。そこで今より遙かに進歩した世の中では、男子の眞價を認めてこれを愛する婦人が多くなり、從つて眞面目な青年は配偶者に事を缺くまいにといふ此青年の嘆も、あながち笑ひ話としてばかりは聞きすごせないことになる。

けれども未來を想ふての『世が世なら』の嘆は、決してこの一事に限ることではない。私達は實に日毎に見聞きするあらゆる事毎に、この感を抱かぬ譯には行かないのである。

大正十二年は、日本の國民が未だ曾て經驗したことのない恐ろしい大震災の年であつた。その恐ろしい經驗は吾々に何を敎へたか。

……………出さずとも濟んだであらう無數の悲慘な犠牲を、……………………………、目前の營利故には人命をも、社會永久の幸福をも省みぬ世なればこそ、―出さ

ずには濟まなかつたことを教へた。

然しその恐ろしい、餘りにも痛ましい教訓でさへ、射利と僥倖による『復興』、隣人を出し拔いて、又は踏みつけて一人逸早く利潤を貪る意味での『復興』、利欲と貪婪を中心としての謂ゆる『復興』氣分の前には、忽ちに忘られもし、又忘れさせられるやうに仕向けられもした。

吾々は過去を嘆き悲しむがために將來の計を忘れてはならぬ。けれども過去の失敗、過去の過ちを十分深刻に自省し、解剖することを怠つては、將來の計が意味をなさない。

が、復興豫算は削減また削減、來るべき自然の脅威に對して市民の生命の安全を保障するためのあらゆる新しい計畫は、それが地主や物持の個人的特權を犯す恐れのために抛擲されてしまつた。そして東京は元の木阿彌、いつ再來せぬとも限らぬ大震大火に對して、依然として何等の防備もない、無用心極まる亂雜な、大家小家の寄集した危險な都市として、恰かも劫火の中に亡びた舊東京の幽靈の如くに、有産者の特權の前には、市民の生命は鴻毛の輕きに比される。呪はれたる東京市民！大震大火のために數萬の兄弟姉妹を失つた東京市民は、……………………、自然の脅威をものがれることは出來ないのである！ 東京市民の大多數は借家人である。家が家主の所有である限り、借家人の安全や便宜のために、自由に改築改造されることは先づ絶對にない。借家人は高い家賃を拂ひながら、不便を忍んでともかくも身をいれる所を貸して貰はねばならぬ。東京市に對する大多數市民の關係もこれと同じことである。實際に東京市を維持し發展させるものは、一坪の土地も一軒の家をも所有せぬ無産者の大衆である。地價や地代の騰貴も、地主がその所有地に加へた勞働の結果ではなくて、市民全體の綜合的活動の結果である。謂はゞ東京の發展は、東京市民全體の勞苦と犧牲の結晶であり、同時に全國民の活動と勞苦との結果である。然るにその市民全體、ひいては國民全體の生命財産の安危に拘はる都市計畫を、偶然土地の所有權を得た一部市民の私人的利益のために犧牲にすること、斯樣なことが許される限り、東京市の主人公たるものは、一般市民ではなくて地主のみであるといつて差支はあるまい。同じ意味に於て、日本國民の、國に對する關係も同斷である。

『世が世なら！』全く世が世なら、あれほど恐ろしい大震火災の教訓を無視して、『禍を轉じて福とする』代りに、禍の上に禍を加へるような愚かな冒險を誰か看過しようぞ。

子供の理想境

震災以來家を失ひ、病ひに惱まされた私達の一家は、今、瀨戸内海に面した溫い海岸の漁村に冬籠りして居る。南には舞子、東には須磨、前には淡路島が秀麗な海に一しほの趣を添へてゐる。紫色に起伏する箱根の連山の中に白い富士の姿を海上遠く望み、綠の滴るやうな濃く繁つた松山が海邊近く出つ入りつし、地響きを立てゝ大きな白波のひるがへる關東地方の壯麗雄大な情趣に比して、瀨戸内海の沿岸は、優美秀麗、池のやうに靜かに、夢のやうに和かである。景色としては各々どちらと云つて定め難い特色をもつてゐるが、氣候の點では確かに瀨戸内海の沿岸の方が溫和ですぐれて居り、隨つて靜養地としては理想的だと思はれる。

須磨や舞子の海岸には、宮殿のように美しい大きな別莊が軒を並ねて、折角の海邊の眺望を遮つて居る。天然の名園を見るやうな此邊の風光を、富裕な私人の獨占にさせる代りに、國民全體のために保存し、開放しておくことが出來たら、とこゝでもまた『世が世なら』の嘆を新たにしない譯には行かなかつた。

關東の濱邊の、灰のように黑く細かい砂とちがつて、此邊の砂は玉を碎いたように粗く、茶褐色を帶びて白く光つてゐる。松の色も綠錆色を帶びて、濃く沈んでゐる。幾抱へもあるやうな曲りくねつた、太く頑丈で物靜かな老松が色々の形をして白い砂地の上にうねつてゐる有様は、新しく開けた關東の海岸には見られないものである。文字通りの白砂青松の濱と、油のような青海を辷る白帆と近く迫る淡路島、高く煙る紀州の山々を一眸のうちにおさめる海岸には、硝子ばかりのような西洋館、溫室のような別莊が、冬のことで大半戸を閉したまゝ、東京の三月頃を思はせる柔かな日光の中に、さも溫かさうに日向ぼつこをしてゐる。この濱邊、この家々に、バラックで顫へてゐる東京の子供らを連れて來られたなら、と夢のように穩かな景色を前にしながらも、腹立たしさと堪らない情なさを感ぜずにはゐられなくなる。

この美しい自然も、これらの住心地のよい家々も、全てこれを國家の保管に委ね、國民のものとしておいたらどうであらうか。老人や子供や病人や、すべて休養を要する人々は、當然の權利として、自然が人間に寄與した此優れた風光や氣候を樂しむことが出來たならどうであらう。さう思つて見ると、恰かも子供コロニーにそのまゝ利用できさうな日當りのよい美しい家が其處にも此處にも横はり、然も大半は固く戸を閉して、稀に別莊番らしい者の掃除する姿が望まれる許りである。

東京には失業者二十萬。バラックにさへはいれずに淺草觀音の床下で冷たい夢を結ぶ者もステーションの石段で、筵一枚か

ぶらずに夜をすごす者も多いといふ冬である！　バラックで生れた數多くの赤兒とその母親の生命は、日本中に温い家が無いからではなく、現に在る家が徒らに遊ばせてあるために、生命を失ふ者も少くはないことであらう。

……………………

病人を根絶しにする法

虚弱な者にとつて冬ほど恐ろしいものはない。

私が生甲斐のある心持のするのは五六月から、精々八月一杯である。八月末から九月初めにかけて、そろ〳〵涼しい風が吹き出し、燃えるやうな樹の葉の強い綠が、どことなしに衰へを見せて、微かに黄ばみそめる時分は、モウ冬の恐ろしさがひしびしと身に迫つて『この冬をどうしたらよいか』と苦勞の種になる。私達は毎年色々にして寒さを凌ぐ方法を講じた。疊の下に紙を敷いたり、部屋にカーテンをめぐらしたり、蚊帳を吊つたり、苦心慘澹して隙間風を防ぐことに努めたが、バラックに毛の生えた程度の不完全な日本家屋の構造では、到底防ぎ切れなかつた。のみならず、一室ばかり手を盡しても、他の室、又は廊下や臺所まで同じやうにすることは出來ないので、結句、たゞ〳〵云ひ甲斐なく寒さを恐れて暮す外はなく、時には冬半年、温い土の中にもぐり込んで眠つてゐられる蛇や蛙が羨ましい氣持さへするほどだつた。それでも私達は最善を盡して冬と戰つて來た。そして毎年、殆ど冬半年は床を離れられずにゐながらも、兎も角も、幾冬かをすごして今日まで生きながらへて來た。が、今年はその寒がりやの私が、とにかく今まで寢つきもせず、飯事然とした自炊生活ながら、どうやら勝手元に出て炊事をしつゞけてゐられるのも、温かい海岸生活のお蔭である。

それにつけても、私は、私よりは丈夫であつた多くの友人が療養の叶はぬ許りに若い生命をむざ〳〵失つた口惜しさを想はずにはゐられない。『世が世なら』強い日光と清い空氣とを要する病人は、手おくれにならぬうちに治す方法がいくらでもあるのである。尤も私共の信仰する名醫奥山先生の說によれば、大抵の病氣は、健康體のうちに豫防注射をすれば免疫になるもので現在發見されてゐる限りの最善の醫療及び衛生の方法だけでもこれを完全に利用することが出來さへしたならば、この世の中に病人は殆ど根絶される筈だとのことであるから、國民の健康維持のために物吝みをせぬ未來の社會では、今日のように病人の率の高いようなことはあるまい。が、とにかく病人がある限り、其等の病人は其時代其社會が提供し得る最善の方法を盡して治療させられなければならぬ。病苦に惱みながら過度の勞働

に服する大多數無産者の運命と、その不自然な夭死は、………人類の上に下した最大の呪ひである。

この冬を寒さと戰ひ、飢と戰つてゐる病人が世間にはどの位あることか。其等の人々の一人一人は、又とない立派な頭腦や才能の所有者であるかもしれぬ。貧のため、病のために亡びる生命と、運命を共にする其等の尊い才能は、人類にとつてどれほど惜しい寶であらう。

病人と云ふ病人をこの温い海岸に連れて來、あの軒毎に戸を閉してゐる宏壯な空別莊に收容して療養させたなら、どれほど貴い生命が救はれ、どれほど惜しい才能が亡びずに濟むことであらうか。

病人の結婚に干渉することは、優生學上どれほどの根據のあることかは知らないが、實際の方法として病氣を驅除する最善の方法とは思はれない。天才は狂人と隣り合はせだといふが、天才とか狂人とかいはれるほど顯著な特色はないまでも、大抵の人が善惡二樣の特色又は長所と同時に短所をもつもので、その善き特色又は長所を發達させて、短所を改善させると否とは主として環境の力による。されば結婚に對する制限の如きは、それによつて傳はる惡い種と同時に、善き種の傳達をも制限するものであるから、極めて消極的な方法にすぎない。これは、病氣と病人とを混同するからであつて、病氣に對する萬全の豫防策と治療の方法とを講じさへすれば、種の蕃殖は、人類進歩の上から云つて、歡迎すべきでこそあれ、恐るゝには足りないのである。

ペストが出た。コレラが來たといつては一時に何萬圓の防疫費を出し、何百萬圓の民業の損害を省みない。どうせ出す金なら、ペストやコレラがまだ顏を見せぬ平素から、國民一般の保健衞生に、それだけの費用をかけておいたなら、遙かに有效な豫防手段ではあるまいかと思ふが、これも世が世でなくては出來ぬ相談であらうか。

熊谷の哀しみと甘粕大尉

或温い午后、私達は散歩がてら須磨寺に往つた。寺では敦盛の遺物の青葉の笛や緋威しの鎧や、熊谷直實の作に成る敦盛の木像や首實檢などを觀た。義經の腰掛松や、その前にある、敦盛の首を洗つたといふ首洗ひの池、熊谷の手で手厚く葬られて以來、香花の絶えぬ首塚なども、傳說めいてはゐるが事實らしく思はれた。

十六才の少年敦盛が青葉の笛に心殘して只一人取つて返した心持といひ、熊谷に呼戻されて臆せず戰つた健氣な言葉といひ

この挿話は、源平戰記の中でも特に傑出したものではあるが、殊に熊谷が我子小次郎と思ひ比べつゝ、已むに已まれぬ武門の習ひ余儀なく敦盛の首をかいて後、終生を貫く痛恨の情は、今思ふても胸が一杯になる氣がする。罪咎もない可憐な少年を殺すことを余儀なくさせた戰を呪ひ、武道を呪ふの餘り、佛門に入つて安心を得ようとしたその心持は、今の吾々にも理解が出來るし、當時の、多少心あり人道を辨へた人としては、それが最善の方法であつたらうとさへ思はれる。

今日より遙かに野蠻な、無智な昔の世の中でさへ、敵とはいへ、無邪氣な少年を殺すことにかほどの苦痛を感じ、良心の苛責を感じた人間らしい武人もゐたのである。

人間が人間を殺すといふことは、いついかなる場合にも恐ろしいことである。情ないことである。野蠻な昔の軍人でさへそれくらゐの人情は辨へてゐた。

私は可憐な少年敦盛を殺した後の直實の、癒し難い痛恨を思ひやりつゝ、ふと敦盛より十歲も年下の幼兒を絞殺させた甘粕大尉を思ひ出した。彼は終生を通じて、痛恨にさいなまれた。これは獄中より『余は惡人に非ず』と自己辯護に忙しい。人間を—殊には罪も恨みもある筈のない幼兒を殺して、些かの苦痛を感ぜず、良心の苛責を知らず、たゞ自己の立場、世界的體面のみを心にかける！　これが現代日本の模範的軍人である！

熊谷が敦盛の首を取つたのは、當時の道德から見て立派なことであつた。否な、當時の道德がそれを强要したればこそ彼は餘儀なくそれを敢てしたのである。が、それが當時の道德から見て、いかに立派な行爲であつたにせせよ、熊谷の良心——恐らくは人間としての銳敏な感受性、よく發達した社會性は、その行爲を强く否定せずにはおかなかつた。數百年後の今日、吾々の心の中に直實の人格を强く生かすものは、近代人と共通なその社會性であり、その純直な人間らしさである。實に熊谷の哀しみは眞の人間の哀しみであつた。

假に甘粕大尉を熊谷の立場においたらどうであつたらう。敦盛の首を舉げた大尉の目は、一滴の淚を宿す代りに、たゞ誇りと歡喜に輝いてゐたことであらう。そして彼は青葉の笛や緋威しの鎧を燒き捨て、散々に切りさいなんだ裸體の遺骸は、勿論古井戸へはうり込んだに違ひない！

テロリストの迷信

或個人が他の個人に暴力を加へることによつて世の中が良くなるように考へる者は皆な甘粕殺人大尉同樣のテロリストである。中岡艮一と云ひ、後藤新平子邸の襲撃者といひ、すべて私

怨以外の動機によつて暴行を働く者は、社會進化の方則に對する個人の力を過大視し、歴史はたゞ英雄によつてのみ作られるように考へる、甘粕流の幼稚な頭の持主である。一原敬の有無によつて日本の國運が左右されるように考へたり、一大杉の存否によつて國家の安危が定まるように考へたりするのは、偏へに英雄崇拜の迷信から來る。甘粕大尉は、たゞの人間にすぎない大杉氏を、お伽噺の中に惡魔のような奇蹟的な魔力をもつ神變不思議な、超人間的な英雄として考へた。そして一大杉を失へば、あらゆる天變地異が立ちどころに跡を斷つこと、恰かもお伽噺の惡魔が地下に封ぜられたようになるものと信じてゐたらしい。

此種の幼稚な思想の持主は、今なほ世間に尠くない。そしてこれを直ちに實行に移して悔いぬような單純な頭しかもたぬ者が暗殺者となり襲撃者となるのである。

これに對する對策としては、思想や言論の解放によつて國民思想の進歩を促す外はない。即ち殺人を肯定し、暗殺を是とするような頑迷な封建的思想を排撃し、英雄崇拜の迷信を打破する道を開き、より合理的な改革の手段を講ずる必要を一般に覺らしめるのが何よりの急務である。思想言論を抑壓する結果は、暗殺や殺人的行爲の愚劣無意味を、それを是とする低能者又は狂人に十分會得させる方法がない。そして封建的な迷信はいつまでも民衆の間に根を張り、社會の秩序的な、合理的な進歩を永久に望まれぬこととなる。吾々はそれが個人によつて行はれると組織的な權力によつて行はれるとを問はず、常に永久にテロリズムの反對者である。そしてテロリズムに反對すればこそ、思想言論の自由を切望して已まないのである。

英雄のみが、個人のみが歴史を支配し作成する力であるように考へ且つ教へる今日の教育そのものに私達は深い疑惑をもたざるを得ぬ。或時代又は思想を代表する英雄又は天才は、偶然の産物ではなくて、其社會又は階級の利害により、要求によつてその地位に推し立てられ、その指導權を與へられて居るものである。例へばロシアのレーニンにせよ、一人一個の力で革命を起したのでもなければ、ロシアの國家を支へてゐる譯でもない。彼の所論、彼の主張が國民の要求と一致し、それを最もよく代表して居ればこそ、あの地位にあるので、手取早く云へばロシアの國民あり、現在の社會組織あつてのレーニンであつて、レーニンあつてのロシアである譯ではない。レーニンを失へばロシアの新國家が崩壊するだらうといふ見方は、アメリカの大頭領の更迭を以て、米國の滅亡と同視するに類して居る。或社會の構成し、且つその社會を進化させて行くものは、無數

の要素の中の只一つにすぎぬ個人の力ではなくて、組織的な物理的な力である。この社會力の赴くところを察して、これを滑らかに速かに辷らせて、餘計な迂回や精力の放散を避けようと努めるのが、社會の健全な發達を願ふ者の義務である。大河の流れを藁しべで堰きとめようとしたり、素手で逆流させようとしたりする反動主義者とテロリストの行動は、社會進化の大勢から見て、有害無益の企てである。吾々はかういふ馬鹿者や狂人を徒らに恐れる代りに、これを根絶しにすべく、社會一般の思想及び教育の發達を期しなければならない。

正月氣分の復活

お正月が近づいた。

學校が休みになると煤掃きや買物に忙しく暮し、おし詰れば煮しめや重箱や注連（しめ）かざりの仕度に何くれとなく賑やかに慌たゞしく年を送り迎へたのも十何年か前までのことであつた。此處何年も、私達は年々に殖える年賀狀の往き來を外にしては、お正月らしい氣分のお正月を迎たへたこともない。

けれども、全國民が心から一致して祝ふ祭日は、社會的に見て必要でもあれば有益でもあるのだから、世が世なら、かういふことには大に力をいれて、眞に國民的和樂と休養の時期としたい。が、今日のように人各々の身分が異い、境遇が違ひすぎて、富める人々にとつては、年中お正月であると同時に、貧しい者にあつては、元日すら飢えと寒さに惱まされる世の中では、萬人一樣に、心から樂しくお正月を迎へることなどは到底不可能である。今の世の中では、人の懷ろ工合次第で來たり來なかつたりするほど、お正月も不公平なものになつてゐる。

賀狀や門松廢止の聲が、例によつて例の如く最も多く虛禮を尊重する階級の中から起つて居る。しかし賀狀などは、交換する者の側から見れば、平素疎遠にして居る者が互に消息を通じ合ふ手段としては、まことに適切な便利なものだと思はれる。賀狀を自家廣告の手段とする者のあることを咎める人もあるが、廣告は商業的な社會の特色であつて、賀狀に限らず、何物にも廣告に利用されるのは已むを得ないことである。現に毎朝吾々の見る新聞の三分の一乃至半分は廣告記事によつて埋められ、吾々の拂ふ新聞代の半ばは、廣告拜見料として徴收されてゐるに等しい。資本主義的生産に伴ふ社會的浪費のかなりに重要な部分である一般の廣告の無意義を咎めずに、僅かにその一少部分にすぎぬ年賀狀を利用する場合だけを咎めるのは愚である。

が、とにかく、吾々のように身分も地位も財産もない者の間

では、年賀といひ、冠婚葬祭といひ、各々の力にあり、各々の誠意を示すだけのことをすればよいので、虚禮とか虚飾とかいふことは全く問題にならない。吾々から見ると、今日、虚禮廢止を叫ぶ人々は、その身分に伴ふ必然の結果を呪ふて居るものとしか思はれず、さほど慣例的な儀禮や作法を煩はしがる位ならば、いつそのこと、爵位や財産を捨てゝ一平民になるが、目的を達する近道であらうにといふ氣しかしない。彼等の間における遊戯的な儀禮や裝飾は、物質的にも精神的にも餘裕のありすぎる有閑階級が、貧しき階級を威壓する一種の道具であり、使ひ道のない富と精力とを注ぎ込む、せめてものはけ口にすぎないので、彼等からさういふ道をさへ奪つたなら、彼等の生活は全く生き甲斐のないものとなり終るであらう。

これに反して、中流以下の、精神的にも物質的にも餘りに餘裕の無さすぎる生活を營む者にとつては、虚禮、虚飾の要こそなけれ、今少し美や情趣を樂しみ得るだけの餘裕が必要である。餘りにも貧しく慌しい一年の後に、忙しくて殺風景なお正月を迎へることは吾々の心をいやが上にも忙しく荒ませる許りである。然し社會全體が眞に樂しく、心にゆとりのあるお正月を迎へることが出來るためには、社會生活の基礎そのものが、今日とは全く違つたものとならねばならぬ。飢餓や無智や壓制や慾戾が跡を斷つた、眞に太平な、長閑な世の中となつて始めて誰も彼も長閑なお正月を迎へることが出來る。一生の間に、さういふ本當に萬人にとつてめでたいお正月を迎へてみたいものである。

地方的特色と文化の分布

十一月の中旬に私は東京を去つた。馬入川の鐵橋が無殘に破壞されて、巨大な石柱が濁流の中に、動物の屍骸でゝもあるかのように半ば埋まつたまゝ轉げて居る物凄い川の上に渡した木の假橋を汽車が通つた時はさすがに氣味が惡かつたが、沼津邊からは、殆ど地震の影響らしいものを住宅にも、工場にも、何處にも見ることが出來なくなつた。西へ走るに隨つて世界は平和と繁榮の國に變つて行つた。

朝霜の融けたあとの京都の町の家々の瓦は、ぬぐひ取つたように黑く滑らかであつた。瓦も格子も窓も、すべて外に露出して居る限りの部分は白い埃に包まれてゐる東京の町々を見なれた目には、埃のない町や家や、澄み切つた空氣が、此世ならず物珍しく思はれた。それから備中の片田舍の町に一月近くの間私達は足を留めたが、其處でも埃と風のない靜かな澄んだ空氣が、今更のように安らかな氣分を與へた。荒涼たる燒け跡の有

様はいふまでもなく、焼け残つた山の手の家でも修繕の出來たのは少く、瓦は落ち、柱は曲り、壁には亀裂のはいつた東京の家を見慣れた目には、歪まぬ家、黒い瓦の美しく並んだ屋根、こわれぬ壁は、あるべき事とも思はれぬ、不思議なもの丶ような心持がした。事毎に心を傷ませるような震災地の情景を遠ざかつて玆に一月半、漸く私達の心も幾らか落つきはじめた。

關西の山々には、石の多い、固い赤土の禿山が多いので、濃いのや薄いのや、様々の緑を交へてよく繁茂した關東の山々を見るような趣が少い。しかし海岸でも一般に地層が古いからして、關東のような緩い砂土でなく、小石交りの赤茶色の固い土なので踏むに足ごたへがあり、堅牢な感じがする。家の建て方は、關東の方は、間取りや採光通風の點に於てすぐれ、關西の方は堅牢な點に於て東京地方の貸家普請とは比較を絶して居る。東京の貸家の常である附木細工のようなヘナ〱普請を廢して、關西で見られるやうな材料と勞力をかけた堅牢な普請をし、加ふるに牢獄のように、穴ぐらのように暗くて陰氣で殺風景な關西の家の建て方を、明るくて氣の利いた、無駄な部屋の少い東京風の建て方にしたら、どの道、不自由がちな貸家住居でも住む人の便利はよほど違ふだらうと思ふ。家が往來にムキ出しになつてゐて周圍に空地がなく、拔目なく土地を節約してある點でも、關西の家は東京附近のそれより住み心地がよくない。市内はともかく、一歩市外に出れば、花を植え、蔬菜を作るぐらゐの空地は、東京附近の家には附きものとなつて居るに、關西方面のは、全くそうした餘裕を殘さない。殊更に日光に背を向けたような家々や、立木一つ植える餘地もない周圍が窮屈とは確かに著しい缺點で、折角の氣候の效果を裏切るように思はれる。しかし普請の堅牢なこと丶家賃が東京の三割乃至五割方安いことは、確によい特徴である。

柔らかで滑らかで、強弱よりも、高低によつて感情を表現するように思はれる關西の言葉は、フランス語を思はせる。東京語がドイツ語乃至英語に當るとしたら、關西語はフランス語に當りはすまいか。

私にはその音調は格別不快には響かないが、何しろ聞き慣れないので、意味の通じないことが多いので困る。それも物賣りや商人などの雄辯に至つて殊に甚しく、時とすると始めからしまひまで分らずしまひのこともあり、一家四人の者が、四人とも別々に聞き取つたり、四人とも意味を捉へずじまひのこともある。私などはトンチンカンな返事をして、あとで大笑ひになることが何度かしれない。

外に遊んでゐる近處の子供の聲を聞きつけて、「僕、お友達つ

くつて來るよ』と勢よく駈け出した子供が、暫らくするとベソをかいてションボリ歸つて來た。いろ／＼にすかして聞いて見ると、『皆が何云つてるんだかちつとも分らないもの』と訴へた。

同じ日本人の間でさへ言葉や發音の相異で十分感情がうつらないのを思ふと異民族同士の間の理解の困難さが思ひやられた

私は東京で生れて東京に育つたに拘らず、一から十まで東京に限ると許りは思はれない。殊に氣候や風土の點から見て、東京がさほど好もしい地點であるとは思はれぬ。たゞ東京は家康以來、政府の所在地であつたがために、政治、經濟及び文化の中心となり、殊に明治以後に於ては、日本の資本主義の心臓となつたので、生活の手段を多く藏し、隨つて全國の人口を吸收するところとなつたにすぎないのである。東京の長所は、東京の上に發達した近代的社會である。混沌として尨大な東京市は、その懷の中に近代文明のあらゆる特徴とその缺點とを同時に包藏し、發達させた。東京が常に清新な氣分と、非慣例的な生活の先驅者であり、活動的にして進取的であるのは此故であり、同時に、それがいつも粗雜な、慌たゞしい、上辷りのした氣分に支配されがちなのも此故である。東京は、次から次と新しい刺戟を受けいれて、同時に其等の刺戟を傳達する中樞のようなものである。

文華と文明病との集中し且つ醱酵される中心である尨大な都會と、原始的な單純さと貧弱と不便とを失はぬ地方との、餘りにも甚しい懸隔と對照とは、近代社會の一つの病弊である。私は或人々のように物質文明そのものを呪ふ氣にはなれない。全體から云つて原始人の生活より近代人の生活の方が、複雜で興味もあり、高級なものだと思ふ。電話も電信もなく、汽車も電車もない昔の世界よりは、それらを備へる近代社會の方が、大抵の人は住み心地よく面白くも愉快にも思ふ筈である。たゞ問題は、其等の物質文明が、金儲けの手段となつて居るので、眞に全ての人の幸福を增進する代りに、却てそれを蹂躙することの多い點である。そして金儲けの手段たるが故に、或はその分布狀態に過不及あり、或は美的感覺を無視して、社會生活を不快ならしめる點である。もし今日發明されてゐる限りの物質文明が、眞に全ての人の便利と幸福のために利用され、都會と地方の區別なく、何處も同じように便利で住み心地よく、美しくなつたなら、物質文明を呪ふ聲は跡を斷つに相異ない。

私は東京で育つたが關西を厭ふ氣にはなれない。都會生活の有難味は知つてゐるが、田舍の生活の情趣にも愛着する。願ふところはたゞ社會全般の文明の程度がもつと高くなり、地方々々の自然の特色を十分に保存し、活かしながら、何處も同じ程度に便利で生活の安易なるべきことである。都市に對する人口の不自然な集中や、農村の荒廢は、期せずして避け得られる筈である。社會的にも富や文化が一階級に集中する不合理を防ぐと共に、地方的にもその偏した分布狀態を改めて、文明を全國化し、一般化することは、世が世ならば、出來ぬ相談でもあるまいと思ふ。

（十二月三十日）

革命藝術と社會主義的藝術

――レオン・トロツキイ――

（編者より。本篇は革命藝術の創造に關してレオン・トローツキイが獅子吼せる劃時代的論文である。最近の『プラウダ』紙上に掲載され、目下ソヴエート文壇及び思想界を通じて評判の中心となり各方面に大論戰を醸してゐるが、ソヴエート革命藝術は大體に於て此の論文に説かれてゐるやうな方向に進んで行くものと見て差支ない。依つて、特に採錄することとした。）

社會主義の停滯か最高の力學か？――革命藝術の「寫實主義」――ソヴエート式喜劇――舊悲劇と新悲劇――藝術と技術と自然と――人間の再改造

凡そ革命藝術に就いて語る者は誰でも二種の藝術的事實を目指してゐる。一方からは革命を主題として取扱つてゐる作品と、他方からは主題に於ては革命に觸れなくとも、革命から生れた新しい意識によつて一貫されてゐる作品と、是れである。が、この二つの藝術的現象が全く異つた平面を占むるものであることは言ふまでもない。アレクセイ・トルストイはその作『苦腦の中を行く』に於て、世界大戰時代からかけて革命時代を描いてゐる。けれども作品其物はヤースナヤ・ポリヤーナ派（大トルストイの作風を指す）の舊套を出ない。依然としてその視野の中にある。たゞヤースナヤ・ポリヤーナよりも無限に小さな範圍に於て描いたといふだけの違ひである。而も世界的大事件に接觸したといふそのことに於て、この作品は單に、ヤースナヤ・ポリヤーナが曾て存在してゐたといふことを追憶させるだけに過ぎない。然るに青年詩人チフオーノフは、革命のことでなく（彼は革命のことを描くのを遠慮してゐるかのやうである）、ほんのちよつとした小店のことを描いても極めて鮮やかな手際と熱烈な力とを以て革命の遲緩な可動性を知覺し且つ之を傳へてゐる。是れは獨り新しい時代の力學（ダイナミツク）によつて養成された詩人のみが能くし得る所である。若し斯樣にして革命を描いた作品と革命藝術とが同一で無いとすれば、それは各自接觸點を異にしてゐると言はなければならぬ。革命によつて育まれた藝術家は、革命のことを描きたくなれば誰か

なくても濟む。けれども一旦彼が飽きたくなつた場合、ヤースナヤ・ポリヤーナ式の接觸は伯爵式にしても百姓式にしても之を必然的に斥ける。

革命藝術はまだ存在してゐない。が、この藝術の要素はある、その暗示と試みとはある。特に注意すべきは、その典型に於て新しい時代を構成してゐる革命人のあることだ。革命藝術はこの革命人に最も多く必要なのである。革命藝術が確實に自己を表白せんがためには幾許の年月を要するだらう？ 之を推測するのは極めて困難である。何故なら此の過程は數量的のものとは異つて、確かな計算が出來ないからである。でも我々は比較的物質的な社會的過程の期限を定むる場合に於てすら、推測だけで滿足しなければならぬことがある。それと同じ程度に於て、革命藝術とその最初の大きな波動とは、革命期に生れて革命を双肩に荷つてゐる若い時代の藝術として、間もなく到來するであらうといふことは推測出來る。

けれども、過渡期的社會のあらゆる矛盾を必然的に反映してゐる革命藝術を、社會主義的藝術と混合してはならぬ。社會主義的藝術のためにはまだ地盤が出來てゐないのである。が、同時にまた社會主義的藝術は過渡期の藝術から育まるゝものであることも忘れてはならぬ。

斯うした差別に立脚しながら、我々は決して或種のペダンチックな思想様式に囚はれてゐる譯ではない。エンゲルスが社會主義的革命を稱して、「必然の王國から自由の王國への飛躍」と言つたのは偶然でない。革命それ自身はまだ自由の王國ではない。却つて革命には戰鬪の特徴が極度の發達を遂げてゐる。若し社會主義が階級と同時に階級的對峙をも撲滅するものならば、革命は階級戰鬪を極度まで緊張させる。革命時代には、虐使者との戰鬪に向つて勞働者を結束せしむるやうな文學が必要であり、また發達する。革命文學は何所までも社會的憎惡の精神に貫かれてあらねばならぬ。この社會的憎惡心が、プロレタリヤ專制時代には、歷史の手に於て創造的母體として現はれる。然るに社會主義時代には連帶心が社會の基礎である。從つて凡ての文學、凡ての藝術は、全く別な調音叉（カメルトン）によつて調節されなければならぬ。我々革命家が今日屢々命名に苦しんでゐるその感情——それは低俗者や俗物共のためにひどく使ひ古されてはゐるか、例へば無私欲の友誼、隣人に對する愛、親切といつたやうな感情——は社會主義的文藝に於ては力強い和聲（アッコルド）として響くであらう。

所がニーチェ教徒の危んでゐるが如く、連帶心の過剩は人間を感傷的な被動的な牧群のやうな弱い存在に退化せしむる恐れはないだらうか。否、そんな心配は絶對にない。資本主義社會に於て市場競爭の性質を持つてゐた強い競爭心は社會主義的組織に於ても消失しないばかりか、精神解剖學の言葉を借りて言ふと、却つて昇華するばかりである。つまりヨリ多く高尚な且つ微妙な形式を取つて、自己の意見のため、自己の計畫のため、自己の趣味のための鬪ひとなるのである。政治的戰鬪の無くなるに從つて（超階級的社會に於て政爭のあるべき筈はない）、解放され

た欲求は技術や構造の方面に向けらるゝであらう。藝術もその中に包含されるのであるが、勿論その場合藝術は普遍的になり、圓熟し、洗錬される。そして實生活の單なる裝飾品でなく、凡ての方面に於ける生活構成の最高形式となるであらう。

　それはかりではない、實生活のあらゆる範圍、例へば土地の耕作、移住地の整理、劇場の建設、社會敎育の方法、學術問題の解決、新しいスタイルの構成等は、萬人の興味を集中するであらう。人々は新しい大運河の開鑿問題のためにサハラ砂漠のオアシス配置問題のために、黨派に分れるであらう。其他氣候風土の調節、新劇問題、化學的假說、音樂界の二大傾向競技の新組織等に就いて、同樣の爭鬪が起るであらう。が、是等の黨爭は決して階級的利欲のために害はれるやうなことはない。凡ての人は一樣に全體の成功に興味を有し、鬪ひは純思想的性質を持つであらう。その中には利益觀念や、卑劣手段や、不信行爲や、買收政策や、其他階級的社會に於て競爭心を煽つてゐる一切の行爲は消滅するであらう。けれども是れは、論爭が劇的に熱烈なものであることには少しも妨げない。社會主義的社會に於ては凡ての問題が、それは早く本質的に自給的に解譯されたもの（實生活）でも、或は特殊な僧侶階級の支配にあつたもの（藝術）でも――萬人の所有となる。それ故に集中的利益と欲求のためにも、個人的競爭のためにも、無數の端緒と廣い戰場とが有り得ると斷言することが出來る。從つて藝術は新しい藝術的傾向を構成したりスタイルを變更したりする上に於て、それの社會的エネルギーや集中的心理的衝動に不足を感ずるやうなことはない。美術派は美學派でまたその周圍に自己の黨派を組織するであらう。黨派と云つても、それは氣質と趣味と見解との共鳴によつて集まる團體である。斯くて著るしく水準を高めた文化の基礎に於ける此の無欲な、而も緊張せる戰鬪に於て、人間の個性は、何物にも滿足しないといふその根本的特質と共に、益々向上發展し且つ充分に研磨されるであらう。事實我々は社會主義的社會に於て個性の墮落や藝術の衰頽を心配する何等の理由も持たないのである。

＊　＊　＊

　在來の術語中に如何なる語を以て革命藝術を命名することが出來るか。僚友オシンスキイは何時か、革命藝術は寫實主義的藝術であらうと言つた。この言には正當な注意すべき理由がある。然し不審を抱くやうなことのないために名辭の意義を明かにしなければならぬ。

　最も完成せる藝術的寫實主義（リアリズム）は、我がロシヤでは、文學の「黃金時代」即ち貴族的クラスシック時代と一致してゐる。

　傾向的題目主義（テマティズム）の時代、即ち作品に於いて專ら作者の社會的意向を論議した時代は、眼覺めたる知識階級が社會的活動を求めつゝ、舊制度に對抗して「民衆」との結合に向つた時代と一致してゐる。

　寫實主義に反抗して文壇の水平線に現はれたデカダン派と象徴主義（シムボリズム）とは、知識階級が民衆を離れて自己の內經驗を崇拜し、事實上有產階級に

服從しつゝ、而し心理的藝術的にはその中に溶解しないやうに努めた時代と一致してゐる。象徴主義はつまり此の形のために天の助けを求めたのである。

歐洲戰爭前の未來主義（フユーチユリズム）は個人主義的道程に立脚して、象徴主義の催眠狀態からもぎ離れて、人格の根抵を物質的文化の征服に於て見出さんとした試みである。

ロシヤ文學の發達に於ける大きな時期の變遷はザッと以上の通りである。これで觀ると、それ等の各傾向は一定の社會的團體的人生觀を包有して、この人生觀が作品の題目や主題の上にまた環境や人物の選擇の上にその刻印を捺してゐる。内容の概念は主題と一致せずに、社會的問題と接近してゐる。時代と階級とその人生觀とは、無主題の抒情詩にも社會小說と同じやうに表明されてゐる。

次に形式の問題であるが、形式は或る範圍内に於て、凡ての技術のやうにそれ自身の法則によつて發達してゐる。凡て文學上の新しい流派はそれが氣まぐれの芽生でなく、本當の流派である以上、必ずその前時代の發達から將來する、既存の言葉と色彩との技術から發生するそして既に到達した岸から更に新しい征服のために術離れるのである。

そこに流派の發達　辨證論的に行はれてゐる。新しい藝術的傾向は前時代の傾向を否定する。それ　、何等かの思想及び感情に取つて、舊い手法を固持するのは堅苦しいからである。けれども同時に新しい情調は、舊い硬化した藝術のうちに、もつと發達さへすれば適當の表現を與へ得るやうな要素を發見する。斯様に文學上の各流派は潜在的に過去のうちに含まれてゐるのであるが、各々過去から離反して發達した。そして形式と内容との相互關係は、新しい形式が發見され宣言されて、内的要求の衝動の下に、（人間の心理のやうに社會的根抵を有する集中的心理的希求の衝動の下に）發達することによつて決定される。

是によつて各文學的傾向の二重性（曖昧なこと）が說明される。即ち是等の傾向は技術の一般的水準を高め若くは低めつゝ創作の手法に何物かを移入すると同時に、一方からはその歴史的具象によつて一定階級の要求を表現するのである。玆に階級の要求といふのは結局個人の要求といふことになる。階級は個人を通して語るからである。同時にそれは國民の要求をも意味する。何故なら、國民の精神は、その國民を支配して一國の文學をも左右してゐる階級によつて決定されるからである。

玆には象徴主義を例に取つて見よう、一體象徴主義とは何であるか。藝術創造の形式的方法として、現實を象徴的（シムボーリ）に取扱ふ藝術なのか、それともブローク、ソログープ其他によつて代表されてゐる象徴的傾向を指すのか。本來象徴（シムボル）なるものはロシヤの象徴派によつて考へ出されたのではない。ロシヤ象徴派は單に象徴主義の本體に、近代化されたロシヤ語を有機的に接種したに過ぎない。この意味に於て、將來の藝術は、それが如何なる道程を辿るにしても、象徴主義の形式的遺産を拒絶することを欲しないであらう。けれども生きたロシヤの象徴主義は或る時期々々に於て一定の社會的問題のために象徴を利用した。象徴主義に先だつた

デカダン派は一切の藝術問題の解決を個人的經驗（兩性、死、其他）のうちに求めたが、彼等は間もなく行き詰まつて了つた。そこで自己の要求や感情や氣分の最高の法則を見出し、それによつて是等を豐富にし高尙にせんとする要求が起つた。單に藝術的態度ばかりでなく、その信條＊でも形象で以て造つた所の象徵主義は、知識階級のために神秘主義（ミスチシズム）への藝術的橋渡しとなつた。この具象的社會的意味に於て、象徵主義は單に藝術の手法であつたばかりでなく、知識階級のために現實からの避難所であつた。彼等が此世ならぬ世界を建設するがための方法であつた。空想と瞑想と被動性との藝術的教育であつた。要するに象徵主義は知識階級か民衆から離れて行つた一つの隘路である。

今や寫實主義に就いて說明しよう。寫實主義はいろ〱な時代に、いろ〱な社會的團體の感情や要求を、いろ〱態度で表白した。各寫實派に就いて言へば、それ〱特殊な社會文學的定義と形式文學的評價とを下すことが出來る。が、彼等の共通點は何であるか。それは或種の重要な人生觀上の特質である。實人生の感覺である。生に對する執着は現實からの逃避ではなく、生の藝術的攝取であり、生に對する積極的興味であり、この生を創作の材料としていろ〱に取扱はんとする努力である。斯かる廣汎な哲學的意味に於て、新しい藝術は寫實主義的であると斷言することが出來る。革命と神秘とは第一共存が出來ない。若しまたピリニヤクやイマジニストや其他の者が稱してロマンチックと言つてゐるものが、本質ロマンチックの皮を被つた臆病な神秘であるならば、革命はロマンチックとも共存は出來ない。是れは單なる空論でなく、破るべからざる心理的考察である。然し是れは文學的傾向の傳統的な意味に於ける寫實主義でなく、人生觀上の意味に於ける寫實主義的態度である。新しい藝術家には、過去に造られた凡ての態度や方法が必要であると同時に、また新しい生活を把握せんがために更に何等かの補助的方法が必要である。と言つて、是れは必ずしも藝術の統一を意味するのではない。藝術の統一は更に積極的の人生觀を待つて附與されるからである。

＊
＊　＊

一九一八年及び一九年の頃、戰線に於て、俳優、女優、大道具、其他いろんな裝飾品を積んだ荷車の長い列に出逢すことは珍らしくなかつた。之には軍隊の行動も閉塞されたほどであ　。藝術の舞臺は概して歷史的運動の輜重車の中にあつたといつていゝ。で、我が戰線に於ける急激な移動の際、俳優や大道具を積んだ是等の荷車は途方に暮れて屢々困難な狀況に陷つた。時には白軍の手に落ちたこともある。歷史的戰線に於て急激な變化に遭遇した凡ての藝術は之と同じやうな困難を嘗めてゐる。特に演劇は最も多く苦しんだ。何所へ行くべきか、何を演ずべきか、全く知らなかつた。が、あらゆる藝術中最も保守的であるべき筈の劇壇に、非常に過激な理想家の居ることは注目すべき事實である。ソヴエート共和聯邦中に於て最も革命的な階級ば劇評家の註台であることも知

られてゐる。で、初めて革命の話を聞くや、彼等はレフテレツ（左翼劇評家の略語）の特別戦闘部隊を組織した。そして劇場が『マダム、アンゴの娘』、『タレルキンの死』、『トゥランドット姫』、『お目出度い夫』等を上演した時、是等の尊敬すべき左翼劇評家達はまだ辛抱してゐた。が、マルチンの戯曲を上演するに至つて、彼等は堪らなくなつて激怒した。（それはメイエルフオリドがまだ『地は逆立つ』を上演しない前のことである）。『あれは愛國劇だ』、『マルチンはパチフイストだ』と罵つた。或る一人は斯うも言つた、『我々に取つては斯んなものは昨日のことだ、何の興味も惹かない』と。所がこの左傾にこそ恐るべきブルジユア根性が隠れてゐるのだ。彼等には革命精神など匂ひにしたくも無い。先づ政治的經歷から言へば、マルチンは、今の左傾階級の多くの代表者がまだ左傾の恩惠に浴さない當時、既に革命家であり、インターナショナリストであつた、次に『マルチンの戯曲は我々に取つては昨日のことだ』とは一體何を言つてるのだ。フランス革命は既に完成したといふのか。既に最後の勝利を得たと言ふのか。それともフランス革命は獨立の歴史的ドラマでなく、單に我々の所に起つた事件の退屈な反復に過ぎないと言ふのか。想ふにこの左傾の蔭には、他の事は別としても、くだらない國民的偏見が隠れてゐる。マルチンの戯曲が冗漫であること、舞臺に上すよりも讀で面白い作品であることは爭はれない事實である。けれども、若し劇場がこの劇をその國民的歴史的具象に於て演ずるならば、是等の缺點は忽ち消滅するだらう。つまり逆轉した地球の様式としてゞなく、大なる道程の岐に立つたフランスのプロレタリアートのドラマとして演じたならば成功は受合である。舞臺を歴史的環境から抽象的な構成主義（コンスツルクチウイタ）的様式に移すことは革命の退却である。

今日我々に取つて舞臺の上にビオメカニック（運動力學）が必要であるか何うか、私は知らない。つまりビオメカニックは歴史上猶豫べからざる順序に適つて居るか何うか疑はしいのである。その代り私は、我が劇壇に清新な革命的實生活的演劇種目とソウエート式喜劇とが頸ッ丈必要なことを少しも疑はない。我々には自己の『未成年』、自己の『智慧の悲哀』、自己の『檢察官』（三種共有名な喜劇）が必要である。三種の古い喜劇の新しい上演でなく、またそれ等のソウエート式改作でなく、純然たるソウエートの喜劇が必要である。笑つたり怒つたりする單純なソウエートの氣風劇が必要である。何故なら、新しい階級、新しい生活、新しい惡癖、新しい痴鈍は、彼等を沈黙より引き出すように要求してゐる。之が行はれた時に、我々は始めて新しい演劇を手に入れることが出來る。新しい手法なしには新しい痴鈍は再現出來ないからである。想ふに幾許の新しい「未成年」が舞臺の上に自己の再現を待つて居ることだらう。「智慧の悲哀」又は「理窟の禍ひ」が如何に蒔き散らされてゐることだらう。若しソウエートの曠野を劇場「檢察官」が通過したら、どんなにいゝことだらう。劇作家諸君！　どうぞ、脚本檢閲の八釜敷いことを口實にし給ふな。そんなことは嘘である。若し諸君の喜劇が『一體我々を何所まで引つ張つたんだ、到頭古の懐かしい貴族の家に立歸つた』と言

つたら、その場合は勿論檢閲官は正當の處置を採るであらう。が、若し諸君の喜劇が『玆に新しい生活を建てようぢやないか、我々の周圍には新舊の醜事實や野卑なことや下劣なことがうよ〳〵たかつてゐる、之を一掃しようぢやないか』と言つたら、檢閲官は決して之を妨げない。若し妨げたら、それは檢閲官の不明の致す所であるから、斯かる檢閲官に對しては何所までも反抗しなければならぬ。

私が誰をも侮辱しないやうに、慇懃に袖の中で欠伸をかみ殺しながら、觀劇した僅かな場合の經驗に就いて觀ても最も鮮やかに私の記憶にとまつてるのは、觀客席が今日の生活に對する、どんなに小さな、ちよつとした暗示でも、それを一々鮮やかに捕捉してゐる一事であつた。特に面白いことには、それが藝術座のオペレットに於て觀察されたことである。その時私の頭に浮んだ考へは、若し我々がまだ喜劇を作るまでに生長してゐないとすれば、社會的實生活的のスケッチなりと作りたいものだ、といふことであつた。

勿論將來の演劇は四壁の中から飛び出して、ビオメカニックのリズムに從ふ所の群衆生活の中に溶け込むであらう。けれども此れは既に角「未來主義」である。遠い將來の音樂である。所が、演劇が養はれて來た過去と遠い未來との間には、我々が生活してゐる現在がある。されば、パッセイズムとフューチュリズムとの中間を取つて、プレゼンテイズムに舞臺の地位を與へるのが今日の急務ではないか。讀者諸君！　我々はこの傾向に贊成しようではないか。一つの立派なソウエート喜劇さへ出れば、劇壇は數年間の飛躍をするだらう。さうなれば藝術の極致と思はれてゐる悲劇も自然出て來るだらう。

＊　＊　＊

然るに我々の無神論時代は、記念碑的(モニュメンタル)藝術を作ることが出來るだらうとか、或る神秘家(ミスチック)は問ふてゐる。彼は革命が死後の生活を保障する條件の下に革命を承認せんとする側の人である。文學の最も記念碑的な形式は悲劇である。古のクラスシックは悲劇を神話から引出した。運命に對する深い徹底的な信仰が無ければ古代の悲劇は無い。記念碑的な中世紀の藝術も矢張りクリスト教の神話によつて統一された。それ等の神話は神殿や密式(ミステリー)ばかりでなく、一切の生活關係をも宗教的に意味づけたのであつた。斯くして凡て記念碑的藝術は、生の宗教的知覺と生に對する積極的關係との統一した場合に於てのみ出來たのである。若し宗教的信仰が斥けられたら、生活は赤裸になる。若し現代知識階級の曖昧な神秘的な氣分でなく、本當の宗教が、神や天の誡命や教材の僧侶と共に排除されたら、人生は本來の姿を暴露して、英雄や運命や罪悪や贖罪の居所が無くなるだらう。

不可抗的な運命に對する信仰は、明白な思想と貧弱な技術とを持つた古代の人が頼つてゐた狹い眼界を反映してゐる。古代の人はまだ現代の範圍に於ける自然の征服など思ひも寄らなかつた。自然は運命のやうに彼を壓した。技術の有限と不動、病氣と死、其他人間を制限する一切の

物——それは凡て運命とされた。斯くて悲劇は眼覺めた意識の世界と限られた技術との不盾に孕まれたのである。が、神話がこの悲劇を作つたのではなく、神話は單に人間の少年期の形象的な言葉に表現を求めたわけである。

然るに中世紀のブルジュア社會は人間的關係に極度の柔軟性と可動性とを與へて、それを原素化した。記念碑的な宗教藝術の基礎としての原始的な意識、原始的な經濟關係と共に消滅した。改革後の宗教は著るしく個人主義的性質を受けた。そして藝術の宗教的象徴は天の階梯からもぎ離れて、その支柱を個人的意識の神秘のうちに求めた。

セクスピアの悲劇——それは宗教改革（レフォルマシヨン）なしには考へられない——に於ては古代の「運命」と中世紀の宗教熱とは、個人的人間的慾望によつて壓倒されてゐる。卽ち戀愛、嫉妬、復讐、煩悶等によつて壓倒されてゐる。けれどもセクスピアのどの劇に於ても、個人的慾望は、それが人間を通り越して超人格的となつて、一種の運命に變ずる時に、緊張の極度に達する。オセロの嫉妬、マクベスの虚榮心、シャイロックの貪慾、ロメオとジュリエットの戀、コリオランの傲慢、ハムレットの心的動搖等はそれである。セクスピアの悲劇は個人主義的である。從つて一般國民的意識を表現したエヂプスほどに社會的でない。でも、セクスピアは兎に角非常な進歩をしてゐる。エスフイルと比べて遜色はない。セクスピアの藝術はより多く人間的である。が、何れにしても我々は、神が支配して人間が服從してゐるやうな悲劇は承認出來ない。今更そんな悲劇を書く奴もなからうけれど。

一切の人間關係を原素化しつゝ、ブルジュア社會はその曙光期に於て、個性の解放といふ大きな目的を持つてゐた。セクスピアの劇とゲーテの『フアスト』とは其所から生れたのである。そこで、人間は世界の中心となり、從つて藝術の中心となつた。そして此のテーマは世紀を支配した。凡ての新しい文學は、その本質に於て此のテーマの發展であつた。けれども最初の目的——個性の解放、人格の尊嚴——は何時の間にか凋落して、ブルジュア社會の内的破産がその堪え難い矛盾を消して曝露するに從つて、新しい神話の領分に退却した。

然るに個性と超個性との衝突は、單に宗教的基礎に於てばかりでなく、また人間を通り越す人間的慾望の基礎に於てばかりでなく、起り得る。超個性には古代の運命はかりでなく社會性をも數えることが出來る。人間が自己の社會組織を支配するまでは、社會組織が運命のやうに人間を支配する。その際社會組織が宗教的陰影を投げようと投じまいと、それはどつちにしても第二義的の事情であつて、人間の心持次第で定まる。まだそれ程に圓熟しなかつた社會に於て、共産主義のために戰つたバベフの闘ひは、古代の英雄と「運命」との闘ひであつた。バベフの運命は眞の悲劇のあらゆる特質を備へてゐる。

閉された個人的葛藤の悲劇は我々の時代に取つては餘りに無味乾燥である。何故なら、我々は社會的葛藤の時代に生きてゐるからである。我々の時代の悲劇は個性と社會との衝突か、でなければ二つの敵對せる社

會が個性ヶ通しての衝突であられはならぬ。我々の時代け新たに大なる目的を有する時代である。この點に我々の時代の印（しるし）がある。けれども謂ふ所の大なる目的とは、人が神秘的な夢幻や様々な思想上の混沌界から自己を解放することである。人が自己の社會と自身とを自己の創造したプランによつて改造することである。是れは勿論、古代の子供らしい遊戯や中世紀の修道師の讃言や個人主義の獨りよがりと比べて、大きな目的に違ひない。

悲劇は、ヒロイックな努力の緊張と、目的や葛藤や苦悶の終局を豫想してゐることによつて、文學の最高形式となつた。この方面から言つて、スチプンが『悲劇と現代』なる論文に於て革命前期のロシヤ藝術の無價値なことを論じた説は正當である。

ブルジュア社會、個人主義、宗教改革、セクスピア劇、大革命等は、外部からの目的に對しては悲劇的意味を認めなかつた。何故なら、大なる目的が、悲劇を生かす偉大なる感情の基礎となつて、之をヒロイズムにまで進めんがためには、國民の意識又は國民を指導する階級の意識を通過しなければならないからである。少しも國民の意識に徹底しなかつた帝政時代の戰爭は、單に惡詩を生み出したに過ぎない。個人主義的詩歌も現はれたことは現れたが、別に客觀的の進歩も見せす、大藝術も作らなかつた。

次にデカダン派と象徴主義とはその凡ての末派と共に、社會的形式としての藝術の歴史的勃興の見地から言へば、單にペンの先の試み、技術の練習、樂器の調子合せに過ぎなかつた。革命前期は藝術に於て目的なき時代であつた。目的を持つてゐた者は、藝術には用が無かつた。が、今や藝術を通じて大なる目的を實現しなければならぬ。果して革命藝術が高尙な革命的悲劇を與へ得るか何らかは豫言出來ない。けれども社會主義的藝術は悲劇を復興するであらう。勿論それは神なしの悲劇である。新しい藝術は無神論的藝術でなければならぬ。新藝術はまた喜劇をも復興するであらう。何故なら新人は笑ふことを欲すからである。新藝術は更に小説に新しい生命を與へ、抒情詩に一切の權利を附與するのであらう。何故なら、新人は舊人よりもヨリ善く、ヨリ熱烈にラブし、また生と死の問題に就いても深く考へ込むだらうからである。新藝術はまた創造力の發達によつて作られた一切の舊い形式をも復興するであらう。もと〳〵是等の舊形式の解體と崩壊とは絶對的の意味を持つてゐる譯ではない。つまり舊形式は新時代の精神と絶對的に矛盾するものではない。たゞ新時代の詩人は、考へ方や感じ方を新式に改めることが必要である。

* * *

將來に於て、都市、公園、家屋、鐵道、港灣等の新しい設計が、啻に建築技師や請負競爭者ばかりなく、廣い民衆の熱烈な興味を喚起するといふことは、少しも疑ひを容れないところである。街區や街路に煉瓦を一つ〳〵積み重ねて行く蟻の仕事のやうな今日の建築は、將來設計圖と

コムパスとを以てする都市村落の大建設に變るであらう。そしてこのコムパスの周圍には民衆の各團體が集つて賛否を唱へ、また獨特な建築技術の各流派が互ひに批判と集會と討論とを行ふであらう。この論爭の間に、建築術は更に最も高級な程度に於て民衆の感情と氣分とを飽和するであらう。そして人類は造形美術の方面に發達してこの世界を、恰も生活樣式の模型を造るための從順な粘土か何かのやうに取扱ふことになるだらう。その時になつたら、藝術と産業とを分つ障壁は無くなるだらう。そして將來の大きなスタイルは裝飾的でなく、造形的になるだらう。

この點に於て未來派は正當である。然し藝術と産業との合同を目して、藝術の破滅とし、技術に對する藝術の自己退却として說明するのは誤謬である。例へばナイフの製造に藝術と技術との結合を適用する場合、兩者は二つの根本的な線を進むことが出來る。即ち藝術はナイフの象牙の柄に、光彩された美人又はエッフェル塔を描いて、ナイフを裝飾するのである。でなくとも藝術は技術を助けて、ナイフの目的と材料とに最もよく適合するやうなナイフの理想的形式を發見せしむることが出來る。然しそれくらゐのことは純技術的方法でも解決されると思ふのは間違ひである。何故なら、目的と材料とは無數の變體を豫想して、どれでも自由に選擇が出來るからである。然るに理想的ナイフを造らんがためには、材料の性質や製作法の智識の外に、想像力と趣味とが必要である。産業文化の傾向と合致しつゝ、我々は藝術的想像が、工業品生産の範圍に於ては、事物の裝飾に向けらるべきものでなく、その理想的形式の仕上に向けらるべきものであると考へる。若し此の事がナイフの場合に於て正當であるならば、況んや服裝、家具、劇場、都市等の場合に於ては尚更必要であらねばならぬ。是れは決して、遠い將來に於ても、藝術の破滅を意味するものではない。それは兎に角、第一義的の意味に於て、藝術とあらゆる技術との直接の協同が必要である。

その場合、産業が藝術を併吞するか、それとも藝術が産業を自己の寶座に引上げるか、之に對する答は、我々が産業方面から接觸してゐるか、又は藝術方面から接觸してゐるか、その接觸線の如何によつて異なるであらう。けれども客觀的に總括して觀れば、それ等の答の間には結局差別に無い。兩者共、藝術の範圍の偉大なる擴大を認むると同時に、産業の藝術的資格の偉大なる向上を認めてゐる。而も此の場合我々は産業といふ語の下に、人間のあらゆる生産活動を例外なしに網羅してゐる。農業、機械工業、電氣工業、何れも同じ産業の一部である。

けれども啻に藝術と産業との間ばかりでなく、それと同時に藝術と自然との障壁も無くなるであらう。それは然し藝術が自然に接近するといふ意味に於てゞなく、反對に自然がヨリ多く藝術的になるといふ意味に於てゞある。今日見るが如き、山嶽と河川、野原と草原と曠野、森林と海岸の配置は、決して完成したものとは言へない。人間は既に、些細なことではあるが兎に角何等かの變化を自然界に齎らした。けれども是れは將來に起り得ることゝ比べたら、ほんの子供らしい經驗に過ぎない。若し宗教が山嶽を動かすことを約束したとすれば、技術は宗教の力を借

りるまでもなく實際に山獄をもぎ取つて他へ移すことが出來る。今日まではそれが產業上の目的（堅坑）か、又は運輸上の目的（トンネル）のために爲されたが、將來はもつと／＼非常に廣い範圍に於て、產業美術共同の設計に基いて大々的に行はれるであらう。そして人は山野河海を再調査して、自然の缺陷を訂正するであらう。仕舞には自己の像と背とによつて、でなければ自己の趣味によつて地球を改造するであらう。我々はその趣味が將來惡化するなどゝ危ぶむ何等の理由も持たない。

國內戰爭の時代から人は赤貧洗ふが如き有樣となつた。日本の大地震のやうなことはなかつたが、兎に角恐るべき破壞に陷つた。恐らく、貧窮飢餓、缺乏を壓服し、自然をを征服せんとする欲求は、今後數十年間の支配傾向となるであらう。良い意味に於てのアメリカ主義に對する欲求は、若い社會主義的社會の最初の躍進まで伴はれるであらう。自然美の被働的觀照などは藝術から一掃されるであらう。そして技術は自然美よりも遙かに強く藝術的創造を刺戟するであらう。斯くて技術と自然との矛盾も最高の綜合（シンテーズ）に於て解決されるであらう。

＊　＊　＊

或る熱中家の中には今日生活の演劇化と人間の律動化とに就いて考へてゐる人がある。是れは單なる空想ではなく、この遠景に對しては今日堅實に熱心に準備されてゐる。人が自己の經濟生活を一定の目的に統一して凡てを合理的に處理する曉、今日のやうな停滯腐朽せる家庭生活は全然跡を絕つであらう。その時には、今日墓石のやうに各家庭を壓してゐる營養と教育との心配は家庭から省かれて、社會的企圖若くは集團的創造の事業に移るであらう。そして婦人は結局今の半奴隷的狀態から救ひ出されるであらう。教育學は技術と並んで、新しい時代の心理的及び生理的構成の意味に於て、社會思想の支配者となるであらう。教育組織はその周圍に有力な黨派を集中するであらう。社會教育的經驗と種々なる教育法の競爭とは、今日想像することも出來ないやうな一大展開を見るであらう。共產主義生活は盲目的にでなく、意識的に建設され、思想によつて考査指導されるであらう。人は山河を動かすと同時にモンブランの絕頂に、大西洋の海底に國民宮殿を建立するであらう。さうなつたら、人は自己の生活に富と光輝と緊張とを附與するばかりでなく、最高の運動をも附與するであらう。そして生活の表皮が硬化するや否や新しい技術文化の發明と收穫との一齊射擊の下に爆破されるであらう。斯くて將來の生活は單調でない。

それればかりでなく、人は遂に自分自身を齊整することに取りかゝる。勞働の際にも、步行の際にも遊戲の際にも、自身の肉體機關の運動に、高尚な端正と整頓と節約とを取り入れ、それによつて凡ての行動を單純にすべく努力するだらう。人は自己の有機體に於て半無意識的作用乃至は無意識的作用（呼吸、血液循環、消化、受胎作用）を支配し、必要の程度に於て此等の作用を理性と意志との監督に服せしめるであらう。そして生活は、純生理的生活ですら、社會的實驗的のものとなるだらう。

斯くして一旦硬化した人類は再び熱烈な再改造に着手して、自身の手の中で、藝術的撰擇と心理的生理的馴致との複雑な方法の對象となるであらう。

解放された人類はその肉體機關の作用に於て大なる平衡と均等なる發達を遂げるやうに努力する。それは之によつて死の恐怖を、危險に對する有機體の適宜な反應の範圍内に引入れんがためである。人間の極端な不調和（解剖學上及び生理學上）と肉體機關の不平均な發達とが、活潑な本能に卑屈な病的な死の恐怖の歴史的形式を附與し、死の恐怖がまた理性を昏まし、死後の生活に關する愚かしい卑怯な空想を生み出したといふことは疑ふべからざる事實である。

人はまた自己の感情を支配し、本能を意識の絶頂に持上げ、それを透明なものにし、隱れたる秘密の世界にまで意志の案内を延長するであらう。そしてそれによつて新しい階段に昇り、もつと高尚な社會生物學的タイプを作り、場合によつては超人をも作るであらう。

將來の人間が如何程高尚な自己發展を遂げるかは、技術の進歩と同じく豫言出來ない。社會的建設と心理的生理的自己教育とは同じく過程（プロセス）の兩面となるだらう。藝術。即ち文學、演劇、美術、音樂、建築等は此の過程に美しい形式を與へるであらう。もつと精確に言へば、共産主義的人間の文化的建設と自己教育との過程がやがて攝取せんとするその形式は、今日の藝術の生命ある凡ての要素を極度まで發達させるであらう。そして人間は比較を許さはいほど強く、聰明に、且つデリケートになるであらう。その肉體は調和の極に達し、運動は律動的（リズミカル）となり、聲は音樂的に響き生活の樣式は力學的（ディナミック）な演劇趣味を帶びるだらう。その際人間の平均タイプはアリストーテル、ゲーテ、マルクスの水準まで高まるであらう。そして是等の山脈の上では更に幾つかの新しい峰が聳え立つであらう。（完）

獄中を顧みつゝ

堺　利彦

肉體連結の感

『大杉がやられた！』『野枝も魔子もやられた！』

『南葛で川合等が七八人やられた！』

『福田狂二の處でも二三人やられた！』

『水沼もやられた！』『××もやられた！』『××もやられた！』

こういふような報導がとぎれ〳〵に、飛ぶような勢ひで我々の監房内に傳はつたのは、九月の二十日頃ででもあつたらうか。私は初めて第一の報導、『大杉がやられた』といふ報導に接した時、いきなりうしろから頭を三つ四つ、樫の木の棍棒か何かで續けさまにどやしつけられたような打撃を感じた。

二三日の中に、矛盾した幾つもの報導を整理して考へて見ると、大ぶん風説の誤謬があるらしいといふ事も分つたが、それにしても、大杉君夫婦のやられた事と、川合君外數名のやられた事とだけは正に確實だと思はれた。そして、どんな理由で、どんな風にやられたのか、内容の細目が一さい分らないので、不安の感じは一層强かつた。喩へて見れば、まつくらがりの中に幽かな光がさして、幾つかの血にまみれた屍體が重なりあつて轉がつてゐるのが、チラ〳〵見えた

り隠れたりすると云つたような心持であつた。

南葛の犧牲者の中、私の善く知つてゐるのは川合君だけであつたが、あの賴もしい若者が、何等かの事情の下に健氣にも自ら進んで死地に就いたのであらうか、あの有望な青年が、何等かの暴力の下にむざ／＼と叩きつけられたのであらうかと考へると、實に我身を切られる思ひがした。現に南葛組合に於ける川合君の相棒とも云ふべき働き手の渡邊政之助君は、我々の共犯としてこゝに來てゐる。我々は皆な互ひに、直接あるひは間接に連結した肉體だと考へる事が出來る。川合君以外の犧牲者と雖も、よし個人的の交はりはないにしても、肉體連結の道理は同じ事である。勞働運動の有力な一部が亡ぼされる事は、我々として直ちに自己の肉體を切り取られる事を意味する。殊にそれが平生から親しんでゐた者、望を囑してゐた者となると、其の感じが極めて深くなるのである。

大杉君に至つては肉體連結の感じが又た一層深い。但し卒直に云ふと、私は近年、大杉君と餘り善い交はりではなかつた。主義の爭ひ、態度の差異、それから生じた種々なる個人的の反感、凡人にも英雄にも免かれがたい幾多の弱點が我々の間に暴露されてゐた。然し今この大變の報道の前に、そんな事が何だらう。大杉君と私との交りは殆んど廿年の歴史を持つてゐる。而も其の歴史が、或る時は我々をして義兄弟ともならしめた。或時は獄友ともならしめた。狹い友人知人の間に於いても、廣い社會公衆の前に於いても、二人の關係は旣に切つても切れないものになつてゐた。仲違ひが生ずれば生ずるほど、我々の關係は寧ろ逆に緊密となるような感じもしてゐた。大杉君と私との間に於ける、主義の爭ひ、態度の差異、それは確かに拭ひ去る事の出來ないものであつた。けれども、少し廣い意味から云ひ、少し遠い眼から見る時に、我々の肉體的連結を否定する事がどうして出來よう。『大杉がやられた』のは即ち私がやられたのである、少なくとも、私の肉體の一部がやられたのである。

斯くて私は、此の大變の報道に接して、事情も原因も分らないながらに、それを直ちに自分の身の上の出來事と感覺した。まつくらがりの中に轉がつて見える數個の屍體の中、其の一つは兎にかく自分のであるかの如くに感じた。

何とも仕方がない

それから餘ほど立つて漸く接見禁止が解け、諸方からの手紙を受取ると、それの殆んど總てに共通な挨拶が一つある。お前は幸運な男だ。外に居れば確かにやられてゐたのだ。此の前、大逆事件の時もそうであつた。何が幸ひになるか分らぬものだ。凡そこういふ意味が、或は隱微に、或は遠廻しに書いてある。其の中、最も明白に書いてあつたのは今村力三郎君の手紙であつた。曰く『千葉の既決で幸徳との同件を免かれ、今度の未決で大杉との相棒を逃れたりとせば』云々。又た信州からの或る手紙には、『獨り先生は共産黨事件とやらに甘かされなかつたのは實に不可思議の運命……人間萬事塞翁の馬とは此事ならん』とあつた。『甘かされる』とは多分、信州の方言だらうとは思つたが、其の意味は分らなかつた。何しろこんなわけで、成ほど自分は幸運なのだらうかとも思つたが、同時に又、其の幸運が此うえいつまで續くものかといふ不安を感ぜずには居られなかつた。

年末に保釋で歸つてから、『信州の方言』の意味も分り、その外いろ／＼の委しい話を聞いて見ると、又大ぶん違つた感銘も受けた。內容の分らぬ時は分らぬで一層の不安を感ずると思つたが、分つて見ると又その分つた所で一層の恐ろしさを感ずるのであつた。そして新たに會ふ人の殆んど總てが、矢張り獄中で受取つた手紙と同じ挨拶を繰返すので、何だか自分の生きてゐるのが不思議なような氣持もした。

山川均君が獄中によこした手紙に非常に面白いユモラスな一節がある。『今春は當分靜養の目的で歸郷すると、間もな

く老兄等の事件が起つたのですが、何様新聞の騒ぎが大きく、小生の如きも、東京電話では東京で検擧されて居り、岡山の新聞では郷里に潜伏中を逮捕され、大阪電話では今東京に護送中といふ始末、小生は検擧される心當りもなく、又現に本人は玆にかうして居るとは信じてゐるものゝ、あまり評判が高いので、本人の意識は一番あてにならぬといふ兼ての老兄の教の如く、或は逮捕護送されたのが本統で、玆に居るのは小生の抜殼かも知れず、その邊を確かめかたく〳〵、殊に老兄等の上も案じられるので、早速歸京して見ましたが、………」

小さんの得意の落語の一つに、自分の醉つぱらつて行倒れになつた屍體を引取りに行くといふ話がある。私は山川君の手紙を讀みながら、それを思ひだしてツイ吹きだしたりした事だが、今度は私自身が本人と抜殼との關係を疑はねばならぬハメになつて來た。

正月早々、私は大阪まで保養旅行を試みたが、其汽車中で小カバンから取りだして見た近著の英文雜誌には、(ComradeSakayMurdered)(『同志堺の虐殺』)と題した一篇の評論文が載つてゐた。それに依ると、震災の時、私は一度、監獄から解放されたが、再びそこに連れ歸られる途中で、逃亡を企てたといふ理由に依り射殺されたと云ふのである。リープクネヒト、ロザ・ルクセンブルクまで引合に出して論じてあるので、私としては誠に光榮の至りであるけれども、ずいぶん變な氣持がせぬではなかつた。勿論これは、當時おびたゞしくあつたといふ『流言飛語』の一つが、どうかして傳はつたものであらうが、『流言飛語』の底に何程かの事實の種がなかつたとも限らない。そして今後又、どんな事が起らぬとも限らない。何しろ恐ろしい事である。

斯様にして、私は自らの生きてゐる事を不思議がるような變な氣持でゐると、多くの親しい人々が今後の事について様々と私に注意してくれる。第一、呉々も用心せよ。勿論わたしは用心する。出來るだけ用心する。然し、我々には

今、言論の自由もない、團結の自由もない、自ら防衛すべき武器もない、種々の防衛設備を爲すべき自由もなければ財力もない。大臣も殺され、富豪も殺され、その外、有らゆる人間が場合に依つては總て危險に晒されてゐる今の世の中に於いて、我々の如き者が生命の安全を期しようとしても、それは出來ないのが當然である。出來るだけの用心はするが、それから先は何んとも仕方がない。

或人は又こう云つて呉れる。どうせお前の命はモウ疾くにから投げだしてあるのだ。既に幾度も死にはぐつた以上、今の命は全くのモウケ物だ。其の積りでシツカリやれ。如何にも其の通りである。只だ人間といふ奴は、強い生存欲の本能を持つてゐるので、幾度死にはぐつても、幾ら年を取つても、生きてゐる事が厭にならないのに困る。と云つて、其の生存本能が有効に敵を拒いで呉れるわけでもないのだから、結局は矢張り、何とも仕方がないといふ所に安心しておくより外に仕方がない。これが私の心理的現狀である。

(私は今、自分の一身に關するだけの事しか云ひ得ない。我々の運動に關する態度とか方針とかいふような事については、もすこし善く世間の事情を知つてからでないと、見當がつかない。私は只、我々の運動の歴史的必然性を確信してゐるので、運動が如何に絶望的に見える場合があつても、それは皆な一時的の反動現象に過ぎないと目する。一時的の運命や、個々人の運命は、運動全體の終局の運命に比べる時、大した問題とするには足りない筈である。)

共産黨事件、消化不良その他

『泰山が鳴動して鼠が一疋飛びだした』といふ、我々の共産黨事件については、いづれ新聞紙が報道してくれるだらう。私は只だ成るべく早く裁判を片づけて、成るべく早く刑の執行を受けたいと思つてゐる。そして『秘密結社』など

といふものゝ再び必要でないように、『我々の公然政黨』を出現させたいものだと考へてゐる。政府としても、もう其の邊までくらいは氣がつきそうなものだ。

私の今度の入獄は、六月の五日から十二月の廿四日まで、六個月と廿日ばかりの未決拘留生活であつた。其の前の千葉行の時からは既に十三年ばかりを隔てゝゐるので、大ぶん珍らしい氣持がしたが、少し慣れて見ると殆んど昔しに變る所はなかつた。その獄中生活の樣子を今から逐一書きつけるほどの熱心はない。（我々の獄中生活の委しい記事は、大杉君の『自叙傳』の中にもあり、私の舊著『樂天囚人』の中にもある。）

多くの人々は私の年齢を考へて、『老體』の安否を氣遣つてくれたが、そこは御方便なもので、別だん老も感ずるほどの事は殆んど一つも無かつた。只だ私の一番困つたのは消化不良の持病であつた。人は皆な腹が減つて困ると云ふのに、私は腹の減らないに困つた『人生に苦勞只ひとつ腹の減らぬ事』などゝ口ずさんだりして、靜坐深呼吸もやつて見る、室内運動も色々やつて見る、後にはタカヂヤスターゼ、ラクトスターゼも毎日服用する、朝と晩はパンを買つて貰ふ事にする、有らゆる方法を講じて見たが、依然として効果は無かつた。それでも、秘結や下痢が甚だしきに至らず、兎にかく病氣といふほどのものには一度も罹らずに濟んだのは、矢張りそれだけ効果があつたのであらう

寒さに對しては初から大いに恐れを成してゐたが、年を越さない中に出たので、それも大した問題にならなかつた。只どてらを着て毛布にくるまり、その上を一枚蒲團の柏餅にして寢ると、寢返りも容易には出來ないほど窮屈で、脊骨が痛くて堪らなかつた。それだけはさすがに年のセイだと思つた。

永いあいだ獨りで寂しいだらうと、よく見舞を云はれるが、本を讀むといふ有りがたい事がある以上、其の點は決して大した苦痛でない。尤も私は、室内に繪葉書展覽會を開いた事もあり、猫の寫眞を毎日板壁に立てかけて置いた事も

ある。私は又、三體詩や唐詩選を繰返し繰返し吟誦してゐた。それには腹ごなしといふ意味もあつたが、矢張り寂しさを紛らす一つの方法でもあつた。

それから寢る時間が毎ばん十一時間ばかりもあるので、寢が餘るのに閉口した。それで夜中に目をさましてモジ〳〵してゐる時、樣々の事を考へて見る。昔し千葉でそういふ度毎に、フランス語で一から百まで云つて見る事にしてゐたのを思ひ出して、今度もそれをやりかけて見たが、一、二、三、四でもう行き詰まつてしまつた。三乘の九々を覺えてゐるかどうかと思つてやつて見ると、二二が八、三三が廿七、四々六十四とスラ〳〵出る。八々五百十二の所でチョットまごついたが、九々七百廿九まで兎にかく首尾よく及第した。代數の公式を考へて見たが、$(a+b)^2=a^2+2ab+b^2$　$(a+b)^3=a^3+3a^2b+3ab^2+b^3$　$(a+b)^4=a^4+$……………あとはモウ忘れてゐた。

ハンガ、ストライキ

我々の共犯は皆な元氣であつた。共犯以外にも社會主義者、勞働運動者の誰彼が來てゐて、皆な元氣にしてゐた。そして若い人達は折々看守君と衝突したりして面白がつてゐた。尤も、たまには痛い目を見せられた事もあるらしかつた。

或時、市川正一君が少し本氣に看守君と衝突して、とう〳〵懲罰監に入れられた。すると、其の同じ第四監に居た吾黨の連中が憤慨して、ハンガ・ストライキ（絶食同盟）をやりだした。第四監の階下にある第八監の連中も應援した。ストライキは僅かに一日で勝利に歸し、市川君は無事に元の監房へ返された。皆は萬歲を唱へてそれを迎へた。私等數人は第五監に居たので、此ストライキに加はるの光榮を有しなかつた。

川崎悳二郎君の死

共犯の中、只ひとり川崎悳二郎君（本名悦行）が病身であつた。彼は炭城の炭坑に行つて胸の病を獲て居つてゐた所を捕へられたのであつた。

地震前の病監にはいつて居り、地震後は大變よくなつたと云つて私等の第五監に來てゐたが、程なく又わるくなつて更に病監にはいつてゐた。そして十一月十二日、遂にそこで死んだ。私はこんな言葉を並べて見た。

又一つ蕾が落ちた。
大きくふくらんで、
頼もしく見えてゐた其の蕾が。

戰ひの場となつて、
赤茶けた着物を着て、
病監の一室で寂しく死んだ。

一人の獄友、
最も親しかつた一人の同志は、

僅かに最後の一二言を交はした。

三人の獄友、
男女三人の親しかつた同志は、
只その青白く眠つた顏だけ見た。

他の廿人あまりの、
獄友、戰友、同志は、
只その知らせを聞いて、
それ〴〵の室で吐息をついた。

あゝあの義憤に燃えてゐた心よ、
竹の樣に眞直ぐかつた心よ、
雪の樣に眞白かつた心よ、
強く堅く鋭く勇ましかつたあの心よ。

そして同時に、

あの云ふに云はれぬほど可愛らしかつた、
幽かなエクボさへ浮かんでゐた、
いつも人なつこげにほゝえんでゐた、
大きな蕾のやうにふくらんでゐた、
あの顔よ。

私は此の病監について思ひだす事がある。昔し赤旗事件か何かの時、運動場への行き道か戻り道かに、第八監の人々の石段の上に立つて、ツイ其の前の病監を望みながら、『いつかあそこで死ぬるのかなア』と、山川君に話した事がある。『かしこにて死なん身かな、と語りつゝ、見れば懐かし病監の窓』『病監はさすがに人の家に似たり、花園近く窓低くして』などいふ歌に似たものを作つたのは、其の時の事であつた。それで今度も山川君に手紙を出して、『いよ〳〵本當に川崎君があそこで死んだ』と云つてやつた。

十一月廿五日の歌

目出たい獄中の誕生日よ、
夜あけの窓の雀の聲が、
今日はいつよりも賑に聞えた。

思ひだす、昔し母が、
めざし鰯の脂をそえて、
よく拵へてくれたあづきめし。

其の懐かしいあづきめしを
今は妻と娘が運んで來て、
箱辨當にして差入れて與れた。

鯵の脂が飛びあがるほど旨かつた、
鯛の味噌漬が震ひつくほど旨かつた、
大きな樽柿と栗のきんとん、
これが又氣の遠くなるほど旨かつた。

おゝ何と目出たい獄中の誕生日よ、
可憐な幸運な堺老人よ、
滿五十三歲の禿頭病の親爺よ。
去年の今日は盲腸炎で死にかゝつて、

森ケ崎の病院に寝てゐた。
好しさらば來年の今日は、――
鬼が笑つてる。

人類學的智識注入の効果

安成貞雄君が、私に少しばかり人類學の智識を注入してやりたいといふ兼ねての親切心からして、今度の入獄を機會に、先づそれに關する平易の英文書を三冊ばかり差入れて呉れた。

私は有りがたくそれを落手して早速讀了したが、大して新智識を得たとも思はなかつた。只だ其の中の一冊が可なり新らしい出版であつたので、母權制に關する最近の研究の程度が、別だん是といふほど變つたものでないといふ事實を知り得て安心したに過ぎなかつた。

最初、私は『差入禁止』の爲、自分の藏書を取寄せて讀む事が出來ないので、丸善に注文して一冊の獨逸書を購求した。社會主義關係の本を注文するのは多少面倒と思つたから、少し縁の遠い兩性關係の研究書を指定して置いた所、指定の本は品切れで、幾分それに關係のある、ヴントの『民族心理學』を届けてよこした。これは偶然にも安成君の親切な希望と一致したわけであつた。それで私は其の本に依つて、安成君の注入より遙か以上に、人類學的智識を得た。然し實を云ふと、私に取つては、其の本は獨逸語の稽古の爲にはなつたけれども、智識としては矢張り大して有りがたいものではなかつた。何しろヴントと云へばエライ筈の大學者であり、又この『民族心理學』は此の方面に於ける有名な著述であるらしいのだが、私に取つては、多くのブルジョア學者と同じように、寧ろ讀み損の感じがするのであつた。

それから又暫らくして、安成君は更に京都の丸善支店から『上古の文明』と題する大冊の英文書を送つてくれた。私は重ね〴〵の厚意を感謝しつゝ、今度こそは必ず多くの利益を得るだらうといふ希望で、熱心に讀み進んだ所が、結果は相變らずで、ヴントよりも一層氣の拔けたビールであつた。

尤も、人類學といふものは大體がそんなものなのかも知れない。私などには味の分らない性質のものなのかも知れない。然し其の私でも、曾てモルガンの『太古の社會』と、エンゲルスの『家族、私有財產、及び國家の起原』とを讀んで、歷史以前の人間社會に對し初めて夜が明けたように目を開かせられた事がある。安成君に對しては、折角の親切に背き、折角の厚意を無にするような申分で、何んとも恐縮の至りであるが、モルガンとエンゲルスとに依つて開かせられた私の目は、ヴントその外、近來の諸學者に依つて更に廣く開かせられる餘地がないと見える。それは丁度、一たびマルクスに依つて開かれた目が、他の幾多のブルジョア學者に依つて更に廣く開かせられる餘地がないと同じ譯だと思はれる。

安成君が若し單なる物識り的の人類學者を以て任ずるならば、若しくば只だ幅の廣いだけの雜學者を以て任ずるならば、私は何も云ふ事はない。然しながら、若し安成君が社會主義的思想家として、兼ねて人類學に專門的興味を持つてゐるのだとするならば、君が其の一般的思想と、特殊的研究との間に、どういふ調和を保つてゐるかを私は問ひたい。私としては、これが眞に君の厚意に酬いる所以だと信じてゐる。

ベーベルの獄中生活

私の獄中で讀んだ本にベーベルの自傳があつた。ベーベルの傳記は即ち獨逸社會黨の歷史である。獨逸でビスマーク

が社會主義鎭壓法を出した前後の有様は、日本に於ける過激法案の成行と餘ほど善く似た所がある。最初、ビスマークの提出した露骨な野蠻な特別法案は、さすがにブルジョア急進主義者の反對する所となつたが、間もなくヘーデル、ノビリングといふ二人の馬鹿者がカイゼル狙撃を企てたので、ビスマークは直ちに其事件を利用して、首尾よく其の法案を通過させたのであつた。然し私は今、その事を語らうとするのではない。私が今こゝに特別の興味を持つのは、ベーベルの獄中生活の話である。

一八七二年から七四年まで、ベーベルはフーベルツブルグの要塞に禁錮されてゐた。其の獄中生活の様子は大ぶん日本と違つてゐる。私は特に其の違つた點に興味を持ちつゝ熱心にそれを讀んだ。先づベーベルは入獄の荷物の中に、或る同志から『監房の伴侶』として贈られた大きな鳥籠を持つてゐた。それには雄のカナリヤが一疋はいつてゐたが、後にベーベルが獄中で相手の雌を入れてやつたので、子を産み孫を産んで遂に一大家族になつたとある。

日本では勿論そんな眞似は出來ない。私共は只だ毎日、監獄の構内に住んでゐる鳩と雀を見るに過ぎなかつた。或る人達は態と窓から飯の殘りを撒きちらして、彼等の多數を窓近くに集めて樂しんだりしてゐた。或る人達は又、鳩がキツスをすると云つては、大騒ぎをして見物してゐた。私共の窓の外には大抵どこでも檜の木が立つてゐたが、其の檜の木には大抵いつでも雀がとまつてゐた。殊に朝晩は其鳴聲が賑かで愉快だつた。夏の頃には、雀と一緒に起き、雀と一緒に寢るのが普通だつた。そんなわけだから、若し室内に鳥籠があつて、カナリヤが居たりしたら、どんなに樂しみな事だらうかと、私はベーベルを讀みながら其の想像に耽つてゐた。

ベーベルは室代及び掃除賃として毎月五ターレル（七八圓）拂つてゐた。『國家は監房すら只では貸さない』と彼はそこに書き添へてゐるが、此の點は日本から見ると、如何にもおかしく感じられる。彼は又、近くの村の宿屋から食事を

取寄せてゐた。此の點は、あちらの既決と、こちらの未決と似たものだと考へれば分る。彼は毎朝七時に起きて廊下に出る。同時に掃除人が來て室内を掃除する。その間に彼は他の囚人等と共に廊下で食事をする。囚人中には此の時間に將棊をさして遊ぶ者もある。八時から十時までは監房に閉ぢこめられる。十時から十二時までは散歩。十二時から三時（夏は四時）まで又閉ぢこめられる。それから又二時間散歩。五時又は六時から翌朝まで又閉ぢこめ。夜は十時まで點火を許されるので、彼は主として其の時間を讀書に費した。何といふラクな監獄だらう。一日二回、二時間づゝの散歩と、一日一回、十分もしくは十五分の運動とは、比べ物にならない。

前もベーベルは又、同囚のリープクネヒトと共に、運動場の片隅の荒地を少し借り受けて、そこにラヂースといふ野菜を栽培した。そして何んでもドッサリ肥料をやらねばならぬと云ふので、二人が臭いのを我慢して肥壺から肥を汲み取つてそれを擔ぎ、リープクネヒトが先に立ち、ベーベルが後に立つて、エッチラ、オッチラ運んだといふ話が、誠に面白おかしく記してある。所が、其ラヂースは芽を吹き、葉を延ばして、大へん善く育つには育つたが、どうしたものか實がならない。二人は毎日散歩に出る度ごとに、其の初なりの實を一番に見つけだす競爭をしてゐたが、それはとうとう無駄であつた。監視人の説に依れば、餘り多く肥料をやりすぎたからであつた。

私は野菜をいぢつたり、草花を世話したりする事が好で、草取りなど最も得意なのだが、若し獄中でそんな事をさせて呉れたら、どんなに嬉しいだらう。ベーベル、リープクネヒトの野菜作りは、たとひ實なしの失敗を演じたにしても、私を羨ましがらせること夥たゞしい。

リープクネヒトは又、毎日午前八時から十時まで、ベーベルに英語と佛語とを敎へる爲、ベーベルの室に行く事を許されてゐた。語學の稽古もやるにはやつただらうが、二人は主として其の時間を政治上の論議に費してゐた。これも隨

うらやましい事だ。

二人は又、大の茶好きであつたが、ベーベルは毎晩室内でソツト茶を沸かして飲んでゐた。勿論、室内で茶を沸かす事は火の用心の爲め禁ぜられてゐたのだが、そういふ規則は只だ破る爲の規則であつた。それで彼は茶を沸かす道具を内證で調へ、夜になつて看守が近くに居なくなると、直ぐに茶を沸かすのであつた。彼は又、其の茶を隣室のリーブクネヒトにも飲ませてゐた。彼は運動場から長い棒を持込んで來て、其の棒の先に紐をつけて網を拵へ、其の網の中に茶のコツプを入れ、それをうしろの窓から差出して隣室の窓に屆かせるのであつた。彼等は其の同じ方法で新聞の交換をもやつてゐた。

ベーベルが此の獄中で多くの讀書をした事が書いてあるが、其の點では我々も可なりの事をしてゐるから、別たん羨ましくはない。然し最後に最も羨ましい事が今一つある。それは面會だ。二人の細君達はそれ〲の子供を連れて、三四週間に一回づゝ面會に來た。細君達の住所は要塞から大ぶん離れてゐたので、彼等は三日間通用の往復切符で汽車に乘つてやつて來た。そして其の切符の通用期限（即ち三日間）だけ滯在するのであつた。彼等は午前十時半から午後の七時まで御亭主の室内に居る事を許され、散歩も一緒にするのであつた。何といふ愉快な事だらう。我々は市谷で、被告人として毎日一回の面會は許される事になつてゐたけれども、（接見禁止の解除された後は）、其の面會といふのは、狹い窮屈な箱の中で、硝子窓を隔てゝホンの五分間ばかり、看守の面前で話す事を許されるに過ぎない。それが禁錮になれば一個月に一回、懲役になれば二個月に一回。嬉しい、樂しいと云ふよりも、寧ろ辛い、苦しい、自烈たいと云ふ感じの方が強くなる場合がある。ベーベルは後に、フーベルツブルクからツウイカウの監獄に移された時、そこでは一個月に一回、一時間づゝ役人の面前で會はされると云ふので、彼は妻と申合せて、そんな不愉快な面會の爲に遠方から

態々來るものは無いと云つて、一度きりでやめてしまつた。よしや役人の面前でも、一時間の面會なら、我々から見れば、それでも隨分うらやましいわけなのだが。

それから今一つ特に我々の羨ましいのは、ベーベルが獄中で寒さの苦痛を知らなかつたらしい事である。フーベルツベルクの記事の中には、冬とか寒さとかいふ事が一つも書いてない。暖室の設備などの事も書いてない。只だ後にケーニヒスタインの獄に移された時の記事の中に、こういふ一節がある『室内には大きな煉瓦の暖爐があつた。春先の好い氣候ではあつたけれども、まだ室內は可なり寒かつたので、日々宛てがわれる僅か五ポンドの石炭は、直ぐに其の大きな暖爐の中に呑まれてしまつた。それで私は寒い目を見まいとするには、自費で石炭を買はねばならなかつた』何といふラクな監獄だ。然し苟くも人間たる以上、如何に四人とは云へ、其の位の事は當り前だらうぢやないか。寒さが刑罰の最大要素の一つになるとは、隨分けしからん話だと思ふ。

地震の來た時

あの地震の時、私は室の隅の流し元で晝食後の茶碗を洗つてゐた。グラ〳〵とやつて來たので、ビツクリして立ちあがつたが、立つて居てはフラ〳〵するし、坐るのは何んだか怖いし、これは餘つぽどひどい、潰れるかも知れん、こゝでムザ〳〵押し殺される運命かなアと云つたような、悲痛な思ひを頭の中にヒラ〳〵と往來させながら、中腰になつて片隅の蒲團の上に兩手をかけてゐたように思ふ。若しそこを人が見たら隨分をかしな樣子振だつたらうと思ふ。それからフト思ひついて、(なぜモツト早く直ぐに思ひつかなかつたか、おかしい樣だが)、『開けろ!開けろ!』と怒鳴りはじめた。同時に、或は其の以前から、外の室內からも盛んに怒鳴る聲が聞えた。

やがて擔當の看守さんが大急ぎで扉をあけてくれた。直ぐに廊下に飛びだして、チョット助かつたような氣がした。然し、こゝに出たからつて安全なわけでもないと、私は獨り言を云つた事を覺えてゐる。そうする中に、擔當さんは各室の扉を開け終つて、最後に廊下の戸を押しあけた。我々はドヤ／＼と皆な一齊に裏の空地に飛び出した。九監ある中で、我々の第五監が一番早く出たのだつた。それは主として擔當さんの決斷の爲だつたと、皆が大變に感謝してゐた。私は空地に飛び出してから氣がついて見ると、右の手にシツカリと布巾をつかんでゐた。

外の人々の話を聞くと、或人は蒲團をかぶつて見たが、そんな眞似をして死んだのでは跡で見ともないと考へて、小机に向つて本を開いたと云ふのもある。或人は扉を蹴つたり怒鳴つたりしても、擔當さんが中々あけて與れないので、切り落しになつてゐる石造の便所の中にしやがんで見たが、どうも頭まで隱れそうにないので、机を持つて來て其の前に据えたと云ふのもある。

第一夜は、高塀越しに眞赤な空を眺めながら、不安と恐怖…………とのゴツチヤまぜの氣持で、皆が一睡もせずに芝原の上で喋りつゞけた。第二夜は一同手錠をはめられ、兵士の銃劍の影を見ながら、同じ芝原の上に寢た。第三夜は矢張り手錠のまゝで、監内の廊下に寢せられた。あとは元の通り、それ／＼の監房に入れられた。餘震の度ごとの厭な氣持たらなかつた。兎にかく皆々生命に別條だけは無かつた。もうあの時の話はすまい。

禁烟のおみやげ

今度の市ケ谷行の、第一の私のおみやげは煙草をやめた事だ。

私には隨分永い、そして恐ろしい失敗だらけの、禁烟の歴史がある。私は十八歳ごろからそろ／＼煙草を吸ひはじめ

て、廿七八歳ごろには、もう指先の震へるほど中毒現象を呈してゐた。そのころ私は、境遇變化の種々なる事情の下に於いて、從來の放縱な生活から一轉して漸く少し克己的な生活に入りかけてゐた。從つて私は禁烟を思ひ立つた。然しそれは容易な事でなかつた。二三年の間、私は絶えず禁烟と其の失敗とを繰返してゐた。自分の意志の弱さがつく／″＼情けないものに思はれたが、それでゐてどうする事も出來なかつた。

そうする中に、私の初めての子が二つで死んだ。腦膜炎だつた。それが大ぶん私の心にこたえた。せめて之を機會に禁烟を成功させようと考へた。そして成功した。それが私の三十歳の時だつた。つまり私の禁烟は死んだ子の記念であつた。

それから十年あまり、私は奇麗に煙草を飲まぬ人になつてゐた。或時、私は『予の禁烟の歴史』といふ一文を書いて何かに載せた事がある。實は大ぶん得意であつた。

所が或時、ツイ戯むれに、友人の持つてゐる卷煙草を一本取つて吸つて見た。それが決して戯むれでなかつた。私は脆くも再び煙草を吸ふ人になつた。勿論、初めの中は只だ折々吸つて見るといふだけの事で、何處までも『戯むれ』だと思つてゐたが、實際にはもういつの間にか、全く十餘年前に跡戻りしてゐるのであつた。然しそれでもまだ一二年の間は、前の成功の自信があるので、ナアニいよ／＼となればいつでもやめると、そう思つて慰めてゐた。細君のヒステリイ封じと交換なら何時でもピツタリやめる、などと放言した事もあつたが、固より兩方とも出來ずじまいであつた。――所が、段々不安を感ずる事が強くなつて來て、もういよ／＼本氣にやめねばならぬと考へた時、其の自分の決心がもう既に、此の惡習慣の前に全く無効である事を發見した。

それからと云ふもの、私は又しばらく、禁烟と其の失敗との繰返しを續けてゐた。毎年の年末にはいつでも、來年一

月一日からは必ずと考へてゐた。然しお歳暮かお年玉かに敷島の一箱も到來すれば、脆くも其の決心は破れるのであつた。我ながら何んとも云はれぬ情けなさを感じながら、それをどうする事も出來なかつた。

或時こういふ恥かしい事があつた。或る遠い地方から上京して、初めて私を來訪した客人が、私の煙草を吸つてゐるのを不思議そうに眺めて、「先生は煙草をあがるのですか」と私に聞いた。私はドキリと胸にこたえたけれども、仕方がないので有りのまゝを答へると、「そうですか」と、深く其の人は嘆息して斯う云つた。實は、私も大の煙草のみで御座いましたが、先年、先生の『禁烟の歴史』を拜見してから、フッツリとやめたので御座いますと。顔からは火が出た。脇の下には冷汗が流れた。

然しそれでも私の烟草はやまなかつた私にはもう禁烟の勇氣が出なくなつた。毎日々々、敷島か朝日を三つ以上も煙にしてゐた。右手にペンを持ち、左手に卷煙草を持たなくては、原稿が書けぬほどの習癖になつてしまつた。胃も頭もそれが爲に惡くなる事が明らかに感じられてゐた。從つて自分の弱さを淺ましく感ずる事は、矢張り毎日毎晩でありながら、それでゐてどうする事も出來なかつた。隨分いやな苦しい思ひを續けてゐた。そして只だ折々考へてゐた。若し今度牢にはいる事があつたら、其の時にこそ機會を捕へよう。それより外に望みがないと。

こういふ永い歴史の後に、私の今度の機會は遂に來たのだ。私は市ケ谷に居る間、幾度も〳〵、幾度も〳〵、特に此の事を考へて樂しみにしてゐた。全くこれが今度の、第一の私のおみやげである。何も手柄のない身に、只これだけが一つの小いさな手柄だと感じてゐる。若し又しても私がこれに失敗するような事があつたら、それこそ私はあんまりの腑甲斐なしになる。どうぞ神樣、助けて下さい。

酒と煙草の色々

去年の暮、歸宅の當坐、共犯の徳田球一君が私の家に宿つてゐた。私は、煙草の方は右に記す通りのわけだが、酒の方は(今では)穴がちやめねばならぬほどの害毒を感じないので、チビ〳〵一合ばかりの晩酌をやる習慣を續けてゐる。所が徳田君は、元來だいぶんいける方で、從つて私の煙草に於けると同じく、禁酒と其の失敗とを繰返すといふ趣きであつたが、矢張り今度を機會にして、いよ〳〵本當に禁酒する事になつた。然るに私にチビ〳〵と面前でやられては、さすがに喉がグビ〳〵鳴るのであつた。そこで彼は其の悶えを胡魔化す爲に、頻りに煙草をスパ〳〵と吹かしてゐる。私としては、目の前でスパ〳〵やられては避易するといふほどの未練でもないが、それでもどうかすると、好い香りがプーンと鼻にはいつて來て、一種のひもじさを感ずる事が無いでもない。此ところ双方いぢめあひ、困らせあひ、厭がらせあひの、可なり滑稽な場面であつた。

煙草については、吾黨の本尊マルクスが種々の逸話を殘すほどの好きであつたが、晩年には幾度も醫者から禁烟命令を受けてゐたらしい。彼は又、ライン州生れとして酒の味をも解してゐたと云ふが、其の方では特になるほど耽るような事はなかつたらしい。

酒煙草については、ずいぶん思ひがけない弱點(もしくは謂ゆる人間味)を、種々の人の上に發見する場合がある。これも私が今度の獄中で讀んだ『大愚良寛』(相馬御風著)に依ると、良寛は世を棄て盡した乞食僧として、誠に面白い徹底味を示してゐるが、それでゐて矢張り酒と煙草が好きだつた。折々保護者の家から贈られる、米や味噌や梅干の間に、煙草の一包みがはいつてゐる事があつた。彼は又、乞食や勞働者の群に入つて、幾許かの錢を出しあはせて酒を

買ひ、皆と一緒に飲む事を樂しみとしてゐた。

一體に近來の若い者には酒を飲まない人が多い。これは私等の年齢階級の者から見ると、誠に感心な事と思はれる。然し其の理由が果してどこに在るのかは、十分ハッキリと分らない。煙草の方は今の若い者の方が餘計に吸つてゐるかとも思はれる。

謎の往復

與謝野寛君からの葉書に、『謹呈戯作一首』と題して、『行半逢孤寺、令戸開口看、山山重疊下、兩犬對而言』とある。サア分らない。幾度讀み返して見ても分らない。暇つぶしの爲には誠に好い問題を出されたわけだが、實は分らないのが不愉快でたまらない。大ぶん煩悶して物の小一時間も過した後、フト『山山重疊』から嗅ぎつけた。その時、私は丁度『三體詩』を讀んでゐたのだが、其の中に『山上有山歸不得』といふ句があつて、それは『出』の字の謎であつた。そこで『山山重疊』も同じく『出』の字である事に氣がついた。すると直ぐに又、『兩犬』と『言』とが『獄』の字である事に氣がついた。そこまで行くと、直ぐに又、第一句が『待』であり、第二句が『君』である事が分つた。

そこで一つ、こちらも負けぬ氣になつて、『一字伽藍聳、幾人乘輿還、只是二文字、牛角自直垂』といふ返事を出した。與謝野君が此の苦しい謎を解いてくれたかどうかは、まだ聞かない。私の心では、『ウキヨこいし』と讀んで貰ふ積りだつた。『こいし』は即ち『二つもじ、牛の角もじ、直ぐなもじ』である!。

(附記。書きたくて書けない事もあり、書けそうに思はれてゐて、ペンを取つて見ると纏まりのつかない事もあり、一應は書いて見たが、思ひ返してヤメにした事もあり、色々でどうも全體の配合が面白く行かない。自分にも甚だ不愉快だが、平に御許しを願ふ。昨年末、改造社から自働車でバラックの東京を見物させて貰つたが、それも見物しばなしになつてしまつた。何しろ久しく別世界に閉ぢこめられてゐると、眞人間の一人前には容易に戻れない。(堺生。)



深冬夜話

死の知らせ

小川未明

雪の夜程、靜かなものはありません。

風もなく、しかも空は、眞暗で、たゞしん〱として雪の降るのは、怖ろしい氣がするものです。一夜のうちに、幾尺積るか分らないからです。

木の枝は、雪の重みに堪えられないで、この音もない眞夜中に、鋭い響きを立て、折れるのでありました。

田舍は、殊に、雪の深い北國では、こんな夜でも、隣村へ何か急の用事があつて、行かなければならないことがあります。こんな時は、藁靴を穿いて、かんじきをかけて、手に棒をもつて出かけて行くのです。

どこが路やら、全く分りません。たとへ晝間のうちは、人の足音がついてゐたものでも、いつしか、降る雪のために、消えてしまつて、いまは、道といふものがなく、どこを見廻しても眞白な雪の一面平野でありました。しかも、夜は、暗く、濃くその上を掩ふてゐたのです。

日頃から、地理に明るい、どこに藪があつて、また、どこに河があるといふことを、よく知つたものでなければ、妄りに冒險ができない筈でありました。

しかし、地理の明るい者は、直觀に、村の在所を探るのです。そして、この暗い、さながら、墨を流がしたやうな、雪の顔にかゝる冷たい空をすかして、その闇の中にも、かすかに、幽靈のやうに、突立つてゐる見覺えのある並木や、森の姿を見出すのです。そして、それを賴りに、歩いて行くのです。

しかし、これは、都會に住んだ人達には、殆んど想像のつか

ないことではあるが、稀れに、凄い月夜があるのでした。
「今夜は、まるで、晝のやうに明るいから」と、いつて、別に提灯もつけずに、出かけることもあるのです。

あちらを見れば、自分のこれから、歩るいて行かうとする、隣村の林が、すぐ間近に見えてゐるのでした。そして、烈しい寒さのために、堅くなつた雪の上を、きしみ音を立てゝ行くと、雪の面は、眩ぶしいやうな明るみを放つてゐるのでした。

明るみといつても、それは、靑みと黃みとを含んでゐる、不思議な凄い光りであつたのです。

「オヤ、こゝは、どこだらう?」と、川堰のやうなものゝある處までやつて來て、はじめて氣が付くと、そこは、全く、どうしても見當のつかないところへ出たのでした。

「この森が、たしかに、さうぢやないか?」

かう思つて、あちらに、黑くなつてゐる森を見ると、似てゐるやうな氣もするが、また、全く知らなかつた森のやうな氣もするのでした。

これは、その筈で、夜になつて、しかも、月の光りに彩られた、すべての森は、みんな同じやうな姿に、こんもりと默つて見えるものだからです。

この月夜の蠱惑に、幾人行衛不明になつたり、また、そのまゝ雪の上に坐つて、凍え死をしてゐるものがあつたか分りません。

村の人達は、
「狐に誑されて、どこかへ行つた」とか。
「隣村へ行く間に、狼に喰はれてしまつた。あくる日、その屍を鴉がつゝいてゐた」とか、言ひます

そんなら、暗い晩には、怖ろしいことがないといふのか?

十一月にはいると、北國の空は、曇り勝で霙となり、雪となつて、また、晴々とした。暖かな日和を見るには、來年の春、それも五月にならなければならないのです。一年の中でいゝ季節といふものは、まことに少なかつた。年若の者には、季節は關係しなかつたが、年寄りは、冬の中は、出歩るきができないのでありました。年寄りが、隣村へ、その親戚をたづねて行くといふことも、一年に、一度あるか、なしのことが例なのでありました。

そして、その別れる時分には、かならず、
「この寒さ時分、お體をお大事になさいまし。また、來年の春暖かになつたら、ゐらして下さい」と、門口まで見送りに出てその年寄りの歸るのを見送つたでありませう。
「なんだか、お婆さんの影が、うすかつたやうだが」

年寄りの歸つてしまつた後で、こんな噂をすることもありました。

年寄りの歸るのを見送つた人々は、また、そのお婆さんが、もつと若く、元氣であつた日のことなどを思ひ出さずにはゐられませんでした。

それから、ずつと後のことです。

ある日、朝起きると、家内の一人は、

「お婆さんの夢を見た」と、言ひました。

「お婆さんが、體がわるいのではないかしらん」と、家内の者は、噂をしました。

「去年の秋、來てくれた時に、なんだか影がうすかつたやうだ」と、一人は、言ひました。

「さういへば、そんな氣がする」

外は、眞白に雪が積つてゐました。雪は、野を埋め、畑を埋め、林を隱くしてゐました。そして、風に吹かれて、尙ほ、その上にも、チラ〳〵と降つてゐるのでした。

「この雪の中に、萬が一、不幸があつたら、困りますね」

「もし、そんなことがあつたら、大變だ」

みんなは、この雪の中に、人の死ぬのを、どんなに怖れたか知れません。雪を掘つて、墓地に埋葬することの、いかに容易のことでないか、それを考へるからです。

かうして、人々は、火達にあたりながら、考へたり、空想をしたり、また、怖れたりしてゐるのでした。

しかし、雪の中に、閉ぢ籠められて、一つことを思ひ煩ふときには、この直觀や、直覺といふものは、不思議に、讖となすことがあるものです。

ある日、山向ふの隣村から、たよりがあつた。それには、老婆が、臥てゐるといふことが書かれてあつた。

みんなは、默つて、顏を見合はせました。

「やはり、さうだつたんだ」

それから、鴉の鳴くのにも、氣遣ひしました。雪のために、餌を失つて、飢に鳴く鴉はいつまでも、前の圃の木立の枝に止まつて、飛び去りませんでした。

みんなは、また、それを氣にしました。冬の日は、短かく、いつの間にか、全く、暗くなつてしまひました。

夕飯がすんでしまふと、みんなは、火燵にあたりながら、いろいろの話をしました。中には、讀みのこしの小説の續きを讀んだり、また、蜜柑の皮をむいたりしてゐます。

「また、降つてゐるやうですよ」

「今夜、降つたら、どうしても明日は、雪おろしをしなければ

ならない」

　この時、窓に、あたる雪の音がしたのでした。

「ほんたうに、よく降つてゐるやうだ」

「今年は、大雪ですね」

「この分なら、大雪にちがひない。もう、平地に四尺もあるだらう」

「前の柿の木が、あんなに隠れたのだから、四尺以上もあるか知れませんよ」

「家の前の道は、無くなつてしまつたらう」

「今日は、郵便一つ來ず、橇も通らないから道は、ないでせう」

「いくら、誰が來なくても、家の前だけは、道を踏んで置かなければならんよ」

「踏んだつて、駄目です。すぐに、雪が積つてしまひます」

　こんな話をした後で、餅を燒いて食べたり、お茶を飲んだりしました。

　冬の夜も、更けて、しまひました。たゞ、折々、思ひ出したやうに、雪がさら／＼といつて、窓にかゝる音がしました。

　この時、一人は、不意に、耳を欹て、

「誰か、來たやうですよ」と、言つた。

　みんなは、等しく、耳を欹てた。けれど、何の氣はいもしなかつたのです。ちやうど、その時です。

「今晩は」

　誰か、戸口で、言つたものがあつた。

「ほんたうに誰か來たやうだ」と、一人は、言つた。

「この雪の降るのに、いま時分、誰だらう？」と、家内のものは、呟いて、直に立上らうとはしなかつた。また、後は、しんとしてしまひました。

「いま、今晩はと、いつたやうだな」

「たしかに、言ひましたよ」

「それにしては、戸口で、雪を拂つた樣子もなし、おかしいぢやないか？」

「二度、いひましたよ」

「私は、一度しかきかないけど……」

　みんなは、顏を見合はしました。

「どなたですか？」

　家の中から、大きな聲でたづねた。しかし、外では、何の返事もなかつた。

「どれ、俺が、行つて見て來よう」

　家の主人は、豆ランプを點して、戸口の方へ出て行きました

　そして、雨戸の栓張棒をはづして、それを右手に、しつかり握

りながら、用心をして、戸を開き、外を眺めました。

外は、眞暗でした。寒い風が吹き込んで、雪が降つてゐます。主人は、豆ランプを翳して、雪の上を照らしました。雪の面は足跡一つ付いてゐず、そのまゝになつて、雪はその上にも積るのに委かせてゐました。

「誰も來ないやうだ」

から言つて、主人は、また雨戸を閉めて、栓張棒を堅くかけて、みんなゐる火燵の傍に戻つて來ました。

「誰も、來ないやうだ」

この時、一人は、

「あゝお婆さんが、死んだのぢやない？」と、言ひました。

みんなは、思はず、顔を見合つて、ぞつとしました。

—二三、十二—

艇上の吹雪

水野廣徳

十二月の旅順は早や大分寒かつた。岸に近き海面には薄い氷さへ張つて、艇側の水線には硝子の樣な氷の庇が艇の周圍に張り出されることもあつた。此の寒天を冒して一日交代の封鎖勤務は、少壯血氣の身にも可なり大なる苦痛であつた。艇内に打ち込む波の飛沫は忽ち凍結して甲板に樣々の氷紋を描き、動もすると滑べり倒れる。艦側の鐵柱や鐵索は氷の衣を重ね着して大きな硝子の柱となり、鐵索からは長いツララが水晶の簾の樣に垂れる。老鐵山の吹雪颪に息も凍つて、乏しき髭がジヤリジヤリと音を立てる。雪は未だしも、夜明方の寒さと來たら二重三重に着込んだ防寒服を衝き通ふして骨の髓まで浸みこたへ、手足は痺れて歯の根も合はない。

無味乾燥、多勞多難なる封鎖勤務も既に八箇月となつた。滿洲の禿山も見飽いた。大砲の音も聞き飽いた。赤い色にも飢へて來た。一體旅順陷落は何時だろか？「占領」「旅占領」「確實に占領」の情報も最早や當にはならない。次の占領は何と書くであらう。今日も二〇三高地の頂には、黄色い砂煙とドス黑い

爆煙が盛に漲つて居る。あの煙の中には、あの煙の下には、敵味方幾千の人間が死んで居るのであらう。どうせ戰爭じや、死ぬることは厭はないが、でも一度見たいものがある。二〇三高地が落ちた。今度こそは愈確實に占領じやとサ。

「占めた!。腰の拔けた港内の敵艦最早や袋の鼠じや。

「正月は佐世保か、萬歳!」。

腰の拔けたと思つた敵の軍艦がノコ〳〵と港外に這ひ出した。

警信一電

「戰艦セワストポリー港外に脫出す」

さア事じや。艦隊長官からは「水雷艇隊は敵艦セワストポリーを轟沈し、以て帝國海軍の名譽を擧げよ」とか云ふ峻嚴な命令が下つた。八個月間封鎖勤務のボーナスとしては難有き仕合せじや。佐世保行きが冥途行きになりさうじや。二十餘隻の水雷艇は數隻づつ交代して每夜敵艦襲擊に出掛けることゝなつた。「確に命中爆發を認む」との報告はあるが、翌朝見ると、敵艦は依然として浮んで居る。

今夜は愈自分等の艇隊が襲擊に行く順番となつた。朝から空は曇つて馬鹿に寒い日であつた。

「こんな寒い日にブク〳〵で溺れ死ぬるのは叶はんね。

「どうせ死ぬのなら一思ひに大きなヤツでツドンとやつて貰ひたいものだ。未練らしく一塊の肉など殘らなくつても宜いが。

「何しろ長い間、艇をコギ使つて居るから、そいつが心配じや。オレの處は度々チューブが吹いてね。

「オレの處もじや。敵前で、時利あらず騅逝かず、なんて目に逢つちや、ヤリ切れないからの。夫に鬼殺しの樣な兵隊ばかりじやア虞平虞平の歌も出なからうぜい……。

「まア御互に氣を付けようぜ。併し貴樣が死んだら、あの珍本を形見に貰ふぞ。

「其代り貴樣が死んだら、アレを貰ふが宜いか。何だか雪になりさうだぜ。

「此の上雪に降られたら今夜は大役じや。何て寒い日だらう。

母艦に横付して炭水の補充やら、水雷の裝置やらをしてる間に、若い艇長達は食堂で牛鍋をつゝきながら、死の危險を前に斯んな話をして居る。

雪は次第に降り募り、初めは細かい灰雪であつたが、夕刻になつては綿を千切つた樣な大粒の雪となつた。赤禿の山は何時しか鹿子絞りの衣に蔽はれ、防寒外套を着た當番水兵の姿が雪達磨の樣になつて居る。輕き北地の雪は風も無きに舞ひ縺れて繽粉繚亂、空は晦暝として幾萬の鵝毛が亂れ飛ぶに似て居る。

と鐵山も、黄金山も、今は雪に遮られて影も見えない。陸上の砲聲も全く絶へて天地間寂死せるが如き靜さである。

夜に入りて雪は益烈しく、四方暗澹として僅に半丁を距てぬ隣艇の燈火さへ見えない。唯先發艇隊の揚錨の響のみがカラコロと暗の中に聞へて居る。やがて愈自分等の隊の出發の時刻が來た。身動きの不自由な程着れる丈け着て甲板に出た。雪は依然として滅茶苦茶に降り頻つて居る。甲板には處に依り早や四五寸も深く積もつて居る。一足踏む毎にザクリと音して、ツルリと滑べる。信號用の目玉ランプなどはチンデ役に立たず、何處に僚艇が居るのやら讃つ張り判らない。

「オーイ?」「オー イ!」「何處 だ?」「此 處だ!」「誰だ?」、「誰だ!」。

唯聲を便りに錨を抜ひて、数十隻の碇泊艦艇の間を縫ふが如く、右に避け左に交はしつゝ、暗を辿つて漸く港外に出た。降るわ／＼、三間先きも見へぬ如くに。毛深い防寒外套は見る間に眞つ白くなり、はたけど、ふるへど、落ちもせねば消へもしない。

港外に於て艇隊陣形を整へ、粛々敵陣地に向つて進んだ。深雪霏々として前程をかすめ、夜色沈々波獨り凄姿として居る。今から愈雪を衝ひて鐵火の洗禮を受けに行くのである。飛彈一發、中には唯死の外はない。平素は十里の遠きを照らす敵の探海燈も今宵は雪に消されて微光だに見へない。

自分は今夜死ぬるんであらうか、死なゝいんであらうか。死ぬと決まれば言ひ置くことも書き置くことも無いではないが、併し何だか死なない様な氣持もする。

雪に暗んで朧にかすむ前續艇の燈火を見詰めて續航しながら斯んなことも胸に浮ぶ。艇の速力が加はるに從ひ、雪は次第に横降りになつて來た。靜かに柔かに音もせず落ちた雪は、バサバサと音立てゝ强く斜にブツ付かつて來た。五條の橋の辨慶ほど體を包みながら、細い雪は針の穴ほどの隙目を潜つて體内に侵入して來る。冷たいこと／＼。

豫定の襲撃時刻には尙ほ少しく早い。先發の友隊は今正に襲撃を決行せるものゝ如く、重くるしき砲聲ばかりがドーン／＼と聞へて居る。砲火は更に見へない。あの音で又何人か死骸になつて歸へるのだらう。昨夜は五六人やられたが、今夜の犠牲は何人だらう。友隊の歸路を妨げぬ爲め沖合に避けた。何時の間にか後續艇一隻の影が見へない。叫べど、呼べど答が無い。雪の爲めにハグれたのであらう。今は僚艇僅に一隻だけとなつた。何が何でも離れられない。雪は小止みもなく降り續き、風さへ出でゝ吹雪となつた。前續艇のシリをつゝくばかりに近く

付いて行かなければ直ぐ見失つて仕舞ふ。小なりと雖も百噸の艇じや。機械の回轉が二三違へば近づいて衝突するか、離れて見失ふか、之が調節は平穏の晝間と雖も容易なことではない。船は揺れる。吹雪と飛沫とは上と下から斜めに眼を目掛けて襲つて來る。風上に向つては殆んど眼を開くことすら困難である。青森聯隊の八甲田山吹雪の遭難が思ひ出される。

砲聲は何時しか收つて、唯船側に吼ゆる浪の音と、檣に叫ぶ風の聲ばかりが聞へて居る。體の轉倒を支ふる爲めに柱を握り締めた四方の手は寒さに凍つて、指は全く感覺を失つた。足の尖はチク〳〵と針で刺される樣な痛さを感ずる。外套の裾は凍つて板の如く固く、動く毎にガシヤリ〳〵と音がする。之では大砲も水雷も打てそうにない。

時刻は宜しと敵の碇泊陣地に向つて舵を轉じた。總員を甲板に上げて戰鬪準備を整へた。吹雪は今を盛りと降り頻つて居る。大砲も發射管も見る〳〵中に雪に包まれる。水兵が滑つて倒れる。冷たい波がバサツと其の上に打ち込んで來る。海は暗澹として波濤白く、空は雪にくらんで前艇の燈火の外何物も見へない。敵陣最早や遠からず、總員雪に塗みれて戰鬪部署に就いて居る。吹雪も寒さも今は殆んど念頭に無い。敵に覺られまじと機械の響さへ氣に懸かる。雪を幸、速力を緩めて徐かに捜ぐり寄つた。敵艦所在を知る唯一の目標と頼みたる敵探海燈の光が見へない。

前續艇が俄に急角度を以て回轉した。敵艦發見！と思ふうち「前方に岩があるツ」との叫び聲が聞へた。

「ストップ！」、「後進全速！」、「一舵一杯！」。

艇は辛ふじて衝突を免れ、「一舷に回頭した。前には岩に碎くる激浪が夜目にも白く物凄く渦巻いて居る。

眞に危機一髪！

外套の頭巾を脫き棄て、吹雪に面を暴しながら邊りを見るも四顧唯瞑濛、碎波の外には山の影一つ見へない。

ヘテ何處だらう？。

前續艇から

「第……號、今の岩は何處と思ふ？」

衝突すまい、ハグれまいと、唯夫ればかりを一生懸命、前續艇の後にクツ付いて來た自分の艇に位置などの判らう筈がない。一先づ沖合に退き、艇位を確めて再び襲擊に向はんとするも、據るべき目標は唯一つもない。

サア困つた！。

吹雪の暗の海に水雷艇二隻が迷ひ兒となつたのである。

襲擊を果さずして歸へるは死よりも辛き恥である。左れど又

無鐵砲に突入して暗礁に乘り上げたり、防材に引つ懸つたりして犬死するのは尚ほ辛らい。吹雪の小止みを待ち、位置を確めたる上再擧を圖ることに決し、波荒き雪の海上を行きつ戻りつ漂航した。時は一時、二時、早や三時を過ぎたが吹雪は少しも衰へず、波は遠慮なく打ち込んで來る。索も、柱も、氷と雪とを以て包まれた。體は疲れる。寒さは募る。足も手も痺れて我が體とは思へない。靴の底は甲板に凍り付き、帽子の庇からはツララが垂れる。大砲も、發射管も凍つて動かない。熱湯をブッ掛ける十分と經たぬ間に又凍り付く。何時しか四時を過ぎた。執念ねき吹雪は横しぶきに吹き付けて、今は眼さへかすんで來た。

最早や夜明けまでには間も少ない。何が何でも襲撃に行かねばならぬ。速力を緩め盲搜りに敵の陣地を目懸けて進み寄つた空は何時しかホンノリと明るくなり、吹雪も次第に小降りとなつた。白妙の山の姿がボンヤリと見へて來た。小雪を透かして前方を見ると、敵の陣地とは思ひも寄らぬ〇〇角の砲臺の巨大砲が目の上にニューッと現はれた。傍には白波が淺灘を嚙んで居る。「ハッ！」と總身の血が一時に頭に上つた氣がした。吹雪が今十分も續ひたなら、旅順の海の犧牲に二隻の水雷艇が加つたであらう。此夜先發隊の一隻は吹雪に迷ふて淺瀬に乘り上げ艇も、人も、遂に歸つて來なかつた。今に忘れぬ吹雪の襲撃。勇壯、活潑、光輝赫たる戰勝の影には斯んな苦酸も潛んで居るのである。

アリナレ江畔の女

中西伊之助

一

白頭山で、浮世知らずに
そだつたわたし、
今は切られていかだ船、
岸にさまよひ、瀬にもまれ、

流れ流れて安東縣……。

女の彈くそのいかだ節の三味線は、上手なものではなかつたが、彼女の唄ふその唄の文句は、きいてゐるわたしに、ひろいひろい北極の海にも似てゐる鴨綠江の氷河を、それから刄の端尖のやうな鋭く輝いてゐる白頭山の悲凉と、壯美な情景を生き生きと胸に描かせる。そしてこの自然を背景に、ボヘミアンライキな生活をしてゐるかうした女たちが、わたしにはしみじみとした哀調を喚られずには措かない。……

女は、よく酒をのんだ。そしてなぜかほろほろと涙を流しながら、それからそれと、いろんな唄をうたつた。が、彼女は東京などで流行してゐるやうな、ハイカラな唄は知らなかつた。そしてこのへんでうたはれてゐるそのいかだ節や、鴨綠江節をとても都會ではきかれない野趣の溢れたローカルカラーの色濃い節廻しでうたつてきかせた。女は、東京から流れて行つたわたしに、いろいろの彼女の生れ故鄕である東京の話をきゝたがつた。そしてそのお禮心で、彼女はわたしに唄をきかせてくれる。その東京を戀しがる女の心持が、今漸くこの宿屋へついたばかりのわたしには、はつきりとわかるのであつた。こゝは、あの『雪や氷にとざされて、あすは新義州につきかねる』と唄はれてゐる文句の中の、その新義州から、更らに數里を溯江した、Sと云ふ小さい鑛山町であつた。町と云つても、日本人なら僅かに二三百人しかゐない、ほんのさびしい村落と云つてもいゝくらいのところである。

わたしが、そこの鴨綠江を隔てた支那と朝鮮の國境に足を踏み入れたのは、その年ももう暮れようとする十二月の末であつた。

新義州から驢馬の背にのつてゐたわたしは、夕暮方にそのSについた。朝からの空は、黝く見えるほど澄みわたつて、輝きわたる氷河の岸につらなつたポプラの並木は、薄樺色に沈んでゐる。そして夕方から、紺鼠に澱んだ霧が、あたりに立ちこめて來る。が、わたしがSについて、それから湯からあがつた頃には、天上にぽつと薄い月がかかつてゐるのみで、諸見たすぐそこの大きい氷河も、それからその對岸につらなる無際涯の氷原も、すつかりと柔かく冷たい霧が、白金を溶かし詰めたやうに、どつしりと重く動かない。靜かなことは無風地帶にゐるやうではあるが、一呼吸する毎に、針金を突き刺されるのではないかと思はれるほど、大氣の冷たいこと！　宿屋の廊下を歩くと、氷り切つてつるつると　ゐる。ガラス板の上を歩いてゐるやうな氣分である。

時々、わたしの乘つて來た驢馬が、寒氣に咽んで啼く、しか

しそのほかには、何一つ耳に響くものはない。きつと聴えねばならない砧の音さへしない。ここで生れた朝鮮女でも、さすがに今晩の寒さには怯ぢてゐるのであらう。

二

眞紅の炎を立てて、安物の陶器火鉢は、燃え立つやうである。二人の間には安火の櫓に厚い蒲團を三枚もかけて、その上へちやぶ臺がのつてゐる。そのちやぶ臺も、脚の長い、特別製であるのも面白い。かまぼこを咬んでも、さくりと音がする。刺し身は砂糖漬のやうに白い、みんな氷つてゐるのである。汁ものは、火にかけながら注いでくれる。料理をもつて來る女中は、ベースボールの選手のはめてゐるグラブのやうなものを手にはめてゐる。そして耳たぶには、兎の皮の袋がかかつてゐた。――これでは、花のやうな灯のついた、暖かい東京が戀しい筈である。

女は、三味線をそばにおいた。

『まづい三味線ね、全くいやになつちまうわ』

そして女は、こんなに寒いので、三味線だつていゝ音色はでないのだなどと云つた。さう云ひながら、わたしのついでやる酒を、いくらでも飲む。そしてきりつとした瞼の中にある眸がますますきらきらと光つて來る。が、女の頬は、それと反對に青ざめる。……

『全く、お酒でも飲まなきやあ、こんなところでは暮せませんわ』

女の眉根が引き緊つて、にこりともしない。

『そして色男でも可愛がらなければね』

わたしは、すかさずに云つた。

『いゝえ、だめですよ、ここいらに、そんな男なんぞ、一人だつてゐるものですか、』

女は、女王のやうに輕蔑した。

『そんなことはないだらう。どこだつて、色男にする男の一人ぐらゐはゐるだらう』

『いゝえ、とてもだめですよ。よくお客さまがそんなことを云ひますけれど、朝鮮や滿洲をうろついてゐる男に、一人だつて色男にするやうな人間がゐるもんですか』

『御挨拶だね、ここにも一人うろついてゐるのがゐるんだよ』

『ほ、ほ、ほ、ごめんなさい。でもね、かうした植民地では、女の方は旅のさびしさでそれあ一生けん命で男に惚れますわ、けど、男はそれと反對に、全く薄情な奴ばつかり、やつぱり出稼人根性ね、――一人だつて生命がけで惚れて來たものはあり

ませんわ、あたいのやうなおかめだからでせうね』
『君のやうな器量をもつてゐて、惚れて來ない男があるもんかね、それはやつぱり、君の方に實意がないからだらう。』
『いゝえ、それはうそ………』
と、女は三度頸を振つた。
『君は東京からこんなところまで流れて來るのには、隨分方々を流浪して廻つたことだらうね』
わたしは、もうかなり年増に見える女に云つた。
『えゝ、東京を出てからざつと十一二年にもなりますわ、最初は大連を振り出しに、滿洲からハルビンを一廻して、一年前にこゝへ來ましたの』
女は、平氣でそんなことを云つた。
『ほう』とわたしは感心して女の顏を見つめた。その時、わたしは、女の頸のところに、妙にすず黝く見える、薄く鍋炭でもついてゐるやうな節のあるのに氣がついた。
『君、ここになにかついてゐるぜ、………』
わたしは、自分の右の頸側を撫でて、女に知らせてやつた。
と、女は、につと微笑つたきり、
『さあ、あなたそんなこと心配してゐないで、お酒を召しあがれよ、そしてまた唄でも唄ひませうね。………』

と、銚子を手にもつた。寒さが、森々と身に泌みる。ど
で、氷屑を叩き碎いてゐる音が聽える。
鴨緑江畔の冬の夜は更けた。火鉢のほてりも、安火のぬく
りも、そんなりで凝結してしまひさうに感じられる。天井に
つてあるランプの石油が氷りついて來た。そして息の絶え
くやうに光度の鈍つて行く灯の下で、女は、突然わたしに
云つた。
『あなた、今晩、あたいと心中しませんか………』
讀者諸君、女がわたしにこんなことを云つたのは、これは
の自惚れでも、またのろけでもなんでもない、事實に、女は
たくしにそう云つたのだ。
『えゝ?』
と、わたしは、あきれた。そしてしばらくぢつと女の顏を
つめた。女はあれだけのんだ酒を忘れたやうに、青ざめてゐ
しかし、その言葉が冗談にしては、言葉の調子があまり
やかすぎる。眞面目すぎる。——わたしは、うそにも女から
中の相談を持ちかけられたのは、生れ落ちてから、これが最
であつた。わたしは女の顏からあわてゝ目をはづして、あた
を見廻した。それはどう云ふわけか、わたしにもわからない
『あなた、あたいと、一緒に死ぬ氣はない?』

『…………………………』

わたしは、まだ言葉が出なかつた。いかにわたしが茶氣滿でも、或はまた生命を落すことか、湯屋で垢をこすり落すよりも愉快に感じてゐたところか、鴨綠江の奧深いこの半島の旅籠屋まで來て、見ず知らずの女と心中するほど、まだもの好きではない。

『冗談ぢやないね…………』

わたしは、あまり相手のしんみりした言葉に恐れをなして、そつと遠慮勝ちに云つた。

『そうですか……そうでせうね……』

女は、ひとりでうなづいて、いかにももつともと云はぬばかりに呟いた。わたしは、なんのことやら、さつぱりえたいがわからなかつた。が、それでわたしと彼女との心中話は打ち切りになつた。わたしは妙な女に出くわしたものだと思ひながら、その夜は、ぞくぞくと襲つて來る寒さも手傳つて、あまり安眠はできなかつた。

夜中には幾度も便所に起きた。最初の一二回の時は、霧がすつかり晴れて、もの凄く光つてゐる空の下に、銀色の夜があつた。しかし、三回目あたりから、さらさらと軒の亞鉛板が靜かに鳴つてゐた。雪らしい。この天氣ならば、明日はこゝで一日滯在しなければならないと、わたしは思つた。

わたしは、ある長篇小說の材料を蒐めるために、こゝへ來のであつた。それは、このへんばかりではまだもの足らない明日は、まだこれから數里もある、或る大きい耶蘇教の寺院で辿りつかねばならなかつた。それはかなり冒險である。ならば、もうこれから先きは、この國境の雪を蹴り、深い落樹の森をくぐつて、どんどん赤化鮮人が國內に侵入して來るのである。きびしい警戒線は、この極寒の冬期こそ弛緩するのある。彼等は、この絶好の機會を利用する必要があつた。そて彼等は、もしそれが日本人であると云ふことを知れば、なの容赦もなくモウゼル短銃を應酬するのである。わたしは、の彼等の根據地とも云ふべき、フランス教會の寺院を探險しうと云ふのであつた。

三

明け方から降つた雪は、朝、わたしが起きた頃には、もういぶ積んでゐた。そして暗い空からは、胡麻のやうに見える雪が、絶えず降つてゐた。昨晚よりは、ずつと氣溫は暖かい昨夜の女について、わたしは次のやうなことを、ここの宿の他の女からきいた。

彼女は、云へば一種の心中狂であつた。そしていつもその心中の相談をかける相手は、きつと東京から來た男に限つてゐると云ふ。彼女は、今までに四度も心中をしたが、みんな失敗に終つた。その最初の場所は奉天であつた。その時は、相手の男は死んでしまつた。と云ふのは、彼女の方に、多少その心中はしたくはないと云ふ心持もあつた。そして生き殘つた。世間の人は、財産をつかい果し妻子をすてゝ、みじめに死んでしまつた男の方に同情して、彼女を薄情者だと罵つた。そうなつてみると、彼女は死んだ男も可哀想だし、世間への反抗心もあつて、すぐまた次に一人の相手を見つけて心中をした。が、今度は、双方とも助かつた。もともと、男は女から迫られてやつたのであるから、思ひ切つたこともできなかつたらしい。彼女は、やけになつた。二度あることは三度あるたとへで、またやつた。またしくじつた。彼女は、それから氣がへんになつた。それからは、自分と心中する相手ばかり見つけるやうになつた。そして懲り性もなくまた四度目をやつたが、最初に失敗した經驗があるために、どこまでもやつても、みんなだめであつた。彼女の、世にも稀な心中狂は、かうして癒えない痼疾になつてしまつた。どこへ行つても抱へ手のない彼女は、とうたうこんな片田舍に流れて來たのであると云ふ。

最初の男は東京者であつた。その男にたいする彼女の幻影は、東京から來たと云ふ男の上にのりうつつて行つた。それに彼女も東京生れであると云ふなつかしみもあつたには違ひない。

わたしは、まだやみさうにもない雪空をながめながら、この不可思議な宿命をもつた女の話をきいてゐた。わたしが、昨夜、その女の頸のあたりに、鍋炭のやうなうす黑い筋のあるのに氣がついたのは、それはむごたらしく突き抉られたふるい刃物の傷痕であつた。

わたしはその翌日、更らにそこから、豫定通り、鴨緑江岸を溯つて、奥地へは入つて行つた。れいの女は、宿屋の表で、寒さうな微笑を泛べて見送つてくれた。青ざめた顔に、ほつれ髪がさびしい……。

四五日後、わたしは再びSの町に引返して、またその宿屋に一泊した。が、その女はもうゐなかつた。それは彼女が、とうたう多年の宿望をとげたと云ふ話をきいて、わたしは驚いた。

二三日前、彼女はついその附近の宿屋へ、にわかに五六人の客が泊りこんだために、そこへ手傳ひに行つた。が、その客たちこそ、赤化鮮人團の手のもので、日本人旅館へ泊つたのも、

あるはかりごとがあつたからであるさうだ。
　女は、その中の若い青年と共に寢てゐた。そして、夜の明け方に、旅館を包圍して、彼女たちの部屋に闖入して來た巡査と、青年は短銃で戰つた。巡査の向けた銃口の向ふへ廻つて、女は死んでしまつたのである。
　北歐ロシアと接壤して、滿鮮の境をなしてゐる鴨綠江畔は、あのツルゲーネフの描いた『オン・ザ・イブ』の中のエレナが戀人の故國の獨立のために起つべく、その戀人のインサロフと携へて、ついにヴェニスの旅の宿にインサロフを失つてしまうた、そのヴェニスの使命をもつてゐるやうな氣がする。云ふまでもなく鴨綠江畔の宿はヴェニスのやうに明るく華やかではない。が、あの暗い、やる瀨なくさびしい、鴨綠江節の歌詞と韻律に唄ひ出されるそのあたりには、また一しをの情調がそゝられる。わたしはその唄をきく每に、いつもあの心中狂の女をおもひ出すのである。………

ロシヤの冬の情趣

昇曙夢

　冬！地球の上に存在する大抵の國々には、一年に一回は必ず冬が訪れる。けれども、その國々によつて、冬の長短、寒暖の差はいろ〳〵である。日本なぞの冬は、十二月頃にやつと到來して、最う二月の末頃には、『早くも立去つてしまふのであるが、ロシヤの冬は、十月末頃には、もうやつて來る。そして四月の中旬乃至は下旬頃までぐづ〳〵してゐる。また寒暖の差でも同じことで、日本では、冬が來ても、ところどころに青葉をとどめてゐるが、ロシヤでは、寒氣が凜烈であるがため、一本の樹にも青葉をとゞめない。日本の冬は、晩秋そのまゝの形で春までぶつ通して行くけれども、ロシヤの冬は徹底的で、自然界は愚か、人間の服裝、步調、人相までも一變させてしまふのである。春、夏、秋、冬と規則的な順を踏んでくる日本の季節

から云へば、ロシヤの季節は全く不自然である。夏から冬、冬から夏と不規則的に飛んで行く。その變化が極めて急激である。勿論、秋が無いとは云はない、秋もある。けれども、日本のやうに冬を迎へる經路若くば準備といつたやうな餘裕のある秋ではなくて、冬を迎へる夏の溜息のやうなもので、ほんの瞬間である。

だから夏も終りに近づくと、ロシヤでは、何處の家でも、薪だの石炭だのを買ひ込む。そして、家の周圍に、家の高さと同じぐらゐ推く蓄積する。これはみんな五六ケ月の長い冬の間、ペチカ（暖爐）の材料になるのである。だから、九月から十月にかけて、ロシヤの何處の都市を步いても、村を覗いても、荷馬車といふ荷馬車は、悉く薪や石炭を山のやうに積んで行列を造つてゐる。一方、どこの家でも、一家總がかりで、二重窓の內枠を嵌め込むのに急がしい。夏の溫味が、室內から逃げないやうに、冬の寒氣が、這入つて來ないやうに密閉してしまふのである。その頃になると、一家の主婦は、一冬中の食糧品を蓄藏するのに無我である。馬鈴薯を買込んだり、キヤベツや、胡瓜を鹽漬にしたりする。かうして冬を迎へる準備が整ふと、やがて冬は、人間の鼻端や、頤髯や、眉の上に小雪を載せたり、子供の頬ぺたを林檎のやうに赤く染めたり、毛皮の外套にまんまるくるまつたり、トロイカの鈴を鳴したりしてやつてくる。

木枯が吹き荒む。寒い風が北の方から雪を運んでくる。雪は嚴寒を伴ふ。そして、冬は完全に大地を占領してしまふ。ロシヤ人は『今年の冬は、えらい嚴寒だ！』と、云つて喜ぶ。萬象は凍死して、なに一つ生氣を認むることが出來ない。けれども、外界の生氣を奪つた冬は、家庭に生氣を與へる。二重窓を嵌めた室の中には、話の雷がふくらむ、笑ひの花が咲く。肥太つた母親は、雌鷄のやうに兩翼を擴げて、澤山の子供を抱いて戯れてゐる。クルイロフの熊や、狼が出てくる。その蔭では、ペチカが眞赤な火の舌を出してぺろぺろ壁を舐めてゐる。卓上には、ぴかぴか光つたサモワールが沸騰して、やがて、ジージーと歌ひだす。すると、皆なが『誰かお客樣がくる！』と、叫ぶ。誰かゞ匙を落す。すると、また、皆なが『も一人誰かお客樣がくる！』と、叫ぶ。あんのぢよう、ペトロフさんが、雪を口にいつぱい頬張つて來る。イブアーノフさんが、鼻を眞赤にして來る。

かれこれしてゐる中に、冬は、クリスマスと新年とをお土産に持つてくる。ロシヤの降誕祭（クリスマス）は、日本なぞの一晩きりの小さなクリスマスとは違ひ、スヴャートキ（聖なる週間）といつて、二週間（洗禮祭、一月五日）まで、ばかりの後祭つ

長い尾を引はつてゐる。一年中の最も樂しい時期で、所謂冬が家庭に花を咲かせる時なのである。

降誕祭！十二月二十五日！春の復活祭につひでの冬の大祭である。この夜は、男にも、女にも、老人にも、若者にも、笑ひの花が咲く。戯れの花が咲く。占ごとの花が咲く、…………………若い男女の間に、戀の花の咲くのもこの頃である。トロイカに乘つて、二つの黒い影が、氷の上を驅けるのもこの頃である。若い二つの影が、抱合つたり、笑つたり、轉つたりして、白い雪の上に影法師を描くのもこの頃である。嫋かな娘が、强壯な男の腕に身を委ねて、くる〱一夜を夜會のダンスに送るのも、夜の白々と明ける頃まで、トランプの飛ぶのもこの頃である。

ヨールカ（クリスマス・ツリイ）が、客間の眞中に立つてゐる。玩具の金絲銀絲を縱横に張り廻した中で、赤、白、青のローソクが華やかに燃えさかつてゐる。その前では、髯武者の爺さんも、林檎のやうな子供も、蝶々のやうな娘子も、若い男も女も皆一緒になつてホロウオドをして遊ぶ。是れは、環形に手を組んで、ヨールカと鬼の周圍を歌ひながら廻つたり、踊つたりする、そして、鬼が誰でも自分の好きなものを接吻する、すると、接吻されたものが、鬼になつて、また、自分の好きな人を接吻するといふ、ロシヤに廣く行はれてゐる遊戯の一つである。髯の爺さんが、小さな娘を接吻する、その娘子が、大きな男に飛びついて接吻する。こんどは、男の番である。男は、うら若い娘に接吻する。顏を赧らめる。皆が冷かす。（これが緣となつて、その年の復活祭が過ぎると、二人は教會堂で、結婚式を舉げて、この日の謎を解く例しが少なくない。）やがて、御馳走に舌づゝみを打つ。ヨールカのローソクも眠さうに消える。子供達も眠むる。そこで、大人連中は、テーブルを圍んでトランプにお金を賭ける。若い娘達は、若い男達と占を始める。

或るものは、ローソクを水にたらして、蠟の浮いた塊を拾ひ上げて、壁の上に影をうつす。その影が、棺箱の形に映ると、壽命が無いと悲しむ、教會堂の形に映ると、近く結婚すると喜ぶ。

或る者は、屋外から雪を一握持つて來て、掌でもみ溶す。そして、其の中から出た、毛の色（雪の中には、大抵、牛や、馬や、犬の毛が交つてゐる）によつて、將來の夫なり、妻なりの頭髮の色を占ふ。褐色なれば、シヤテン若くばシヤテンカ（褐色頭髮の男、女）、黑色なれば、ブリユネツト、若くばブリユネツカ（黑髮の男、女）だといふ。

或るものは、通りへ出て、いきあたりばつたり、通行人の名

を聞く。すると通行人は、イワン！若くば、マリヤ！と、答へる。そこで、將來の夫は、イワンだといひ、妻はマリヤだといふ。クリスマスの晩に、若い男女が占をすることは、プーシキンの『エブゲニイ・アネーギン』の中にも出てゐる。また、或る民謠の中には、靴を投げて、靴先の向つた方向によつて、婿が南から來るとか、嫁が東から來るとか占つてゐる所を、歌つたのもある。

かうした數多い遊びや、ペーチカや、ローソクや、カルタやなどに煽られて、ほてつた顏を屋外の寒さに冷すべく、戸外に溢れ出す頃には、東天はもう白んでゐる。だから、とんでもない時刻に、よく橇に乘つた人の群を見ることがある。これらは皆、冷却隊なのである。偶々、こんな時に、路の傍に黑い風呂敷包の轉つてゐるのを發見することがある。近づいて見ると、風呂敷包みではなくて、半身既に凍傷におかされて、半ば、冥土の旅路を辿りつゝある泥醉漢である。斯うして、祭の犧牲に供せらるゝ連中は少なくない。ロシヤでは、よく、手、足、指、鼻そして耳などのない多數の不具者を見かけるが、これ等の殆んど大部分は、皆この凍傷の結果である。

京都の雪

田山花袋

一

義朝の事蹟の中では、伊吹の雪に艱むところが面白い。平治の亂のあつたのが十二月の二十六日、その翌日か翌々日にかれの一行は小野まで落ちて來てそれから雪に逢つた。今でもあそこは雪の多いところで、長岡、柏原あたりで何うかすると汽車がとまることがある。それに、名古屋ではまた雪がないのに、關ケ原に入ると、二尺も積つてゐることなどもある。愚管抄には、義朝があはれにも馬を捨て鎧を捨て、大白衣になつて跣足で落ちて行くことが書いてあるが、私はそれに疑問を持つて車

人の弟に訊いて見た。

『それはさうだらう？　馬は雪には意氣地のないもんですよ。八寸積ると、もう駄目ですね』經驗のある弟は、かう私に言つてきかせた。

『そんなもんかね？』

『何うも意氣地のないもんだ……。歩けなくなつて了ふからね？』

『それぢや滿洲なんかでは、馬は何うして使ふんだえ？』

『滿洲は雪なんか積りませんもの……地上は氷つてカチカチだもの……』

『あゝさうか。それぢや、義朝が伊吹の下で馬を捨て、跣足になつたといふことも事實だね？』

『それはさうだらう。何しろ、昔は騎兵の戰爭だからね。馬が駄目になると、意氣地はないのさ……。鎧や兜をつけて、徒歩ぢや歩けないからね？　何うしたツて、馬を捨てれば、鎧、兜を捨てゝ大白衣にならなければならないわけだね？』

『うむ、それでわかつた！』

私は馬ばかりでなく、源氏の家重代の鎧――義朝の稍無、義平の八龍、朝長の澤潟、賴朝の産衣などの鎧が堆雪の中に捨てられたさまをはつきりと眼の前に見たやうな氣がした。

二

平治の亂の起る前の日の夜に、後白河上皇は慌てゝ蓮臺野を經て嵯峨の仁和寺へと赴いた。その夜は吹雪で、御幸の道もはつきりとは見えないくらゐであつたが、その雪は二三寸積つて翌朝はカラリと晴れた。禁庭には朝日は美しく照りかゞやいて雪と物の具との互ひに掩映するさまが、繪のやうであつたといふ。

私はその時のさまを眼の前に浮べた。その時も今もあたりの山巒には少しも變つたところがないであらう。北山も眞白であつたらう。比叡にも鞍岩にも雪がその半ばに及んでゐるであらう。かう思ふと、その時の京都の町もはつきりと私の眼の前に浮んで來た「寒しとてかへり見すれば北山のみねしろ妙に雪降りにけり」これは松波遊山翁の歌だが、翁は京都の人であつただけに、その歌の中にはつきりと京都の町に住んだ人の感じが出てゐるが、矢張、その平治の亂の時にも、京都の町の感じはそれと略々同じであつたらう。振廻ると、北山の雪が眞白であつたらう。かう思ふと、昔も今もさう大して違つてはゐずに、重盛と義平とが禁庭の大きな椋の木を中心にしてくるくる廻つて戰つたさまや、十町次郎が騎馬の賴盛を容赦で追ひかけて、

その兜に熊手を引かけ、既のことに頼盛を馬上から落さうとしたさまなどが歴々と眼の前にあらはれて來た。

三

それから私は、雪の降る日に、鳥羽の安樂壽院に行つた。完全に保元の亂を理解するには、是非ともそこまで行つて見なければならなかつた。

雪と言つても、さう大した大降ではなかつたけれども、兎に角西山もはつきりとは見えないくらゐには降つてゐた。私は七條で電車を乘替へて、鴨川に架つてゐる橋をわたつて、眞直に伏見の方へと向つて行つた。暫く行つたところで、私は車掌に安樂壽院の所在を訊いた。

『城南離宮で下りるのが一番近いだつしやろ？』

から車掌は教へて呉れたが、

『そら、向うのわきに堤が見えまつしやろ？　低く……。あすこがさうだつせ！』

から言つて降頻る雪の中を指點した。成ほどそこに、こんもりとした森があつて、中に低い三重らしい塔の半ば森に埋められたやうになつてゐるのを私は眼にした。

城南離宮といふ停留場はやがてやつて來た。そこで私は下りた。

私のさした傘には、サラサラと雪が當つた。何とも言へななつかしい感じがした。私の頭には、保元時代のこと——鳥法皇が熊野から歸つて來て崩御になると、天下の形勢が何となく穏かでないので、即夜それを安樂壽院に葬り奉つたことながはつきりと浮んで來てゐた。美福門院のことなども思ひ出れた。崇德院は實は白河法皇と待賢門院との間に出來たであつたために、そのために保元の亂が起つたことなどもとなしに考へられて來てゐた。

幸ひにして路はまださう大してわるくなかつた。私は村のを眞直に横ぎつてレイルの上に出た。と、三間ほど先きに、十くらゐの僧侶が歩いて行つてゐるので、追いついて、安樂院への路を訊くと、

『わしもそつちへ行くで、一緒に來なはれ！』

と言つてグングン歩いた。

そこからはもはやいくらもなかつた。やがて安樂壽院のが來たが、それは向うに横道になつてゐるのであるといふがやがて私にも飲み込めて來た。檟の垣には雪が深く積つた。

近衛天皇の陵が、すぐその左にあるので私は眼にした。

森はかなりに深く、雪は一面に積つて、をりをりそれのくづれて落ちる氣勢がした。私はそれを眞直に行つて、更に右に曲つた。今度鳥羽天皇の陵が出て來た。私は傘を傾けてじつとその前に立ち盡した。

安樂壽院の主僧は六十ぐらゐで、大きな體格の人だつた。別に紹介も何も持つてゐなかつたけれども、快く私を迎ひていろいろなことを話して呉れた。百鍊抄や愚管抄に書いてある記事を集めた本などをも見せて呉れた。寺は今は全く衰へ果てゝゐるけれども、兎に角保元の亂に深い縁故を持つてゐる場所であるだけそれだけ私に強い印象を與へた。暫くしたあとで、主僧は雪を衝いて、私をその本堂の方へと伴れて行つて呉れた。

鳥羽院法體の像は、それは大したものではなかつたけれども、その本尊の釋迦如來は、天皇御歸依の佛像であることは歴史に見えてゐるので、深い深い感銘を私は受けた。その佛像を繞つた空氣の中に、鳥羽天皇を始め、待賢門院、美福門院、崇德院、などの面影がはつきりと籠められて殘つてあるやうな心持がした。

本堂の小蔀(こじとみ)を明けると、雪あかりが明るく内部の薄暗い空氣を照した。

四

朝、戸を推すと、あつさり化粧でもしたやうに、薄雪が
河原を白くした。水は錆鐵(さびてつ)の色をくつきりとあたりに見せ
ゐた。

『好いな！冬も好いな』私はかう思はず口に出して言つた。
好い天氣で、眩ゆいほどの朝日が比叡から如意嶽の雪に
てキラキラと輝いてゐるのも何とも言へない爽(さわや)かな感じを私
誘つた。河岸に臨んだ家々の家根が白く連りこもつてゐる
も、廣重の繪か何かでも見るやうな氣持がした。

それにしてもその三條の橋の畔は、私に取つていろいろな
じのするところであつた。私はそこで、山の端を出てしばか
の月影にかゝやきにけりかもの川水』といふ歌を口吟んだこ
を思ひ起した。また梅雨の頃そこに行つて、『さみだれに水は
れどかも川の柳のいろはあざやかにして』と詠んだことを思
起した。『梅霖旬日暗二衢閭一、無三綫東山揺二翠鬟一、一夜酒醒窓推
月明三十六峯顏』かういふ惡詩を拈したことをも思ひ起した

私はその日、白河北殿の址を岡崎に探つた。それから聖護
に出て、丸太橋を渡つた。前者は保元の戰場で、後者は平治
戰場であつた。私はそれから下加茂を左に見て、高野からす

と八幡の方へと行つた。千束がかけの「掛け」といふ地名の殘つてゐるのも私にはなつかしかつた。私は義朝の逍走した路をずつと龍華越まで行つて見た。

猯

瀧井孝作

猯の話をしたい。むじなは青海に、古く又ウジナ、狸の屬性、善く睡る、頭尖り、鼻出で、眼黒し、毛は黄黒褐色にして、深厚温滑衣とすべし、曲穴を作りて穴居し、晝は睡り、夜出でて食を竊む。とある。動物園へゆくと檻からこすさうな眼で人間を物色し、飄輕な物腰で歩いて居る。

芥川龍之介君の「猯」と云ふ小説に――書紀の推古記に、陸奥の猯が人間に化し歌をうたつた事が記してあるが、之はこんな事から傳へられた話であらうと前置して、陸奥の或汐汲の娘が男とちぎり男は娘の許へくる時はいつも歌をうたふのだつたが、或晩娘は母親の傍で忍男の來た氣配を母親の居る手前氣兼して猯が歌ふと云ふた故、正直な母は言葉を眞にうけた。で、猯が歌をうたつたと信ぜられてしまつたのだ――とや、左樣な短篇小説がある。

私が一昨年田端に居た頃、芥川君の許へよく出掛け、色々話した。飛彈日報と云ふ日刊新聞が私の郷里の高山町から屆き、面白い記事が出てゐるとそれを芥川君の前で私は話材にした。茲に書かうと思ふ猯の話も同君に聞いて貰つた事がある。

飛驒の新聞にでてゐた猯の話をする前に、私自身直接土地の人から聞いた、猯の事――習癖の一端を書いておきたい。

飛驒の丹生川村字法力のうちに平倉ケ原と云ふ處がある。有名な栖の栖でよくその歩いて居る形を見かけると云ふ。平倉原の猯は秋の末から春先まで冬中人家へ居を移し、床下に巣を造り己れの仔を生むのである。百姓屋には庭と稱し農仕事をする低い板の間がある。穀類の粒の漏らぬよう隙間なく拵へた板敷

である。狢は板敷の下、人の手の屆かぬ眞中に位置を占めて、巢を造り仔を生む。土窠にすぐ框がついて居る低いがつしりした造りの床だから、人は此床下に狢が仔を殖してゐても何する事もならぬのである。狢の啼くのや獸の臭氣などが分る。或時人が土臺の下の土を掘つて通路をこしらへて狢の巢へ犬を逐ひ込んだが、犬は狢の最後屁といふのを食べてひよろ〳〵として出て來たが、見て居る間に二三回くる〳〵と回轉して尻尾を捲いてそこへ倒れてしまつた相である。その後犬はもう狢に構はなくなつてしまつた。人は冬中床下の狢に聞えるやうに「去つてくれ去つてくれ」と賴むのださうである。左うすると狢は立退くと云ふ。併し狢は春になり温うなつて去つたので、また寒い晩秋がくれば人の床下の古巢へ立戻つて、己れの仔を生むのである。之はむかしからずつと極つて居るのである。

狢の事を書かうと思つて、此程高山の町から見えた人に話したら、其人は、この間の晩妙な事があつた、と前置して

「隣の石黑の槲の木へ梟が來て鳴くんぢやあ、すると私共の土藏の塀の方では狢が一緒に啼くのよ。妙な事があると思つて暫く聽いてゐたが。――梟はその晩上みの方の産業銀行の邊でも鳴いたさうぢやが、狢の聲はしなかつたらしいけれど」

と左う云ふ話があつた。之は聞く人の有情だが、人家に栖む狢の話故、つけ加へて置く。狢は家畜ではないが、人間にまぢる習癖のある獸らしい。私は幼時祖母の膝の上でお伽に聞いた、狢の話も數々あるが、之は容易く幼時の氣持になれぬ故なかなか書けない。

扨、飛驒日報に揭げてあつた狢の話は、――その新聞が手許になし古い新聞紙を取寄せる閑もない故詳細にはかけないが――大正十一年の或日の記事になつて居たのである。高山の町から三四里在の村の出來事であつた。村にやもめ暮しの老婆があつて、七十近い年寄で一軒に獨りで粗末な生活をして居た。淋し相故村の者はよく話に行つてやつてゐた。此婆さまが或日こんな事を賴んだ。此間から、皆が戻つた跡、遲く入つて來て每晩泊つてゆく者がある。始は村の衆だらうと思つて泊めて居たが、段々腑に落ちない處があるので、體を探ると非道く毛深い或は狢でも來るのぢやあ、ないかと思ふが、よくは分らんから、狢であつても俺は逐ひ出すだけの力はないから賴むのぢやが、若い衆にそつと一遍見に來て貰へまいか。左う事づけた。

事を聞いて、此年寄が嘘をつくとも思へぬ故、村の青年は老婆の言に疑をはさまなかつたらしい。で、夜更けて各々支度して樣子を覗いに往つた。覗くと火燵のまはりにいびきをかいて

寢込んでゐる者がある。老婆の寢た姿も見える。青年は表から入つて往き、寢間へ灯りをさしつけると、案の定、大きな猪が寢込んでゐるのであつた。で、それから繩で縛り外へ曳出して皆で打殺してしまつた。皮を剝いて、肉は煮て食べ、皮は殘つてゐると云ふ。

——この新聞の記事を芥川君に話しをした譯だが、この猪は同君の小説「猪」の反證になるわけである。芥川君は事を聞とつてから

「飛驒日報には何時も愉快な記事があるね僕も飛驒日報の購讀者にならうか」

と、笑つた。芥川君は、猪の記事を飛驒人の創作話とするのだ。

巴里の二た冬

中川紀元

西洋の記憶もだん〳〵にうすらいでゆきます。何かの拍子に忘れてゐた小さな裏通りの情景など思ひだすのは懷しいものです。

私は巴里ではじめての冬をパンテオンの近くのリュー・デ・フインチーヌで過しました。この小さな通りの或下宿屋に、エックスの田舍から出て來たばかりの青年セザンヌが、しばらく寐してゐたことがあるさうです。私は本でその事を讀んだ時、自分の部屋を見廻して、この部屋にゐたのぢやあないかと思つて一寸した想像をしてみました。

巴里の冬は隨分寒くて陰氣です。十一月半ばに雪が降りました。三月の末にはマロニエの並木がすつかり青葉でかざられ、郊外には花の香が匂せるやうですのに、四月末まではふるへ込むやうな寒い日が續くことがあります。

晝飯をすこしゆつくり喰べてゐると、もうあたりが暗つぽくなり出すやうな日の短い冬は、人々は自然にカフェや芝居小屋

へ集まつて時を過すことが多くなるのです。煙草のけむりと人いきれでムツとするやうなカフエーの一隅にボンヤリ腰をかけて、笑ひさざめく男女の群を眺めたりする時ほどエトランゼーの感を深くすることはありません。

最初の冬は氣候に馴れない故か健康を害して困りました。部屋には立派なシユミネがあるのですが、經濟を考へるのと手數をいとふのとで、夕食後は石油こんろで暖をとりながら、ランプの下で本を讀んだり手紙を認めたりします。巴里のまん中でランプは古すぎますが、私は前後四回宿をかへた何處にも電氣燈はありませんでした。巴里は古い町です。

夜が更けると何處か遠くから地下電車の響きが氣味惡くきこえ、廢芥自働車が騷々しい音をたてて廻つて來ます、今から考へるとホーム・シツクも手傳つてゐたでせう。陰氣な部屋の中で痛む頭をかかえながら、自分のからだはこの冬の惡い氣候にやられてしまうのではないかと案じたこともあります。

そんな中で私は故國から子供の死んだ知らせを受取つたり、ある日本人に立替えた金が、返されなかつた事件があつたりしてかなり參りました。

私の隣室に或會社へ通つてタイピストをしてゐる若い妻君がゐました。その亭主は父親かと思はれる位年のちがつた男で、商用でいつも月の半分以上は留守でした。

私の知人にノルマンデイ生れの呑氣でやゝ出鱈目の學生がありました。時々私のところを訪問して來るうちに、何時の間にかその若い妻君と別懇以上の仲になりました　お旦那さんに濟まないぢやないか』と私が詰ると「いや君、佛蘭西ではこんなことはあたりまえさ』と男は雜作もない返事です。

その戀？は三ケ月程も續きましたか。冬が過ぎて春が來た頃何か喧嘩をしてそのまゝおしまいになりました。はじめの頃は私が仲介者だと云ふので二人からレストランをおごられたりしたのでしたが、そんなエピソードもありました――

不眠症にかかつて苦しい夜中なぞ、寢卷の上へ外套を引かけて窓を開けたまゝ、寒い夜氣を呼吸しながら長い間立ちつくすこともありました。私の部屋は六階で通りに向つてゐました。向側の古い小學校の建物は寒月に照されて死んだものゝやうに眠つてゐます。これはヴイクトル・ユーゴーがその幼年時代を暮した事のある建物で、昔フイヤンチーヌ派の修道院だつたところです。

その頃私はアカデミー・グランツ・ショーミエールへ通つて仕事してゐました。冬になると畫學生たちは戸外の寫生が出來ないので、研究所は大はやりです。中には別に繪を描くのでもないのに、ストーヴであたためられた研究所で、モデルたちを相手に遊んだりするのを日課にしてゐるやうなボヘミヤンもあるのです。

　こゝに集まる男女の學生は殆ど世界中のあらゆる人種を網羅してゐます、佛蘭西は勿論、英國、西班牙、露西亞、スカンデイナビヤ、伊太利、米國、アルゼンチンから黑人まで樣々な標本が見られます。日本人も仲々優勢でした。

　私は毎朝通學の途中リユクサンブール公園の南端にあるカフエー・シモンと云ふので朝餐（プティ・デジュネ）を取るのを例としました。私たちより一時期前に洋行した島崎藤村氏や山本鼎氏もよく來て心安かつた家で、おかみさんはその娘が山本氏から貰つたスケツチを見せてくれました。その娘は今はもうすつかり大きくなつて、お婿さんもきまつたと云つてゐました。仲々美人でした。

　二度目の冬の十二月はじめに私はシテ・ファルギエールのアトリエへ移りました。モンパルナス停車場の裏手です。こゝで私は割合にコムフオータブルな一と冬を過しました。前年にくらべて氣候もよかつたし健康も回復してゐました。同じ家にほかに數人日本の畫家がゐてにぎやかでした。

　この界隈は場末に近くて一寸柄が悪いところです。夕方になると停車場の裏手には、帽子も外套も着ないやうな下等な女工たちが工場のかへりをうよ〳〵してゐて、うつかり歩いてゐる男を擒にしてあやしげなところへ引張りこむのです。何でも夕食前に一とかせぎしなければ、――たべ物にありつけないやうな慘めな女達ださうです。

　私たち日本の畫家たちが大勢集まつてS君のアトリエで新年會をやつた事があります。大に日本氣分を味はゝうと云ふので魚や野菜を澤山買つて來て、自分たちでお吸物をつくつたり飯を炊いたりしました。テーブルや椅子を片づけて毛布を敷いて坐りました。皆のよろこんだ事には席に二人の美人を加えたことでした。一人はGと云ふモデルの女で、もう一人は私たちの部屋の掃除に來る婆さんの娘です。

　みんな隨分機嫌よく騷ぎました。女たちも調子づいて大酒をあほつて唱ふやら踊るやらで、しまいには女同志で摑み合ひをはじめる始末に一同呆氣にとられました。とても西洋の女には

かなはない』と嘆聲をもらす人も出て來ました。

掃除婆さんは滅多にないお饒舌でした。はじめて私のところへ來た朝、箒を持つて立つたまま、自分は昔金持ちだつた事、亭主はいゝ歳をしながら花賣女とくつついて逐電してしまつた事、先日街角で女と一しよに歩いてゐるところを見かけた事、その時彼は『外套なぞ着込んで』氣取つてゐた事、しかし自分はかまはずにドン／＼歸つて來た事、こんな事情のあるにもかゝはらず自分の幸福なことには、十七歳になる娘のミユーゲツトは近所で『美しいミユーゲツト』と呼びならされてゐるほど美しい、その兄はまた伊太利風な貌をした大變氣のきいた働きものである事そんな身上話を悉くぶちまけるのです。

二三日して彼女は眼を泣きはらして入つて來て、息子と娘とが餘り騷ぐからといふ理由で家主から追立をくつて住むところもなくなつたと訴へました。氣の毒よりも可笑しさが先にたつて、私は『美しいミユーゲツトだけなら私の部屋に寢かしてあげてもいゝが』と冗談を云ひました。婆さんは娘もただ遊ばせて置くわけにも行かなくなつたから、ボルトレーのモデルにやとつてくれないかと頼むのです。兎に角一度本人を見て貰ひたいといふので、その日の午後に娘を連れて來ました。なるほど婆さんの娘にしては秀逸なので翌日から使ふことに約束しました。この娘です、新年會の晩にすばらしい元氣となつて一座を煙に卷いたのは。その後もよく日本人の誰彼にやとはれてポーズしてゐました。

ある時吾々をおびやかす事件が起りました。晝間の未だ明るい午後四時といふにK君の部屋へ強盜が押込んで來たのです。その頃K君は伊太利旅行の途中で背負つた惡い病氣のために寢てゐる時でした。衰弱して動けないので寢たまゝ侵入者の爲すがまゝにしてゐたさうです。ただ勳章と（彼は前に陸軍にゐました）外套だけは殘して置いてくれるやうに賴んだら、泥棒も知してほかのものを纏めて出て行きました。勳章は持つて行つても金になるまいし、外套を奪られてはこの寒空に病上りが困るからと云ふと『それはもつともだ』と云つたさうです。

あとで檢べると強盜は『美しいミユーゲツト』の色男で、様を知つた彼女が手引きをしたらしいと云ふ事でした。しかしのまゝで別に證據は上りませんでした。何でもその後に、途でそれらしい人相の男と連立つて歩いてゐるミユーゲツトを見たと云つてゐる人もありました。兎に角彼女は不良少女だつたやうです。

私たちのアトリエ長屋の持主は未だ若い男でしたが、私が移轉して行つた翌日卒中で頓死しました。吾々日本人仲間も花輪を供えて會葬しました。あとで妻君と主人の親戚との間に遺産のことでゴタ〳〵があつて、妻君は『いつそ日本へ行つてカフエーでもやりたい』と云つてゐました。彼女は以前からよく日本の畫家たちの世話をして、その名前なぞもよく聽えてゐました。私は歸國する時に彼女からモデイリアーニの油繪を一點ゆづつて貰ひました。よい才能を持ちながら夭折したこの伊太利の畫家も、こゝのアトリエに住んでゐた事があるさうです。

次の年の冬の來ない前に私は歸國の旅に上りました。その頃の佛蘭西の様々な人たちは今どうしてゐるでせう。(終)

巴里夜話

(どうして花聟は新婚の當夜氣がふれたか、どうして同じその夜花聟の男もまた氣がふれたか、と云ふ話)

岡田三郎

きつと病氣でどもあらうと思つてゐましたよ。さもなかつたら、この陰氣な冬の夜に、重い窓懸をとざした下宿部屋の四つの壁の間にはさまり、暗い電燈と二人きりでゐよう筈はありますまい。芝居に行くか、踊場に行くか、それともパンテオンのキャフエで音樂でも聽くか、……

病氣ですつて？　悲みの病氣？

「パンを持つものは悲みを馬鹿にする。」(Qui a du pain nargue le chagrin.) これは我がフランスの俚諺ですが、あなたの國、日本では、こんなことは云ひませんか？　それは兎に角、あなたは今悲みの病氣にかゝつてゐる。多分パンを持たないからでせう。しかし、私はあなたの悲みを馬鹿にはしません實は私もパンを持たないのです。

まあ、煖爐(シュミネ)のそば近く寄りませう。もつと火をさかんにし、白葡萄酒(ヴァン・ブラン)をのみながら語りませう。昔の人も「一杯の葡萄酒はい

い分別を與へる。」(L'ny erre de vin avise bien un homme.')
と云つてゐます。
私を衒學の專門家だと云ふのですか？ まつたくそのとほり
そしてあなたは何でせう？ 東洋の哲學者、……あなたばかりではありません。私の見かける殆どすべての日本人は哲學者に見えます。あの黑い瞳は何を常に凝視してゐるのか？ あの鎖された唇は、何を物語らうとしてゐるのか？ あの謎のごとき微笑は、何にむかつて與へられるのか？
けれども、こゝでまた、專門家たる私の本領を發揮させてください。'On ne rit plus, on sourit aujourd'hui. Et nos plaisirs sont voisins de l'ennui.'(「もはや笑はず、たゞほゝ笑むのみ。快樂はこれ倦怠の隣人。」拙譯）十八世紀の一詩人はから嘆いてゐます。若しもあなたの微笑が倦怠のためでなければ、私はどんなに嬉しいことでせう。
一昨夜も昨夜も、私はあなたの窓下をとほつたのですよ。窓簾の隙間からあかりがさしてゐたので、あなたが此頃どうこもつてゐることが解りました。
さう云へば、昨夜、キャフェ・スフレであの女、イヴォンヌに會ひました。あの女はもうこゝへは來ないのですか？ またあなたは物を云はずにたゞ微笑する！
悲みの病氣！ さつき、私もパンを持たないと云ひましたが葡萄酒を一杯飲んだせゐか、少しばかりパンの持合せがあるのを思ひ出しました。けれども、私はあなたの悲みを馬鹿にはしません。そのパンの一片をあなたにも分けてあげようと思ふだけのこと。

パリを遠ざかつた或田舍に、兩親と娘一人の一家がありました。その娘と云ふのは、まことに罪のない無邪氣な娘でしたが年頃にもなつたところで、或男に結婚を申込まれ、兩親も承諾し、いよいよ結婚式をあげることになりました。が、何分一人娘のことだから、兩親は娘を遠くへ手放すのを心許なく思ひ、自分達の家に新夫新婦を同棲さすことにはからつたのです。
さて結婚の當夜、村人達を招いでの饗宴もをはり、新夫婦は一室へとしりぞきました。そこで夫は新妻にあらためて結婚の神聖なること、夫婦は二體にして二體ならず、一人一心たるべきことを說きゝかせたのです。
『男と女は二體ではあるが、結婚によつてその二體が完全に一つの肉體になるのだ。もう決して離れてはならない。だから、お互に心の奥底まで打明け、すこしの秘密もないと云ふところまで氣持を通じあはねばならない。つまり隱しだてしてはなら

ないのだ。そこで私はお前を心から愛してゐるから、今一切をお前に告白する。實は私は、四年前に或娘と戀仲になつたのだが、その娘はたやすく私の要求をかなへてくれた。と云ふのはつまり、もうすこしたつたらお前も拒まずに私に同意してくれるだらうところのものを、その娘が私に許したのだ。ところがやがて男の兒が生れた。實に可愛い兒で、今年三つになるが、今は友人の家に預けてある。若しお前さへ許してくれるなら、あの兒をこゝへ引取りたいのだ。そしたら私を可愛がるつもりで、あれを可愛がつてやつてはくれまいか？　あの兒を引取つたからと云つて、決して跡繼ぎにすると云ふのではない。第一あれは私生兒になつてゐるのだから、我々の法律はあれに相續權を與へないことはお前も知つてゐるとほり、………』

夫(をつと)がかう云ふと、新妻は面に喜色をたゝへて答へたのです。

『何もかも明らさまに云つていたゞいて、私もほんとに氣が樂になりました。あなたの子供ですもの、それはあなたも同樣ではありませんか。御都合次第で、いつなりとも連れていらつしやい。私の子供と思つて可愛がつてあげますから。………さて、あなたがそんなに正直におつしやつてくれたし、また、お互が決して秘密を持つてゐてはいけない。二人が一つの心にならなければいけないと教へていたゞいたのですから、それでは私も正直にありのまゝをお話いたしませう。今は乳母の家に預けありますが、私にも今年二つになる女の兒があるのです。勿結婚すると云ふ約束の下に私は身を許したのです。さもなかたら、私は決してそんなことをいたしません。ところが、そ男は悪者で、結婚の約束を果さなかつたのですが、きつと今は神樣に罰せられて、決していゝ目は見てゐますまい。とはへ、そんなことは、今は少しも私の心にかゝりません。なぜて、あなたと云ふ正直な男らしい人が出來たのですもの。そに、もつとよいことには、あなたの男の兒と私の女の兒が、頃になつたら、似合の夫婦になれようと云ふもの、そしたらなたがいゝと思ふだけの財産を分けてやつて、………』

つまらない私の話で、それでも、憂鬱だつたあなたの顔もひに綻びましたね。が、「笑ふものはまた笑はれん。」（
bien qui rira le dernier.）しかし、折角あなたを笑はしおきながら、こんな厭がらせを云つてはいけませんでした。

それにしても、その時花嫁の告白をきいた君殿はどんないたことでせう！　あまりに驚いて一語をも發することが出ず、新妻の傍からはねおきるや、襯衣(シユミーズ)一枚で、………その頃夏の暑いさかりだつたさうです、………いきなり部屋を飛び

し庭へ出たところが〃まぐれあたりに驢馬の荷鞍をみつけ、それを背中に背負うて聲高く、俺は驢馬にされた！　俺は驢馬にされた！』とくりかへし叫びながら庭を驅けまはりつゞけたのです。

　こちらは娘の父親、まだ眠れずにゐると折柄の叫聲に驚き、女房を呼びさまし、『一體まあ聟殿はどうしたと云ふことだ、花嫁をおきざりにして庭を叫びまはるなんて、……？　ちよつと行つて見て來な！　聟殿にあんなわけの解らんことをさせる娘も娘だ！』

　そこで娘の母親は上靴をつきかけ、廊下づたいに新夫婦の寢部屋へと出かけたが、寢床には娘一人が寢てゐる。で、はいりしなに母親は戸をしつかりしめたところ、父親は物好きにも、一體何事がはじまつたのかと女房の後からそつとついて來たのですが、戸がしまつてゐるのではいるわけにいかず、鍵孔に耳をあてゝ中の様子をぢつときいてゐる。

『お前はまあなんて馬鹿な娘なんだらう！　きつとあの兒のことでも喋つたんだらう！　なんておぼこ娘のねんねえなんだらう！』と母親の聲。

『あら、母さん、私ちつとも惡いことを云つた覺えはないのに！　私はたゞ、あの人が私に云つたと同じやうなことを云つただけです。それに、どうしても私に云はすやうに强ひるんものの。ながいながいお説教をして、妻は夫に從はねばならぬの、夫婦は一心一體であるから、決して互に隱しあつたり隱あつたりしてはならぬもの、と云つた上で、あの人が何をたか、母さんに想像が出來ますか？　男の兒があるんです今年三つになる、可愛い男の兒が。だから、私だつて云はね惡いと思ひ、今年二つになる女の兒があるつて云つたんです年頃になつてお互に氣があつたら、夫婦にさせませうとも云たんです。たつたそれだけのことで、どうしてあんなに氣がれたやうになつたんでせう？』と娘の聲。

『そんなことをあの人に云つて、お前はづかしくは思はなかたの？　そんなことを新婚早々夫に告げるなんて、お前も隨わからずやだ！　そんな大事なことを！　……よくお聽き私はね、お前の父さんとこへお嫁に來た時、もう三人の供母親だつたんだよ。それでもお前の父さんは、ちつとも知らにゐるぢやないか！』

　またあなたは笑ひ出しましたね。私も一緒に笑ひませう。

　しかし、鍵孔に耳をあてゝ聽いてゐた父親は、笑ふどころはありませんでした。今の今まで夢にも思つてゐなかつた

を聽かされ、仰天してそこから飛びのくと庭へ驅け出たのです。すると聟は荷鞍を背負うて、『俺は驢馬にされた！ 俺は驢馬にされた！』と喚きまはつてゐる。そこで舅はありあはせた鞭をとつて、それで己の脛を叩きながら、『俺はぶちのめされた！ 俺はぶちのめされた！』と叫んでは、おなじやうに驅けまはる。結局二人は互の不幸を語りあひ、慰めあつたと云ふことです。さうする外に、二人の心の痛手を癒やすどんな方法があつたでせう！

これだけの話です。これではあなたのパンとして不足でせうか？ 何か、物語のしめくゝりになる教訓をですつて？ 教訓をつけたら、折角のこの話も訓話になつてしまふぢやありませんか。

ですが、俚諺の專門家として、それでは一つ、少し尾籠なものですが、……。

「己に關することを聽かんと欲するは、燭をかゝげて厠に赴くがごとし。」('Tout homme qui s'efforce à vouloir écouter ce que l'on dit de lui ressemble à ceux qui portent la chandelle au privé.')

なぜ！ なぜと云ふのですか？ でもその說明はよしませう。さあ！ 若しもこのパンがあなたの悲みの病氣を癒したやうでしたら、出かけようぢやありませんか。キャフエ・パンテオンの地下室へでも行つて、朝まで踊りあかしませう。

若しそこで『私はあなたを愛します！』と、一人の女があなたに云つたなら、それ以上の言葉をその女から聽かうとしてはいけません。でないと「笑ふものまた笑はれん」です。「知らざるは知るにまさる」です。

が、東洋の哲學者よ！ 私はあなたを一層懷疑的にし、一層憂欝にしたのではなかつたでせうか？

（この材料は小說のために保存しておいたものだが、改造社が深冬夜話にふさはしいものを何か書けと云ふので、こんな話にしてしまつた。が、他日これを別の形式で作り換へ、小說として發表することがあるかも知れない。豫め讀者諸氏にお斷りしておきます。猶、特に俚諺の佛文を挿入したのは、僕の拙譯或は原文の眞意を傳へ得ないかを恐れたからであることを附言する。作者）

少數貴族の政治支配

原則意識を缺いだ政治的善惡

杉森孝次郎

たとひどんなに暫現的であらうとも、現內閣の如き內閣が現に現はれたといふことは、全國民の深省をあたひする。決して淸浦氏その他の閣員らが獨りわるいのではない。元、准元老が獨りわるいのでも、貴院や、貴院內のいかなる會や團が獨りわるいのでもない。むしろかれらとしては、人性に通有の利己性や虛榮心に誘發されて、結局、やりさうな事をやつただけの事だ。かれらが智見や品性に於いての例外卓越者だとはよく／＼の例外者を除いては、いま時、だれも平素から思つてゐなかつたらう。

在野の代表黨、諸黨でさへもが、そしてそれらの黨のあたま株の個々人からしてが、政權獲得の夢想に失望させられたり、爭ふ方が得だと、同じく單なる政權慾に驅られて打算したりするたびごとにこそ、時代錯誤呼ばはりの元、准元老攻擊や、非立憲呼はりの官僚攻擊、樞府攻擊貴院攻擊、乃至軍閥攻擊などを常例的にやるが、どうかなと思ふ時には、すなはち、その邊の御機嫌をも取つて置かないでは、組閣や入閣の夢が實現されさうにない、實現されないにきまつてゐると考へられるあひだ、考へられるや否や、あるひは現に內閣にすわつてゐれば、保命の心要上、さう考へられるあひだ、わが國の政治家なるものは、問題なしに、その御機嫌を取る。政治家としての公的職責をいくらでも犧牲にしてまでさうする。その例と證據は、算へはじめたら際限もない。それは、實に、文字通りに常例であり、通則であるがゆゑに。

現內閣の如き、あまりに罪のない、先づもつてなにを人をも笑

びの衝動によつて不緊張にするやうな内閣が出來したことはその責任、一に全國民、しかもそのうちの、それが出來てからはまつかになつて憤慨し、攻撃する部分にある。政黨殊にも在野黨は、その部分のうちの最も顯著な部分だ。

元、准元老制や、貴院しかも殊に現にあるが如きかたちの貴院制を、原則的に曾つて一度も問題としなかつたもの、問題として意識しなかつたものが、現にもしないものが、ただ現象的に、いかに聲を大にしてそれらを攻撃し、あるひは私攻しても徹底しない。攻撃する方自身が徹底してゐないのだから、これは不思議でない。原則意識にもとづかない現象批判、現象攻撃は、いたづらに騷々しい。そして本質的、道德的矛盾やら、僞善やら、無責任やらさへも目立つ。

政治は公事だ。政治を公事あつかひする方法の現代に於ける代表形が立憲制だ。しかるに、この現代的最低限の政治の原則が、まだわが國の政治家と政治常識には一更に徹底してゐない。

たとへば、公、侯爵にして滿二十五歳に達したる男子は、國政の樞機に參與する能力及び意志を持つとか、持ちうとかいふ必然は、事柄の本質上、勿論決してありえない事であるのに、われらは、平素に於いて、あまりにこれを原則的に問題としなさすぎるではないか。問題として意識しなさすぎるではないか解散なき、しかも大きく特權づけられた參政組合、これ及びこの種の反政治原則的現象が、制度としても、習慣としても、學説としても、常識としても、いまだ國民的に批判の對象とされたためしが、わが國に於いては、ない。

山本内閣は辭職した。それには十分なる公的理由がなくてはならん。現に公認されてゐる理由は、果たして眞に十分なる公的理由たる資格あるものであるか。責任が犯人自身に於いて最も重大であることだけは自明的明白事だが、その餘の責任の歸しどころと、歸しかたに於ける種類別と程度別とは、決して單純に明白な事柄ではない。先づもつて全國民に責任があることもあきらかだ。當日の當所の治安吏、その治安吏の比較的に直接な上長官、この邊の責任もまた分限的に判識される。しかし、内閣辭職して、それで責任がほとんど全部的に自覺され、遂果されたと考へるならば、あまりに重大なる問題を、あまりに輕小に意識したといふ批判は當然成り立ちえようではないか。

清浦内閣は現はれた。現はせられた。これにも勿論十分なる公的理由がなくてはならん。もしも宮中の御大典前後に、なるべく衆議院の解散騷ぎなどを御遠慮申上げるといふことが、その理由の代表的理由であるとでも假定するならば、これも、果たして立憲的忠君愛國の意義を完全に帶んだ行爲だと判斷され

うろかどうか。もしも普選なり、選擧權擴張なりが、わが國に於いて、この際、早きをたつとぶ一とつの國家的、政治的必要善だとするならば、それをさう考へ、信ずる人々の立ち場からしては、たとひそのために衆議院の解散位の事件は生じやうとも、勇敢なる爲善のための奮鬪を、これは意味するだけの事柄ではないか。山本内閣といへども、それのために碎けることはもし碎けるとしても、正しき意味に於いての忠臣なり、愛國なりにむかつて邁進する殉善者の玉碎だ。人生の眞價は、正しき意味の理想主義のための、不斷の戰鬪たるところに、要するに存するではないか。瓦全としての無不安は人生の最深原則にそむく。人生の最深原則にそむいて、なほかつ正しき意味に於いての忠君も、愛國も成り立たう道理はない。

山本内閣にも、感心の點も全然なかつたわけではないが、眞の理想勇が足りなかつた。山本氏は驍勇者ださうだから、氏には、勇がなかつたよりも、理想がなかつたのだと推斷される。勇者には聰明なる理想なく、たま／＼聰明なる理想の持ちぬしがあれば、かれには勇氣がないといふわが國の現狀は、眞によそ事ならず、不安を感じさせる。しかし、問題の要點は、國民全體の知識と聰明の不足にある。原則意識の缺乏が、どう考へなほしても困難、國患、國憂の唯一因的最大因だ。

原則意識にもとづかない組織改善の運動や努力も、つもりつもれば、量が質に轉生する一可能によつて、原則意識にもとづいたそれであつたかの如き表面相を次第に呈する方向へは進むだらう。けれども、人間としては、それではあまりになさけない。また、そんな事では、その轉生した質も、眞に質ではないそれは、やはり、わが民族の痼疾である模倣主義以外のものでは、實は、ないのだ。

政治の責任は無限ではない。その代はり、政治の責任は、合理的有限の範圍内に於いては、曖昧なものではない。前内閣の逝きかた、現内閣の生まれかたも、この原則を十分に意識して國民に深い反省を要求する性質のものであつた。

政治の直接責任圈のそとに生起する、かなしむべき悪事や、よろこぶべき善事のために、政治の代表的中心位置に公立されてゐる政府そのものが、無問題的に去つたり、來たりすることは、故意に、非心や悪心をいだいて、それによつて、すなはち單に内閣をつぶすとか、變へるとかいふだけの私心によつて、政治の直接責任圈のそとの世界に飛んだ迷惑を及ぼしたり、また勿論政治そのものにもさうしたりする、恐るべき悪可能をして、有先例的に權威づけしめるやうな國家の深憂事さへも、およそ原則に於いて不完全な行爲は、單なる現象的結果に於いて

も種々の不完全を證示する必然と可能とがあるがゆゑに、注意されるではないか。

所謂貴族政治と現代の民衆

千葉龜雄

政府といふものが、國家を監視する仕組みであるかぎり、政治の統治者が、いつだつて小數者であることはきまり切つて居る。萬民平等の利福をはかるための、世界の新見本として現はれたところへの新ラシアさへもが、レエニンを中心とする專制政府の頭腦で統治されて居るではないか。それなら、國民の數量に比べて、最少微分子ともいふべき這箇少數が、儼然として數千萬倍、數億倍の民衆の上に立ち、彼等を統治する妥當性の何であるかとならば、それはいふまでもなく、民衆が、いつの時代でも、衆愚の集積であり、ひとり彼等が國内の知能と逹識を代表したところの、選ばれた知識者だからといふ前提から來るのである。けれども、民衆が、本當の意味で衆愚であつた時代には、その統治者の資格も、また果して、知能と逹識の代表者であつたかどうかは頗る怪しい。第一民衆に、彼等の資格がどうであるかを見分けるほどの聰明が發達してなかつたからだそして統治者の持つものは、むしろ知能や逹識の全能ではなくて、却つて或は、多少は持ち合せて居るらしい知能や逹識を役立せるところの、その權力や勢力が唯一のものであつたやうに思ふ。歐洲中古以來の貴族、日本の封建時代の大小名の歷史は、みなそれ等の能力によつて育て上げられて來たものである。

けれども民衆もさういつまで覺めずには居ない。彼等はようやく此上に立つものの資格に對して、選擇の機能を發揮するやうになつて來た。と云つても、國家の政府が、依然として少數者によつて管掌されることは、かく定められた組織下にあつて、たとへば止むを得ぬとしてもよい。が、それは斷じて昔のやうに「統治」であつてはならない。樣式は何であれ、精神は、民衆意志を「代表する監理」でなければならない。と彼等は强く

意志し、信念するやうになつた。監理はいさゝかでも、凡ての天降り的權力から成り立たない。少くとも、民衆生活の現實とそれに即した根から生れないものは、凡てが天降り的權力である。たとへば、偶然に與へられた特權の名によつて、上から壓抑しやうとする貴族政治の精神の如きものも、また一つの天降り的權力である。そこに民衆と何等の交渉を持つ機縁が無い。また或る者が、いかに理想的に、民衆生活の幸福を監理し得るかは、一にその人々が、いかに民衆生活の內容を知りつくし、理解し、精透するかに關聯する。民衆生活の容量に、いさゝかでも參加してない階級は、だから、その監理に、いさゝかでも參加する資格を持たない。生活は抽象した知識では無い。生活は生活する體驗を持つもの丶みがたゞ生活し得る。もし貴族にして、おれは充分に、民衆生活の琴線を捉へて居るといふものがあらば、それは直ちに貴族の本質的なものを、おろかにも本地で現はしたものだ。本質的なものとは何か。無邪氣な痴愚と無知であるための大膽である。由來この滑稽な心理は、わが大名や公卿や擬似貴族にのみ潜在し、古有された傳統であつた。

しかし、もし萬一にも、貴族及び、貴族類似者が、民衆生活の監理をかりにも行ふといふ場合であれば、それはまさに、彼等が二重の無知と、冒瀆を平氣で敢てして居るものである。われ等は、今更に彼等の無邪氣な身の程知らずをあわれまざるを得ない。なぜなら、彼等は、彼等が民衆生活を監理するどころか、民衆を監理しやうとする彼等自身の生活が、已に拾集しやうのない潰崩に陷りつゝあることを知らないからである。言を換へれば、彼等の生活が、すでに監理しやうとする民衆の手で監理され、その特權を奪はれるところの自然の危機にさへ瀕して居るのである。がそれがわからない。

けだし、彼等の階級生活の潰崩は、きわめて自然の徑路なのである。が、それにもかゝわらず、現代特權階級の頭腦の錯誤は、彼等が特權階級である故に、その優越を永久に振舞し得ると考へるところにある。が、それは論理的錯誤である。彼等は貴族だから優越が振舞せるのではない。かつての彼等の祖先の何等かの優越が、彼等に貴族の特權を與へることになつたのである。が、もとより彼等の祖先の優越とても、現代に特越せる質の優越では斷じてない。歐洲の中世紀に出來た貴族には、海賊や詐僞師の出身があつた。日本でも、切り取り強盜から起つた貴族が中々ある。が、何にせよ、彼等の祖先には、抽象した何等かの時代的優越があつたのだ。またいわゆる公卿階級にはなるほど當代の知識者、高德者があつたのだ。けれども遺傳の

學理と法則は、必ずしも子孫の知識的優越までを保證しない。

しかも貴族の生活は、それが貴族であるがために、種族的に、貴族の素質を頽廢せしめ、潰崩させる作用と働らきを根本的に持つ。その一つは特に日本にいちゞるしいものである。それは日本が家族制度を固執し、男系の嫡子の出生を唯一の念願とする故に、貴族が家系を永續させるといふ唯一念の下に卑族の女性を思ふまゝに閨房に執り入れた。この雜婚が、血液の混交とともに、種の素質の低下をおそろしく早めて了つた。他の一つは環境である。遊食が唯一の貴族の特權であり、標章であると考へられた長い間の過去の傳統は、彼等をして、いつも一切の實生活から脈離せしめた。そして彼等は、すべての奉仕者の、不自然な忍從と、心にもない好意に取り圍まれながら、爲すべき仕事のない退屈と空虚から、豪華でぜいたくな歡樂や、飲酒や性慾の享樂に逃避のはけ口を求めやうとした。かうした種族の人々が、どうして生理的心理的に頽廢せずに、現代に存在して居ることが出來るであらう。特に華族の精神的優越を保有するために、明治以前に建てられた學習院が、かへつて、民衆の子弟と知識的に競爭し得ぬところの、低能な華族子弟の逃げ込み所となつた矛盾も、こゝにおいていさゝかも矛盾では無いことがわかるであらう。

都鄙の新聞が、華族の何等かの就職か研究かを、さも業々しくものめづらしげに報道する心理が何を語るか。一つは、貴族といふものに對するところの、極めて卑屈な、傳統的尊敬心理から出るのもあらうかなれど、有りやうは、知識的落伍が原理である貴族界にも、なほ多少の俊才はあるといふ意味の、消極的な價値批判を無意識に表現したものであることは注意せねばならない。彼等が種族的にいかに大體に頽廢して居るかは、彼等が富の市場において、大抵落伍者となりつゝある現狀が事實を語る。もともと長い傳統と環境の結果として彼等は現代文化の中心たる生産や勞働に關する體力も知識も能力も全く乏しい。たゞ止むを得ず煩悶しながら、年々に乏しくなつて行く固定財産を見つめて、いたづらに萎縮して行く現實が何を語るか。けれども、この經路は、遂に潰崩すべき彼等の種族的滅落の前哨に過ぎない。故に彼等が差當つて考ふべきことは、彼等がいかにその傳統をいさぎよく、敏捷にふりきつて、一路勇敢に民衆の生活に合致すべきかにある。然るに彼等は容易にそれに思ひ附かない、いや、思ひ附いても力めてその想像の前に目をつぶる。そして、せめて唯だ一日の間でも、過去の特權に縋り付かうとする。それはかりか、進んでその夕陽の如き特權によつ

て、現代の民衆に指揮しやうとする如き無自覺、傲慢、無知、大膽の心理に出るにいたつては、われ等はたゞ彼等の盲昧の、皮肉に入ることの深さを今更に驚ろかざるを得ない。

が、現代民衆の徒が、なほ貴族階級に向つて、石を抛ち得る資格があるといふのか。由來、少數特權階級の政權專制は、決して清浦内閣に始まつたものでは無い。長い元老政治も、乃至は官僚政治も、不合理な特權階級の少數統治である一點からは、どこに貴族政治とちがつたものがあるか。いな、人は強ち少數政治を不合理とするけれども、かの多數の名によつて選ばれた政友内閣政治も、また一種の、明らかに不合理な特種利權階級の政治ではなかつたか。それなのに、ひとり清浦内閣が、貴族院に倚つたことのみを持つて、俄に容ることの出來ぬ特權政治とし、これさへ斃せば、日本のすべての社會現狀が、雨の晴れたやうに晴れ渡るやうに思惟する所の、囂々たるいはゆる輿論に對しては、私は明らかに反感を持つ。これによつて、俄かに日本が舊時代に逆轉したやうに、われ勝ちに、攻撃に後れるをおそれる無省察と、機會迎合の風潮を私は否定する。

社會は一つの統合された有機性である。或る一局部の事實の發生は決して局部の發生の爲めにのみ發生しない、發生……的生命は、必ず社會の全生活の基調に潜んで居る。一つの社……的變調が生れることは、その變調が、社會地層の全面にわた……て發生して居る機微を語る。然るにわが國現代思潮の混亂は……全くこの論理に目をつぶり、批判の目安を先づ世界と社會の……面の深さに置くことを忘れて居るところにある。そしてその……判を單に局部局部に即して、安價藥を貼り付けて濟まさうと……また濟まし得ると錯感する所から來る。危險な腫物や、發疹……場合に、内服藥が、何故唯一の對藥であるかゞ分らないので……る。一方にしきりに守舊思潮を招來することを絶叫するとも……らが、他方に貴族政治の時代錯誤を批難して得意で居るやう……いはゆる輿論が、平氣で横行して居る現狀を見て誰か時代が……合理的な思想の步調に進みつゝあるを斷言するものがあらう……

かう考へつめて來ると、かうした混亂した世態を招ぎ來し……のも、または、自身達が、あるまじい特權内閣だと批難する……浦内閣を招ぎ來したのも、所詮は民衆自身の迷蒙そのものに……ぎなかつたのではないか。思へ。われら民衆の祖先だちは、……等貴族や特權階級の、ほんの夢のやうな歡樂の爲にさへも、……んなに貴重で有價値な無數な生命や、血液を、無慈悲にしぼ……

取られたことか。單にそれだけを考へてもとくに存在の價値と生命が終つた筈の彼等を、平氣で存在さして居るやうな時代なればこそ、かうした變態な現實も發生しやうといふものだ。さればそれが存在を許して居たものは誰だ。

さらば、民衆の誰が、清浦内閣に向つて、もしくは超然内閣元老内閣、官僚内閣、政友内閣、その他のエトセトラに向つて石をなげうち得るといふのか。けれども彼等は、平氣でしきりと石をなげつゞけて居る、

誰に向つて？　自分の影坊子に向つて！。

夜はまだ暗い。

シタンドとクラッセ

室伏高信

清浦内閣に對する世評は、それが一つの特權内閣だといふことに一致してゐるやうである。私は勿論この點に異論はない。樞密院の老耄と貴族院の紙屑とを拾ひきたつて内閣を組織し、われ／＼國民に號令せんとす、これを特權内閣に非ずといふは尙ほ清浦奎吾が馬面に非ずとするの類である。

貴族は今日においても尙ほ政治上の特權ある地位である。佛蘭西革命以前におけるごとくに、若しくは露西亞革命以前におけるごとくに、今日の日本では、貴族は依然として政治上の特權を擁して尙ほ貴族院若しくは樞密院の一角に立て籠り、國民の直接なる監督を受けざるがために、稍もすれば氣驕つて、その人に非ずしてその他の地位に立ち、國家の重きに任んずべからずして廟閣に上る。今日の研究會の如きは其最も代表的なものである。清浦内閣はこの種「紙屑貴族」の委員會なのである。

紙屑貴族の特權はもとよりこれを打破せねばならぬ。この紙屑貴族の委員會としての清浦内閣はまたもとよりこれを木葉微塵に打破らねばならぬ。

けれども私たちはそれとともに、清浦内閣の打破、紙屑貴族の攻擊がそれほど大問題であるかどうかを疑ふものである。

貴族は勿論一つの特權をもつてゐる。貴族はしかし一つの階級ではない。經濟的機能、若しくは經濟的利害を共有にするがために貴族があるのではない。即ちそは一つの社會經濟階級ではない。たゞ一つの政治的地位である。その政治的地位さへもその經濟的背景を有せざるがために、今や政治世界のうへに明滅の境を往く。或は既に滅びたのである。寧ろ一つの死屍である。これを今日の政界に、聊かにても呼吸せしめてゐるのは、その罪全く政黨にある。政黨がその内訌と反動的精神とのために、貴族の政治的生命を今日に蘇生せしめたのである。從つて貴族の政治的權力と戰ふことの責任は勿論政黨にある。

階級を代表するものは政黨である。今日の特權階級を代表するものは政黨である。貴族が一つのシタンドを代表してきたのに對し、政黨はブルヂョア階級を代表すべく生れてきたのである。政黨と階級とは常に一致するものではないが、階級のあるところ必ず政黨がある。政黨が階級を造るのではない。階級が政黨を造るのである。階級は何人が造るのでもなく、如何なる集團の意識的製造物でもない。今の社會、機械の世界に、必然的に發生し、生長する經濟的分裂の狀態である。今日は階級の時代である。シタンドが支配する時代ではなくてクラッセの支配する時代である。今日の害惡の原因、奴制隷度の直接原因はこの點にある。明滅の境にある貴族の權力のごときは、あるもよし、無きがよしである。ブルヂョア階級の問題はしかしそうした呑氣な問題ではない。われ／＼が當面すべきものはシタンドの問題ではない。クラッセの問題である。

今日の狡猾なる政治業者の諸君は、特權内閣打破の名によりて、彼等自らの階級を支持せんとしつゝある。階級鬪爭を逆轉せしめて第三地位の革命たらしめようとしつゝある。

清浦内閣が特權内閣であるといふの理由によつてこれを仆せといふことは、クラッセをもつてシタンドに代へよといふことである。即ち清浦奎吾に代ゆるに三井、岩崎をもつてせよといふことである。岩崎の女婿加藤高明、商工黨の首領武藤山治、三井の代表者政友會は、この戰ひに最も適した戰手である。彼等が戰はんとするなら彼等をして戰はしめるがいゝ。ともに傷き、ともに仆れることが國民の希望である。

勿論彼等の戰志はどれだけの誠意があるかは疑問である。清浦内閣を特權内閣だとして攻擊の火の手を擧げてゐる政黨の諸君は、昨日までシイメンス伯爵の讃美者であつたではないか。馬面子爵が特權貴族である時に、シイメンス伯爵山本權兵衛は特權貴族でないのであらうか。シイメンス・ゴンベイの膝下に屈して、その草履取りに甘じた犬養憲政擁護神と、更にその一黨であ

る革新倶樂部の諸君が、果して特權打破を叫ぶの資格があるか。

彼等の論辯は、山本内閣は普選に贊成したといふであらう。シイメンス・ヤマモト・エンド・コムパニイは、果して普選の無條件且つ即時實行を聲明したことがあるか。山本内閣のごとくに普選に對して蛇頭蛇尾の内閣がまたとあつたであらうか。

馬面内閣が普選のよき友でないことは私の勿論認めるところである。或ものはこの馬面内閣をもつて普選を「弄」ぶものだと云ふ。私もそのとほりに信んずる。けれども日本の政治業者の間にあつて、たゞの一つの團體と雖も、普選を弄ばないものがあるであらうか。革新倶樂部の中心の諸君が普選議員の數人をその國民黨から除名したのはまだ數年前のことである。憲政會内の普選派に對してあらゆる厭迫を加へたのは加藤高明ではなかつたか。

普選の問題はもとより輕い問題ではない。そは一内閣の興廢の問題よりは遙に重大である。一つの内閣が仆れると仆れざるとは渺たる小問題である。何人が大臣にならうと、なるまいと「大正の青年」は、そんなことを眼中に置くほど時勢後れではない。大臣の名前なぞは知らざるが名譽である。われ〳〵の知らんとすることはアップ・ツウ・デエトのことであり、政治家のことは、アウト・オブ・デエトであるからである。

それゆえに一内閣の問題をもつて普選に代へてはならない。一内閣の興廢のごときは、近所の猫が兒を産んだかどうか位ひの問題である。それが馬面子であらうと、シイメンス伯爵であらうと、われ等の深く問ふところではない。普選の問題は、これに反して、幾つかの内閣を。これによつて仆すに足りる問題である。だから今日の政治上においては、普選は第一の問題、内閣の興廢は第二、第三の問題である。

清浦内閣が普選を弄ばんとするならばこれをして弄ばしめるがいゝ。ビスマークがした如くあらしめればいゝのである。蛇使ひをして蛇を使はしめよ。どうせ政治とは經濟的原因とマハトギイアに基く、有産有閑階級の遊戲なのだ、

清浦内閣よりも奇怪なのは、自ら普選に反對しながら、清浦内閣を特權内閣として反對しつゝある政友會の一派、高橋是清の「鞭」である。彼等は憲政擁護といふ。若し第二憲政擁護運動なるものがあるとすれば、その旗印は普選即行、反普選黨の打破でなくてはならぬ。

× × × ×

私のいはんとすることは、私たちの眼を常に階級支配の現實にとどめ置かなくてはならないといふことである。今日は貴族の時代ではない。貴族は一片の紙屑である。今日は金の階級の時代である。その金の階級が政治上の權力をも掌握しつゝあるのだ。即ちシタンドとクラッセとの一致なのだ。シタンドの支配のために私たちの先祖は長き日を苦しむできた。今日はシタンド・プラス・クラッセが二重の厭迫をもつてわれ〳〵を支配しつつある。われ〳〵の戰の目標は、それゆえに明瞭である。政治業の狡猾なる術策のために、この闇を瞞過されてはならない。

時評

貴族政治の復活と政治の將來

長谷川如是閑

政治の進化は所有權の進化と似てゐる。それは二つとも權力關係だからである。權力關係は社會生活の第一次的關係そのものではなく、反社會生活即ち敵對關係の現象である。一つの社會集團內に於ては、權力關係がその本來の關係ではない。政治的權力にせよ所有者の權力にせよ、總て後發事情である。故に政治及び所有權の進化の跡を尋ねると、始めは全社會的であり即ち共有であつた。日本の最古の政治は八百萬の神々が神集に集つてそれを決したとある。その次きに發生したのが即ち權力關係である、それは個人的乃至階級的意識の支配である。これは中世紀に於て全盛に達した政治狀態である。同時に所有權が階級的の意味で完成した時代である。それに次いで復古的現象が起つて次第に全社會的關係に移動しつゝあるのが現代的現象である。政治も所有權もその同じ傾向をとりつゝある。然らば政治は社會的から執意的となり更らに社會的に復歸するのである。

政治が執意的であるといふことは、必ずしも反社會的であることではない、個人的若しくは階級的自由意志と考えられるものは畢竟全社會的傾向の個人的解釋である場合もないではない。けれども政治的執意が發生した事情は、社會生活の軍事上又は經濟上の不平等から起るのであるから强者の意志は個人的でなければ階級的であることを免れない。舊世紀の政治は、この意味に於て反社會的傾向の勝つてゐた狀態であるといふことに一致してゐる。然るにこれに對する復古運動は果して社會的性質に於て發展して行つたかといふに必ずしもさうではなかつた。

フランス革命以來の政治的傾向は、軍事上の階級的執意を打破する結果となつたが、次いで經濟上の階級的執意を以つてする支配を建設する結果となつた。政黨の發達が即ちそれである。政黨の代表する階級は種々あるけれども、それは階級の相異ではなく同一階級に於ける利害の相異に基いたのであつた。故に政黨による政治は如何に轉々しても經濟的支配によつて一貫されてゐると考へられた。而して此の經濟的支配が、決して全社會的であり得ないことは、古代の全社會的支配が實は奴隷階級を除外した支配であつたのと同じ性質のものである。故に奴隷階級の除外が社會的安定を妨げない事情の下に於てのみその組織が成り立つ譯である。其處で現代的政黨政治の缺陷はそれから除外された階級の運動によつて常に安定をおびやかされる點にあることと丁度軍人階級の政治がそれから除外された地方豪族の運動によつて常に安定を害されたのと同じである。

處が、政黨政治によつて安定を害された被害者は、それが除外した階級よりもまだ外に、それによつて打破された階級がある。即ち舊政治の維持者である。此の階級は、自から全社會的理想を把持する資格のある唯一の階級であると信ずる點に於て非黨の權力者に讓らないのみならず、社會の傳統は政黨の代表する階級になくして此の階級にあることは、長い間の歷史的地位の當然の結果である。從つて傳統が勢力を持つ社會的風習の下に於ては民族的、國家的と考えられる生活理想は、此の階級が把持する樣に考へられる傾きを持つ。其處で政黨政治は、それが打破した階級とそれが除外した階級との兩面からの挾擊を被りつゝある。その前者は日本の現狀であり、後者は、イギリスの現狀である。

日本が政黨政治に轉化する過程の非常に有望らしく考えられたのは、要するに世界に於ける政黨政治の全盛期に作つた運動であつたからである。然るに日本に於てそれが全盛期に達する糸口を見出したか見出さないのうちに、世界に於ける政黨政治の估券はもう臺なしになつてしまつたのである。西洋に於て政黨政治の估券をこき下したものは、政治から除外された階級であつたが、此の世界の大勢に乘じて、日本に於て政黨政治の估券をこき下ろさうとしてゐるものは、それに打破された貴族階級であつたのは面白い對照である。

日本人の模倣性は有名なものであるが、政黨政治の世界的全盛期に當つては、日本の傳統的階級そのものが、政黨にかぶれて、政黨は藩閥に於ける繼子から生れた。自由、改進の二大政黨はそれである。後に到つても、伊藤、桂の如き官憲の權威が政黨に謳歌した、西園寺、原の諸氏も官憲に對する力によつて

政黨讃歎者の首領となり得たのである。然るに世界に於ける政黨の全盛期が過ぎるや否や、貴族官憲の權威はたちまち、矛を倒しまにして非政黨主義の爲めに躍び出した。政黨を官憲に結び付ける有力なる政黨首領が死亡又は隱退するや、政黨打破は彼等の手によつて始められた。貴族は政黨によつて權力を得る點に於ては、商人地主に及ばない。わずかに貴族院の勢力によつて利權を獲得する外はなかつた。如何に貴族院が政府を破壞しても、純貴族の政府は造ることは出來なくなつたほど、政黨は有力になつたが、政黨の世界的衰退期になると、たちまち形勢一變して漸く此處に貴族院内閣なるものを始めて日本で造ることが出來た。此數十年の短い期間に日本の政府は藩閥の政府即ち封建的殘黨の政府、官僚の政府、政黨の政府、貴族の政府といふ四段の變遷を經たのである。

此の變遷の段階によつても、日本の政治組織が世界の大勢に引きづられたものであることが認められる。封建的内閣が官僚のそれと變つたのは西洋に於ける順序である。即ち封建貴族的勢力は、立憲政治の始めに於ても多少殘存する。がやがて立憲政治の政治的機構の爲めに、その機構に於ける權力者なる官憲的勢力が別に成り立つ。そこで貴族階級が、政黨の發達に伴つて封建的勢力を剝がれて立憲政治の機構に參加する爲めに、政治能力を獲得しやうとする處から所謂官僚の階級に入り込むのである。日本の藩閥政治家が官僚に轉化した過程もそれである。そしてこの官僚の政治は、立憲政治の機構が更に發達するに從つて、政黨によつて取つて代られる。日本の政治的發達は矢りその過程によつた。而して此の政黨の勢力は、西洋でも最近の反動的傾向によつて一般に一時貴族の手に渡つた。日本の政黨政治が貴族の手に渡つたのもその同じ過程によつてゐるとすると、それも又一時的現象であるに相違ない。前述の如く政黨の支配を打破せんとする世界的大勢は、それによつて打破せられた貴族階級の復活ではなく、それによつて除外せられた勞働階級の擡頭である。この大勢は世界的傾向としては、最早逆轉することの出來ないほどの急傾斜を追つて進んでゐる。日本の社會事情の内容を漸く度外に措いて、日本が今まで歴史の上で辿り來つた傾向によつて考へると、此の上とも又當然この世界の大勢に從ふであらうと思はれる。

この形勢は已に今日の狀態がこれを暗示してゐる、清浦内閣出現といふ此の時代錯誤の大逆轉に對し、國民は頗る冷淡で、彼の寺内内閣に對して示した樣な猛烈な反抗的氣分を見ることは出來ない。殊に大震災に遭遇して、所謂人氣の荒くなつてゐる際であるから、若し一般の心理に少しでもこれを重大視す

る傾向があつたならば、わずかの煽動が政治的騒擾をおこさしめるに充分である。然るに形勢は頗る沈滞して、土偶の如き貴族等の政府が頭上に成立したに對して何等の刺激を感ぜざるかの如くである。此の現象を只だ反動的傾向が、貴族の復活を歡迎する一時的氣分であると見るのは誤りである。政治の進化に於て、これまで働いた凡ゆる權力に對する全部の批判が、この沈滞の原因でなければならぬ。政治的騒擾は政治的權力が頑强な存在を保つ時に於て起ること、健全な内臓ほど猛烈な苦痛を持つのと同じである。内臓がアトニーの状態に陷ると、轉げる様な苦しみがなくて、只だ一般の沈滞があるのみである。土偶的貴族内閣の出現に對し、國民が平然としてゐるのは、政治的權力のアトニーの結果である。藩閥、官僚、政黨、貴族等の政治は此處に於てか悉くその試驗を經つたのである。次ぎに起る可きものは、卽ち大勢が暗示してゐる世界的傾向でなければならぬ。

此の世界的傾向は一部の人々が夢想してゐる様に全政治状態の廢滅であるかどうかは無論問題である。社會變化を、人間的執意又は階級的執意によつて持ち來たし得ると考へたのは舊世紀の支配者である。如何なる科學的心意でもそれが現代社會の有機的進化と沒交渉である場合に於ては、決して實現されないのが社會進化の歷史の明示する處である。卽ち政治的進化は、現代の政治組織に於ける有機的過程が、如何なる進行をとるかによつて決せらるべきものである。人間は一代一代進化するものであるが、子は親の形態と氣質とを全く離るゝことは出來ない。社會進化が科學的執意によつて此の有機的過程に沒交渉に成立すると考へるのは、脂肪と蛋白質と、何々とを集めて人間を造り得ると考へる様なものである。故に世界の政治的機構の進化は、各國の政治の有機的過程によつてそれぞれ其の先在條件に規定される。其處で現實の進化は中途半端なものであるに相違ない。その過程を早くも現状によつて暗示してゐるのはイギリスのそれである。政黨の政治を否定することによつて起つた勞働組合が、政治的勢力に割り込んで遂に勞働組合の政府を政黨政治の機構に於て成立せしめ様とするに到つた。それが無産者の階級的理想と矛盾したものであることはいふまでもない。從つて勞働組合のそれに對する反抗は極めて猛烈であつた。そして今でもなほ猛烈であるにも拘らず、現實の社會過程にその理想に反する事實が現はれるといふ處に社會組織の有機的な特徴が存するのである。

日本に於ける政治の特徴も又何等かの中途半端に向つて進むに相違ないが、現在の政黨政治を打破する二つの力の中の、最

も根底的なるそして最も決定的なる勞働階級の力が、未だ組織的に完成されてゐないのであるから、此の中途半端の力は、其處で、今一つの非政黨的勢力即ち傳統的貴族の殘黨に委ねられるといふことになる。同じ中途半端でもイギリスの中途半端の目覺しく生々としてゐるに對し、日本の中途半端は眠氣を催うさせる程生氣のない意固地な中途半端である。日本は一日も早く現代の政治的進化に動力を與えるその徹底的の力を組織的に完成せしめなければならぬ。勞働階級の組織完成が日本の政治の新らたな安定を持ち來たす唯一の道でならねばならぬ。

政友分裂と政黨の中世紀の終末

前節に、政治は社會的から個人的に移り更らに社會的に復歸するといつたが、政黨も又何等かの社會的動機に發し後に個人的支配が起り而して又社會的傾向に轉ずる。即ち政治に於て個人的動機が強く働いて居る時代は、即ち政治の中世紀に該當する。日本の政黨は前節で云つた通り、封建的勢力の餘波から起つたが、それは個人的といふよりは寧ろ、所謂閥族的であつた。然るにこの閥族的心意が薄らぐと同時に政黨は個人中心の傾向を執つたのだ。今日も尚ほその時代を脫していない。政黨の離合集散が常に個人的關係に於て行はれてゐる。無論如何なる國の政黨も個人中心の傾向を全く脫したものはなく、殊にイギリスの樣な保守的の國ではその傾向が著しい。けれども、さういふ國では、その個人を中心とした異なる政治的雰圍氣を持つてゐる。アスキスを中心とした政治的雰圍氣は、傳統的リベラリズムであり、ロイドジョージを中心とした雰圍氣はリベラリズムの新らたな轉向を示した過度的政治氣分であり、保守黨に到つては、最早十年前のジョセフ・チンバーレン、バルフォア等の全盛時代の樣な個人中心の傾向を失つてゐる。勞働黨のマクドナルドにしてもその個人的勢力は全く彼れの政治的雰圍氣によつてゐるのである。然るに日本の政黨の現在の狀態は、政治的雰圍氣の別れが不明瞭で、全然人物の個人的勢力の明確な別れに基いた十年前の狀態を今も尚ほ脫してゐない。

政友會が個人中心であつたことは中心たる個人を失ふ度に結

烈な分裂がおこるのを見てもわかる。敢て政友會ばかりでなく總ての政黨がさうであるが、大政黨は組織が復雜であるだけ個人的勢力が稀薄であるべき筈だが、政友會に於てはその反對に總てが親分子分の關係から成り立ち政治的雰圍氣はその附屬物たるに過ぎない。今回の分裂は原敬といふ中心人物を失つた以來の政友會の遠心力が漸く結果を示したので、日本の政黨の歷史的過程を繰り返したものに過ぎない。

政治的雰圍氣が、政黨の離合運動を支配する場合に於いては、その離合運動が政治的空氣の氣壓の關係である故に政治空氣の氣象學によつて、科學的に觀測することが出來る。政治的空氣は利害の外的表現であるから、決して隱れた關係を動力とすることは出來ない。反之動力が政治的氣壓關係でなく嫁と姑との關係の樣なものであつたならばその一般傾向を見出すことは困難である。個々の人々の感情、その人々の間の愛憎關係、個人的利害關係——そんたものに通じない以上は彼等の離合集散の動機を知ることは出來ない。日本の政界の消息通といはれる人々は、さういふ個人關係の事情通に外ならない。

政黨の離合集散が、政治的動機を基礎とした、個人中心でなく、親分子分の關係によるといふことは卽ち日本の政治狀態が社會的であるよりは尙ほ家族的であるといふ時代を脫してゐない證據である。然し乍らこの狀態は次の事情によつて次第に變化する傾向を持つ。第一には傳統的人物の消滅である、傳統的人物は政治的雰圍氣に關係なくその傳統的の地位によつて敵味方の區別なく丁度朝鮮に於ける老人の樣に尊敬される人物である。政黨の中世紀に於てはさういふ人物が極めて便利である。政權が家族的に授受される時には、しば〳〵さういふ人物に渡される。故にその人物の存在は勢い個人關係により中心づけられる。然るに日本の現狀は次第にさういふ人物を死亡によつて自然消滅に歸せしめつゝある。これが政黨の個人中心の關係を稀薄にさせる事情となる。第二には、中心人物の分割である。卽ち小親分の簇出である。これは、親が死ぬと子供同志が財產爭ひをおこすのと同じ現象で一個の大たる力が失はれて遠心的に相反する力が働き出すのである。原が死んで政友會の求心力は遠心的に働いて澤山の頭目が分割的動力を起したのである。彼等の個々の理由は、後發的の事情で、妥協派は清浦內閣を助ける爲めに分れたのではなく清浦內閣などの胎兒ともなつてゐない以前からの動機によつて分裂しその結果、清浦內閣を援助するといふ政治的空氣を醱酵せしめたのである。高橋總裁の堂々たる宣言書も退隱することの代りに發生した政治的氣分であつて、その動機は彼に反抗する頭目等の分離運動に對する

人間的感情である。中心人物を失つた政黨は斯くの如くにして分裂してから後に政治的空氣の分判を生み出す。人間でまとまつてゐれば何等の分裂もないのである。

斯くの如くにして政黨の個人的中心は、自己破壞に陥る、これは各國共さういふ傾向を示してゐるのであつて、要するに傳統的の人格趣味は小さい生活利害にある小頭目の發生となり、更らにより社會的な傾向を執らふとするのである。日本の政黨は尙小頭目時代を脫することは困難である。然し乍ら小頭目時代になつた事は、伊藤とか桂とか原とか如何しい人格中心の時代を過ぎ去つたのであつて一進歩であると見なければならぬ。而して此の進展を持ち來たしたについては、之れを政友會だけについていえば、高橋總裁の態度に負ふ處が多いといはねばならぬ。無論それは偶然の結果であるが、若し高橋といふ人がより舊型の傳統的人物であつたならば政友會は今後も尙ほ大きい醜怪な塊として續くであらふ。それはあの單純な子供らしい無策な人物の消極的手柄である。今後平民政治家としてどれだけのことを成し遂げるかは頗る覺束ないが、政黨の中世紀から近代に轉ずる過度期に於いて現はれる人物としては恐らく舊世紀の崩壞と共に滅びるデカタンに過ぎなかろうと思はれた。高橋氏がつぎの世紀に於て平民となつて活躍しやうと企てたのは殊勝のことである。デカタンには一種の生活味がある。彼れをデカタンとするものはその生活味であるが、デカタンの高橋には、その裟婆氣を以つて新に生れ變らうとした譯で七十一才の老人としてもつと若い人々を奮發せしむるに足るだろうが、幾分か三浦といふ老人の奮發に似ている樣で悲慘にも思はれる。いづれにしても一種の舊劇的氣分である。それは日本の政黨の年代的地位を示してゐる事相である。

讀書餘錄

菊池寛

馬琴と訪客

當代の文人、多少とも訪客難を嘆じないものはあるまい。然し、多くは訪客を獲て、自身に對しては怠惰を口實とし、編輯者に對しては原稿遲延の云ひ譯となす。訪客難を嘆ずるも眞に訪客を嫌ふは少し。曲亭翁に至りては、訪客を忌むこと蒼蠅よりも甚し。日記を見るに

天保七年二月二十七日

一、同刻丁子屋平兵衛案内にて書家萩齋盛義來訪。予初て對面。手みやげ贈らる。外に生醫者同道是は見物人也。

天保七年三月十五日。今日兩度の客いづれも長談に付筆とるいとまを費し不都合の至り也。

天保九年三月十三日。

一、四半時頃古川石川内山田東馬來る、和太郎の父也。近所與力方へ娘遣し置き候間、それへ罷越候序のよしにて、數刻無益の雜談せらる。當春著述におくれ甚心せはしく候へども是非なく應對す。

翁が、憤懣の情、同感の外はない。翁は、翁の風容に接せんとする好奇心丈の訪客を、「多くは吾を見まくする者、兩

國邊なる勾欄戯場を見て、故郷へ歸るの日、話柄になさまく欲するが如し」と解し、知人の紹介なき者は一切面會を謝絶した。現代に於ける文藝講演會の聽衆の如きも、多くはたゞ作家文人の風容に接せんとする見物人である。而も、吾等も活として壇上に立ち見せ物に甘んずること、翁に對して忸怩たる感なきを得ない。

大名と駕籠

昔の大名が道中をするに、いつも駕籠に乘り詰めかと思ふと、さうでない。甲子夜話の筆者松浦靜山公の日光社參記を讀むと、駕籠に飽くと降りて、徒走したとかいてある。講談や稗史で見ると、大名は馬か駕籠にばかり乘つてゐるやうだが、時には歩いたものと見える。もつとも松浦公の日光社參は微行だから、參勤交代の道中でも歩いたかどうかは確でない。また大名だからと云つて、駕籠に乘つてすましてゐたかと云ふに、さうでない。本多能登守忠常の如き、駕輿丁に言葉をかけ、その勞を慰めるのを常とした。

英文の日記

蘭學の先驅者達が、蘭語の日記を付けたかどうか知らない。が、維新頃英學をやつた連中には、英文で日記をかいた人達が多いらしい。戊辰の變亂に當つて梁田に北越に、五稜郭に、官軍と角逐した幕軍衝鋒隊の隊長古屋作左衛門は、英學を修めて、當時有數の兵學者だつたが、英文で付けてゐる日記は左の如きものがある。

19/IX/Fine Weathere,

Morning Rise at the Thyrd o' clock, and reud grammar, go beaten or school or Custom, take duty walk back Come ihcku etc, night sleep ten o'clock.

現代の中學二三年生の學力だが、その耿々たる好學進取の意氣に打たれずには居られない。

信長秀吉家康

殺伐不倫なること信長の如く甚しきはない。天正二年正月岐阜城で、正月の酒宴をしたとき、酒三獻に及んで「珍らしき肴有り。今一獻可レ有とて、黑漆の箱出來る。何ならんと怪み見る處に柴田修理亮がのみける時に、自ら蓋をあけさせたまふに、薄にて濃みたる頸三あり。各々札を付けられたり。朝倉左京太夫善景、淺井下野守、子息備前守長政、彼等三人が首なりけり。滿座の人々此を見て、此御肴にては下戸も上戸も押し並べて、只給べよと云ふまゝに、各々歌舞酒宴暫しは止まざりけり」とある。野蠻不倫宛然臺灣の生蕃人である。その他、信長の多くの殺伐さを擧げなくても、彼が光秀のために非業の死を遂げたのは、當然すぎるほどである。秀吉は、信長に比すると寛宏にして血醒いことはやらなかつた。それでも、秀次の妻妾三十幾人を屠つた如きは、人をして眉をひそめしむるに足りる。たゞ家康丈は、老猾にして、長子を見殺しにし、秀頼母子を斃したが、しかしそれは政略上止むを得ないことで、その他に於ては天道を怖れ人命に對しては極めて、愼重であつた。彼が、天下を保有した一端は、かうしたところに存するかも知れない。孟子が「不嗜殺人者能一之」にと云ふのに、適つてゐる。

夜發お蝶貞義のこと

水戸の友滞守山侯の公子が書いた招隱館雜錄にある話を、「甲子夜話」に拔萃してある。

尾張町和泉屋藤助の手代權兵衞と云ふものが、出入屋敷佐竹京太夫殿へ行き用金の拂二百三十兩受取り、酒の饗應になつて、暮れてからの歸途和泉殿橋（現在の和泉橋は和泉殿橋の轉稱）で、醉つたまぎれに夜發に引き覺れたが、漸々

逃げて歸つて見ると、懐中してゐた金子が失くなつてゐる。彼は蒼くなつて、親方に事情を話し三日の間で當りを探し廻つたがない。四日目の夜今日見付らなければ自殺する決心で和泉殿橋を渡らうとすると、いつも出てゐる夜發の裡に、髪に紙を結びつけてゐるのが居る、權兵衛が不思議に思つて、その女の顔を見てゐると、その女が聲をかけ貴君はもしや何か落しはせぬかと云ふ、權兵衛は蘇生の思ひで金を落したことを云ふと、女は彼を川端へつれゆき、朋輩にも知らさず隱して置いたと云つて、地中から堀り出した二百三十兩を渡してくれた。權兵衛が悦んで禮金をやらうとしたが、一切受けない。たゞ、本所鐘撞堂杢右衞門の抱にて、蝶と云ふ名前丈を聞いて歸つて來た。主人藤助に、その話をすると藤助が、大に怒り、權兵衛を二階へ押込置き、藤助は本所へ行き杢右衞門に伶ひ蝶を十五兩にて身請し、相應の店を調へ、權兵衛と夫婦にしたとある。

そして、筆者は世に珍敷女も之有ものに候と、感歎してゐるが、お蝶の直義はさる事ながら、その話を聞くと、大に怒り本所へ馳け付けた主人藤助にも、人間らしい親しみを感ぜずには居られない。

信綱と地震

松平信綱がある朝、訪客と話してゐると、地震が搖つた。客が、登城せられなくてもいゝかと云ふと、信綱は小姓を呼んで、居間にある水桶の水がこぼれてゐるか、どうか見て來いと云つた。小姓が、歸つて來て、水はこぼれてゐないと云つた。すると、信綱はそれでは登城に及ぶまいと云つて、そのまゝ客と話してゐた。信綱は、如何程の地震には登城然るべきかを考へた後、居間の前に水桶を置き、御城で地震に逢ふと歸つてから、水のこぼれ工合を見、水のこぼれ工合で、御城で感ずる地震の強弱を研究してゐたのである。この話を見ても、如何に江戸に漸々と地震があつたかを知る

ことが出來るが、然し地震の襲來前大正の政治家に、松平豆州が水桶を置くほどの用意さへ、地震に對して採つてゐなかつたことは、古人に對しても恥しいと云つてよいだらう。

堀田正盛

堀田正盛は、家光に殉死した忠義の大名である。ある日、家光は鷹野からの歸途、不獵のために、不機嫌になり切つてゐた。ふと、振り返ると、草履取の男が、自分を冷笑して居るやうに見えた。本當はこの男は反齒のために、顏を動かすと冷笑するやうに見えるのである。が、家光はそんな事は考へなかつた。近侍の松平治郎左衛門に、今あの草履取が笑つたのを見たかと訊いた。いや見ませんと、治郎左衛門は打ち消した。そんならお前は見たゞらうと、家光は跡部茂兵衛に云つた。茂兵衛は、治郎右衛門の思慮ある答に感心してゐたのだから、自分もそれに習つて打ち消した。家光はいよ〳〵不機嫌になつて、新番頭の安西茂兵衛に、お前は見たゞらうと訊いた。甚兵衛も、見ないと云つたので、家光は怒つてしまつた。主人を朋輩に思ひ代ふる奴があるかと云つて、治郎右衛門が持つてゐた腰物を出させて、腰に挾むと、馬を輪乘にして今にも、草履取を手打にしようとしたので、三人とも生ける心地がなかつたが、さすがに自身は手を下さず、堀田正盛を呼んで、あの草履取を斬つて捨てよと命じた。堀田は御請して引き下つた。その翌くる日、家光が昨日の奴は、斬つたかと云ふと、堀田はまだその沙汰をしないと云つた、二三日、過ぎて家光が又聞くと、今日晩斬らうと云つた。十日ばかりして、家光が訊くと、二三日の裡に斬らうと云つた。三十日ばかり過ぎて、もう斬つただらうと云ふと、年末だから、來年になつてから、斬らうと云つた。來年になると家光は、正月の行事に取りまぎれて、草履取のことは忘れてしまつてゐた。

近代の戀愛觀

廚川白村著

廚川氏著書中尤も快心の作にてそして尤も得意とした戀愛論であるが故に、その賣行は依然白熱的勢ひで、群書中に嶄然頭角を抜く

紙型燒失のため永く品切中の所漸く本日出來

八十七版發賣

□定價貳圓五拾錢□

四六判上製□送料十五錢◇

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



迦留陀夷

武者小路實篤

一、

釋迦には澤山の弟子が居た。その內には隨分いろ〳〵の人間がゐた。その內の一人に迦留陀夷と云ふ男が居た。之はあまり評判のいゝ男ではなかつたが、しかし釋迦はへんに迦留陀夷を愛してゐた。迦留陀夷は他に別に缺點はなかつたが、そして人間もよく、頭もよく、殊に快活な男であつたが、女のことにかけると、いつもしくぢりをする男だつた。

迦留陀夷は釋迦がまだ出家をしない前から釋迦の侍者であつた。そして彼獨特な快活さで釋迦を出家させないやうにすることが、彼の務めではあつたが、彼はいつのまにか、釋迦にかぶれて、釋迦が出家したあとで、釋迦の弟子になつた。

彼が僧侶になつたのは、決して現世がいやだからではなかつた。むしろ彼は現世を愛してゐたが、そして彼は決して不幸ではなかつたが、彼は不思議に釋迦を愛してゐた。彼は女を愛してはゐたが、しかしそれ以上釋迦を愛し、釋迦のわきにゐる時が、一番おちつけた。釋迦のそばをはなれると妙に心が空虛になつた。彼が僧侶

になつたのは釋迦の魂を愛したからで、その愛の强さでは何千人とゐる釋迦の弟子の內でも、一二を爭そうことが出來、それは眞實のものであつた。だから釋迦も迦留陀夷を愛してゐた。

時々厄介な奴だと思はないことはなかつたが、逢ふと、どうも眞面目になつて怒る氣にはなれなかつた。

迦留陀夷が人妻の齋優婆私と云ふ女と關係したことが、僧團の噂にのぼつた時には、さすがの釋迦も、僧團のために破門することに決心した。そして迦留陀夷にあつて怒つてやらうと思つて出かけた。

しかし釋迦が、迦留陀夷の居る林のなかを步いてゐると、美しい小鳥が呑氣にさへづりあつたり、美しい花が咲いたりしてゐるのを見ると、迦留陀夷のことは忘れて、そして、生とか死とか、或は眞理とか云ふやうな問題のことを考へて、すつかり心の內がうれしくなつて居た。しかし釋迦の步は迦留陀夷の家の方へ步いて行つた。そしてふと見ると、迦留陀夷は水槽のなかに入つて、呑氣な格好して、小鳥のなき聲でも聞いてゐるらしかつた。

それを見たら釋迦は、腹が立つより、噴き出したくなつた。

「仕方がない奴だ」

さう思つた。迦留陀夷は性慾に苦しむと水槽に入るのは有名な話であつた。

それも皆に云はすと、暑い處で水槽に入つたつてい丶氣持がする許りで何にも役に立たないと云ふのだつた。

實際迦留陀夷は圖々しい男でないとは云へなかつた。彼は何も知つてゐて、損することは中々しなかつた。禁慾なぞなする男には見へなかつた。殊勝らしく水槽に入るのも、釋迦をだますためだと噂する人もあつた。

釋迦は迦留陀夷の正直ものだと云ふことをよく知つてゐた。迦留陀夷が怖い人間は釋迦だけで、釋迦に嘘がつけない位いは、迦留陀夷は百も承知なので、何にも嘘つく必要は彼にはなかつた。

釋迦が、迦留陀夷が水槽に入つてゐるのを見ると、どうも笑ひたくなるが、しかし今彼は笑ふわけにはゆかなかつた彼は迦留陀夷の唯一の缺點をこのさいなくなしてやらうと思つた。あまりその方に自信はもてなかつたが、しかし出來るだけやつて見やうと思つた。

迦留陀夷は足音がするのでふとふり返つて見ると其處に釋迦が眞面目な顏して立つて居た。迦留陀夷は頭をかきながら、

「いゝお天氣ですね」と云つた。

「迦留陀夷、今日はお前と眞面目に話したいことがあるのだ」

「はい」、から迦留陀夷は釋迦の顏色を一寸見ながら云つた。

「俺はあの木の下でまつてゐるから、早く水から上つてやつておいで」

「はい」、迦留陀夷は神妙に返事した。

釋迦は默つて步き出した。

二、

まもなく釋迦が木影の石の上に腰かけてゐる所に迦留陀夷が來た。

「どうも今日はいゝお天氣ですね」

「いゝ天氣なことは一度云へばわかつてゐるよ。今日はいゝ天氣だが、しかし今日はお前とは眞面目に話さなければならないのだ」

「はい。誠にすみませんでした。私も後悔してゐるのです」

「お前の後悔は今日に始まつたことはではない。俺が何度お前に云つて聞かせたか知れない。それなのにお前は俺の心も察しないで、又新しい事件を起したさうぢやないか。皆も今度はどうしてもお前を僧團から出てもらいたがつてゐる。皆の云ふのも無理はないと思ふのだ。俺は今度だけは許してやれと、今迄に十何回云つた。いくら俺でも、今度も許してやれとは云へない」

「それはもう、あなたには何と云はれても私は反對は出來ません。私だつて、又しくぢるなぞとは考へたことはないのです。ですが、あの場合仕方がなかつたのです。私の力以上なものに壓倒されてしまつたのです。私もあとで之は困つたと思ひました。又あなたに御迷惑をおかけすることになる、實際すまなかつたと思ひました。始めつからそれはわかつてはゐたのですが、ついいつもの通りで、その時は目がくらむでしまつたのです」

「お前は今だつて本當に後悔してゐるのではないのだらう。お前は今でもその女がくればすぐ又、俺の云つたことなんか忘れてしまうだらう」

「さうおつしやられると一言もありません。實際あの女を見ると、私はどうすることも出來ないのです。あなたに出來ることは私に出來ないことはないと思ふのですが、矢張りその時になると、つい負けてしまうのです」

「それはまだお前が色慾の恐ろしさを本當に知らないからだ」

「しかし色慾と云ふものはそんなに恐ろしいものでせうか。私はさうは思ひません。あなただつて色慾にかけては私にまけなかつた方ではありませんか、それでも今、そのやうに覺りを開いてゐらつしやる。色慾が恐ろしいと云ふことにしておくことは私も惡いことゝは思ひません。しかし色慾の罪を今の人は少し誇張しすぎてゐるやうです。私にはさう

思はれますが、どんなものでせう。

「お前は、この世に行はれるいろ〳〵の恐ろしいことの源が何處から起つてゐるか、知つてゐるか」

「それは嫉妬から起つてゐるので、戀から起つてゐるのではありません」

「お前は面白いことを云ふね」

「あなたはなにもかも御存知ではありませんか。色慾はつゝしむにこしたことはないことは私も知つてゐます。しかしこのたのしみが人間に與へられてゐる以上、色慾を禁じなければ人間は救はれないなぞと云ふ者は、誇張した者で、その結果は面白くないと思ひます。色慾でしくじつたために自棄を起して、覺りの道を途中でやめた人がどの位ゐるかわかりません。色慾の罪を誇張するのは、人間のつまづきのもとゝ思ひます。勿論、一方にあなたのやうな立派な方がゐることは必要です。色慾の奴となることは奬勵すべきことではありません。しかし色慾を恐れすぎることもよくないと思ひます。あなたには大勢の前で私をお叱りになるのはよろしい。私も皆の前で、あやまります。ですが、私をおい出してはいけません」

「それでは俺がお前に說教されてゐるやうなものだね」

「まあ、さうです。あなたは太陽のやうな方です。しかし太陽だつて、年が年中人を照してゐればいゝと云ふことはありません。夜の世界と云ふものが人間にあるのはいゝことです。晝の世界にかけては、あなたに叶ふ人間はこの世にはあり得るとは思はれません。しかし夜の世界の方ではあなたは知らん顏してゐらつしやる方がいゝのです」

「しかし恐ろしい種をまくものを默つて見てはゐられない」

「私は恐ろしい種をまきますか。私は自分を嫌つてゐる女を强迫して自由にしたことがありますか。私は自分を愛する

女を、覺りの道に段々近づけてゐるではありませんか。幾多の場合でも、私は決してあの女を墮落させはしませんでした」

「幾多の夫の密護はその爲に早く死んだと云はれてゐる。しかしあれはお前の出家しない前の話だ。しかし今度のはちがふ。出家する前のことは俺は問題にはしない。しかし出家したあと、お前は謹めるだけ、謹んでもらはないと困る」

「之でも謹しめるだけは謹しんでゐるのです。謹まなかつたら、どんなことをしてゐるかもわかりません」

「困つた奴だな」

「本當に困ります。何しろ女にすかれるとどうも、相手をよろこばしたくなるので」

「馬鹿云ふな」

「之から本當につゝしみます。まあ大目に見てゐて下さい。私も何かの形で、あなたの教へのために御役に立つてゐるのでせうから。あなたの教へは、女のことなんかで、びくともする教へではありません。女のことに夢中になればなる程、矢張りあなたの云ふことが本當だと云ふことがわかります。いくら私が女がすきだと云つて、そのためにあなたの教をすてることは出來ません、私はあなたの教のためにはよろこんで幾多もすてやうとしました。いくら密優婆私であなたの教のためならよろこんですてます。ですが、あなたの教は大海のやうなものですから、何百、何千の密優婆私がゐたつて、おどろくことはないので、私は安心して彼等をすてないのです。他の人が何を云つたつて、私をおすてになつてはいけません。私があなたの教へを尊敬しなくなつたらその時はおすて下さい。私がまた自分を少しでもよくしたいと思ふ心がけのある間はお捨てになつてはいけません」

「それでも他の人がお前の眞似をしては、お前だからあぶない所で引き返せるが、他の人だつたら墮落してしまはない

とも限らない」

「御安心です。あなたと云ふ太陽がある以上私のやうなものが、いくらゐても心配なことはありません」

釋迦は、始めつから大して問題にもしてゐなかつた。其處で、ともかくもう少し樣子を見てゐやうと思つた。

迦留陀夷は釋迦の機嫌がなほつたので安心して云つた。

「あなたは女を見ても、何とも思はなくなつたのですから、結構です。その點大迦葉なぞも私は心から尊敬してゐます。私も早くさう心からなりたいのです。さうなれたら、私だつて女なんかに見向きもしないでせう。早くさうなりたく思つてゐるのです。さもないと女はあまり可愛いすぎて、困ります」

「こんないゝ天氣でもお前は女のことを考へてゐるのか。可哀さうな奴だね」

「本當に可哀さうな奴です。あなたのやうなあかるい、のび〳〵した方から見ると」

三、

釋迦が機嫌よく歸つて、暫くすると、齋優婆私が、忍んでやつて來た。

「今日はあなたは水槽のなかに入つてはゐらつしやらなかつたのね」

「いゝえ。今さつき入つてゐたら、足音がしたのであなたかと思つてふり向くと、お釋迦さんがすました顏して立つてゐらつしやるのでびつくりしました」

「さうを、今、私も、こつちへくる時、お釋迦さんにお逢ひしてよ。御挨拶したら、お釋迦さんも御機嫌よく御挨拶なさつてよ」

「さうか。お釋迦さんには本當に頭が上らない。あの方にあふと、私はつい眞面目になつてしまう。あの方はいくら默つてゐらつしても、何にもかも知つてゐらつしやるのだから、本音さへ出せば、何んでも許して下さるが、それだけ、私は責任が重い氣がする。」

暫くして二人は森の奥へ入つて行つた。

迦留陀夷は一人で歸つてくると水槽に入つて、自分の頭を拳固でいくつとなくなぐつた。そして自分の罪の許しを何かに祈つて、そして之からしつかり修業をしやうと決心を新にしてゐた。しかしそれから一二時間たつと、彼は森のなかを元氣に歩きながら、何か讃歌を口づさんでゐた。

四、

その時、迦留陀夷の處に一人の若い僧侶がたづねて來た。

「私は一人の女と戀し合てゐるのです。その女のことを思ひ切らうと思つても思ひ切ることが出來ないのです。どうしたらいゝでせうか」

迦留陀夷は、その若者の顏を見た。彼はその若い僧に厚意をもつことが出來なかつた。若者は、彼がすぐ贊成することを信じ切つてゐるのがわかつた。むしろ賞めてもらいたがつてゐることがわかつた。彼は其處で云つた。

「お釋迦樣の處へ行つてお聞きしたらいゝでせう」

「なんだか恐ろしくつて」

「それなら大迦葉さんの處へ行つて」

「どういたしまして、あの方のつぶしのきかないことはまるで石のやうです」

「あの方の惡口を云ふのをおよしなさい。あの方は尊敬すべき人です。私なんぞはあの方にはくらべることの出來ないやくざものです。私の處へそんなことを聞きにくるのは大泥棒の處へ行つて泥棒していゝかわるいかきゝにゆくやうなものです。大泥棒だつて泥棒がいゝとは云ひますまい。私だつてさうです。人間は八正道を守るのはいゝことです。女のことを考へるより考へない方がいゝのです」

「それなら私は女を思切らなければならないのですか」

「思ひ切れるなら思切つたらいゝでせう。」

「どうしても思ひ切れないのです」

「それならいゝことだと思はずに、そんなことを自慢にせずに、謙遜に何か他の點でそのおぎないをするやうにして、そのことは、許して戴いてゐるのが勿體ないと思つて、生てゆけばいゝでせう。自分の罪を知れば、他人の罪に同情が出來、許すことが出來、そして自分が苦しい日にあつても、誰もうらまずに、すなほに自分にゆるされたよろこびを思つてその罪を感謝してお受けとりなさい。決してひがんではゐけません。また自分に悲觀してもいけません。まあ私のやうに、缺點は缺點としてなくすことが出來なくとも、長所は長所として生かしてゆかなければいけません。何かの形で罪ほろぼしをして、そして罪の方はなるべくうちかつやうになさい。人間は缺點の多いものです。それを一々くよくよしてはいけませんが、それを得意にしてはなほいけません」

「よくわかりました。ありがたう。それにしても、なぜ性慾と云ふものが人間に與へられてゐるのでせう。」

「子供が生れるためですよ。中々うまく考へてつくつてあるぢやありませんか。私はそのよろこびの深いのをよろこび、

あとの後悔の强いのをよろこびます。それで私のやうなものでも、どうにかお釋迦さんの教がわかるのです。あの快樂がいつまでもどん〳〵調子づよく味はつてゆけたら、私はくさつた種豕になるより他なかつたでせう。相手の運命をいたわり、愛し、そして相手が本當に仕合せに生られるやうに骨折らなければいけません。その點、私の方があなたを手本にしたい位いに立派にやつて下さい。はゝゝゝ」

と迦留陀夷はうれしさうに笑つた。

五、

實際迦留陀夷のすることは一部の人に非難されたが、しかし迦留陀夷に逢ふものは迦留陀夷を憎むわけにはゆかなかつた。彼は親切もので、思ひやりが深かく、腹にわるだくみがなく、快活だつたから。彼は又よく釋迦と一緒に步き、そして阿難達とも仲がよく、目蓮達とも氣があつてゐた。たゞ大迦葉とは、蟲があはなかつた。しかし彼の方では大迦葉を尊敬してゐた。たゞそのつぶしのきかないやうな處がとりつきにくかつた。しかし彼はそんなことにこだわるにしてはあかるい氣持をもつてゐたし、呑氣ものだつた。いつも勝手なことを云ひ、又行つて、皆を笑はしたり、怒らしたりしてゐたが、腹に毒がなかつた。

釋迦の弟子には女の方でも中々迦留陀夷に負けてゐないものがゐた。何しろ人數が多いのと釋迦は太腹で、あまり氣にしなかつたので、いろ〳〵の人がゐた。その女の中で夷羅難陀比丘尼と云ふのが居た。この女も若い時に迦留陀夷がまだ出家せず、自分も尼さんにならない前に、關係したことがある女で、尼さんになつても、いろ〳〵僧侶を誘惑したことがあるが、元來の性質はわるくもなく、又惡だくみをするたちでもなく、又僧侶達の仲間同志の間をさくと云ふ質

でもなかつたので釋迦は知らん顔をしてゐた。
この女は大迦葉が、品行方正で、彼女の存在を無視してゐる許りではなく、彼女のことを惡口云つたのを聞いて腹を立てた。そしてある日大迦葉とゆきちがふ時、大迦葉の顔を見ると、いかにもキタナイものを見た時のやうに唾をはいた。大迦葉は別に氣にしないですませたが、それを見てゐた人が、そのことを何かの時、迦留陀夷に話した。迦留陀夷はそれを聞くと、腹をたてた。
「自分がすきなことをするのはまだいゝ。しかし自分がしたことがよくないことなら、そのことをよくないと云ふ人のあつたつてそれを怒るのはよくない。自分のした惡い點を誇張せずに、或は心配して非難されたからと云つて怒る馬鹿があるか、その位いならわるいことはしないがいゝ。まして自分の方が惡いからと云つて、正しいものに唾をはくことがあるか。男女の間のしくぢりは自然である。いゝとは云へないが隨分人のいゝ人でもしくぢらないとは云へない。だが尊敬すべき人を輕蔑することは、いゝ人では出來ないことだ」
迦留陀夷は迦留陀夷らしいことを云つたので、相手はふき出してしまつた。

六、

迦留陀夷がその話を聞いて二三日したある朝、彼はいつもになく氣持ちよく起きた。彼は心がすが〳〵しく、何にもかも忘れて、たゞ心うれしく森の中を歩いてゐた。彼はさう云ふ時、讃歌を口ずさむのがくせだつた。そして草木や、小鳥達を友達のやうに思つた。
彼は釋迦はきつといつもこんな氣持でゐるのだらうと思つた。明るいのび〳〵した氣持、彼は自分にも時々さう云ふ

氣持がわかるやうになつたことをよろこんだ。

しかし彼は憍梵婆私のことをふと思ひ出した。すると又彼の心は段々狭まれて來た。逢つた時のいろ〳〵のこと、今度逢ふ時の、いろ〳〵のことを考へた。彼の頭は濁つて、少しいたむやうな氣もしたが、しかし不愉快なものではなかつた。彼は段々迦留陀夷に逢ひたくなつて來た。あの女も自分のことを思つてゐるだらう。今度逢つたら、思ひのまゝに自然が與へてくれたよろこびを味つてやらう。

彼はそんなことを考へてゐる內に自分の心がせばめられ、胸どうきが感じられて來た。今日はどうせ逢へないのだからと思つて心を淸くしやうと思つた。彼は又、釋迦のことや兄弟弟子のことを考へ、これらの人が淸く生活してゐることを考へると、自分の心も淸められて來た。そして涙ぐみたい氣持がして來た。「お釋迦さん處に行かう」彼はさう思つて森から出て、そしていつもよく通る道を歩いて行つた。すると向ふの角から二人の比丘尼がやつて來た。

彼は誰だらうと思つた。美しい女らしいと思つた。少し近づくと一人の女の方は彼を見て笑ひ顏を見せた。彼はすぐその女が偷羅難陀だと云ふことに氣がついた。その時、彼は彼女が大迦葉に唾をしたことをすぐ思ひ出した。

何か云つたらやつけてやらう。彼はさう思つた。そして苦い顏をして通りすぎやうとした。

「迦留陀夷さま、今日はどうなさつたの、いやにむづかしい顏をしてゐらつしやるのね」と偷羅難陀は笑ひながら云つた。

それを聞くと、迦留陀夷はいきなり、偷羅難陀に近づいて、横面をいやと云ふ程、なぐつた。

「何をなさるの」

「大迦葉さまに唾をしたやうに、俺にまた唾をしやうと云ふのだらう。もう一度大迦葉さまに唾をして見ろ。その分ではおかないぞ。一體貴樣は大迦葉さまの何處が氣に入らないのだ」

「あの聖人面よ」

「もう一度云つて見ろ、馬鹿」彼はもう一度なぐらうとしたが、やめてしまつた。そして泣き出しさうになつた。

「おまへは心までくさつたのか、自分のした悪いことが思ひ出すことが出來ないのか。大迦葉さまの前へゆけば俺達は恥かしがる、があたりまへだ。それなのに、自分よりも清い方を侮辱する。俺はお前がそんなにまで馬鹿だとは思はなかつた、お前は今にお釋迦様を見ても唾をするやうになるだらう。恐ろしい奴だ」

「そんなことはありませんわ」

迦留陀夷は聲あげて泣いてしまつた。それで偷難難陀も泣いてしまつた。

「これから決してそんなことはしませんから、許して頂戴　泣かないで頂戴」

七、

迦留陀夷は偷難難陀と仲なほりして、わかれて少し來た時、自分のしたことや、泣いたことが恥かしい氣がした。しかし彼はそんなことにながく拘泥する男ではなかつた。彼は釋迦の處へゆくのをやめて、自分の家の方へまた讃歌を誦しながら歸つて行つた。彼は自分を幸福ものだと思つた。

彼はいろ〳〵と人のことを思ひ出すと男も女も皆いゝ人だけで、自分だけが蟲のいゝ人間のやうに思へた。しかしその自分も彼は可愛く思へ、そして嫌ひにはなれない男だつた。自分は馬鹿の數かぎりをつくして來たが、しかしそれは自分が何かの人形になつてゐるにすぎない。滑稽な可愛いゝ無邪氣な人形にすぎないやうに思へた。

釋迦だけは人形から人間になれた男だが、他の人間は彼にはまだ人形にすぎないやうに見へた。いろ〳〵の役させら

れてすましてゐるが、根をあらつて見ると、皆何かにあやつられてゐる人形で、本當はわかつて生活してゐるものは一人もなさゝうに見へた。それが彼には面白く思へた。そして自分の役目が滑稽で、あまりいゝ役でないのに氣がついたがそれもはまり役で、丁度俺にはいゝ處だなぞと考へた。そして彼は家に歸つて何にもすることがなかつたので、水槽のなかに入つて、空とぶ雲を見てゐた。

八、

それから四五日たつた。あるむし暑い日、彼は釋迦の云ひつけで、波斯匿王の寵妃の末利夫人の處へ説教に出かけた。彼は内心末利夫人を尊敬してゐた。それでよろこんで出かけた。

さすがの彼も末利夫人程、美しい女は知らなかつた。それで末利夫人に逢ふのは彼のよろこびの一つだつた。しかも彼は末利夫人だけは自分の思ふ通りにならない女として尊敬してゐた。

それで彼の末利夫人にたいする尊敬は逢ふ度に強くなつた。その上彼は釋迦が、自分のやうな男をわざ／＼撰んで王の寵妃に説教させる、その心にも感心し、又感謝してゐた。

彼はそれでたのしみに出かけた。そして座敷に通された。そして侍女から「今、あまりお暑いので晝眠してゐらつしやいますから、少しおまち下さい」と云はれた時、

末利夫人の寢姿が、頭に浮んで來た。しかしそれは勿論、彼は考を他に向けた。そして庭の美しい木や、草花や、泉水なぞを見て、呑氣な氣持で末利夫人のくるのを待つてゐた。其處へ末利夫人がいそいで來て、彼に丁寧に會釋して坐つた。處がどうした拍子か、ねぼけ眼で着物をまとつて來たせいか、末利夫人の着物がすべり落ちて、末利夫人は裸體

になつた。末利夫人はすつかりおどろいて、顏を火のやうにして、あはてゝ着物をまとつた。

迦留陀夷はその瞬間、何もかも忘れた。たゞ見たことのない美しい、女の身體の線や色を見た。それは何にゝたとへていゝか彼にはわからなかつた。彼は何を話したか、すつかり忘れて歸つて來た。彼の頭の内にあるものは、裸體の末利夫人だけだつた。彼は歸つて釋迦に逢つて、今日はどうだつたと聞かれた時に、彼は「今日は大變なことがありました」と云つた。

「どんなことだ」釋迦は例によつておちついて聞いた。

「末利夫人の着物がどうした拍子かすべりおちて末利夫人が裸になられました。その美しさと來たら、とてもお話には出來ません。あなたにお見せしたかつた」

「馬鹿！」釋迦のその一聲は、迦留陀夷をおどろかすに十分だつた。わきにゐるものは、釋迦が本氣になつて怒られたのかと思つた。

兎が獅子吼を聞いたやうな氣になつた。迦留陀夷は夢からさめたやうな氣がした。

「早く水槽にでもとびこんで、頭でも打つて來い」

「はい」

皆は笑つたが、迦留陀夷は笑はなかつた。そして一目散に自分の家に歸つて、水桶にとび込んで頭を拳固で、いくつとなくなぐつた。

九、

それから一時間程して釋迦が迦留陀夷の處に行かれたら、迦留陀夷はすつかりおちついて、そしてマキ割りをせつせとしてゐた。

釋迦を見ると彼はうれしさうに云つた。

「さつきはおどろきました。おかげで目がさめました。私もどうしやうかと思つてゐたのです。あまりに美しいものを見ると困りますね。何のために、あんなに美しさがあるのでせう。矢張り惡魔がつくつたのでせうか」

「馬鹿！」釋迦はやさしく云つた。「神がつくつたのか、惡魔がつくつたのか、それは今にわかる時がくるだらう。そんなものを見ても、迷はない時代が來たら、その美は皆に賞讚されるだらう。しかしお前のやうな男がゐる間惡魔がつくつたことにしておくさ。さもないと正氣を失なつた馬鹿が出來るからな」

そして釋迦は快活に笑つた。

「皆が、あなた位になればいゝのでしよ」

「俺位は、なさけないね、はつはつは」

迦留陀夷もすつかりうれしくなつて笑つた。

「はつはつは」

（一三、一、一〇）



車窓殘月の記

佐藤春夫

頗る朦朧としてゐる。――もう十年の歳月を經てゐる。朦朧としてゐるのは、しかし、歳月のせゐばかりではない。その事の最中に於てさへそれは頗る朦朧としてゐた。何しろ、私は寢呆けた頭で觀察してゐた。その上またその主人公たちが、どこの何人だか知らないのはもとより、どんな顔つきをしてゐたのか、それさへも私は滿足には知らないのだ。もしかしたら夢ぢやなかつたかと思ふくらゐだ。いや、夢だつて時にはこれよりははつきりした印象を殘す。それほどだから、人が聞いたらあんまりあつけない話なので定めし氣に入るまい。そこがまた私に面白い。頭も尻尾もない人情本の一くさりが、それとてもちぎれちぎれに、ひよくり自分のそばに在つた。つくり話にしては間の抜けたことでも、本當にそれがあつたとなると興の催されるものがある。ところで、これが本當にあつたと知つてゐるのは私ばかりだ。そこでこの話は結局、私ひとりが面白いのかも知れない。――と、さう決つてしまへば、もう書くがものはない。それぢや心細い。第一困る。だからもう一度出

なほして、ともかくも、朦朧なら朦朧なりに一とほりだけ話をして、それから、うつかり最初に書いてしまつたこの一節を、諸君には最後に思ひ出してもらふわけにはいかないか知ら。

夜汽車である。

八時三十分に新橋驛を出た。むかしの新橋驛を。

暮もやうやう押迫つて二十六日であつた。それでゐて、汽車は思つたより隙いてゐた。

私はといふと、ふいと思ひ立つて長崎あたりまで旅行がして見たくなつたのだつた。切支丹の殉教者のことか何かを調べるつもりで。私は二十一才の少年であつた——思へば元氣なもので、一日二晩三等列車で搖すぶられつづけて、けろりとしてゐたのはわれながら今は羨しい者である。——が、さう直ぐに長崎まで行つてしまつたのぢや、話が行き過ぎてしまふ。今話さうとする出來事は、まだまだほんの道中でのふり出しに起つたのだから。といつて、それが何處からなのだか、そいつがはつきりとは判らない。——ただ、私は今もいふとほり夜汽車の三等室に、相客がないのを仕合せと二人分の座席の上へ、例の犬のやうな形で犬のやうな眠をうと〳〵と眠つてゐるのであつた。——と、搖ぶり起されたが、多分、人が搖ぶり起したのではない。車がどこかの驛に停つたはづみか、或は驛から出るはづみかに、私の體がどしんとゆれて、それに人のどさくさのけはいで目が明いたのだらう。大きな驛だつたらしい。人が澤山車内にまだ落着かずにゐた。それから寢呆けてあたりを見廻してゐるうちに、車のなかはいつの間にか殆んど滿員になつてゐた。私は大へん眠かつた。幸に私のわきに座らうといふ人もない。それで、一つくるりと寢返りをしてまた眠り出した。……うまく眠らうといふ間際に、ふと私は自分の耳もとで、暫く聲とすすり上げて泣く忍び音とを聞いたのだ。それが男の

聲と女の聲とだ。私はもう一ぺん目を明けた。それから聲がしたと思ふ方を無意識にふりかへつた。聲はやんだ。それは私の直ぐとうしろの、私のとは背中合せの座席から洩れてゐたのであつた。私はもの好きにその方を見た。島田髷の襟脚がくつきり目についた。氣がつかなかつたが、それが私の眞うしろにあつた。だから襟脚だけで、顔は見られなかつた。その若い女の隣には、ハンチングを冠つた横顔があつた。私がふり返つたとたんに、横顔は私の視線からそむけられた、私自身と同じぐらゐの年輩の若者だつた、と私はたつたそれだけのことをやつと見ることが出來ただけだつた。

このハンチングも島田髷もいつどこからこの車に乘り込んだものか。私は知らない。私が眠り込んでしまはない以前には、そこには私には何の注意をも促さない乘客があつただけのやうに思ふ。島田髷ならもつと早く氣がついたらう――私が眠り込んでさへ居なかつたら。ともかくも、この時始めて氣がつくと、うしろの座席はいつの間にかこのふたりに變つてゐたのである。

すすり泣きの聲で目が明いて、反射的の動作でこのふたりを見出した時に、彼等はその囁きと泣き聲とを遠慮したやうに、私もまた、もとの姿勢にかへつて彼等に注意することを遠慮した。遠慮したばかりではない。實はそのことより好奇心の方が多かつたのだ――嘘をついてはなるまい。さて私は再び寢入つた人のやうなそぶりをした。すると、案のとほりしばらくしてまた囁きが始まつた。やつぱり男の聲である。汽車の轟きのさなかに、洩れるは、とぎれとぎれであつた。――全身耳になるといふ句法は外國語からの誤譯ださうである。誤譯でも何でもいい、全身が耳になつた。作者として、ここで私は、それほど苦心して聞き得た言葉を寫し出すのが、どうやら本當らしい。ところで私は、その時自分がやつと聞きとつた言葉の一きれ二きれ、今は美事に忘れてしまつてゐる。第一に覺えてゐられるほど完全には聽けなかつたのでもある。でも、その言葉のニュアンス――氣持だけは殘つてゐるから、それを辿つてつくり出して見る

ことも出來ないことではなささうだが、無理にこしらへてまづかつたらつまらない。さう思ふと、今更どうも億劫になる。そこで無性をさせて貰ふのだが、要するに、その若い男が娘に囁いてゐる言葉のきれぎれを、その場でさまざまにつなぎ合せて見てその時考へたところに據ると、最初私は見て取つた――これや女はどこかの商人家の娘だ。さうして男の方はその店の若い番頭だ。それに違ひない。さういふ言葉づかひだ。それに東京の言葉ぢやない。どうも手に手をとつた駈落者らしいと思つたのに、必ずしもさうではないらしくもある。女が逃げたのを男が追つかけて行つて捉へて來たものらしい。男は女に、家へかへることをすすめてゐるからだ。しきりに勸めてゐる。勸めてはさまざまになぐさめてゐる。それにしては、男と女との間柄がいつの間にやらどうやらまたはつきりしなくなつて來た。男がこの女の思ひあきらめた戀人らしいところもその口ぶりのなかにある。言葉の内容にためいきの影がある。かと思ふと、ただの追手らしいきつぱりした口ぶりでもある。何にしても、女が何とか口を開いてくれなけや見當がつきかねる。それだのに女はさつきから、まだ一口も言はない。ただ男に同じやうなことを何度でも何度でも言はせてゐるばかりだ。女の沈默の間を汽車は多分十哩以上も走つたであらう。そばで聽いてゐてももどかしいくらゐだ。かういふくどさは戀人たちでなければ持ち得ない。それにしても女はどんな氣持でゐるのだか私には全くわからなくなつた。全然わからないでしまつたかも知れない――もしこの時、女がいつの間にかしくしくと泣き出してゐなかつたなら。女は泣き出してゐた。それはさつき私を愕かせたやうなヒステリカルなものではない。靜かに、かすかに、すすり上げてゐるのであつた。その泣き聲によつて掻き消されてしまつたかのやうに、男もたうとう默つてしまつた

女のすすり泣きがまだつづいてゐる。その泣き聲が、へんに、私には誰だか知らない美しい女の面影を呼び起させる。私は彼女の樣子を見たくなつた。と言つて、私が身動きをしてしまつたのでは、せつかくの彼等の空氣が亂されて

しまふだらう…………

「やつぱり、さうより外に、外には仕方がないのね。……かうして、この汽車からあんたが下りて行つてしまへば、わたしはひとりでにうちへ歸つてしまふことになるのだわ」

女の聲が、思ひがけない時にさう言つた。聲は男のものよりもはつきりとしてゐた。私は、ふと冷淡なことを考へた。といふのは、女が男の言つただけの口數を利くとしたら、このふたりの事情は私にはもつとはつきりするだらう。男の鈍い低い聲は、とぎれとぎれにしか聞けないから。聞きながら私は想像を働かせなけやならないから。——で、その男の聲で、男はまた言ふらしいのだ。

「歸つてしまつて、あなたをひとりで歸してしまつてそれからは、もうなるやうになるより外には仕方がない。……ふたりで一緒に出て來たわけではないのだから、いづれは事なく濟んで、すべては運んで行くだらう。さうさせたいわけではないのに、……さうなるより外には仕方がない。……どうして家を出たかなどと、うちでは多分そんな詮義はきつと、しても見ないでしまふぐらゐなものだらう……」

と先づ、男の言つたことは、どうやらそんなことらしかつた。やつぱり、全く、男はこの娘の戀人だつた、と私はもうきつぱり判斷した。それに、私は私の空想を莖草のやうに延ばして行くが、この若者はこの娘としめし合せて、家を拔け出て來たのだ。しかし、若者は、氣の弱い若者は今更に後悔をして女を主家に返さうとしてゐる。いや彼等はもうどこかで別れて來たのだ。——どういふふうに泣いてだかは知らないけれども。さうして今はもうその果しのない名殘の餘韻（トレモロ）をむせび泣くのであらう。女を返して彼の男は、自分自身はどこかへ、多分は自分の在所へでも歸つてしまふにちがひない。さういふやうなことを言ひつづけてゐるではないか。男が何か言ひ出しさへすれば、女は、それが返事で

でもあるかのやうにきつと泣き出す。今度は泣きながらものを言ふ。子供のやうにしやくり上げて泣くので、せつかくの言葉がどうも私にはわからない。だが、男にはそれが判つてゐるものとみえる。

　それが突然、ものを言はなくなつてしまつて永い沈默に代つた。私はそこで、そつと、極くそつとふりかへつて見た。ふたりは席も亂さずにきちんと夜の小鳥のやうに並んでゐた。思ひがけなく愼しいのが偸み見た目にもなかなかにいとしかつた。誰か、近い座席に無作法にも目をさました人があつたのかも知れない。

「ごらんなさい」と女が固い沈默を破つた。渴いてひきつつてゐるやうな聲音であつた。

「――そら、月が出て。――なんだか、なにもかもほんとうに夢のやうにねえ。さうでせう。」

　私も目を開けて見た。海の上に、さして高くないところに二十日すぎの月があつた。伊豆半島であつたらう。島影がきつかりと浮んで、近い磯には浪が荒れてゐた。風が出たと見えて、程近くにひるがへる浪の穗があざやかに消えては立つ。立つては消える。「何だか何もかも夢のやうに。」――これがもし私のつくり話の小說なら、私はこの際、娘にそんな仕入れものらしい言葉を言はせはしない。だが、その娘は、事實の女はほんとうにさう言つたのだ。これだけは、この一言だけはその月の風景と一緒に、言葉のままをはつきりと私は覺えてゐる。だから、ここでそんなセンチメンタルな安つぽい言葉を嫌ふ人々は、その苦狀を私には言はないで、その娘の方へ持ち込んでもらひたい。……それはともかくも、今まで眠いのをぢつと辛棒してゐた私は、たうとういつしか再び眠入つてしまつた。

　……どや〳〵と人の慌しい立居のけはひに私は目が覺めた。夜は白んで、窓はもう殆んど明るかつた。私はすぐ自分のうしろの座席を氣をつけて見ることを忘れなかつた。私はふりかへると、島田髷の娘が立つてゐるうしろ姿を見た。彼の女は手を差し延べて荷物棚の上から、着替への一枚も這入つてゐるらしい風呂敷包みをとり下してゐた。彼の女はもうひとりであつた。車を降りやうとする群集のなかに雜つて、私に背を見せてゐた。私は念のためにあのハンチングをもう一ぺん車中の群集のなかに搜して見た。決して見當らなかつた。

「名古屋！　名古屋！」

驛夫が私の窓の外をさう呼んで通り過ぎた。
冬の夜明けの凍つてゐる窓がらすの上に自分の額を押しつけて私は、自分の息吹きで曇つたがらすを手套の手で淨めながら、その娘の姿をいつまでも見送つてゐる用意をしてゐたのに、それをつひプラツトフオムのなかで見失つてしまつた。

私はこの女主人公の横顏を、彼の女が車からプラツトフオムに足をおろす時に、ほんの一目見ただけだつた。別に美しくもなかつたし醜くもなかつた。

——只、それだけの事である。

それを、私は、東海道をたびたび通りすぎる折ふしに、岩淵、興津などといふあたりの海岸にさしかかると、私は實に屢々あのふたりを思ひ出すのだ。——あの車窓の殘月はたしかこのあたりではなかつたらうか。——彼等は一たい沼津あたりから乘つたのぢやなかつたらうか‥‥などと。つひ、人の世の別れといふものから、いつの間にか自分のことなどを考へてゐる——が、それはここでは用のないことである。

この小篇は我々の文字で刊行される最も普及的な婦人雜誌に出ることになつてゐる。だから、この雜誌を手にして何ごころなくこの頁を繰る人のなかに、今はもう三十にも近くなつて子供のふたり三人もあらうかといふ人が、ふとこれらの文字に目をとめると顏色が少し蒼ざめて、料らずもむかしのことを思ひ起しながら、むかしは——あの時は悲しかつた。しかし今はもう忘れた。さうしてすべては幸福である——としばらくは思ひに沈む人がもしあつたら、それこそ、もつと小說的であらう。

この一篇は本文にあるとほり或る婦人雜誌の爲めに執筆したものだけれども、改造の〆切に合はないのでこれを融通します。斷るまでもないことだけれども、妙に思ふ讀者があると惡いから一言ます。また婦人雜誌へ書くと思つて調子を下げてゐるなどとも思はれたくないものです。いづれ即興の半切畫のやうなものではありますが。



子供芝居

久保田万太郎

……昨日だ。――阿部川町まで無盡の懸金をとゞけに行つたかへり、いつも新堀を眞つ直に門跡まへを出るやつを、何の氣なし、ふいと途中から右に曲り、森下に入つて、駒形の芝居のわきに出た。――と、めづらしく角に幟が立つてゐた。――多分、また、浪花ぶしか、さうでなければ田舎まはりの奇術でもかゝつたのだらう。――何が來たつて小屋が腐つてゐるんだからだめだ。――さう思ひながら、前にまはると、大阪上り少年歌舞伎大一座とした看板が麗々とあがつてゐる。――不意を喰つたかたちで、おや？と思つた。」

それが、その………

『緣だ。――やつぱり緣だ。』

鈴佐の旦那の話を聞いてゐる間に感じたことを、粂吉は、もう一度、外に出てからはつきり思ひ返した。――感心したやうに自分にうなづいた。

『目と出たぜ、おます。』

うちに入いて、長火鉢のまへにすわるなり、皷から棒に、兼吉は、所在なさにかきもちを燒いてゐた女房のおますにいつた。

『…………？』

おますは、火にかさした、とろんとした眼をあげた。

『來てたもんぢやアないよ、えゝ。』兼吉は腰から煙草入を拔いて『俺の體が入用になつたんだ。』

『何で？』……

おますは落ちついていつた。

『鈴佐の旦那の今夜の話でよ。』

『旦那に何かたのまれたの？』

『それがさ、お前。――うそのやうな話だ。』

『…………』

『芝居だ。――芝居の世話をするんだ。』

『芝居の世話？』

おますの腑に落ちない顔をするのを

『それ、鈴佐のうちに何事かあると來る藤さんといふ人を知つてゐるだらう。』

抑へるやうに兼吉はいつた。

『あゝ、あの、一丁目の藥種屋さん……』

『あの人が金方で、今度、芝居をあけるんだ。』

『どこの？』

おますはうけ取れない顔をした。

『駒形のだ。』

『何をいつてゐるの。』今度はおますのはうで押へて『あすこへは大阪の子供芝居とかゞ來てゐるといふんぢやアありませんか。』

『可笑しいのよ、それが………』自分から粂吉はわらつて『あの子供芝居が、つまり、さうなんだ。』

『さうとは？』

『藤さんが金を出してゐるんだ。』

『あら。』

『もつと可笑しいのは、お前「粂吉は嵩にかゝつて『あの子供芝居の座頭といふのが藤さんのおとうとなんだ。』

『おとうと………？』

『實のおとうとなんだ。』

『まア………』

『俺も聞いておどろいたよ。』

鈴佐の旦那の話によると、五六年まへ大阪の藥種屋へ奉公に出したところ、勝手にそこをとび出し、どこへ行つたか、そのまゝ行方知れずになつた藤さんの弟が、この正月、だしぬけに名古屋から手紙を寄越していまゝでのことを詫

びて來た。――それでみると、前からしきりに役者になりたいといつてゐたが、とう〳〵その後、役者になり、どこをどうしたものか、くはしいことは書いてないから分らないが、とにかく、いまでは、旅廻りの子供芝居のいゝところにゐるのだつた。――なぜいゝところにゐるのが分つたかといへば、自分の出しものだといふ狂言が、こくめいに、幾つもならべてあつたから………

末に、近いうち東京へ行くかも知れないと書いてあつた。

と、四五日して、いよ〳〵一座で東京へ行くことになつたから何分たのむといつて來た。――藤さんは、あつかましいにもほどがある。來たつて蔭のぞきもさせるものかとそのときはいつた。

が、いざ來てみると、藤さんは、それどころでなかつた。早速、自分で、鈴佐へつれて來た。――それを手始めに、はう〳〵、親類中をつれて廻つた。

揚句が金を出すことになつた。――たつた一人の同胞だ、金ですむことなら幾らでも出す、親のない後の兄貴としてのそれが義務だと藤さんはいつた。――が、それは言立で、ありやうは、戰爭の最中、染料で自分にも不思議なくらゐ取りこめたものが、まだ、そのまゝでゐるのだつた。――堅く出來上つてゐて、遊ぶすべも知らなければ、貰つたり貢つたりの味も知らない藤さんは、所詮は、さうしたことでゞもそれを役に立てたいのだつた。――鈴佐の旦那はすくなくもさういつた………

莫迦をみるのは知れてゐる。――が、折角のり氣になつてゐるものを無下に抑へることもない。――それよりも、そばで、舵をとり、少しでも深みに陥らないふせぎをするに如くはない。――それには、誰か、氣ごゝろの知れた、さうした内裏のことにあかるい後見を、自分の手で立てたい。――さう思つて藤さんに話すと、さういふ相談相手があれば

自分も心强い。是非さがしてくれ。――といふことだつた。が、さて、さがすとなるとなかつた。註文が難しかつた。――あぐねて、一日おくれに遅れてゐるうち、『仲町のお師匠さんの御亭主はどうだらう。』といふものがあつた。うつかりしてゐた。――さうだ、粂さんといふ人がゐた。――あの人たら氣ごゝろもよく分つてゐる。――自分でそのなかにゐたのだから、芝居のことなら、知りすぎるほど知つてゐるわけだ。――内輪で間に合ふものを、何もうろうろ方々さがすことはない。――といふことになつた。

『……で、つまり、さういふことで、今夜旦那からお使者が立つたんだ。』

粂吉はことのあらましを、はじめから、おますに話した。

『だけど、お前さん……』

おますは一くぎりついたところで、火鉢にかけた餅あみを炭斗のうへに下ろしていつた。

『…………？』

『あの薬種屋さん、そんなにありあまるものを持つてゐるのかね？』

『ちつとやそつと儲つたんぢやア何のこともないさうだ。』

『でも、そんな、馴れないことにしらうとが手を出さなくつてもいゝぢやアないか。』

『だからよ。』粂吉はかぶせるやうに『俺は、これは、先方にだれか糸を引いてゐる奴があると睨んでゐるんだ。』

『…………』

『粂さんはすつかりのせられてゐる。――いゝことをいはれて、おそらく、先方のいふなりになつてゐるに違ひない。

――どうせ、相手は、どさ廻りの、素性も知れないものを持つてあるいてゐる奴らだ。――何をするか分つたものぢやアねえ。』

『道具につかはれてゐる、その、おとうとさんこそ災難だね。』

『戯談だらう。――當人はうそにも東京で芝居が出來るんだ。――嬉しいんで一ぱいだ。』

『さうかしら？』

『俺にしたつて、それは、覺えがある。』

粂吉はわらふつもりもなく笑つた。――ふいと、その、三十年まへ、念がとゞいて、今戸の紀の國屋のところに弟子入の出來たときのことが、自分に、影をさした……、

『で、どうするの？』

おますは鐵瓶とかけかへた。

『とにかく、明日、藤さんにあつてくれと旦那はいふんだ。』

『どこで？』

『直接に芝居へ行くことにした。――何も、そんな、段取ることもないし、みず知らずの相手でもないんだから……
……』

『……………………』

『この字は、偏から書いたか、つくりから書いたか、一目みれば分る。――一わたり光景をみたうへで、どうせ巨密なことは、旦那と三人、三つ金輪でいろ〳〵相談するんだ。』

『と、すぐの役には立たないんだね。』

『いまやりかけてゐる芝居をどうすることもない。――しごとは、どのみち、このつぎからだ。』

『だけど、お客は來るの？』

『いまのところぢやア來てゐるさうだ。――子供芝居はめづらしいから、此奴、うまくあたつたらいゝかも知れないんだ。』

『さう行けばいゝけれど……』

『たゞ、心配なのは、あの小屋の腐つてゐることだ。』

『………………』

『日清戰爭の時分、あの、川上が、「又意外」だの、「又々意外」だのといふ芝居で當てた時分には、賣りこんだ、性(しやう)目(め)のいゝ小屋だつたがね。』

『東京座だの眞砂座だのゝやうになるといふうはさもあるね。』

『仕事師のあがりはかん／＼坊主、藝者(げいしや)のあがりは門附(かどつけ)、芝居のあがりは氷倉庫(こほりぐら)と相場はきまつたか。』象吉は嘲けるやうに、『緞帳役者のあがりは何になればいゝんだ。』

が、さういつたとき、象吉は、いひ知れぬ安心の身うちにわくのを覺えた。――川だちは川に果てる。――さうだ、俺には芝居が身についてゐるんだ。――どこまでも附いて廻つてゐるのだ……

寒いといつても、矢つ張、春だ。――宵のうち强かつた風の、いつとなし、止んだあとは、ほぐれた、もの懐しい夜のこゝろのほのかにさしぐむものがあつた。

『あゝ、さうだつけ。』粂吉は思ひ出したやうに『お前に、また、月が替つたらとき〴〵逢ひに來てくれとお内儀さんがさういつてゐたぜ。』

おますにいつた。

あくる日、芝居の、以前、座附の茶屋だつたのを、そのまゝ、名目だけかへた案内所の二階で、粂吉は藤さんと會つた。――そのあとで、階下の帳場に、まだ、樂屋入をしないでゐた藤さんのおとうとに引合はされた。――そのときだつた……

『しばらくでした、小父さん。』

粂吉に、藤さんのおとうとはさういつた。

『………………?』

不意を喰つて、粂吉は、藤さんの、その、おとうとの顔をぢつとみた。

『あゝ、お前さんは……』

思はず膝を叩いた。――夢ではないかと粂吉はうたがつた。

恥ぢをいはなければ分らない。――嘗て、七八年まへ、わづかであつたが、公園の、活動小屋に粂吉は身を落したことがあつた。

不景氣のどんづまりで、芝居も寄席も火の消えたやうになつたあげくが、はう〴〵に立ち行き兼ねる一座が出來た。

それまで粂吉の喰ついてゐた一座もその一つだつた。——敢なく、粂吉は、永年の扶持から離れた。
生憎とそのとき、女房のおますは丹毒をこじらせて寢たつきりだつた。——まるで稽古が出來なかつた。
何とかしなければならなかつた。何とかしなければ生きて行けなかつた。——といつて、外に、何一つおぼへた手わざがあるわけでなかつた。——思案に盡き果てたとき、以前、同じ一座にゐて、これは自分から見きりをつけ、早くに公園に入つて、そのころ仲しかけた連鎖の好い顏になつてゐた仲間がゆくりなく訪ねて來て、遊んでゐるなら助けてくれないか、舞臺には出なくつていゝ、裏うちのことだけみてくれゝばいゝ、と、つまりはいふのだつた。
粂吉はまよつた。——一言、うん、といつてしまへばいゝのだが、いまゝで、さうした料簡の毛頭なかつただけ、酷く、自分を、安價くされたやうに思つた。それには師匠のおもわくも——いまではたゞ、春、ほんのお供へだけを持つて行く關係にしかなつてゐないとはいへ——思はれた。
が、背に腹はかへられなかつた。——一日一晩思案した末、舞臺に出るのでなく、裏の仕事をするだけなら、この場合、だれも無理はないとしてくれるだらう。——後々、どこから苦情が出たにしても深入さへしなければ、どんなにでも言譯は立つ道理だ。——料簡をそこにきめて、粂吉は、搔出されるまゝにしたがつた。
で、當座の凌ぎをつけた。
柝を打つたり、衣裳道具のだめをみたりする外に、粂吉は、手の足りないときにはお囃子の手傳ひまでした。——旅で御難にでもあつた氣で、持ち込まれることを、何でもいやとはいはずに引きうけた。——あきらめて、さうするはうがいつそいゝと思つたものゝ、粂吉は、どこから拾つて來たとも分らない、名前さへ聞いたことのない役者たちの、とてつもないことをするのを道具裏からみたりすると、いまゝで自分は何をして來たんだと、わが身不憫にときぐ〵はな

つた。

内部のものは、誰も、粂吉のしだいをほんたうに知らなかつた。粂さんも、あれで、以前は舞楽に出てゐたのださうだぐらゐにしか知らなかつた。——そのなかで三的といふ近所の子供——どういふ緣か、囃子方のところに始終遊びに來るその子供が、年に似合はず、いろ〳〵の、こみいつた内裏のことをよく知つてゐた。——といふことは、外のものゝ知らない粂吉の變名から、どこで、いまゝで、どういふ役所ばかり演つてゐたといふことまでくはしく心得てゐた。

『そんなこと、どうして知つてゐるんだ？』

粂吉は寔に驚いた。

『そりやア知つてゐますよ、小父さん。』三的はわらつて『始終みてゐたんですもの』

『子供のくせに生意氣だぞ。』

『生意氣つて奴があるものか。——好きなものは仕方がない。』

『いまツから、芝居をみたり、こんなところに遊びに來たりしてゐると、ろくなものにならねえぞ。』

『いゝよ、ならなくつても。』

『お前はよくつても、それぢやア親父やおふくろの立つ瀬がなくなる……』

『親がないからいゝんだよ。』

『兩親ないのか？』

『だから何になつたつていゝんだ。——役者になつていゝんだ。』

『馬鹿いひなさんな。——役者になんかなつてどうするんだ。』

『だつて、小父さんだつてさうぢやアないか。』

その俺がさういふんぢやアないか。――俺のやうになつたらどうする……』

『…………………………』

『錦着て疊の上の乞食かな。――むかしの人はうまいことをいつた。――役者つて稼業は、そんな、外からみるやうないゝものぢやアないんだ。』

『だつて、出世をすればいゝでせう。』

『さア、その出世だ。――其奴がわけなく出來りやア心配はないんだ。』

『…………』

『俺だつて、お前、お前の年ごろにはさう思つてゐたんだ。――出世するつもりでゐたんだ……』

粂吉は、で、役者の世渡りのいろ〳〵難しいこと。――たとへば技倆があつても家柄がなければうだつの上らないことだの、するやうにしなければ、いつも、肩身を狹くしてゐなければならないことだの、強いものがちの、どんなときでも弱いものはけじめを喰はなければならないやうに出來てゐることだのをその三的にいつて聞かせた。――それが緣になつて、機會のある毎に、それからは、師匠について歌舞伎座に出た時分のこと、金がほしいばかりに旅へ出て死ぬ苦しみをしたこと、後から〳〵と出て來る、若い、景氣のいゝ役者のためにだん〳〵被壓れるやうになつたこと。――さうしたことを思ひ出すまゝ話した。――つまりは、で、ゆめにも役者になんぞならうと思つちやアいけない、といふところに、いつも、話を落ちつけた。――相手は默つて聞いてゐた。

そのうち、三的は、いつとなし樂屋に姿をみせなくなつた。――間もなく、粂吉も、女房の體のもと通りになつたの

を機に、足を洗つて、今度こそすつぱり堅氣になつた。といふことは、その後、何にもすることなしに遊んで暮した。――おますの體さへまんぞくなら、あくせくしなくつても、粂吉一人ぐらゐどうにでもなつた。――それほど、おますは、「仲町のお師匠さん」として、古い、ためになるいゝ弟子を大ぜい持つてゐた…………で、この間、五六年相立ち申し候。――藤さんのおとうとゝいふのは、實に、當年のその三的だつた。

『……小父さんのいふことを聞かないで――とう〳〵こんなことになつてしまひました。』

縮緬の羽織を着た藤さんのおとうとは、わらつて、いつぱし大人びたいひかたでいつた。

『でも、まア、結構だ。』

粂吉はさういふ外はなかつた。――不思議さうにその場のさまをながめた藤さんに、改めて、ことのしだいを具に話した。

『それは奇遇だ。』いまさらのやうに、藤さんは、兩方の顏をみて『芝居なら「これはしたり」といふところだ。』

『とんだ五段目です。』

藤さんのおとうとはさういつてわらつた。――とも〳〵さそはれて、粂吉もわらつた。

そのとき、小屋のはうで、「着到」の太鼓を打ち出した。藤さんのおとうとは、腕に卷いた時計を一寸みて、『では、また……』といそがしさうに立上つた。

『一番目は……?』

粂吉は玄人らしいとりなしで訊いた。

『「鞘」です。』

『で……？』

『瀧口と笹助と兩方行つてゐます。』

『其奴は肯だ。―み送て貰ひますよ。』

『えゝ、どうぞ。——だけど、小父さん、わらつちやアいけませんよ。』

愛想よくいひ捨てゝ、藤さんのおとうとは、そのまゝ階下へ下りて行つた。——み送つて、粂吉は、夢ではないかともう一度うたがつた。

階下から藤さんと呼びに來たところで、一しよに、粂吉も二階を下りた。——階子段の下で連中の世話でもしてゐるらしい男に藤さんが掴り、何かくど／＼話しこまれる間、粂吉は、しばらくわきに立つて待つてゐたが、手持無沙汰になつたまゝ、離れるともなくそこを離れ、小屋のはうへ行く通ひ路の、わたりの上にぼんやり出た。

『へえ、御免……』

案内所の若いものが、うしろから、二三人づれの女のお客のさきに立つて、搔き分けるやうに側をとほつて行つた。——つゞいて、後から、どこかのお酌らしい四五人づれが、百囀りをしながらいそいでとほつた。——さそはれて、粂吉も、ともにその後から小屋のなかに入つた。

『今日はどんな入だらう？』

すつかり、もう、內輪の心もちで、粂吉は、立つともなく鶉のうしろに立つた。——閉め切つて、黃昏のやうに暗いなかにともつた夢のやうな燈火のいろ。——布交の、中村稲丸さんへ、淺草藝妓公園中よりとした可笑しいほどくすんだ幕がまじ／＼と引かれて、お客のあたまは、まだ、三分どほりも揃はなかつた。——入のない芝居の幕のあくまへに

かぎる、冷めたい、しら〴〵とした空氣が粂吉に感じられた。

『はて……?』

その光景の、聞いた話と出合はないものゝあるのを思ひながら、念のため、兩方の棧敷のうへをみ廻した。――二階には、でも、連中があるらしく、藝妓だのお酌だのが一とかたまり固つてゐた。

『今日は惡い……』

粂吉は眉をひそめた。――大向で、幕をあける催促の手を、一人二人、さびしく叩くものがあつた。

お客のはうに向けた眼を、粂吉は、何ごゝろなく階下の賣場のはうにうつした。――と、藤さんをいま階子段の下で摑へた男が、いつの間にかそこに來て、賣場のものと、香盤をのぞいて、しきりに何か打合せとしてゐる。――その男も、賣場の、眼鏡をかけたそのとしよりの男も、ともに、粂吉には、ものごしのどこかに折合ひ兼ねるふしがあつた。

『臭いぞ、此奴……』

わけもなくさう思つた。

遠く、幕のおくで、間もなく柝の音が聞え出した。――芝居をみるつもりで廊下に出ると、そこに、粂吉をさがして藤さんが立つてゐた。

『こゝでしたか?』藤さんはそばに寄つて來て『どこかと思つてはう〴〵さがしました。』

『それは、どうも……』

粂吉はいそいで頭を下げた。

『御迷惑ですが、一寸そこまで附合つて下さいませんか?』

『へえ、有難うございます。――ですが、舞臺の工合もみて置きませんと……』
『芝居は明日(あした)だつてあります。――そんな、いそいでみることはありません。』
『でも……』
『それに、一番目は、あんまりぞつとしません。――みていたゞきたいのは中幕からあとです。』
『…………』
『お手間はとらせません。――まア、一寸……』
さういつて、茶屋のはうへ、藤さんは自分からさきに立つた。――あとについて、粂吉も、いはれるまゝわたりのうへに下りた。
藤さんは獺の襟のついた外套を、粂吉は唐桟の道行を、それ〴〵女中からうけとつて、二人は、すぐ、外に出る仕度をした。
『もし由さんがあとでわたしを探したら、いつものところに行つてゐるとさういつて下さい。』
藤さんは、土間で、手袋を嵌めながら、うしろを向いてさういつた。
『かしこまりました。』
若いものゝなかの一人はこたへた。
『ぢやア、一寸(ちよいと)行つて來ます……』
『へえ、行つてらつしやいまし。』
女中と、若いものと、四五人口をそろへていつた。

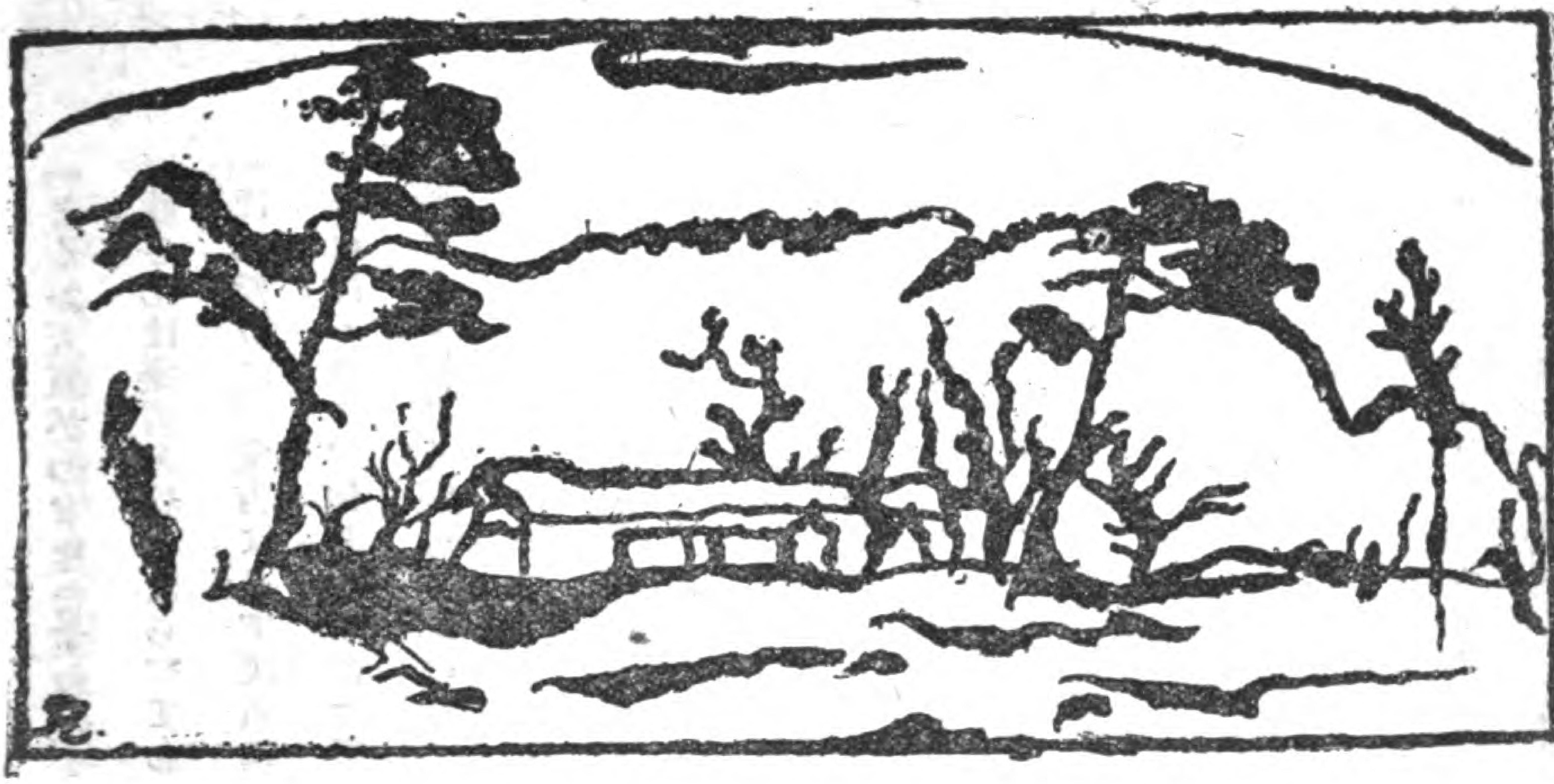
『よくお天氣がつゞきますね。』

藤さんは粂吉と肩をならべてあるいて。

『ほんたうに。』粂吉はうす淺黄にぼつとりとうるんだ空をみ上げて『昨日あたりから寒さも大分ゆるみました。』

『それは、まア、何といつたつてもう三月ですものね。』

藤さんも同じく空をみ上げた。――そのまゝ、二人は、河岸のはうに電車通りを越した。（前編をはり）



遺産

葛西善藏

弟と、つひ此間二回の誕生を了へたばかしの甥とが、午後の薄日の射す縁側に出て親しげに遊んでゐる。

「クマ！」

「クマ！」

「アヒ！」

「アヒ！」

「アヒ、ゲヤア〱」

「アヒ、ゲヤア〱」

「熊が、頸を振つて何か喰べてるよ……」

「クマ！　クマ！」

悴が威勢よく、斯う幾度でも親父の云ふことを繰返してゐる。

自分の座つてゐる座敷の爐邊からも、障子の腰ガラス越しに、七八間幅の瀬川を隔

てた川向うの共同浴場の隣りの安宿の裏庇しの下に、鼻環の鎖につながれた煤色した毛のかなり大きな熊が、前肢で何か抑えて喰べてゐるのが、見られる。その下の石で流れを堰いたあたりに、六七羽の白い家鴨がスー／＼泳いでゐる。二棟並んだ浴場の家根上に湯氣が濛々と立つてゐる。十二月も中旬に入りかけてゐるが、冬が遲れて、東北の山奥の溫泉村にも、まだ雪が一二寸積つたり消えたりしてゐる。

熊は昨日あたりから見えてゐるのだ。相手の猿は見えないが、猿が熊を乘り廻して何か藝當をやるのらしい。

弟夫婦と甥の三人は、細君の病氣のため、今年の三月郷里に引込んだのだ。弟は日傭取りのやうなことをして生活を支えて來たらしい。細君はすつかり恢復してゐた。

自分は夏ひどい腸カタルを患つた。その揚句鎌倉で地震に會つて、九月初旬に東京に出て來たが、引續き脚氣喘息とまる三月本郷の下宿で寢通してしまつた。殊に脚氣では神經を惱ました。

父の唯一の遺物の杉林と林檎畠を賣るようにと弟へ手紙を出したのは、十月の下旬だつた。滯つてゐた下宿料を拂ひ、冬の間だけ郷里の溫泉に入つて養生したい——一週忌そこ／＼で父へは申譯ないが、どうにも仕樣のないやうな容態だつた。身體も神經も散々に傷んでゐた。

十五年程前から父の丹精で二百三百と植えつけて來た杉が三千位ゐ、何反歩かの畠に林檎が五十、葡萄百、桐も近年植えつけたものながら百位ゐはある筈だつた。がいよ／＼買主がきまつて、十一月の末に弟から金が送られたが、下宿料を拂つた後自分の手許に殘つたのは、精々郷里への往復の汽車賃位ゐに過ぎなかつた。

「兎に角杉一本が十錢かそこらにしかならなかつたのかなあ……？」自分も聊か呆然とした氣持だつた。

やうやく痺れだけは除れたが、まだ歩行にも困難な脚して、往復一千哩から三等室に鮨詰めになつて一日かそこら溫泉に浸つて來る——如何に郷里の溫泉の効能を信じてゐる自分とは云へ、躊躇はされたが、しかし一度でも入つて來ないと、氣が濟まないやうな氣持だつた。

「何にしても高い湯治だつたなあ」と、自分もつい弟にも云はずにゐられなかつた。

「それでは一週間だけは入つて行から。一つは氣持のものだらうからな、一週間で一ケ月分も効くかも知れないね」と流し場で、汽車に揺られて浮腫の來た脚を捬して見せながら、弟に云つたりした。

今日でその、一週間だつた。

「明日はまた、あのスチームで一晩夜近くも蒸されるには、閉口だな……」

自分は斯んなことを思ひながら、何氣なく彼等のクマ！　アヒ！　に聽き入つてゐた。

「クマ！」

「クマ！」

「アヒ、ゲヤア〳〵」

「アヒ、ゲヤア〳〵」

「クマ！」

「クマ！」

甥の無心な、調子づいた叫び聲が、ふと自分の胸に——怖れてゐた痛いところに、觸れて來た。自分は暗い氣持になつた。杉は自分の伜に、林檎畠は弟の伜に——それが父の遺志だつたのだ。自分も全然そのことを忘れてゐたのではないが、自分の性質として、つひ、苦し紛れにやつちまつたのだ。そして弟は、いつの場合でも、自分の企てに、腹ではどう思つても、口へ出して不贊成を唱へるやうなことはしないのだ。歸郷以來の弟夫婦の暗い顏色が、はつきりと感じ出された。

「クマ！」

「クマ！」

「アヒ！」

「アヒ！」

彼等は、いつまでも繰返してゐる。……



獨りの陽の下に

鷹野つぎ

湯上りの良い氣持ちで、子供たちはぐつすり眠りについてしまつた。夕餉のあと片づけなども濟んで、友子は始めて吻とした氣分になつた。

何時もの事であるが、彼女にとつて、此のひと時ほど樂しく嬉しいことはない。たとへ一日の役目を果して、駄馬の心易さにも似てゐる。

『ドウ、ドウ、さあ休むんだよ』

斯う云つて氣のいゝ御者の手が、見えぬところから自分を愛撫して居てくれるやうな氣もする。

友子は何んとなく、一つゆつくりと溜息を吐いた。もう夫の歸宅を待ち、彼れに食事を侑めるばかりであつた。彼女は長火鉢に凭れて、讀書を始めた。緋色の小型なクロースの飜譯ものである。それには世紀末的な放縱な、年若い男女の群れが、一色濃く描き出されてあつた。その中でも友子の注意を惹き起させたのは、一人の無垢な可憐な女性が、次第に性格的變化を來してくる經驗であつた。彼女の邪道の一歩は、ある放逸な青年に、氣紛れな愛を囁やかれた事から始まつて居た。

友子はたゞ熱い血に駈り立てられて居るやうな、さうした年若い男女の戯れの場面を讀んで居た。しかし不思議と讀んでゐる間は、彼女は自分の心の底にどんな批判と嫌惡の氣持ちが秘んで居るものか悟らなかつた。たゞ其の單純な情景は、彼の女の眼の前に、躍り狂ふ花のやうな色彩を思はせた。

彼女は讀みさして、またしても吻と溜息をついた。そしてふと身近いあたりを眺めて見れば、これはまた何んといふ瞭りとした、小部屋の有樣であらう。そこには『若々しい男女の嘶く花の木立』のかはりに、そこらぢう繕ろいのあとの見える障子があつた。『うす白い春先きの河霧の立ち罩めた、廣々とした河流』のかはりに、もう散々使ひ古した、赤ちやけた疊があつた。そして『輕るい雲の一片のやうに見える、彼等の短艇の婀娜姿』のかはりに、火鉢の前に寒さうに肩をすぼめて、小さく坐つた自分の姿があつた・・・。彼女は危ふく笑ひ出すところであつた。

それは餘りに現實そのものであつた。然うした放恣な男女の生活を悼むかはりに、彼女は子供たちの汚れものを洗ふ自分の指先を見た。そして知らず識らず明日の仕事に都合のよい、手順を思つて居た。

友子は何時か本を閉ぢて、傍らに置きながら、此の讀書の暇潰しであつたことを思つた、全く子供の三人も抱へた良い世帶持ちの彼女が、然う思ふのは仕方がないことであつた。彼女は然うした男女の世界を、最早遠い夢の中に數へた。今や複雜なものが彼女の心に押寄せてきた。あの駄馬の背後は重い荷物があるやうに、そして或る時には愛撫にかはる、手剛い御者の手があるやうに、更らに勞苦をもつて休息を購ふのが寧ろ當然であるやうに、彼女は廣い世間を考へて居た。種々雜多な人々の苦しい心の表はれが、彼女に澤山の嚴しい讓歩を教へた。

友子としてはそれを一つの、自分の心の方向として考へたかつた。そこには不思議と打ち屈した氣分はなかつた。多く知る事を不幸と考へるよりも、自分の心のありかを味覺する點では、それは大變な仕合せになつて居る、といふ氣がした。

戸外は風が荒れてゐた。氣味わるく雨戸を挾んで行く木枯しの音は、更らに屋上にも、庭先きにも、汐鳴りのやうな物凄いどよみを殘しては、吹き過ぎて行つた。

友子はふと此の寒空の下を、轉ろぶやうに急ぎ足で歸つてくる、夫の姿を思ひうかべた。

格子戸の開く音に振りかへつてみると、夫はもう後ろに客人を連れて、茶の室に入つて來るところだつた。

『珍らしい人を連れて來たよ』。

彼れは友子の方へ、元氣な氣輕な聲で云つた。

ふと見るとそれは思ひがけない、瀬津であつた。彼女は何んといふこともなしに、はつとした。今までの安らかな氣持ちは、見る間に疑惑と不安とに閉ざされて行つた。

思ひ返してみれば、もう彼れこれ五六年越し、彼れの消息は絶えて居たはずであつた。その最後に友子たちを訪づれてきた時、慥か彼れはひどく腹を立てて居たやうであつた。

『二度と君等とは遇ふまい』。彼れは然う投げつけるやうに云つて、閾を飛び出して行つた。

『どうしたのでせう』と、あとで友子は夫に云つた。がしかし彼の女には、それが解つて居るやうな氣もしたのであつた。

瀬津はどつちかと云ふと、友子の方に餘計親しみをみせて居た事は事實であつた。彼女もそれをよく知つて居た。初めに彼れを彼女に紹介させた彼女の夫も、それを知らぬはずはなかつた。しかしそのうち瀬津の態度は、此の夫婦に向けてだん／＼變化して行くやうだつた。

『案外此の家庭は拘束されて居るね』などと云ひ出す頃には、彼れの眼は微かな冷笑を湛えて、夫の方に向けられて居た。時には友子に對して、多くの家庭的女性に向けられるやうな、怒氣を含めた揶揄があつた。それはだん／＼と冷嘲と△笑に變つて行つた。

それよりももつと友子にとつて、堪えられなかつたことは、彼れがさも氣の毒だといはぬばかりの、意地惡い見方を始めた頃からのことであつた。友子は彼れを避けたく思つた。同時に夫も漸く彼れに憎惡をもち始めた。

『君の云ことはすべて破格だよ、これ以上お互ひにもつと、自由であつこいゝと云ふのは、どう云ふ事なんだ』。
彼女の夫はよく瀬津に詰つた。そんな時瀬津は頑固に默り込んで、耳の垢でも掃除するやうな眞似をした。彼れは友子にさへもそんな場合、眼もくれなかつた。
それはあの最後の訪問の日であつた。其の日どうしたわけか彼女の夫との輕い物言ひのあとに、思ひがけなく彼れの眼から、溢れ落ちる涙が見えた。友子はその彼れを見た。彼女の眼にも、これも全く思ひがけないことであつたが、ふと誘はれたやうな涙がにじんだ。
彼れが腹を立てゝ歸つて行つたとき、彼女は自分の此の涙を思ひうかべて、わけもなく後めたく思つた。それであるのに彼れについて『どうしたのでせう』などと、夫にたづねた事が一層彼女の心に嫌な思ひを殘した。
恐らくあの頃限り、二度見る事はあるまい、然う思ひすてゝ居た瀬津が、再び眼の前に姿を見せた時、彼女は先づ何よりも、彼れの心意を怪しまずにはゐられなかつた。
『何んのために、彼れは來たのであらう』友子はそれを疑つた。彼女には解らなかつた。更らに今日になつて、此の一家に惑亂を伴ふやうなものを考へることは、彼女には堪えられなかつた。
友子は日頃の子供に對ひなれた、安易な微笑も忘れて居た。彼女は默つて一つお辭儀をして、彼れのために坐布團を、火鉢の一つの隅に侑めた。
『君、飯を食ふかい』と、瀬津の横側に向き合つて坐つて居た夫は性來の明るい聲で、彼れの方へ呼びかけた。彼れはすつかり昔の友達を、歡び迎へてゐる樣子であつた。心に長くこだわりを包んで居ることのできない彼れは、何時かしら良い回顧ばかりを、此の友の前に持つて居た。彼れは瀬津と食事を共にしながら、一緒に仕事をしてゐた頃の思ひ出話をしたり、その後の彼れの生活についての色々の風聞を、からかひ顔で持ち出してきたりした。
『あれから、君とN女史との噂さがあつたが、どうしたい?』。

『どうもしないさ』。瀬津は然う云つて、含み笑ひをした。彼れは一度も殆んど、友子の方へは眼を向けなかつた。彼れはまるで六年前の彼れのやうに、獨り思ひ屈したやうに默り込んで居た。

友子も無言で、彼等の食事の濟むのを待つて居た。長い長いと思はれる間、彼女は何を云つてよいか解らなかつた。あの最後の瀬津の見せて行つた腹立ちは、今となつてみればむしろ年月を斷ち切つた昨日のやうに、一時に鮮やかに彼女の心に、反映して來るといふのも不思議であつた。それも或ひは此の年までいくらか苦勞を經て來たせいであらうと思つても、何故か彼女は重苦しく不快であつた。

そればかりではない、こんな嫌な思ひが此の彼れの訪問によつて、もつと長い明日につゞくのではなからうか、と思ふことが恐ろしかつた。『一體此の先きはどうなるのであらう』。彼女はそう思つて、ひとり秘かに怯えた。しかしまだそれだけに止まるならば、なほ易い事であつた。彼女はやがて本當に此の無意味な瀬津のために、『千々に心を碎く日』を迎へるのではなからうか。彼女は夢にもその夫に知らせてならないもの、その餘りに人の心を汲み、傷けずに置かうとする、自分の心弱さを思つて惧れた。

斯うして彼女は、彼等の食事の終るまで、殆んど何一言も言はず過してしまつた。

瀬津は食後の果物を採りながら、そのときになつて始めて友子のことを、夫の方に話しかけて居た。

『ずゐぶん君んとこの奥さんは、默つて居るんだね、そんな人だつたかね』

友子は其れを聞きながら、自分のナイフの手元にうつむいて居た。半分まで薄黄色い林檎の皮は、サラサラと赤いすじをひいて、膝の上に落ちていつた。

『何、いつだつて變つちやゐないよ、君の取り方だよ』

『然うかね、まるで怒つてゐるやうだね』。

『然うかも知れないぜ、ふいに君のやうな男を連れて來たんだもの』。

『君のやうな、はひどいな』。瀬津はふとカラカラと笑ひ出した。『だが、君達は割合に變つちや居ないね、然うだらう』。

彼れはさう言ひながら、その瞳は素敵こく、友子の身邊に走つた。

それを聞くと、彼女はふと見透されたやうな、弱さを感じた。そして彼女はもつと恬淡に、初めから話し出さなかつた、自分の愚かさを嗤はずにはゐられなかつた。

人間と云ふものは、そんなものではない。成程もつとスラスラと、樂しくお互ひが打ち解けてつき合ふ事が、寧ろどんなに良い事であらう。彼女は瀬津の前に、彼れの態度の氣輕さを見出すと、一寸欺かれたやうにも、またそれよりも多くそれが本當であるやうにも思つた。

『皆様お變りはありませんか』と、彼女は始めて瀬津に云つてみた。その途端どうしたのか、無暗におかしくなつてきた。『お父ちやんの馬鹿メン』と、彼れを見れば叫ぶと云つた、彼れの小さな息子の事を思ひ出したからだつた。彼女は思はずクスリと顏に出した。

『何を笑ふの、おかしな人だね、そんな事を聞いて』。

『でも、何誰でも挨拶の始めには、斯う云ひますわ』。

『なるほど、然うかね』瀬津は然う云つて默つた。

そして彼れは急に、先刻よりはずつと元氣よく、煙草をふかしたり、お茶を喫んだりした。

『君だつてさつぱり變つちやゐないよ。で、その後奧さんはどうしたい。子供さんは』。

今度は夫の方が、聞き出した。

『ほんとに止して異れよ。君達は何んだつてそんな詰らないことを聞きたがるんだね……。子供は二人になつたよ。ワイフは依然としてワイフで納つてゐるさ』。

『まあ、お子さん方もどんなに大きくおなりでせうねえ。家のもうう上の子供は、學校ですのよ』。

然う云ふ友子を、瀬津はまるで呆れたやうに見た。その彼れの口邊は、微かに歪められて見えた。彼女は少時、壓しつけられたやうに不快な氣がした。で、彼女はそれきりで默るよりほかはなかつた。

『さう〳〵、もう君のは慥か九ツか十才になつて居る筈だね。どうだね、今でも矢張りばかなんてやるかね』。『さあ、時々やるね』と、彼れは全く眞顔で答へた。そしてその額は暗くしかめられた。彼れは急いで苦さうな、冷えた茶を一口すゝつた。

ふと友子は、そこに寂しげな、年の老けた彼れを見出したやうに思つた。彼女は痛々しく思つた。どこかに彼れの生活には病根がある。それは矢張り、彼れの家庭ではなからうか。

友子は背に男の兒を括りつけて、夫のあとを探ね廻つてゐた、彼れの妻女のことを思ひ出した。瀰津は殆んど、あの頃から家庭と云ふものからもがき出ようとして、絶えず家を外にしてゐたやうな人であつた。

『おい、僕の赤坊が今夜生れるんだ。どうか一晩置いてくれ』。然う云つて或日友子等のところへ逃れてきた、若い日の彼れの姿も思ひ出された。彼れは誤つて女を知り、誤つて結婚し、誤つて父となつた……然うして現實の脅威に、じつと堪えやうとして、しかも力の足らない悲しみを思はせる、人のやうに見えた。

それはもつとずつと以前――十年も前のことであるが、あの頃から彼れはともすると、絶望的にぼんやりと、放心した人のやうに見えた。しかもどうかすると、たゞすべての誤ちを投げ棄てゝ、一途に求めて行かうとする、意地な所も見せた。それは皮相的に見ると、『押しの強い』そんな型に見えた。

あの頃は友子も若かつた。さうした醒め果てた夫のために、子を育て、貧苦と闘ひながら、怨嗟と涙との中に暮してゐた。彼れの妻女を見ても、彼女にはその胸の奥まで察し入る力はなかつた。寧ろなりふりも構はず、やたらに世帶くづれのした、その妻女を見ては、瀰津を憫れみたい氣持ちもあつた。それよりも然うした陰慘な瀰津の生活の背景などは、思はふともしなかつたほどの、鈍感なそれほど幼なかつた彼女であつたと云ふ方が、一層適切であつた。

それが何時かしらず、彼女も人の親になつてしまつた。恰度あの妻女の苦しんだやうな道を、無論生活の様式は異つてゐても、心の上ではおぼろ氣ながら、通つてきてゐた。

今何よりも眼の前に、世帶くづれのした、良い子持ち女房の姿を、あの妻女さながらに瀰津の前に見せてゐるのは、

此の自分ではないか。彼女はすつかり今や、自分の心の見方、それが形を變へてきたやうに思はれた。
それには亦、瀬津の淋しげな姿があつた。何んと云つても矢張り、良いお父さんになつてゐるであらう。彼女は心から然う思ひたかつた。彼女はあの今は懷かしく思出される、彼れの妻女のことを、話に持ち出したくてならなかつた。
『奥さんにも久しくお遇ひしませんが、こちらにゐらつしやるなら、どうぞお出でなさるやうに云つて下さいまし』。彼女はとう／＼斯う云ひ出した。しかし彼れが愕いたやうに、此方に瞳を向けると、思はず赤面せずにはゐられなかつた。
それは友子があの妻女に、決して好意を持たれてゐなかつたことを、思ひ出したからであつた。彼女はその過去の或日の事を思ひ出すと、今もつて心が痛んだ。
『お話の友子さんだ。よろしくおつきあひ願つたら良いだらう』と、その日瀬津は、作つて來た妻女を友子に、ひき合せながら云つた。
丸髷に結つて、眼元や豐かな頬の、生々とした美しい人であつた。その頃はまだ産み月にも二三ヶ月早い頃だつた。肉體の發達した、容姿の若々しいその妻女には、醜いと云ふほどの腹部でもなかつた。友子はその時、こんなに美しいさかしさうな妻女の、何處が不足であらうと不審に思つた。
多くの學校友達にとりまかれてゐた頃の、人懷しさが、その頃の友子には、少しも害はれずにあつた。彼女は始めて家を持つて、夫と二人きりの生活の中に、矢張り女同志の話相手を見出したことを、どんなに嬉しく思つたであらう。
『どうぞ宜敷』と、彼女は火鉢のむかふから、その妻女に心から手を差し伸す氣でゐた。しかし彼女には、全く理解できないやうな言葉が、直ぐ彼等夫婦の間に始まつてゐた。
『おつきあひしろつて、お友達になれつて有仰るの』。
妻女は瀬津の顏をまともに見返しながら、詰るやうに然う云つた。
『さうさ、お友達になつたら可いだらう』。
『いゝえ、私なんかにはできませんわ。お友達どころか、私なんかにはお話一つだつてできないではありませんか。』

瀬津は弱々しく、恥ぢたやうに苦笑して、友子の方を見た。友子は友子でとむねを突かれて、並んで坐つてゐる夫の方へ、愕いた眼を向けた。

『奥さん、まあ、然う一口に云つたものでもないでせう。最もお忙しいでせうからなあ』と、夫は直ぐ妻女をとりなした。

『一體君が悪いんだよ、苦しい體をしてゐるものを、引張つて來るつて法はないぢやないか』。

すると妻女は夫の方へ、激動して蒼ざめたやうな顔をふり向けた。

『あなた、お聞き下さいまし、今日ね珍らしく私を良い所へ連れて行くつて、云ひ出したんでございませう。そして私が嫌がるものを、無理に急き立てゝ連れ出して來て置いて、途中行く先きも明さないぢやありませんか。不意にそんな無理な事を云ひ出したつて、私には返事にも困るのですわ』。

妻女の眼には、友子をすつかり仰天させるほどの、澤山の溢れをちる涙があつた。夫は思はず瀬津に云つた。『君、ほんとにこんな病人みたいな體のものに、無茶をするのはひどいよ』。

斯うした記憶に續いては、出産後の再度の訪問の折りの事まで思ひ出された。其の頃には彼女は、俄かに身じまひを怠つて、急に三ツ四ツも老けたやうに見えた。何時でもさうであつたが、その時も十文字に背負はされた赤兒は、彼女の背中でむづかつては、若い不幸な母親を、困らせてゐた。

『こちらに、瀬津は來て居りませんでせうか』。

『はあ、いらつしやいませんが』。

友子は出て行つて應對する時、妙に素氣なさを感じた。そして其の頃から理由もなく、彼女の前にまごつく自分であるやうに思はれて居た。

『瀬津さん、どうかなさいましたの』。

然う云つてその時も友子は、此の街から三里も奥にある瀬津の在所の方から、遙々夫のあとを探しに出て來た彼女を

氣の毒に思ふよりも、逸早く自分の家に彼女の足が、向けられたと云ふことのために、妙に心にこだわるものが掠めて行つた。

『いゝえ、もう出てから三日ばかりになりますの、急ぎの用事ができましたものですから、若しやお宅ではないかと存じまして』。

『まあ、然うでございましたか』。然う云つたが、友子は彼れの日常については、殆んど一片の知る事もなかつたので、妻女と共に案じるだけであつた。

『では△△……かしら』と、彼女は軈がて、獨り言を云つた。

『まあ、失禮いたしました。また此の頃新らしいお友達ができましてね。きつと其方なのでございませう』。

彼女は赤兒を賺しながら、まるで腹を立てたやうに、さう云つて格子戸に、音を立てゝ出て行つた。

今、斯うした間柄にあつた、妻女の事を云ひ出した自分に對して、瀨津が不可解な瞳を向けるのは當然であつた。これほどお坐なりを云ふ女であらうか、心にもないことを！。彼れの瞳はそれを云つてるのに違ひない。

しかし其れは彼女の本心であつた。彼女は今となつては、あの妻女と近しく遇つてみたかつた。たとへ自分が彼女に與へた苦惱は、ほんのその僅かな一部に過ぎなかつたにしても、あの反感が何んであつたか、其れが解つて來ればくるほど、友子は今や身を責めずにはゐられなかつた。

夜は更けても、風は靜まらなかつた。小さな友子の家のそとまはりのものは、小止みなく寂しい物音を立てて鳴つた。彼れの家族の話が出てから、すつかり無言にをちてしまつた瀨津の姿は、十燭光の乏しい灯の下に、寂しい黑い像のやうに見えた。しかしそれは惱み苦しんで來た不幸な人の姿といふかはりではなく、それをもつて他に強いるやうな重苦しい嚴さへ感じられてくるのであつた。友子は毎日の此のさゝやかな休息所も今はそのためにすつかり亂されたやうに思はれた。

彼女は風の音を聽きながら、こんな物わびしい部屋の中に、人々の沈默するさまを、息苦しく思つた。彼女は話好きの

夫が、引き込まれたやうに、矢張り默つて煙草ばかりふかして居るのを見ると、その秒を刻む間も、長いやうな氣がした。
『私、休ませて頂きますわ』と、友子はその夫の方へ云つた。
『あゝ、さうお仕、僕等は今夜は話して居るから』。
友子は瀬津の方へ挨拶して、そこの坐を起つた。
子供らの臥床の傍らに、身を横へると、彼女は何氣なし溜息が出た。
『あゝ、自分も大人に成り過ぎたものだ』と思つた。『一體こんなに氣をつかふと云ふことも、間違つて自分を見せると云ふことになりはしないだらうか。
然うだ、もつと底意なく、笑つたり話したりできないことが、自分の最も損な點なのだ』。彼女はそんな事を思つて、また溜息が出た。
『いま、子供は幾人？』と、襖越しに瀬津の、云ふのが聞えた。そのうち彼等がぽつりぽつり話しだしたのを耳にするともなく、何時か友子は、眠りにはいつて居た。

翌朝になつて見ると、もう瀬津の姿は、家の中になかつた。茶の室に良いかげんに、布團を引き出して行つて、瀬津のために床を與へてやつた夫も、何時彼れが出て行つたのか、知らなかつたと云つた。
『矢張り變つてゐるねえ』と、夫はそれを、さも彼れの當然の事のやうにして話した。
『なんだか、五六年前の彼れとも、違つてゐるよ、話してみると、矢張り彼れも年をとつたね、何んだか妙に考へ込んで、頻りに寂しさうで、そのくせ、非常に現實的なところが出てきたよ』。
『さうでせうか』と、友子もふと昨夜の彼れの寂しさうな姿を思ひ浮べながら、
『ひと頃は、氣苦勞は氣苦勞として、一面にはそんなにこだはつて居ない、元氣なところがありましたがね、けれど今になつてはそんなに物事を、別々にきり放して、考へても居られなくなつて來たんでせうね』。

『きり放す……と云ふ風でもないだらうがなあ。何しろある一つの事を大きく重く見過ぎるんだよ、例へば此の人の世は、男と女の生活から基調を發してゐる。然う云つた調子でね、昨夜もそんな事を云つてゐたよ。つまりその他の子供の事や、家の事や、食ふ事や、世間の事や……すべて人生の雜多な表はれを、次位に見てゐるんだね、何にしても今の世には珍らしい理想家――夢想家さ。ああむきになつて、根本の一つの追及に、寸分の假借もないとすると、彼れは一生を棒に振つても、せか〳〵と相手を探し廻つて、居なければならない事になるよ』。

『まさか、さう單純でもないでせうけれどもね』。

友子は、何故かさう云はずにはゐられなかつた。慥かに然う云ふ處はある。彼女もそれは知つてゐた。しかしながら彼れが多少でも、現實的になつたと云ふのは、どう云ふことであらう。より以上に、そこには人間の生活に對して、多くの複雜な考量が、含まれて來たのではなからうか。

彼女の心は、ともすると、秘かにその安易な方向に、解決を求めやうとして行く事を感じた。

『一體、どうしてあなたは、以前餘り好きもしないで居たあの方を伴れてくる事になつたの』と、夫の出先きになつて彼女は斯う云ひ出した。

『なに、歸りしな、ふと電車で一緒になつたんだよ、お互ひに『よう』と云ふわけでね、なんでも此の邊に訪ねる家があると云ふことでね、それなら序でに寄らないかと云ふことになつたんだよ。でもあの頃の面白くない態度も、ずつと爽りして來たぢやないか』。

『さうでせうかね』。

『お前にしたつて、自分を鍛へる上に、好い機會になるよ』。

『でも、あなたの云ふことも、何んだか變ね』と、友子は彼れを玄關に送り出しながら云つた。

夫はふと振り向いて、彼女の前に立つた。

『何しろ、お前さへ確りして居れば、良いんだよ、それだけだよ。僕だつてそれが判りきつて了へば、どんなに氣持ち

がいゝか知れやしない』。

彼れは然う云つて、一寸物思はしい顔つきになりながら、急ぎ足で出て行つた。

それを見送つてしまふと、友子は直ぐさま仕事の多い座敷の方へ歸つて行つたが、そこに彼女を待つてゐる、幼ない子供らを見ても、彼女は何時ものやうに、すぐ膝の上に抱き上げてやる氣にもなれなかつた。妙に頭の中がこぢれて居た。

ともかくも今まで安易な平和にあつた、彼の女の其の日が、外からも内からも一氣に、紛れもなく掻き亂されたやうな氣がした。其處には彼女にとつて、月日の逆轉して行くやうな、變な錯覺があつた。彼女はあの鈍く幼なかつた、若い日の自分が、頻りに思ひ起された。瀬津に對して、あの頃の自分は何を彼れに知らしめて居たらう。そこには既に忘却に等しい、深い迷霧があつた。その中にかき消された自分の姿は、彼女にもどかしさと、殆んど神經的な模索の恐れをさへ覺えしめた。

それにもまして、今夫の出しなに云つた言葉は、重苦しいものであつた。『お前さへ確りしてゐるなら』。それはなんたる不信な悲しい言葉であらう、彼女は今や二重に、内外(うちそと)から向けられた不快な拘束を感じた。

子供らは、昨日の風にひきかへて、穩やかに日の射す緣側に出て、色々の玩具を並べながら遊んで居た。やつと歩き出したばかりの女の兒は、兄の兒にかたことで何か話しかけては、無心な笑顔をふりまいてゐた。

彼女は然うした樂しげな子供らを守りしながら、殆んど機械的に立つたり居たりして、こま〴〵した家の中の仕事を片づけ始めた。

赤いクロースの本が、昨夜の讀みさしのまゝに、茶の室の置き棚の片隅に、置かれてあつた。彼女はそれを腹立たしさうに、急いで書棚の方へ持つて行つた。彼女は最早すつかり讀みつゞける興味を失つてしまつた。彼女はたゞ此の思ひがけなく迫つて來た、彼女自身の困迷をじつと見詰めたかつた。どうなるだらうか。彼女は自分を然う思ふために、あらゆる餘裕を失つてしまつた。

そしてあの樂しい夜の休息の時が來た。けれどもあの安易さは最早なかつた。彼女は一途に、自分の心にふりかゝつてきた、重苦しさを見つめた。そこには何かしら、ふりきれない重荷がある。負債がある……。
そして友子の眼は、冴えかへつた。

ある日曜日の朝であつた。あれから半月餘り姿を見せなかつた瀨津が、ふらりと訪づれて來た。
友子の家では恰度、遲い朝食を始めて居るところで、食卓のまはりには、子供らの何時もの賑やかな騷ぎがあつた。
その日は師走空には、氣まぐれた天氣で、掃除後の明け放した障子の間から、霜解けのぶよ〳〵した庭土の上に、盛んに糸遊の立ちのぼるのが見えた。
『何時の飯？』と、瀨津は食卓の傍らに、立つたまゝ元氣な聲で、誰れにともなく云つた。
『朝めしさ、しかし君は早晝として一緒に食はないかい』
『あゝ』
『けれど、おあがりになるやうなものが、無くつても宜しければ』と、友子は貧しい卓に氣をかねて云つた。
『なに、どこだつて同じことですよ』
瀨津は然う云つて、坐る場所を探した。
食卓の一隅に、窮屈に押し寄せられた子供らは、無遠慮に瀨津の方を、まじ〳〵と眺め始めた。彼等は彼れを生れてから、始めて見る人で、またどう云ふ人間であるか、全く知らなかつた。子供のもつ本能的な觀察眼が、何時までも、まじまじと注がれてゐた。
そこにはまた彼れの風貌もあつた。誰れでも冬になれば、着るものと思つて居た、羽織がなかつた。そして其の手入れの屆かない髮の上にのせて現はれた帽子は、彼等の小さな妹のかぶる碗型の、あれにそつくりであつた。然うした見馴れない姿で、彼れが默つてゐるのを見ると、恐ろしく沈欝に見えた。

何んとなく普通人でない。それが子供らの眼にもわかつた。友子はそれが笑へなかつた。何よりも彼れに失禮であれば、氣の毒でもあつた。それにまた、彼れの眼に彼女の幼ない者を、厭はしく思はせることは、全く無益なことだと思はれた。

『さ、みんな早く濟まして、あちらへ被行い』と、友子は云ひながら、彼等の食事を手傳つて、遊び場所の方へ起たせた。

『君んとこでは子供は、お父さん兒かね、お母さん兒かね』。瀬津はその時、ふと斯樣なことを云ひ出した。

『どつちかと云ふと、まづ僕の方かなあ。しかし子供なんてものは、案外敏捷なもんだからな、ちやんと父と母との區別、利用法を辨へてゐるよ、どつちがなくても、彼等には大事だからな』

『うむ』と瀬津は云つた。そして彼れは默り込んだ。

『暇さへあれば、相手になつてやれば良いんですけれどもね、何んにしても一人手で忙しいものですから』と、友子も話に入つた。

『さうかね』と、瀬津はもの憂さうに、うつむきながら『どつちにしても、君んとこは穩やかで良いね』

『でも私が氣短かだから、駄目ですわ』

それを聞き棄てゝ、瀬津は默つて退儀さうに、食卓の前を離れた。

彼れは到の元氣に換へて、だん〳〵堪へがたいやうな屈託を見せてきた。夫に伴はれて書齋に坐つても、まるで席が定まらぬ人のやうに、寧ろ家を誤つて入つて來た人でもあるやうに、何處となくそは〳〵してゐた。

『君、出ようよ、つまらないよ、少し散歩しやうぢやないか』と、軈がて彼れは、吸ひさしの煙草を灰皿の方へ投げ込みながら、夫に催促した。

『さうだね、行かう』と、彼れもわけもなく、家の中に坐り込んでゐる事を、笑はれでもしたやうに、急いで起ち上つた。そして出かけに、夫が聲をかけたので、友子も子供連れで出かける事にした。

戸外は全く上天氣だつた。忙しげな家並みの街道を折れ、幾筋かの人家の巷路を脱け、竹林の深い靜かな小徑などを出はづれたりすると、直ぐ平坦な田野が現はれてきた。その緣に緩い大きな弧線を畫いて、見渡された。立つてゐる森だの、何かの工場だの、丘だの、斑らな人家などが、と何處となしに此季節らしい、澄んだ底強い空氣の壓力が感ぜられた。

散歩づれは、その一望のところで、みんな大きな呼吸でもするやうに、少時歩みを止めた。子供たちは、幸ひに陽の下の温かいばかりに、駈けたり追はれたりして、元氣よく動き廻つて居た。

『ほんとにお子さんを、連れてゐらつしやればよかつたに』と、友子は小さな子供の一人を喚んで、鼻の下を拭いてやりながら、瀬津の方へ云つた。

『さうだね』と、彼れはまた元氣な聲になつて云つた。

『子供……でなくつとも、ほかに誰れか連れて來やうね、全くこちらは良い、何よりもゆつくりした空地が多くつて良い。ね、僕は斯うした間のぬけたやうな、田舍の道は好きですよ。此の頃は何處も彼處も、いやにせゝこましくなつちまつて、街の形まで定つてきたぢやないの』彼れはさう云つて、友子を見た。

友子は友子で、『誰れか』と云はずに、孰れはあの妻女も、訪ねてくれるやうになるであらうと思つた。そしたらお互ひに子供づれで、また樂しい苦勞話もできるであらう。

瀬津は戸外へ出てから、再びすつかり元氣な樣子にかへつて居た。彼れは友子の夫と伴れ立ちながら、彼女には解らぬ、自分の仕事の話など始めた。

『園藝も道樂のうちは、却つて失敗がないもんだよ。少し本式にやり、種の良いものでも採らうとすると、これで隨分氣を使ふからね。僕も少しこれから、大規模にやらうと思つてゐるんだ。しかし近頃の寒さでは、霜で一晩のうちに元も子も、失くして了ふこともあるからね』。

『だつて、それでもつて食つて行くつてのは、大變だらう』。

『無論さ、それは君云ふまでもないよ。しかし、それでも幾分は生活の助けになつて居るさ』。
それから彼等は、これから計畫したい事、色々な良いと思ふ仕事に就いて、頻りに語り合つて居た。
しかし然う云ふ話の中で、瀨津はどうかすると、友子の夫の言葉を、うつかり聞き流してゐるやうな、場合もあつた。そんなことどうでもいゝ事だ。然う云つた、投げやりの樣子にも見えた。
片添ひに丘があり、一方は小川の流れに沿つた村道が、しばらく續いた。丘の上に點綴されてゐる、小松林や、雜草や、小さな畑の奥には、人家や、牛舍でもあるらしく、微かな水を汲む音や、牛の啼き聲などが洩れて來た。
斯うした何んの奇もない、殆んど貧しげにさへ思はれる。靜かな野道を歩いてゐると彼女は何んとなく、何處かの遠い騷音を感じてくるやうな氣がした。それは矢張り考へてみると、最近手にしたあの赤クロース本の記憶のほとぼりらしかつた。
彼女はふとあの異國の若い男女らの散策を思ひ浮べた。眩ゆいまでの春の陽光と、花と、青い草原と、そこに躍るやうな若き歡聲を思ひ浮べた。そして其事は此の眼の前のわびしい野道を一層はつきりさせてくれるやうなものであつた。
『ね、何處まで皆樣いらつしやいますの』と、友子はと片かげのできた、日さしに氣づきながら、前を歩いて行く散歩づれに云つた。
それを聽き洩らしたかして、瀨津は不意にふりむくと、友子の近づくのを待ち合せながら云ひ出した。
『あゝ恰度にこんなやうな村道を昔僕たちは歩いたぢやなかつた?。あなた憶えてゐるの、あれは夏だつたかな、ひどい埃りの日だつたと思つたが』。
『え、然うでしたつけか』と、氣輕に答へたが、見るとその瀨津の眼は、感慨するやうに、强くこちらに向けられて居た。それがふと彼女の胸に應へた。
その日は、颯と吹きまくられて來た、埃りのために、盲ひのやうに眼を潰された、自分であつた事を思ひ出した。誰れかが自分の肩に、手を置いて導いてくれた事を思ひ出した。それが彼女と、並んで歩いてゐた夫ではなくつて、他方

の傍らにあつた、瀬津であつた事を思ひ出した。彼女は見る〳〵當惑して、赧くなつた。そしてそれは忽ち、重苦しい壓迫感となつて、此の漫歩を續けるさへ、堪へない氣がして來た。

『子供たちが草臥れたやうですから、私達は一歩先きに戻りますわ』と、友子は、枯田の足場の悪い畦道のほとりで、彼等の方へ云つた。もう其處を出ぬけて、一廻りすれば、前と反對の方向に、歸路をとつてゐるわけであつた。が、それが待たれなくなつて、彼女はふいに家の用事でも思ひ出したやうにして、せか〳〵と然う云つた。

彼女は一行から別れると、手早く末の子供を脊に乘せ、二人の子供を先きに立てゝ、更らに心覺えの近道から、急ぎ足で歸りはじめた。

それには、ほんとに仕置いてきた、家事の心がゝりもないではなかつた。しかし其れよりも何よりも、彼女はあの居馴れた、茶の室の休息所が戀しくなつた。何も考へないでもいい。何も思はないでもいい。たゞあすこで、獨り靜かな時が欲しかつた。

彼女は今や、暴力の下にある、あの駄馬の心持ちに、陷つてゐる自分を、感じた。彼女は徒らな物思ひのために胸が痛んだ。頭もぼんやりした。そして其のために、彼の女の心身は、疲れ果てゝしまつた。

家へ歸つてみれば、その上休息どころではなかつた。陽のある下では、ともかくも目前の仕事だけでも、一つ一つ精出してやらねばならなかつた。

それが、彼女をして愈々自動人形のやうな放心を思はせた。彼女は色々の仕事の傍ら、夫と瀬津のために、やがて歸つて來る筈であると云ふばかりに、座敷の方へお茶の席を設けて置いたりした。

彼女は斯うした一瞬間の自分が、彼女の生活に對して、何者であるかも考へなかつた。夫に對して、瀬津に對して、彼女がどんな態度をとるべきか、それも考へなかつた。

たゞ彼女はあの茶の席に、三つの坐布團を敷くとき、突然爆發するやうな、何ものかが胸元へ突き上げて來たのは本當であつた。

『瀨津さん、私に來た此の上のあなたの用事とは何んでせう、云つて下さい、明るい日の下で瞭りと云つて下さい！』

その火の塊りのやうな激情は、幾度となく彼女の胸の中で叫びつゞけた。彼女の若い日の姿を楯にして押し迫つて來るかと思はれる男を前にしては、彼女は思はず齒をかみ占めても足らないほどの思ひがした。

けれどもまた一方では、あらぬ驚愕と疑惑との中に、悶え惱んだ夫の顏が浮んできた。彼女は忽ち此の二つの間に迫ひつめられたやうにして、ハツとした。そこでは瀨津に對する強い彼女の樹立した心も、徒らに夫を悲しませるといふばかりに、もろくも萎み崩れてしまつた、そして彼女はたゞ自分の若い日のために、彼女自身を憫れむよりほかは知らないのであつた。

夫が軈て單獨で歸つてきたのは、彼女の歸宅から僅か一時間にも足らぬあとの事であつた。彼女の疲れた頭には、それがひどく長い事に思はれた、彼女は殆んど云ふともなく、ぼんやりとした顏つきで、一人だけ歸つて來た夫を怪しんだ。

『瀨津さんは、どうしたんですか』

『途中から、歸つたよ』

『まあ、どうしたんでせう』

『なに例の調子だよ。一言二言何か話し出したと思つたら、ぢや失敬！と云つて、そのまゝぷいと駈け出して、行つてしまつたんだよ』

『また、何を話したんですの』

『なにね、『君んとこでは、僕の訪ねて行くのを、何か云つてやしないかい』つて訊くから、僕は有りていに『餘り面白く思つちやゐない』つて、云つてやつただけなのさ、全く相變らずだなあ』

夫は上へあがつてきながら、彼れを迎へるために駈け出してきた子供らを、避けるやうにして、坐敷の方へ通つて行つた。

彼れの廣い額にも、どこか不快な曇りがあつた。彼れはひどく疲れたやうに、椽端の方へ足を伸ばして腰を下ろすふとあたりに麗々しく並べられた、坐布團や茶道具などを見つけた。

『おい、こんなものは用はないんだ。片づけちまへ』と、彼れは荒々しく云つた。

其日から愈々瞭りと、瀬津の姿が友子の胸に映つて來た。ともすれば其の彼れの實際の姿に、彼女は脅かされた。彼女は格子の音がすると、それが惡戯好きな、御用きゝの小僧であらうが、先づ彼れの訪なひではないかと、最初にそれを感じた。

けれど彼女は、彼れの姿の再び現はれないことを、それほど頻りに思ひ希つてゐるにも拘らず、此の儘で彼れが有邪無邪に、姿を消すならば、今となつては彼女は、それが彼女自身にとつて決して氣の濟むやうな正しい結末ではないと思はれるのであつた。

こんな思ひの中にも、必要に迫られて友子は極く稀れに繁華な街の方へ、買物に出かけて行つた。斯うして彼女が、一歩廣い往來へ出てみると、、其處には驚くべき時代の響きがあつた。人々は、親も子も夫婦も相携へながら、自由に歡ばしげに語らひながら歩いて行つた。中には彼女の吃驚りしてゐるやうな眼の前で、非常に自然に握手を以て別れて行く、若い男と女の友達もあつた。

ある家族は他の家族と、打群れて歩いて行つた。人の夫は人の妻に、人の妻は人の夫に、爽りとした明るい、ほゝゑみを投げ交して別れて行つた。

なほ或る暗い道のほとりでは、彼女の眼の前を、恐るべき人々のすがたが、掠め通つて行つた。女の罵しる聲、男の喚ふ聲。そして其處には彼等に同樣な酒精と、飽食とがあるやうに思はれた。

友子はそんな時讀書にえた、多くの不氣味な世界を、今眼の前に見るやうに思つた。彼女は一面では驚嘆し、一面では慄然とした。

斯うした廣い世間の中で、自分の姿を見かへると、友子はふとその寂しさに慴ろいた。彼女は如何なる點でも、斯うした僅かな見聞にすら自分の怯懦であり、微弱である事を感じた。さうした一面の目前の世間には、寧ろ不滿と憫然とを感じながら、彼女は自分にかへると、其の痛み易い細心を愧ぢねばならなかつた。

然うして彼女は何時でも、そこ〳〵に用事を果して歸宅を急いだ。

家へはいると、そのあとでは彼女はつく〴〵と考へた。瀬津に對しての自分の懊惱は、此の世間を前に於ては、餘りに愚かしく思はれた。若しかすると自分の此の、細心と追及心とは、彼れの眼には、都合よき弱點とも見られてゐるかもしれない。

しかしながら獨りになれば、矢張り然うした考へかたは、彼女には氣愧かしかつた。彼女は矢張り苦しみを續けずにはゐられなかつた、そしてたゞ彼女の幼なき過去の日の、記憶をのみ索る日が幾日となく續いた。

しかしながら何時ともなく、彼女はある事を思ひあてた。それは瀬津に對する當時の、彼女の最も判然とした感情であつた。

その頃友子は、ある趣味の上で瀬津を先輩として見てゐた。そこには幼稚なほどの、彼女の生徒らしい氣持ちがあつた。友子は遂ひにそれを今はつきりと思ひあてた。

けれどまだそれだけでは氣がすまなかつた。彼女は彼れを一度でも、其れ以外の人間として見た事があつたであらうか。彼女は更らに其處まで考へ詰めて行つた。しかし其處には殆んど彼女に意外と思はれるほど何もなかつた。全く彼れについては、怒ることも、泣く事もなかつた。消息が絶えればまた、生き死にすら思はなかつた。

友子は始めて吻とした。同時に現在の瀬津を前にしては、一層その寂しさと不幸とを思出すにはゐられなかつた。

こんな思ひに日を暮らしてゐる頃、彼女は最早一月あまりも、彼れの姿を見なかつた。

寒い霜の日は、またあの氣紛れな暖かな日の反動として、激しく襲つてきた。うす白い冬の陽の下に、凄まじく吹き立てる風の日などは、特別穏やかな日を、幾日と數へ立てるほど彼女になつかしく思はせた。

彼女は今度瀬津に遇ふならば、その時こそ正直にたゞありのまゝに、當面しようと思ひ極めた。彼女は彼れの生活を理解せぬ事、彼れに就いては打絕えて以來現在に到るまで何んの諒解もないこと、況して自分は若き日のそれでないこと、自發的に彼れについて何んの心構へももたぬこと……。それ等の事を、包むところなく、明らさまに彼れに知らしめたいと思つた。

斯う思ひきめ、自分の心のあり(ヽヽ)か(ヽ)を確かめてみると、友子はいくらか氣が樂になつてきた、しかしそのまゝで、徒らに日が消されて行くのを見ると、彼女は胸に吐きつくせないやうな、不快な焦燥を感じた。

『瀬津さんは、あれきりどうしたのでせう』と、友子はある時斯う云つてみた。それは夫の歸宅後の、或夜のことであつた。

『おゝ、然う云へば二三日前、銀座の通りで、瀬津君に遇つたよ、むかふは變に考へ込みながら步いて居たので、氣がつかなかつたやうだつたが』

『ではそんなにして、矢張り出ては步てゐるんですね』と、友子は云つた。そして彼女はなほどんな樣子であつたか聞きたいと思つたが、なぜか夫の心持ちをはかれば、氣輕い口は利けないやうに思はれた。

『病氣でもしたのか、斯う窶れてね、人通りのなかをうつむきながら、步いてゐるんだ、例の通りあの寒さうな格好をしてね』

それをきくと友子の胸は、ふと思ひがけなく痛んだ。何んといふ氣の毒な人であらう、そして然うもよく絕えず、何事か思ひつめて居られる人であらう。今多少彼れについて冷嘲的にきかされた、夫の言葉があつたにも係らず、突嗟に斯う感じられてきた彼女の心には、氣の毒さのみが先に立つた。

『そんなふうに考へ込んでゐる樣子を見ると、なぜか寂しく見える人ね』と、友子は云つた。

夫はそれについて、何時か話に出たN女史との事件が、原因ではあるまいかと云つた。

『愈々あのひとは夫婦別れをしてね、その別れた夫の友達と、同棲することになつたさうだ、瀬津がまたそのごたく

の中の、立合人と云ふ役目をつとめたさうだよ。その顚末は何時かの××新聞などにも出て居たから、お前も知つてるだらう。』

それを云はれると、彼の女も思ひ出した。そしてそこに彼れらしいものを感じて、自然とほゝゑまれた。

彼れがいかにN女史を求めて居たか、彼女のためには甘んじてその靴? もとらう、裳裾に額もつけよう……、それほどの熱心であつたと、その新聞の記事には面白く書き添へられてあつた。そしてその立合役の可笑しみに、その途方もない彼れの熱心をつけ加へて、充分俗世間の喜びさうな讀物として傳へられてあつた事を、彼女も思ひ起した。

友子はその滑稽な立場を、買つて出た彼れを、今さらに寂しいものに思つた。彼れに勝利を博するもの、裏切るもの——それらを眺めた一事件が、あの一生を通して行くやうな、寂しい不幸な男に、何んの痛痒であらう。彼女はそんな風に考へた。彼女は、彼れや、彼れの不幸な妻子や、荒んだ家のことを考へると、自分の曾て無思慮な若き日の介在などは、とるに足らぬものに思はれた。

しかしながら、彼れが彼女の面前に、あの強い異様な瞳をむけて、坐られる事になると、彼女は彼れを重苦しく思つた。のみかありていに云へば彼女はそれを好まなかつた。殆んど本能的と云つてもいゝほど、人間として彼れと自分との相違が、判別されて來るやうに思はれたから。そのために彼女の心は少しも動いて行かなかつた。動く動かぬといふよりは、寧ろさうした彼れについて少なからず怖れてゐた自分であることを知つてゐた。

そのためにも友子は、再び瀬津を見ねばならぬと思つた。そして其の愚かしき怖れを、一日も早く彼れにあかし、お互にさつぱりすべきだと思つた。

「瀬津さん、そして何か話しましたの』。

『何も云ふもんか、さつさと行つてしまつたよ……。だが縱にお前は聴きたがるではないか』。

友子は斯う云はれてみると、俄かに何か、思ひがけぬ汚穢なものを、胸の中に押し込められたやうな氣がした。むか〳〵とする氣持わるさが、じつと彼女を押し默らせた。

『何か瀬津に用事があるのかい？』、夫はまた追及してきた。

『…………』。

『何故默つてゐるんだね、云つてわるい事でもあるのかね』。

これを耳にしてゐるうちに、友子は眼の先が暗くなつてくるやうに思つた。云ひやうもない不快さ！　彼女は此の心の暗くされた夫の前に、其の淺ましい響きを傳へてくる言葉を、なるなら手をもつて押し止めたいとまで思つた。

『ああ！。そんなにあなたの云ふやうに、安つぽく人間が動いて行けるものでせうか。若しそんなことができるものなら…………』、こんな苦しみはしないと思ひながら、『そんな馬鹿げた調子で有仰るのは、ほんとに止して下さいまし』。

彼女はさう云つて、夫の方へまともにその瞳を向けた。

彼女は送るともなく、其の後の幾日かを幽にものをためたやうな思ひで、過してゐた。

それは曇つたりかげつたりする、一月の寒い日であつたが、彼女が庭先きで箒を手に、さゝやかな植込みの落葉など、掻き出してゐると、陽かげにあるにかゝはらず、ふとバラ〳〵と屋根に音がして、米粒ほどの霰(あられ)が落ちてきた。彼女の足元や手元にも、その眞白な可憐な結晶體は、コロコロと踊るやうに降り亂れた。

友子はしばらく、その美しい自然の手品みたいな造物に、驚ろいて見とれてゐたが、數分間の後には、それが細かい雨を伴つて、次第にかき消すやうに失くなつて行つた。そしてその代りに、雨の樋を傳ふ點滴の音は、だん〳〵盛んになつて來た。

彼女は仕方がないので、掃除を半ばにして座敷にかへらうとすると、ふと駈け込むやうに門の中に入つてきた人があつた。見ると瀬津であつた。

『傘を借してくれませんか』と、彼れはいきなり云つた。

僅か一月あまり見ないうちに、彼れは意外に窶れてゐた。頬の肉などもひどく落ち込んでゐるし、多分土いぢりのまゝの仕事着でもあらうか、ゆきの短かい筒袖をきて、細い帯を胴中へくる〳〵とまきつけて居るのを見ても、元氣らしい處はなかつた。

いつぞや夫の話した『病後』ではなからうか。と友子はふと彼れを見る拍子に思つたが、彼女は何も云はずに、そのまゝ家の中へ驅け込んだ。

傘をもつて再び玄關口へ引き返してくると、彼れはその土間のところで、脊を屈めながら、しきりに足元を苦にして居た。

『どうなさいました』と、彼女は云つた。すると彼れは眞直ぐに立ちなほりながら、殆んど素氣なく云つた。

『下駄の緒が駄目になつた。あなた何か借してくれませんか。』

『えゝ、よござんすとも』と、友子は突嗟に氣輕く答へたが、ふと夫の下駄を彼れに與へるといふことを、憚らねばならないやうに思つた。何故であらう。彼女はあの苦い、不快を思はせる夫の言葉を思ひ出したからであつた。

『ではわたし、直して上げませうか』。

彼女は自分としては、然うすることが一番當を得てゐるやうに思つた。彼れの不自由をそのまゝ見過さねばならないほどの理由がない限りは、彼女は然うしてやらねば氣が濟まなかつた。で、友子は早速紐や鋏などを持ち出して、門口につくなんだが、時折り手にすることもある子供たちのとは違つて、その下駄は妙に緒締めの凹みが深くて、よく出來上らなかつた。

それでもどうやら一時の間には合ひさうに紐を結んで、友子は瀨津にそれを渡さうとすると、すぐ傍らに彼れの受取る聲がした。

『ありがたう』と、彼れは改めて例のあの強い瞳を向けながら、輕く頭を垂げた。

『あなたは黒い帯をしめてきますね、それをすると、良いお母さんに見えますよ』。

彼れは更らに少し笑ひながら、然う云つた。

友子は何故かそれをきくと、祕かに不快を感じた。今まであの下駄にかゝづつてゐた間を、あの不氣味な瞳は自分の背後に注がれてゐたのではなかつたらうか。

そのとき彼女の胸の中には、思ひがけない苦しい考へが、一時にまき返つて來た。彼れはもしかすると自分に下駄の修繕などを託して、そして其まにひそかな優越を感じてゐるのではなからうか。恰かもある種のしもべの如く、奴婢のごとく、自分は思はぬ心を強いられてゐたものではなかつたか、斯うした疑ひに立つてみると、彼女は一時に矢のやうな鋭どい自嘲に驅り立てられた。友子は殆んど泣かんばかりに悄として彼れの前に彳んでゐた。

『僕、今日は××園つて云ふ花屋へ來たんですがね、あなたんとこは、何時も歸りはいつごろ?』と、瀬津は云つた。

『此のごろは日の暮れないうちです』と、友子は思はず素氣ない聲になつて云つた。

『さうか、では………歸りに寄るからと、然う云つてをいて下さい』。

彼れは然う云ひながら、なほちよつとの間寂しさうに友子の眼顔を見てゐたが、軈て袂を擦ぐやうにして、また驅け足で出て行つてしまつた。

友子は座敷へかへると、彼れ是れ夕方に近いので、勝手口の用事に立つて行つた。此の日になると、彼女は一層今夜の瀬津との會見に心急かれた。思ひなしか斯う云ふ心持ちからは、勝手元の仕事も、割合ひで手早くはかどつた。

彼女は今夜この、何掩ふところなくありのまゝに振舞ふと決心した。そして彼女は場合によつては彼れのために、また夫のために、自分がどういふ息苦しい立場に置かれようとも、此の決心はひるがへすまいと思つた。たゞ何處までも自分の心持ちを、曖昧に置くことはたえがたかつた。

彼女は斯う思ひつゞけてゐるとき、ふと料理用の卵子の不足してゐる事に氣づき、外に買ひに出かけた。彼女は幼兒たちに留守をあづけ、斯うして只管家事に急ぐ一方には、思ひ亂れて足元も地につかぬ思ひがした。考へてみれば、あゝは思ひ立つたものの瀬津にしろ夫にしろ餘りに慘めだといふ氣がした。

彼れらは必らず自分の斯うしたありのまゝの吐露によつて、悲しい破目に陷らずにはゐないであらう、一方は幻滅に、一方は不信と疑惑とに、そしてそれは友子自身にしても、自らを正直に振舞ふとしてあがなふところの、すべてではないか。

彼女はどうなり行く結果だらうと思ふために、眼先が暗くなるやうに思つた。そしてこのとき、友子自身もいかに自分の心がゆるみ、不快と混亂とがいかに、一層深められたかが解るやうだつた。

彼女は自らを罵しり且嘲りながら、道を急いだ。

そのとき恐らく彼の女の足は、實際に辿々しくよろめいたかもしれない。彼女は殆んどぼんやりした樣子をして、ある店頭にたち、買物を果した。

もろい買物の包みを抱へて、友子は急ぎ足で幼ない者の待つ我家の方へ歸らうとする時、ふと瀬津に相違ない人か、二人の男の兒を連れた婦人と連れ立つて、前の方に歩いて行く後姿を眼にした。

友子はそれによつて思はず歩みを止めるほどの、衝撃を受けた。あの女の人はもしかすると、彼れの妻女ではなからうか。そしてあの男の兒たちが、その子供たちではなからうか、さう思へば、相見てから彼れ是れ七八年も時を距てて居ながら、それが、さながらの彼等であるやうに思つた。友子は然う思ふと、我れを忘れてその一行の方へ駈け寄つて行かうとした。

が、同時に何時かの妻女との最後の會見の印象が、ツと頭を掠めて行つた。そこには、ぢろりとした冷やかな彼女の一瞥が、未だ頭裡のどこかに忘れずにあつた。友子はなんとなくそれを思へば、近寄るのも躊躇された。

彼等はある停留場のところで、ひと塊になつて、立ち止まつた。妻女らしい人は一聲二聲瀬津の方へ話しかけた。すると少し首をまげて耳を傾けた彼れの唇も、動いたらしかつた。

友子はある寫眞店の狹い小路に、わけもなく身をかはした。彼女はさうしたことが、直ぐ餘りに自分が怯懦だといふ氣がした。何故こんな些細な考へに囚はれて、自分は彼女を避けるのであらうか。何事を置いても、何故現在の正直な

心持ちを、自分は遂行し能はぬのだらうか。彼女は斯う此處でも自分を鞭ちながら、でも直ぐさまそこを動いて行くでもなかつた。

そのうちに彼等の居るあたりから、電車の動き出すけはいがした。彼女はそこで、今眼の前を行かふとする、電車の窓々を一つ一つ眺め送つた。しかし彼等一行とも思はれる人の影は、そこにはなかつた。

けれども彼等は行き過ぎて了つたのであらうかと思つて、友子は再び通りへ出て見た。すると思ひがけなく、あの妻女と子供たちとが、こちらを向いて足早やに歩いてくる處であつた。瀨津は居なかつた。

友子は最早ためらうことはできなかつた。

『ごめん下さい』と、彼女は二三間も小走りに追ひかけながら、彼女の方へ行つた。

『あなたは瀨津さんの奥さんではございませんか、わたし山邊ですの』

呼びとめられた彼女は、不意を打たれたやうに、ちよつと歩みを止めて、まじ〱と友子の方を見た。そこには彼女の前に、その昔よく笑ひ、よく話し、快活そのものであつたやうな友子の姿が、現在一個の年老いた、影うすい女になつて立つて居た。あの人の心を無視した女……、さうした記憶が、彼女の眼元に口元に、僅かにその面影を殘してゐることによつて、瀨津の妻女に甦つて來たやうであつた。

友子はまた、あの豐かであつた頬や顎が萎え衰へ、髮もうすれ、驚くばかり額に陰氣なかげをもつてきたやうな、悲しげな彼女の方を眺めた。美しい魅力のあつた彼女の大きな瞳も、どこか鋭どく、柔かみを失つてゐるやうであつた。

彼女もまた自分も、此處まで暮らして來た。友子はふと然う思つた。彼女はたゞ然う思ふ事によつて、二人が靜かに瞑目し、今一度自分にかへつて、見合ふことができたならば、直ぐにも手をとり合つて、微笑み合ふ事ができさうな、親しみと氣安さとを感じた。

『まあ山邊さん』、妻女は然う云ひながら、少しあともどりしてあの寫眞店の軒先に、子供たちを入れて、僅かな雨を避けさせた。そして或る愕ろきを噛みこたへたやうな、彼女の顏には、暗いかげが走つた。

『あなたは此方にお住ひでございましたの、まあ然うでしたか』。
『お言葉をかけるのも、どうかと思ふほど、ほんとに長いことお目にかゝりませんでしたのね』。
『わたしもすつかり、お見それするところでしたよ』と、彼女も云つた。それは友子の期待に反して、ひどく素氣なかつた。
『今日はどちらまで』と、ふとつぎ穂がなくなつて、友子は尋ねた。
『は、たくを見送つて來たんですの、此の一と月ばかり病氣をいたしましてね、醫者に止められて居るんですのに、誰もかまはずにそこらへ出かけたがるものですから』。
『瀬津さんでございますか』と云つたが、今日も今日、つひ今しがた自分のところへ寄つた彼れであつたと思ふと、友子は腑に落ちなかつた。しかし其れを云つて可いものやら、わからなくつて默つてゐた。
『奥さん、相變らずですのよ』と、彼女は默つてゐる友子に、呟くやうに云つた。『此のごろこちらの方へは、よく××園に行くと云つては出かけるのですが、ひよつとしたら、お宅へも上つたりして、ご迷惑をかけて居たのではないでせうか』。
彼女はあの昔見せたいら／＼しさを、その寂しい額に刻みながら、話しつゞけた。斯うした彼女の身邊に陽が明るく射しつけたと思ふと、またさつと潮を引くやうに、かげつて行つた。毛のやうな雨が、さら／＼としぶいて來た。
『××園と申ますしと、あのSの停留場わきにあるのでせう、私も存じて居ります』と、友子は未だ打明けて、何事も云へないやうな氣がしたので、斯う言葉を合せた。
『えゝ、その××へは只今まで參つて居りましたの、そして大丈夫だから、私にかへれ／＼つて申しますんですけれど、病人をほつても置けませんしね』。
『さうでございませうとも、ですがそんなにお惡いのですか』。
『何しろ、夜分やすめないのが、一番いけませんですの、それに醫者の云ふことを、少しもきゝませんでね、只今もその園主のKといふ友達が笑ふんですのよ、「君は花を咲かせる人ぢやなくつて、根を枯らす人」だつて。全くそんな仕事

にでも凝り過ぎて、失敗ばかりしてゐますんですのよ、まるで子供みたいですわ』。然う彼女はせか／＼と云ひつゞけながら、ふと一人の子供の方へ顔を向けた。

『ね、お父さんどうしたんでせう、あつちへ馳け出して行つたけれど、何か忘れものでもしたんだつて?』。

『うん、傘だつて、それをとりに行くつて云つてたのよ』。

その子供は半分友子の方を見ながら、さも待ちくたびれたやうに、あき／＼した聲で答へた。

『あ、さう／＼、此の傘と、今一本來がけによそさんで借りたんですつてね』。

『でも、母ちやん歸らうよ』

『あゝ歸りませうね、お父さんのことだから待つてても仕様がないわね、奥さんこの通りですの、またあすこのKさんと、話し込んでゐるんでせうよ』。

妻女は寂しさうに、友子に笑ひかけながら云つた。

『私これで失禮いたしますわ、少し寄り道もございますから』。

やがて彼女は二人の子供たちを連れて、せか／＼と、今行つた道の方へ引きかへして行つた。

素氣なく見えたその様子で、友子はちよつと見送ることとすらためらはれた。しかしどうしてもそのまゝでは別れかねた。

で、後ればせに彼等のあとについて近づいて行くと、妻女の眼は突嗟に冷たく、こちらに振り向かれた。それは人と人との間の、何か越えがたい、ひやりとする感じであつた。

しかしそばへ行けば、彼女は矢張り物を云はずにはゐられないやうにして、話し出した。

『ほんとにあなたが此處にお住ひとは、只今まで私全く思ひがけませんでしたわ』と、彼女は何故か、また新らしく同じ事をくりかへして云つた。

『その後、御主人にもお變りはありませんの』。

『えゝおかげで』と友子はうなづいた。

『私の方と云ひましたら、十年前も只今も少しも變りはありませんのよ、あのあなたの以前からご存じの、あのまゝですわ』。

彼女はそばへ行けば、ただ胸にいつぱいになつたものを、吐き出さねば居られないやうに云つた。それは孤獨な人にもち前な、あの善良を思はせる、人なつこさからであつた。妻女のためには、あるとき敵視をさへ思はせた、その人にすら、その人の多い喋舌は止まらなかつた。

『此頃はまた創作をするのだ、とか云つてましてね、しきりに考へ込んでますけれど、私あてにはして居ませんの、自分では素晴らしいものが書けさうだ、なんて云つてますが、わかるものですか、それにあの方は私が見るまでは、考へ込むほどだん〳〵惡くなつて行く一方ですよ』。

友子はさう云ふ妻女の、ある種の女らしい感情を見た。彼女はその夫が、彼れの生活を前にして考へ込むほど、彼女から遠去かつて行きでもするやうに、憤り怖れて行くやうな種類の女であるらしく思へた。友子はあの瀬津を思へば無理からぬこととは思ひながらも、今やあの十年前のあの頃の妻女を、恰も昨日のやうに再びそこに見たやうに思つた。そして彼女はこれだけの年月の歩みを思ひ、また此處まであの頃と同じ調子で、此の夫婦を離れがたくさせて居たものを思つた。そこには二人の間に、とても三者の眼などにはわからない、思ひのほか善良な強靭な、そして美しい絆があるやうにも思はれた。

雨は何時の間にか小止みになつて、時々明るい陽が、足下に落ちてきた。けれども空はどんよりとして居て、たまさか見せた蒼空の一端をも、急いで掩ひ閉さうとあせつてゐるかのやうに見えた。しかも今日も陽の落ちて行かうとする、その西の空の果てには、うづまくやうな黒雲が、氣味わるく動いてゐた。

電車は一つ二つ、彼女らの話して行く前に疾走して行つた。ふと妻子は更らにそのあとの電車のかげが見えはじめた頃、氣がついたやうに友子の方にお辭儀をした。

「では私、矢張りこれで歸ります」。
然う云ふが早いか、恰度眼の前に來た電車に先づ待ちあぐねてゐた子供たちが駈け込んだ、妻女もあとにつゞいた。そして電車はすつとそのまゝ走り過ぎて行つた。
それは餘りに素氣ない別れであつた。友子は其處に矢張り、最後に殘された冷淡を疎隔との淡い寂しさを感じて、一人とぼ〳〵と歩き出した。

友子は家へ歸つてからも、今日の思ひがけない妻女との邂逅を、それほど不思議にありえないことのやうには思へなかつた。それは神秘的な一種の、彼女の確信のやうなものであつた。人と人との間には、恰も網の目のやうに、糸につながる交錯がある。それは無限に……さう感じられた。彼女は廣い土の上に住む人間同志が、いかに近しく、また憐人であるかといふ氣がした。
斯う云ふ妙な感じは、彼女の半生を通じて、色々の機會に遭遇するごとに、深められて行つた。まるでありえないこと、まるで作り話みたいなこと、それを彼女はあまりに當然に經驗することは、屢々であつた。
全く路傍の人だと思つて、新らしくつき合ひ始めた人の友達が、又彼女の古い友達であつたといふ場合もあつた。單に用向きのために訪れて來た人が、根を探つてみれば緣つゞきのものであつたり、ふと錢湯などで落ち合つた人が、同郷のものであつたりした場合もあつた。
彼女にはそんな時、ある場合には世間を狹く、またある場合には限りなく、廣く思はれた。それはまた妙に彼女にとつては、人間生活の愛情や好惡を絕して、人々を見る眼に一種のなつかしい感情と溫かい融和とを思はせるものがあつた。で、あの妻女とあゝした冷やかな別れをしたといふことが、何故か彼女には、自分を鞭つやうな深い哀しみとなつた。
友子はさうした一方では、ある期待をもつて、其の日のたそがれを迎へた。瀨津が來るといふこと、それはまた彼女にとつては確信に近かつた。そして夜が來た。

降り降らずみだつた天氣は、夜になつてからすつかりどしや降りと變つた。それは寒氣と、云ひやうもない鬱陶しささへ伴つた。家の中は何んとなく、灯の光りも衰へたやうに、物わびしかつた。

友子は例によつて子供たち相手に、少し何時もよりは食卓などにも、注意を拂つて用意して置いたりした。

夫が歸つてきたのは、灯がついてから間もなかつた。彼れは入浴に行き、直ぐそして食卓についた。

友子は瀨津のことを云ひ出さうとしたが、止めて一緒に食事をとることにした。

『今夜はご馳走があるね』

『えゝ』と友子は答へたが、何故か氣づまりを感じた。斯ういふ夫の問ひに對しては、俄かに此の食卓も面伏せな氣になつた。

食事も濟み、そちこちして子供らも寢につかせてしまふ頃には、夜もそれほど更けたとも思へぬのに、あたりはひつそりとして來た。

『ひどい降りだな』と、夫は火鉢の傍らで新聞などひらきながら呟いた。彼れは退屈さうに溜息をついて、友子の方へ話を向けた。

『今日は別に誰れも訪ねなかつた？』。

『え、あの午後――夕方近く瀨津さんが見えたきりでしたよ』。

『うむ、それでどうした？』。

『またあとで來るなんて云つてましたが、此の雨ではどうでせうかね』。

けれどもう夜も十時近くなつて、その人はやつて來た。

『僕、傘をかへしに來た』と、彼れは、起つて行つた夫に、玄關のところでいきなり云つた。

『やつぱり序でにかへして置いた方が都合がよいと思つて、持つてきたよ』。

『だつて此の降りぢやないか』。

『いや二本あるんだ。友人のを借りてきた。かへすよ』。

彼れはまた然う云つて、そこに突立つたまんまだつた。

『まあそれはそれとして、上り給へ、今から家へ歸るんぢやないだらう』。

『いや歸るんだ』。

『しかしまあ、一寸上り給へ』。

友子は彼等の押問答を、茶の室の障子越しに聽きながら、別に立つて行くでもなかつた。彼女としては、今や瀨津に對して、自分が正直にとらうとする態度――それを思ひきはめるために、心は一途にそこに集中されて行くやうだつた。

瀨津は夫に伴はれて、例の彼女に輕い叩頭をして、座についた。

『君、先夜はどこへ行つたの、丁度××屋の前あたりに居たではないか』。

『歩いてたよ』と、彼れは云つた。彼れはそしてむづかしい顏つきをして默り込んだ。そのとき彼れのあの筒袖姿は、一層窶れをきは立たせて見せた。

友子はふと先刻の妻女との話しを思ひ出した。あれほど瀨津を氣づかひ、注意を怠らないと思はれたのに、此のうそ寒げな姿は何んといふことであらうかと怪しまれた。瀨津が拒むのであらうか、實際は妻女がかまはぬのであらうか。亦は彼れ自身の投げやりのためであらうか。

彼女はそれを思ふと、あの時彼等夫婦の間に、ある良き強靱な絆があると思はしめられたのも、あてにならないやうに思はれた。矢張り彼等の間には、お互ひにある踏みこえがたい、一線があるのではなからうか。

『瀨津さんは、どこかお惡いやうに見えますのね』と友子は云つた。

さう云ふ時彼女を彼れはじつとまともに見返した。それは彼女にとつては云ひやうもない、重苦しい自羞をさへ思はせるほどの、暗い瞳であつた。恰もそこに彼れの前にあるのは友子自身ではなく、別に何か最も愚かしい、鈍い小さな、

、生物ででもあるかのやうであつた。

『僕に何か飲むものをくれませんか』と、彼れは云つた。

『おや、君はつひぞ飲らないと思つてゐたが……、何を飲る?』

夫は怪しむやうに云つた。彼れは不安な瞳をもつて、奇怪なものでも見るやうに、瀬津の方を眺めた。

友子は起つて行つて、形ばかりの盃盤の用意にとりかゝつた。が、彼れが酒を嗜むことについては、今日の今まで少しも知らない彼女であつた。況して彼れから酒を求められること、それが友子にとつては何故か異常なことに思はれた。

最早何事が起らうとも懼れぬ、といふ自分でありながら、不安は止め度なく身内を襲つた。またしても彼女の心内には、自分の若き日の捕へがたきさま〴〵の姿が、騒然として過ぎて行つた。

そこにある、例へ一片の無拘束な言葉にしても、若さのためだと云つて、許さるべきだらうか。況してそこに彼女の夫があり、瀬津があつたとすれば、一層現在に至つて、彼等の前にそれが些細なことだと云はれるであらうか。そればかりならばまだよい何よりもそれが友子自身の現在の心に問ふて些細なことだと云はれるであらうか。

斯う思ひ亂れてくると、結局責むべきものは彼女自身であつた。彼等のいづれをも欺むき、そして自分を糊塗し掩ふてゐるところの彼女自身でなければならなかつた。

友子は一人勝手元にコトコト立ち働らきながら、此の自嘲のために、息詰るやうな思ひがした。最早そこには彼女にとつて、過去を思ふ悔いすらなかつた。たゞ彼女自身の現在の此の卑しむべき優柔と怯懦とが、今や彼女を壓倒せんばかりに、嘲けり威嚇して居るかのやうに思はれた。

やがて小さな食卓が調へられた。

『何時もつまらないものばかりです』と、友子は瀬津の方へ云つた。

しばらく無言で食卓のまはりをとり圍んだ三人の姿は、弱々しい電燈の下に、暗いかげをつくつて見えた。そのときも相變らず戸外は雨の音が激しかつた。で、却つて部屋のうちは一層靜められたやうに思はれた。

『さ、元氣よくやつてくれ給へ』と、夫は瀬津へ促した。『ばかに今夜は陰氣だね、それにいやに君も考へ込んでゐるぢやないか、どうしたんだ。』

『いやそんな事はないよ。』瀬津は斯う云ふと、ふと俄かに酒盃を手にとつて、つゞけて幾杯となく呷るやうにして飲んだ。彼れの顔は見る〳〵赤らんで行くやうであつた。

『人間も元氣が失くなつては、お了ひだと思ふね、考へ込むのもいゝが、老い込んでしまつちや駄目だ。』

夫は、瀬津の顔に漸く血色が浮んでくるのを見ると、こんな話を始めた。

『それあ然りだ』と、瀬津も直ぐ同じた。

『僕なんか、今からだつて行れと云へば、何んでもするさ。まだ將來に向つて計畫してゐる、仕事だつてもある。』

『しかし現在の君の仕事はどうだね、失敗ぢやないかね。』

『いや、失敗だつていゝさ、いゝことはないが仕方がないさ、僕は僕の信ずる通りにやつてゐるんだから』

『どうも相變らずだな、矢張り今も激しいな』と、夫は彼れの酒盃を滿たして遣りながら面白さうに云つた『しかし君も當節では、そんなに人と喧嘩なんかやつてみよう、つて云ふやうな氣はないだらう。』

『何時だつて喧嘩なんかする氣はなかつたよ』と、瀬津は苦笑した。『けれども僕は許しがたいと思ふ人間にむかつてはとるべき態度は一つだ。』

『それはどういふことでせう』と、そこへ友子も口を挾んだ『何故人は、どういふ事があつたにしろ、喧嘩をしたり、爭つたりしなければならないのでせうねえ、若し全然無理解同志の人間ならば、靜かに別々になつたつていゝと思はれますわ。』

瀬津はふと然う云ふ友子の方へ、强い瞳をはしらせた。が忽ち彼女の言葉などは意にも介さないやうにして、彼れの話をつゞけた。

『ある場合には敵になるか味方になるか、僕はそのどつちかを撰ぶよ。親切らしく見せかけておいて、良い子になつて

ゐるような奴は、殊に僕はきらいだ。女でもそんな奴はいやだね。』

斯うして話し合つてゐるうちにも、彼れの酒盃は可成り重ねられて行つた、酒に弱いらしい彼れの呼吸は、だん〳〵苦しげに喘えいで行くやうに見えた。

『しかし今の世の中を見給へ、君のやうに云ふその戰ひだつて、今の人間には火の遠吠えみたいなものさ、第一好い加減でもあるし、生温くもあるよ、早く云へばお祭りさはぎでね。』

『さうかしら……。しかしまだないよりはいゝね』と、瀬津は喘ぎながら云つた。

『僕には、人間がいやに行ひすましたり、生悟つたりするのが、實にいやなんだ』と、彼れは話しつゞけた。『女にもそんなのが、あるね。誰れにも愛されたいと云ふ型だ。あの親切らしい殼をかぶつて、そして腹には驚くべき臓物を、たくはへてゐる人間だ。』

『しかし君の見方も、少し偏見らしいよ』と、夫は云つた。

『いやそんな事はない、低下だ、一切の人間の低下だ。』

そんな事を云つてゐるうちに、突然瀬津は上半身を食卓の縁から辷らせるやうにして、疊の上に横倒しになつてしまつた。

苦しげな呼吸が、激しく彼れの胸元を揺つた。そして酒のために赤く痛み燃つた瞳のなかには、むしろ悲しみにたへないやうな、寂しいかげが見えた。

一體これは何事だ、といふやうにふと怪しみを深めた夫は、友子の方を見た。彼女の胸は思はずどき〳〵と鳴らねばならなかつた。

『あなたのそんなお嫌ひな人間が、どこかに居るんでせうか』と友子は、非常に悲しい、そして落ち目な位置に立たせられた自分を思つて、夫の凝視を反らしながら、瀬津の方へ云つた。

『何んですかそんなにわけの解らない事を云はないで、端的に有仰つて下さい、私は實の事を云へば、あなたの此家へ

いらつしやる時から、怖れてゐました。何んのために來たのだらうとも思ひました。けれど私には解りませんでした。本當の事を云へば、今のあなたの、變なものの云ひ方は、乾度私に向つてだらうと思ひますが……。』

『卑怯もの！』と、瀨津は突然叫んだ。

ふと友子の胸には、始めてこの瀨津に向つて、對人間的の激しい憎惡が、込み上げて來た。それは實に激しく、彼女の自制を絕したものであつた。

『わかりましたわ』と、友子はやつと自分を制へ、聲を制へて云つた。『あなたが何んのために、今更らやつて來たか、私は知つてゐます、……。けれど私は決して、なほ大きな過ちにつかふとは、思つてゐないのです。……私も今となつては、端的に云ひますけれども、そんな風なあなたの態度を、私はきらひです。餘りばか〳〵しいぢやありませんか。』

すると瀨津は此の言葉に、突然起きなほつた。彼れの瞳には今や、憎惡さへも失せて、激しい嘲笑と、冷罵とが浮んでゐた。彼れはじつと唇をかみしめながら、額ごしに彼女を憎さげにみつめた。

先刻から、二人の方をと云ふよりは、友の面貌に食ひ入るやうに瞳を据えてゐた夫は、此の時叫んだ。

『友子、一體どうしたんだ、お前は僕に何か秘密があるんだらう？。』

斯う云はれた時、寧ろ友子といふよりも、瀨津の顏に非常なショックが見えた。彼れは殆んど射るやうな好奇的な眼で、友子をみつめた。

友子は息をのんだ。彼女は恐ろしい障壁をじつと堅くさせた。

けれども彼女の夫が今や眼の前に、自分の口の開かれるのをじつと待ちかまへてゐるのを見ると、彼女は思はずためらはずにはゐられなかつた。

そこには寸分も假借しないところの、恐らくどんな小さな過ちをも、許しがたく思つてゐるやうな、鋭どい夫の瞳があつた。

絕えず此の日まで、自分に完璧を期してゐた彼れ！、さう思ふと友子は、思はず刺されるやうな胸の痛みを感じた。

『さあ云へ！』と、なほ斯うして口籠つてゐる友子を見ると、夫は促すやうに鋭どく云つた。

『云ひます』と、友子は今一度苦しく息を詰めた。

『私は、ずつと以前に、此のかたを愛してゐるのではないか？と思つたことがあります。』

彼女はやつとこれだけを云ひきつた。しかも非常に長い間を費してこれだけ云ひきつたと思ふと、ふと熱汗が身内に湧き上るやうに思つた。どんなにそれは重くたえがたいほど苦しい言葉であつたか！。さながらにガチガチと肉を踏みきしるやうな、重たい歯車が、彼女の身内を駈け通つた。

『おゝよし、みんな云ひ給へ』と、そのとき瀬津が叫ぶやうに、云つた。

『云ひます』と、友子は更らに息をのんだ。

『私はあなたにではなく、夫に云ふのです。……ほんとに許して下さい……、私は此の方に、今一日早く知ることができたならば――と云つた事もあります、ほんとにこんな事まで、云ひました。』

友子はそれを云ふと、そこに眼の前に、恐ろしく大きな奇怪な姿をして、夫が迫つてくるやうな氣がした。彼女は最早自分の力では、彼れのまへに默ることができなかつた。彼女は息をのみ／＼つゞけた。

『けれど此のかたは、今になつて、そんな、そんなとりとめもない頃の私を責めに來たのです、私は怖い！……。』

彼女は斯う云ひさして、最早こらえかねたやうに身をふるはせながら、夫の前に身を投げ出さうとした。

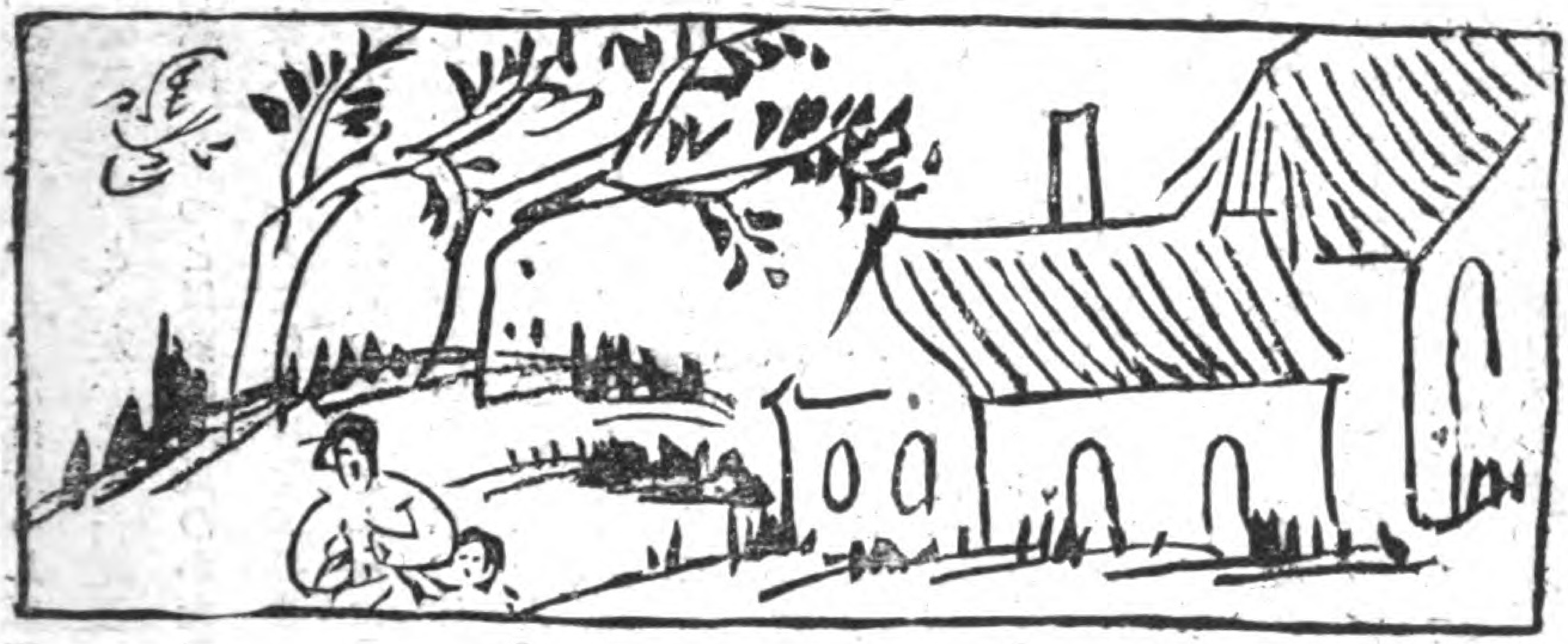
と、思ひがけなくそのとき、彼女の頬の眞上に、ぴしツと激しい打擲が落ちてきた。二度……三度……。

『打ち玉へ！』といふ瀬津の聲が、その物音の中に交つてきこえた。『僕のかはりに打ち給へ、もつと、もつと』。

夫の逞しい腕は、冷灰な鐵のやうに、そして暴戾な奇怪なばねのやうに、しばらく彼女の眼を脅かしつゞけた。

けれど此の數度の激しい打擲の下で、ふと友子ははつきりと、自分を感じた。

そこには最早瀬津もなかつた。夫もなかつた。彼女は全く自分自身のために、その打擲に屈して、一時に自由な伸々とした天地に、跳り出るやうな、火やかさを感じた。



指

廣津和郎

夕方店をしまつて、東京驛から電車に乘る前に、彼は夕刊を買ふ癖があつた。

『三枚五錢――』

さう云ひながら、驛の入口で、澤山の子供の夕刊賣達が、彼のまはりを取りかこんで來る。彼はそこでいつも買ふ事にしてゐた。

その中に、或夕方、彼がいつものやうに、自分の前に一番先に夕刊をさし出したものから買つてゐると、

『ちえツ、俺から買つてくんないのかなあ、氣の利かねえ小父さんだなあ。俺のは同じ夕刊でも、特別上等の別誂へなんだ！』そんな事を側で云つてゐる子供があつた。

彼はそつちを振向いて見ると、十一二の頬の赤い、明るい、快活な顏をした子供が、にこにこ笑ひながら、彼の顏を見て立つてゐた。ませた冗談を云つた時に子供がよくする、一寸首を縮めるあの恰好をしながら、それでも人見知りをしないのび

のびした様子で、にこにこ笑ひながら立つてゐた。

彼は思はずその子供の顏を見て微笑んだ。

『よしよし、明日からお前のを買つてやるよ』

『ああ、買つてお呉れよ、屹度だよ、小父さん』

子供は人なつこさうに彼の微笑に應じて頬笑みながら、念を押すやうに云つた。

彼はそのまま別に氣にも止めずにゐたが、その翌日は、彼が店から歸りがけに、東京驛前に來ると、その子供は他の子供達を追ひ拔けて、最初に彼の前に駈けて來た。

『小父さん、今日は約束だよ』

『よしよし』彼はかう答へて、その子供の手から夕刊を買つた。

その時から彼は、その子供から夕刊を買ふ習慣になつた。

それは見れば見る程、怜悧な、明るい、快活な子供だつた。顏付も、目鼻立が整ひ、敏捷な、併し人なつこい眼をしてゐて、何處かに品もある。他の子供達を追ひ拔けて、逸早く通行人の側に走りよつて、新聞をさし出す時の機敏さには、頭の好い子供を見る時に感ずる愉快を感じさせられる。

その時分、彼の店はかなりの難關に陷つてゐた。それは彼と彼の知人の二人がやつてゐる小さな合名會社で、Kビルディングの中にその店があつた。雜貨の輸入が本來の商賣であつたが、ふとしたきつかけで、滿州の方から或國の軍隊が使つてゐた荷物自動車を三十臺程引受けた。それはかなり立派な好い機械だつた。新しく注文すれば、一臺七千五百圓も取られる位のものだつた。それが一臺三千圓で手に入つたので、捨賣りにしても四千圓には賣れる、そんな計算で全

部引取つてしまつたものだつた。ところが、小さい荷物自働車ならば、買手がいくらもあるが、それが二噸半だつたので、此東京のやうな道路には不向きな事が直ぐ解つた。買手が少しもつかなかつた。そこで思わくがすつかり外れて、彼の店はかなりの苦境に陥つてしまつたのだつた。何しろ倉敷料ばかりでも、月に千圓近くも取られると云ふ形だつたので。

そんな事が彼の頭にいつぱいだつた。もともと彼の發意で引取つたものではなく、彼と合名會社をやつてゐる今一人の男の發意で引取つたものであるだけに、彼は一層殘念な事をしたやうな氣がした。もつとも、よく調べもしないで、贊成してしまつた彼も、十分迂濶であつたし、その迂濶の責任は負はなければならなかつたけれども。――そんな風で彼は考へたり、いらいらしたりしてゐる事が多かつた。

そんな時、

『小父さん、今日はどうしたんだい？　素敵に考へ事をしてゐるぢやないか』と例の子供の夕刊賣の聲に、ふと我に歸されて、知らない間に、自分が東京驛の方へ店から歸りかけてゐたのだと云ふことに、氣がつく事などがあつた。

『夕刊買つてお呉れよう、先刻から新聞をさしつけてゐるのに、小父さん、今日は知らん顔をしてゐるのだもの』

『さうかい、それは惡かつたね。よし、買つてやらう』彼は急に元氣な聲を出して、かう云つて、ポケツトから金を出した。

『ありがたうよ』子供はいつものやうににこにこ笑ひながら、新聞を彼の手に渡すと、『小父さん、悲觀しちや駄目だぜ』さうませた口の利き方をして、そして身體の三分の一位ある新聞綴を小腕に抱へながら、すたすたと他の通行人の方へ駈け出して行つてしまつた。

彼は自然と頰笑まずにゐられなかつた。

『なるほど、悲觀しちや駄目だ』不思議な程明るい氣持になつて、彼は獨語した。『あの子供の云ふ通りだ。悲觀しちや駄目だ』

彼は自分の表情が、それ程屈托してゐるやうに見えたのか知らん、と今更のやうに反省させられる氣がした。

彼はその子供が、そんな事があつてから一層好きになつた。どんなに忙しい場合でも、頭の中が店のいろいろの事でいつぱいになつてゐる場合でも、その子供の顏を見ると、彼は自然に微笑を浮べて見せずにゐられなくなつた。

『あの子供は不思議に自分の心持を轉換させて呉れる——可愛らしい慰安者だ……』彼はこんな風に思つたりした。

その中に、月日がだんだん經つて行つた。その子供の顏を見覺えるやうになつてから、三四ケ月經つた。そこに例の九月一日の地震——大正十二年九月一日のあの大地震が來たのである。

その地震の時、彼は丁度Kビルデイングの店にゐた。轟々と云ふ音響と、壁土の崩壞から濛々たる煙の中に、彼は椅子や卓子と一緒に、三十分ばかり轉げまはつた。震動が一時おちついた時に、人々が泣き叫びながら我先に外へ出やうとする廊下や階段を押しつ押されつしながら、彼は東京驛前の廣場に出た。Lビルデイングの物凄い倒壞、MビルデイングやYビルデイングやそれから彼の店のあるKビルデイングや、さう云ふ丸の内の大ビルデイングの外郭が、大破損してゐる光景を、彼は人々と同じやうに夢心地でながめた。

彼は中野の自分の家まで歩いて行つた。家も家族もみんな無事だつた。結婚してまだ間もない彼の妻は、近所の人々と一緒に、畑の中に避難してゐたが、彼の顏を見ると、『まあ御無事で』さう云つて、人前も憚からず、喜し泣きに泣き崩れたりした。

だが、それから引續いての三日三晩の東京中の大火事、大都會の慘憺たる破滅――彼はその煙の中に忽ごしらへした小屋の中に、近所の人々と一緒に暮しながら、無我無中だつた。一體何がどうなるかが、他の人と同じやうに解らなかつた。彼は例の荷物自働車の事を考へた。それは三ケ月の間に二台賣れた。そして三台は或新聞社に貸してあつた。それだから二十五台は、深川の或るところに未だそのまゝ置いてあつたのだが、地震から一週間して、それがみんな燒けてしまつた事が解つて來た。

彼は或日中野から、半ズボンにシャツに足袋はだしと云ふ、あの震災當時のいでたちで、その自働車の預けてあつた深川の倉庫まで見に行つた。人々の黒焦になつた屍體がぽつぽつと横たはつてゐる燒けた町々を通つて、何處が何處やら總ての目印がなくなつてしまつたものだから、一つところを右へ行つたり左へ行つたりして、やつとの事でその倉庫のあつたところに辿りついて見ると、二十五台の荷物自働車は、鐵が半ば以上どろどろに溶けながら、焦土の中に、まるで馬の背骨が並んでゐるやうな恰好に並んでゐた。

それを見ながら、彼は暫くぼんやりしてゐた。

『併し荷物自働車なんかが何だ！　今はそんな問題ではない』

彼は確かに昂奮してゐた。震災當時の一般の人々と同じやうに、人間の命以外の總ての事は、みんな些末だと云つた、あの感じが胸に强かつた。損害と云へば無論損害だが、併しその三十台の荷物自働車は、未だ全部の金を先方に渡してはない。損害と云つても嚴密に云へば拂つただけの金だけである。それが今かうして品物が燒けてしまつた以上は、先方だつてもう後の金を請求しようがあるまい。

併しまたそれだけの損害でも、小さな合資會社には隨分の傷手だつた。荷物自働車問題が起つてから、無理に無理を

し拔いてゐた。苦しい負債で八方ふさがつてゐた。

『だが、地震前の借金は……』と一般の人々が當時さう思つたやうに、彼も輕く思つてしまへるものだと思つてゐた。

そこに持つて來て、例のモラトリアム。——彼はこれが長く續く事をどんなに望んだか知れなかつた。

彼の協同者は彼よりももつと若い青年だつたが、その青年が彼をたづねて來たのは、九月の二十日に近かつた。

二人は顔を見合せて、わつはと笑ひ合つた。

その青年は下町の方に住んでゐたので、今度の地震で小さな妹を一人失つてゐた。母と三人暮しだつたその青年は、母を仙臺の方の親戚に預けるために歸郷して、そして再び出京して來たのであつた。

『これで僕は足手纏ひなく働ける！』そんな事を云ひながら、未だ子供氣の拔けない頬の赤い顔を、崩して無理に笑つた。

店の復興と云ふ事について、併し二人は何の成算もなかつた。

『兎に角、お互ひにやらうぢやないか。此處を一つふん張つて、しつかりやらうぢやないか』

そんな事を、氣がつまつた沈默が二人の間に來ると、どちらかが、思ひ出したやうに附元氣に云つた。

結局二人は何とかして金をこしらへなければならなかつた。そのために各自（めいめい）が最善の努力をする事になつた。

經濟界の復活の曙光は意外に早く見えて來た。恐らく今年いつぱいは續くであらうと思はれた支拂延期令（モラトリアム）も、一ケ月で撤廢される事になつた。——もう愚圖々々してはゐられなかつた。

十月の二日に、彼は故郷に歸つて行つた。到底駄目だと思つてゐた金策が、七八分通り意外にも實現された。彼は直ぐそれを持つて東京に戻つて來た。

東海道線が通じないので、淸水から横濱行きの船に乘つたが、その中で彼は向島の方の革屋と乘合せた。

それが彼の幸運だつた。現金を欲しがつてゐた革屋は、坪二十二錢も地震前にしたセーター革を、坪十一錢で手放す約束を彼にしてしまつた。

『これで何かがやれる！』彼はその革をどうしようと云ふ豫想のつかない前から、妙に直覺的にそれに依つて儲けられると云ふ氣が胸に强く來た。

東京に歸ると、彼は手袋工場を駈けまはつた。手內職の廣告を新聞に出した……

彼と彼の協同者の靑年とはそれから一生懸命に働いた。

そしてその仕事はめきめきと成功して行つた。製品の捌け口は、震災地ばかりではなかつた。東北地方、北海道、そんな方面からの注文も每日のやうに、彼の店に來た。

『何が幸福になるか解らない』とんとん拍子にうまく仕事の行くのを眺めながら、彼は幾度も心の中で呟いた。つい一ケ月前まで、全然見當のつかなかつた混沌の中から、どうして自分がかうも早く乘り出せたか、思へば總てが偶然の幸福だつたやうな氣がした。

總てが現金取引の震災後の事なので、品物が出來上れば、直ぐそれは金だつた。而も七割位の利益のついた金だつた。

彼と協同者とは、その幸運を語り合つては感激した。

大晦日の晩に、此二人の協同者がＫビルディングの店を出たのは、もう十一時近かつた。

恐れてゐた大晦日と云ふ難關も、非常に易々と通り越せた。朝から晩まで、いろいろの事に眼がまはる忙しさを經な

から、二人は少しも疲れてゐなかつた。

『どうだい、少し散歩しようぢやないか。僕は今晩ほど嬉しい晩はないんだ。今年の最後の祝盃――我が△△會社の復興を兼ねた祝盃を、何處かで擧げようぢやないか』

若い協同者は、とてもぢつとしてはゐられないと云つたやうな調子で云つた。

『ああ、さうしよう。今晩は夜通し飲んだつて構はないよ。――そして歸りには僕のところに來給へ。君は獨身者だから何處に行つたつて差支へないぢやないか。明日は僕のところで一緒に正月をしよう』

二人は鍛治橋から第一相互の前に出て、そこから銀座通の方へ歩いて行つた。

銀座の復活は眼覺ましかつた。十二月の初旬に銀座を見た人は無論の事、たとひ十二月の二十五日に銀座を通つた人でも、大晦日に此やうに銀座が復活してゐようとは思ひも寄らなかつたらうと思はれる程の完全な復活だつた。バラヲクはすつかり立揃ひ、何處に地震があつたかと思はれるやうに總ての裝ひが出來上つて、夜店の並んだ人道には、身動きも出來ないやうに人々が歩いてゐる。そして何處とも知れず人の心を湧き立たせるやうな活氣が溢れてゐる。

京橋の橋の上から、空をぼつと薄赤く染めてゐる程の銀座のまばゆい電燈と雜閙とを見た時、

『おゝ！』二人は思はずこんな風に叫んだ程だつた。

『愉快だね』

『ああ、愉快だね。九月のあの廢墟のやうな姿を思ひ出すと、實際考無量だね』

『ああ、僕は涙が出て來るよ』と若い協同者は實際に涙が出かかつてゐさうな感激した聲で云つた。『僕はよくさう思ふんだよ。あすこに立つてゐる交番の巡査ね、あの巡査にその感想を語らせたら、隨分それこそ考無量だらうと思ふんだ

よ。あの九月以來、毎日々々こんな風な銀座が出來上るまで、ぢつと見守つてゐた巡査に語らせたら……』

京橋の橋の畔の交番の前には、眞黒な服に眞黒な外套を著た巡査が、ぽつねんと一人、銀座通の方を向きたがら立つてゐた。寒いと見えて、時々靴をこつこつと踏み鳴らしてゐた。

『なるほどね』彼もそれを見ると、友の言葉に、思はず頬笑まずにゐられなかつた。

○町の角のLカツフエに二人は這入つて行つた。二階建のバラツクと云はれない位に立派なそのLカツフエの建物が建つたのも、極最近の事だつた。かなりの廣さのある土間に置かれた卓子は、何處も此處も客でいつぱいだつた。

――一隅にひかへた音樂隊が、酒や珈琲を飲んでゐる人々の心持を、わくわくする程浮立たせてゐた。

二人は自分達の席を見つけるまで、暫く佇んでゐなければならなかつた。

『僕は强い方がいいな。うんと醉つて見たいからな』若い協同者は、やつとの事で一つの卓子が空くと、それに腰かけながら、かう云つて笑つた。ウヰスキイがいゝ。君だつて今晩は飲んでもいゝだらう』

『ああ、飲むとも』と酒の飲めない彼も、快く云つた。『マンハツタン、カクテエル位ならつき合へさうだよ』

『ほんたうを云ふと、先づ三鞭酒が抜きたいところだがね。餘り嬉しがるのも少々恥しいからね、近邊の人達に……』

二人はめいめいのコツプが來ると、かちりとそれをかち合はせて、顔を見合はせながら頬笑み合つた。

二人の話はいつもする以外に出なかつた。地震以後、何も彼もが譯が解らなかつた時分の事、もう二人の合名會社は到底立直る望がなささうに思はれた事、それがどうしてこんなに早く立直つたかと云ふ事、而も心配し切つてゐた歳末の難關が、如何に樂に、安々と過せたかと云ふ事……かう云ふ度々繰返された話ばかりが何度でも懲りずに二人の唇に上つた。そして繰返される度にその話は新しく、繰返される度に二人は生々として行つた。

『來年は素敵だぞ。來年は！』

マッハッタン・カクテエルを三杯立て續けて飲んだ彼は、もうすつかり醉つてゐた。日本のセーター革では碌なものは出來ないが、亞米利加に注文した革が這入つて來れゝば、どんなに上等なものが出來るかと云ふ事を、彼は年少の友達に向つて、熱心に說いてゐた。彼の計畫ではそれで春著のオオバアを作るつもりだつた。レエンコート兼用の春著のオオバアを。

『愉快、愉快！』と若い協同者はコップでこつこつと卓子を叩きながら、大聲に叫んだ。『そして三越、白木屋から注文が來たら、三越特製、白木特製と云ふマークだけつけてやりや何の事はない！　愉快々々！』

この飽く事を知らない話を、杯を重ねる度に、二人は益々熱心になつて、喋り合つて、感激し合つて、昂奮し合つてゐた。

近邊の卓子の人達もみんな醉つてゐた。

『愉快々々！』とこつちで云ふと、

『さうだ、愉快だ愉快だ！』何處かでこんな風にそれに應じて叫んでゐる男があつた。

『こんな愉快な大晦日はない。地震後の大晦日、生き殘つたものの大晦日！』と遠方の方でから叫んだ男もあつた。

『さうだ、生き殘つたものの大晦日、違えねえ！』二人の側にたつた一人で腰かけて、さつきからチビリチビリと飲んでゐた五十位の請負師風の男は、突然叫んで、あつははと一人で大きな聲を出して笑つた。

酒場の上の時計が十二時を指すと、いきなり外國人の一團が、彼等からずつと離れたところで立上つて、何やら歌ひそれに釣られて、近邊の者達も、はつははと大きな聲で笑つた。

ながら踊り出した。その中の一人が酒場の台の上に飛び上つて、その踊の音頭を取り出した。その踊は譯の解らない踊だつたが、快活で元氣があつて、とても愉快な踊だつた。ステツキを持つて、歌に合はせながらぴよいぴよいと空中に飛び上つて、そして最後にヒツヒツと云ひながら、そのステツキを三四度振る……そんな踊だつた。

踊が終るとその外國人達は、方々の卓子にゐる日本人達に握手をしてまはつた。『ハツピイ、ニユウ、イヤア、おめでたう』ハツピイ、ニユウ、イヤア、おめでたう』こんな風に云ひながら、順々に握手をしてまはつた。その有様にカツフエ中が拍手した。

それが一層人々を浮き立たせた。

『ハツピイ、ニユウ、イヤア、おめでたう』

『ハツピイ、ニユウ、イヤア、おめでたう』

しまひには日本人も外國人もなかつた。知つてゐる人も知らない人もなかつた。向う此方で握手し合つては、『おめでたう、おめでたう』を連發してゐた。

二人の協同者がそこを出た時には、もう二時も過ぎてゐた。ウヰスキイをめちやくちやに飲んだ若者は、もうすつかり正體を失つて、足がひよろひろしてゐた。『おつとあぶない、おつとあぶない！』彼は兩手を擴げて、それをかばふやうにしながら、絕えず口でかう呟いて、友の後からついて行つた。さういふ彼自身も十分に醉つてゐた。

時々若者は立止つて、いきなり兩手を擧げて萬歲と叫んだ。さうすると彼も萬歲と叫んだ。銀座通は、さすがに少し人足が減つてゐた。それでも未だ十分賑かだつたが。

『數寄屋橋まで行かう、數寄屋橋まで行かう。數寄屋橋からタクシイに乘らう！』と彼は友達の後から押して步きなが

らから叫んだ。そして二人ともよろよろしながら、尾張町の角から一二間數寄屋橋の方へ行きかけた。

『小父さん、其辺に好い機嫌ぢやないか！』突然かう呼びかけたものがあつた。彼は聞いた事のある聲だと云ふ氣がした。そこで振向いて見た。

道端に薄暗い蠟燭をともして、一人の子供が蜜柑を賣つてゐた。澤山の蜜柑を並べる台もないと見えて、五つ六つの箱を並べて、その中から摑み出して賣つてゐるやうな貧しい夜店だつた。その子供の側には、その母親らしい四十五六の眼のしよぼしよぼした女が、行火をかかへてぽつねんと坐つてゐた。

『小父さん、あたいだよ』

子供はにこにこ笑ひながら、快活に云つた。

彼はその顔を見た。それは東京驛の前で始終夕刊を買つたあの新聞賣の子供だつた。

『ああ、お前か！』と彼は突然の邂逅にびつくりして叫んだ。『どうしたい、その後は？』

彼は地震以後、すつかり此子供の事を忘れてゐた。さう云へば、あの後東京驛の入口で此子供が彼を呼ばなかつた。そんな事さへ、不思議にも何とも思はなかつた程、彼は自分の忙がしさに紛れて、此子供の事を忘れてゐた。

『小父さん、蜜柑買つてお呉れよう、殘つて困つちやつてるんだよ』と子供が云つた。いつも夕刊を賣る時のあの調子だつた。『負けとくぜ』

『よしよし、買つてやるとも。』さう云ひながら、彼はポッケットに手を突つ込んで、札を摑み出して、それを子供の前に投げ出した『さあ。だけど、蜜柑は持つて行くのが大變だから預けて置から……』

彼は前を見ると、彼の友が五六間先の電信柱に頭をもたせて、もどしてでもゐるやうに見えたので、それが氣が氣で

ないので、そのまま歩き出した。

『それぢや、好い年をお取り。又來年會はうよ』振返りながら、彼はかう云つた。

二三間行きかけると、

『小父さん！』と云ひながら、その子供が追つかけて來た。『小父さん、こんなに貰つちや濟まないよ。間違ひぢやないのかい。阿母さんが濟まないからお返ししておいでと云ふんだよ』

『いや、構はないんだ、構はないんだ！』彼はいくらの金を與へたものか、見ないで與へたので、知らなかつた。

『だけど、餘り多いんだもの。貰つちや濟まないよ』子供は彼の前にまはつて、彼の眼の前に金をさし上げるやうにした。それは十圓札だつた。

『いいんだよ、いいんだよ』と彼はその十圓札を見ながら云ひかけたがその時、その十圓札をつまんでゐる子供の手に氣がついた。ぎよつとした。──子供の手は小指と藥指とが無かつた。

『どうしたんだい、お前、指は？』と彼は急き込んで訊いた。夕刊を買つた時分には、確にこんな手はしてゐなかつたと思つた。

『地震だよ、地震でやられたんだよ』

『えツ、地震で？　お前の家は何處だつたんだい？』

『深川だつたんだよ』と子供は相變らずのにこにこした快活な調子で答へた。

『それぢや、下敷になつたんのかい？』

『ああ、すつかり下敷になつちやつたよ。だけど助けて貰つたんだよ。阿母さんに……！』

三ケ月前の地震が、彼はまざまざと眼の前に浮んで來る氣がした。彼の知らない間に、この子供はこんな目に會つてゐたのだ。彼は急にこの子供がいとほしくなつた。無論酒の力もあつたが、彼は子供を抱へ上げて頰ずりをしないではゐられなかつた。

『さうかい、それは氣の毒だつたね。そして阿父つあんは?』

『死んぢやつたよ。出られない中に火が來たんだよ』

『えツ、死んぢやつた? その時に?……』彼は一層感激して、力限り子供を抱きしめた。

『苦しいよ、小父さん』と子供は足搔きながら云つた。『だけれど、阿父つあんが死んで、暢々したよ。——飲んだくれで、のらくら者で仕方がなかつたんだもの』

『だつてお前……』

『うゝん、近所の人もさう云つてゐるよ。阿父つあんが生きてゐた間は、阿母さんが可哀さうだつたつて。だつて每日々々朝から阿母さんは擲られ通しだつたんだもの……甚しいよ、小父さん、もうお放しよ』

彼は子供の身體を放した。

『それぢや、お前があゝやつて阿母さんを養つてゐるんだね?』

『うん、さうだよ』と子供はそんなつまらない事を訊くなよ、とでも云つたやうな調子で云つた。『それぢや、小父さん、これ貰つて置くよ。ありがたうよ。……』

そしていそいそとしながら、小走りに母親の側に走つて行つた。彼はそれをぢつと見送つてゐた。子供が何か話すと、母親がこつちを見て、低く頭を下げるのが、蠟燭の火にぼんやり見えた。

『何と云ふ勇氣のある事だ！』彼は踵をめぐらして歩き出しながら考へた。胸が感動にいつぱいだつた。何とも云はれない涙ぐましい喜が、心の底でふるへてゐた。人間と云ふものの消げない力強さ、さう云つたものをはつきりと眼の前に見た氣がした。『どんな事があつても、子供が厭世家にならないのは素敵な事だ！』彼は胸の中の感動を、口に出してこんな風に呟きながら、電信柱にもたれてゐる友の方へ歩いて行つた。（十三年一月）

編輯を了へて

□男爵内閣が出來ても誰の罪でもない、元老や、政友會研究會を攻むるのは攻むるものの御門違ゐと云ふものだ。それは國民全體の自覺の足りないのを氣づくべきだ。われわれが社會に徹する行爲をすることによつてかかる妖怪は雲散霧消するものだ。

□近時の政界で尤もいやなのは伊東巳代治の總ての行動、清浦のだらしなきことと、義一の怪行動、研究會の利權熱がその尤なるものであつたが、それにまして、山本、中橋、床次、元田の徒が政權欲しさに脫黨したことだ。

□達磨は西、松二老に惡いし、とても天下を取れる見込が立たぬので、それよりか、この二老人に信用ある達雄を戴き、研究會と策應し、下岡一派及び、革新の一部と氣息を通じて清浦老閣を助け、今回の選擧で一與多勢を制しやうと云ふにある。

□研究會及改革派は花より團子黨で、うまく行けば政界の實勢力が改革派を中心とする團體に移動する譯だ。何にしても清浦内閣の出現は官僚、閥族の末路の弔鐘であり、改革派の崛起は高橋、横田黨の死活――といふより政友會の凋落を示すものだ。高橋君の辭爵などは少々時機後れの感がする。

□强震一月十五日又々來、帝都の人心漸く困惑の色がある。

□本社にて二月號から出す筈の運動雜誌「アスレチックス」は日本體育協會との讓渡案件に折合ふことの出來ぬ所があつて本社より發行することは中止する。

□震災のため、アインスタイン全集四卷配達不能のものが隨分多い。未だ配本を受けない方々は至急申出で下さい。第三卷は目下印刷中であります。

□本社の出版物は二月頃より震前のやうに復舊が出來ることと思ゐます。倉田氏の「超克」は一月下旬、本庄榮次郎氏の「日本社會史」も一月卅日位、厨川氏の「苦悶の象徵」は二月上旬出版の運びとなります。紙型が燒失した「愛すればこそ」「近代戀愛觀」は漸く出來しました。

□本號所載フッサール教授の「個人倫理問題の再新」は、氏が心血を注がれたものである。學界に大反響を與へる論文である。

□そして堺氏の「獄中を顧みつつ」は、本月雜誌界の一大讀物であらう。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	臺大鮮共 郵稅不用
壹ケ年	拾壹圓廿錢	臺大鮮共 郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の節は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は營業部につき郵稅金拾錢を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾參年一月廿日 印刷納本
大正拾參年貳月壹日 發行

(定價八拾錢)

東京芝區愛宕下町一ノ一
編輯發行兼印刷人 平田貫一郎

東京牛込區市ケ谷加賀町一ノ一
印刷所 秀英舍

東京芝區愛宕下一ノ一
發行所 改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三


使へば使ふほど
歯を強く美しくするものは、ライオン歯磨ばかりで御座います。
香といひ、味といひ、効果といひ、全く申分が御座いません。
ライオン歯磨

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO